
機械化少年の異世界史

噛ませ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械化少年の異世界史

【Nコード】

N5526K

【作者名】

噛ませ犬

【あらすじ】

とある世界のとある時代。人はナノマシンと埋め込み式情報処理機器により、比較的、合理的かつ安全な生活を送っていた。

ナノマシンは事故や病気による死亡率を下げることに大きく貢献し、埋め込み式情報処理機器は人の争いを減らすことに一役買っていた。まったく争いがなくなったわけではないが、少なくとも情報処理機能により予測される争いの不利益を考慮できるので問題を回避できるようになった。

しかしその一方でナノマシンおよび情報処理機器をより高性能に

し、より「高度」な人間になろうとする人が増えてきている。自身自身の考えを軽く評価し情報処理機器に思考を委ねてしまう人間が増えてきたことが社会問題として挙げられるも、過去に起こった大戦を繰り返されるよりかは「いくらかまし」という考えが大勢を占めるよく言えば平和な、悪く言えば停滞している世の中になりつつある。

これはそんな世界に生まれたとある少年が異世界に（なぜか）飛ばされ、なんやかんやする話である。

序（前書き）

初投稿です。

小説書くのがおもしろそうなので書いてみました。
宜しくおねがいします。

序

「あー、今日の天気はどうなっかなあ」とぼんやり考えていると、『あなたの現在の所在地では本日の天気は日本標準時で9:00から14:30にかけて晴れ、16:30から雨が振り出すでしょう』と埋め込み情報処理システム(Implanted Information System 略して IIS)が自動的に自身の観測データと気象庁のデータバンクの情報を照らし合わせほぼ確実の当たる天気予報を教えてくれた。当たらない天気予報を馬鹿にしていた時代があったらしいが今ではほぼ正確に天気を推測できてしまう時代である。

しかし、雨よけのドームが町全体にかかっているこの状態でいったい天気予報にどの程度意味があるのか疑問に思う。しかも雨が降ったら立体映像(音響つき)で雨の降っている様子を再現までするのだから何かおかしい。するとドームをかける際、季節感や天気の移り変わりを大切にしたいという派閥と雨にぬれるのはイヤだという派閥が話し合って「合理的に」どちらも取り入れた結果がこのようなおかしな光景を作り上げていると半自動的にIISが教えてくれた。このあたりがいくら情報処理技術が発達しても使うのが人である以上仕方ないことだとして考え、思考を豊んでしまおう。

なぜこのような暇人なことを考えているかといえば、なにを隠そう。暇だからである。

たいていの情報は興味を持った端から自動検索され一つの「解答」が得られる。その解答が本当か気になれば根拠まで丁寧な説明つきで得られてしまう世の中だ。このシステムを開発した人たちはおそらくこれで人類がさらに発展することを夢見たはずだ。しかし俺は停滞してしまうのではと考えている。俺は新しいものに興味を持ち、知りたいと願う。しかし興味の対象がすでに調べつくされていると感じると知識欲は急速に冷めてしまうらしい。そんなこんなで小さ

い頃は何でもかんでも知りたがっていたが、今となっては知りたいものの方向性を見失ってしまった。

そんな中でも最近気になり始めたことがある。宇宙探査だ。太陽系の惑星が観光地化しているくらいに身近になり、そこで宇宙探査への熱意を失い、今だに太陽系から出ていない。そこで何でも分かってしまう世の中ならまだ探索されていない太陽系外に行ってしまうえばいいじゃないかと考えたわけだ。我ながら短絡的である（IISはあくまで情報処理端末であり、行動選択の補助しかしないのでこのような合理性のない判断ができる）。

そこで大して人気のない「太陽系の外に行ってみようツアー」申し込んだのがすべての始まりだったのである。

続く

序（後書き）

短いですが冒頭はこんな感じで、
省エネに行こうとする少年が巻き込まれていく感じで進めていこう
と思っています。
じゃ。

序：第一話 機械化少年、異世界に立つ？（前書き）

異世界。

現実逃避とは知りながら、行ってみたいと思ってしまうもんですな。

序：第一話 機械化少年、異世界に立つ？

『セドナー、セドナです。お降りの方はお忘れ物のなきようお気をつけ下さい。』

どうやらセドナに着いたようである。これからガイダンスを受け、各自宇宙艇に乗り探索に向かう予定である。通常ガイダンスといっても宇宙空間で遭難、その他のトラブルにあった場合のマニュアルを埋め込み式情報処理システム（Implanted Information System 略して IS）にインストールするだけのだが。そのような事故は滅多に起こらず、事故が起こっても助けてもらえるようになっていた。

セドナ駅には少人力化のため職員は最低限しかおらず、そもそも無人惑星なので旅の醍醐味（？）のはずの現地の人とのふれあいもなかった。

ガイダンスのための部屋に行き、これからガイダンスと共に探索を行うメンバーとの顔合わせがある。

「それではガイダンスを始めます。」と責任者らしき人が説明を始めた。これには少なからず驚いた。回りを見渡しても皆驚いている。それもそのはずで通常ツアーも少人力化のため通信か、A・Iによってガイドされるものだからである。

「今回の探査のリーダーを勤めるヤン・オールドです。宜しくおねがいします。」と自信なさげに自己紹介された。

リーダーってどうか図書館でぼんやり本とか読んでるほうが似合っ
てそんな人だとか考えていると横から話しかけられた。

「ねえねえ、なんかリーダーの人頼りくない？」

これまたはつきり言うもんだ。みればセミロングのかわいいという
か美人の部類に入る活発そうな女性だった。何かのスポーツをやっ
てそうだな。姿勢もいい。おそらく筋肉のつき方からして剣道か何

かだろつ。

「そうだね。」

などと適当に返事をする。向こうもそれ程真摯な答えは期待してないだろう。例えば「いや、たぶん探索する対象に詳しいからっただけで責任者にされたんじゃないかな?」とか。

すると

「このツアー、かなり割安だったからなあ。」

と話に入ってきた男がいた。

グレーの髪に切れ長の青い目の二十代後半くらいの知的な二枚目だった。これは俳優かな。声も良く通るし、人に見られることに慣れている雰囲気がある。

「でもこのツアーに人間のリーダーが雇われているのにあの値段はつりあわない気がするな。」

また別の人間が話に入ってきた。

ロングヘアーのメガネを掛けたやたら男前な女性だ。手に機械油の汚れがついていた。機械工か何かかな。

「・・・そこら辺も含めて説明いたします。」

無視されてリーダーがかなり気落ちしていた。

「今回の探索は資源探索でリストにある資源のほかに未知の物質がないかの探索になります。」

そこで鉱物資源に関して詳しい私が派遣されました。料金にしましてはこの探索にとある企業が資金提供してくださったので皆さんの負担する費用は軽減されているということです。探索終了後、自由時間がありますのでご了承ください。」

なるほど。旅行会社と鉱物資源を扱う会社が提携したのか。

「それでは質問の方がなければ軽い親睦会を兼ねた昼食後、探索に向かいますよう。」

「はい。」

「わかりました。」

「OK」

「了解」

と順にセミロングな女性、俺、二枚目、男前（女）が四者四様な返事をして親睦会へと移った。

「じゃ改めて自己紹介しますね。名前はヤン・オールト。地球オランダ出身です。ユニヴァース金属工業の資材調達部に奉職しております。よろしくおねがいいたします。」

などとやたら堅苦しい挨拶になった。これはオランダ語を日本語にIISが自動翻訳する際、自己紹介するときの日本語表現で翻訳を行ったためだろう。

「じゃ次は私ね。一橋 巴です。地球の日本出身です。鼎高校2年生です。部活でラクロスやってます。よろしくおねがいします。」
へー、ラクロス、剣道という予想が外れたなあ。

「じゃ次は俺が。前田義弘です。地球の日本出身。帝都高等学校人間行動学部の三回生。よろしくおねがいします。」
我ながら簡潔だったかな。

「次は私が。リチャード・ジョーンズです。地球のイングランド出身です。俳優をやってます。宜しくおねがいいたします。」
やっぱり俳優だったか。

「次は私が。イレーヌ・トレスカよ。火星のネオIIフランス出身。Mars Heavy Industries Companyでエンジニアをしているわ。宜しく。」

ネオIIフランスか。火星がテラフォーミングされて三番目にできた都市国家だっただけか。

「や、同じ日本から来てる人がいて安心したよー。ヨシヒロさんだつたっけ？」

「ヨシヒロでいいよ。トモエさんだっけ？俺も少し安心した。よろしく。」

「よろしくー。私もトモエでいいよ。じゃヨシヒロくんで。どうしてまたこのツアーに参加したの？」

「太陽系外の宇宙に興味があつて。君は？」

「私も学校の授業でさらつとやつて、そこから面白そうかなーって。」

「

・

・

親睦会兼、昼食を終え、宇宙艇の操作について簡単に説明を受け探査作業に移った。

こうして太陽系外縁部に来ると地球が如何に多彩な景色があるかが分かるな。殺風景で何も無い。

『おーい』

つつ。いきなり通信が入った。この声はトモエだろう。

『どうした？何かあつたのか？』

『いや、ヤンさんがねいつたん集合したいらしいんだよー。今どこー？』

『星の太陽系と反対側。』

『反対側ね。じゃあそこでいつたん集合するから動かないでね』

『了解』

採取した鉱物の確認かな？

『全員いますね？この辺りに異常が感知されましたので一旦セドナに戻りましょう。』

『異常とは？』

「実は観測される太陽風が」

「多いのですか？」

人体に有害だからな多かつたら困る。

「逆です。通常の一万分の一もないのです。」

「？ないならいいじゃないの。」

「少なくともつていきなり大量の太陽風がやってくる可能性があります。安全のため戻りましょう。」

「ok」

安全に越したことはないとセドナ方向へ転進したとき、後ろに宇宙空間より黒い何かが現れ5艇の宇宙艇が吸い込まれた。

何だ。やけに明るい。セドナに帰ってきたのか？いや宇宙空間にいたはず。

目を覚ますとそこは。海の上だった。

「IIS。・・現在地を教えろ。」

「不明」

本来心地よく響くよう設計された合成音声が鈍く響き渡った。

序：第一話 機械化少年、異世界に立つ？（後書き）

あんまり筆が進まんもんですな。

なんとも会話がうまく弾まないです。

他の方はストーリーのテンポとかどうやって決めてらっしゃるのでしょうね。

字数とかって重要ですかね。

ラブラブな展開はありますかね。

難しいモンです。

序：第二話 機械化少年、漁業に挑戦する（前書き）

なんだから

話の進むテンポがやたら遅い気がする。

序：第二話 機械化少年、漁業に挑戦する

「どういうことだ？」

『正確には外部データにアクセスできない状態にあります。』

「圏外か。」

基本的に太陽系には圏外は存在しないことになっているのだが、まさか大量の宇宙線に阻害されている？

「電磁波及び人体に有害な放射線などを感知できるか？」

『生命活動を阻害するものは現時点では感知されません。』

つほ。とりあえず安全のようだ。というかなぜ海に？

「ここは地球のどこかか？それとも火星の人口湖？」

少量の海水を飲んでみる。

『地球の海の成分と異なります。火星の人口湖は純粋に3%の食塩水ですのでまた異なります。また空气中、海水中に有害なものは検知されませんでした。』

地球でも、火星でもないとなるとどこだ？

いや位置を知ることが意味がない。俺は遭難しているのだ。

遭難したときは安全な場所で動かず、救援信号を出して救援を待つ。これがベストだ。

とりあえず今は宇宙艇の中において転覆の心配はない。安全と見ていいだろう。

エネルギーは。

『残少。宇宙艇の推進装置に損傷有。』
動けないか。修理の方法は知らないしな。
救難信号は出せるようだ、出そう。

それより深刻な問題がある。

それは、食料である。

これは現代人特有の問題ではないが、現代人は特に問題になってくる。

なぜなら体内に注入されたナノマシン及びIISの動力は人の体温、正確に言えば消化の際に得られるエネルギーである。

つまり簡単に言えば腹が減りやすい体質なのである。

高カロリー剤があるにはあるが節約しても一月分。圏外の場所に一月で救助が来るとは思えない。

食料をとらなければ死ぬこともありえる。

餓死というしたくない死に方BEST3で。

救助が来るまで食料を自給しなければならぬが、ここは未知の場所。

何が食べられるか分からない。

ここは海だから魚などの海産物がとれるか？しかしどうやってとる？

まずここに海産資源があるかだ。

「この宇宙艇のレーダーで海洋生物を探知できないか？」

『可能です。実行しますか？』

「実行」

どうやらいることはいるようだ。形までは分からないが群れは感知できた。

あとはどんな生物が観察しなくてはな。群れのいる方向を肉眼で確認する。

「視力強化」
『視力強化』

ナノマシンは生まれたときから注入され、生活の中でよく使われる部位を効果的に使用できるようになる。

俺の場合、人間観察を日常的に行っていた結果、感覚の強化が行えるようになり、

強化された感覚から得られた情報をIISに送られ、解析及び分析される。

『海洋生物と思しきものの分析終了いたしました。』

やはり海を移動するものだけあって形状、大きさは地球のものと同じようだ。

「この宇宙艇の装備は？」

『障害物除去用のレーザ装置と採取用のアームがありますが、エネルギーの残量が少ないため使用回数と出力に制限があります。』

「アームは最大伸張は？」

『15メートルです。』

アームは確かIISと接続して手足のように動かせたはず。

「半年エネルギーをもたせるとしてアームはどのくらいの負荷に耐えられる？」

『一日に二時間アームを稼働させるとして1トンまでなら耐えられます。』

よし実行だ。

結論から言おう。無理だった。

魚のつかみ取り大会をご存知だろうか。アレはなかなかコツと集中力がある代物で素人には難しいものだ。

しかも海を自由に動き回る魚を殺さないように掴み取るなど宮本武

蔵でも難しいに違いない。

『もしもし、ヨシヒロ君。生きてる？生きてたら返事して！』
『・・・白状しようこのときまで他のメンバのことを思いつかなかつた。』

『もしもし、こちらヨシヒロ。その声はトモエさん？』

『よかった！他のメンバは皆無事よ。』

『そうか！よかった！』

えらいなパニックにならずみんなを心配できるとは。

よくみたらレーダに他の4艇が集まっている様子が映っていた。

『実は推進装置が壊れて動けないんだ。』

『今からそちらへ向かおう。』

と回線にイレー又さんが入ってきた。

『直せるんですか？』

『直せるか見てみないことには分からない。』

『OK。よろしくおねがいます。』

数分で皆に合流できた。おそらくそんなに分かれていたわけではな
いの長年あっていないようなそんな感覚に襲われた。

『どうやら直せそうだ』

『そうですか。他の艇は全部動くんですか？』

『いや、私のとトモエのものだけ動かせた。他は一応牽引してき
た。』

『じゃあ直していただいて、どこか陸地を探しましょうか。食料
や水の問題もありますし。』

『いや、このまま引っ張って行こう。海上での修理は面倒だ。』

「分かりました。」

そのままレーダで確認できた一番近い陸地に向かうことになった。

そこは港などではなく天然の岸壁と砂浜、後ろには森が広がっている。地球では見ることが難しくなってしまった光景だった。

「ふう。」

「さて、遭難したわけですけどまず食料はどうします?」

「そうだね。水は海水から抽出できそうだが、食料は高カロリー剤だけでは心細いからね。」

トリチャードさんが少し考えて言った。

「あとここがどのような場所かも探らないと。」

「じゃ分担しない?」

とトモエさんが提案した。

「そうしよう。」

「では私は艇の修理と見張りをするよ。もしかした救難信号が届いて連絡が来るかもしれない。」

とイレエヌさんが引き受けた。

「では残りは二手に分かれて辺りの搜索と食料収集を行いましう。」

とヤンさんが提案した。

「じゃ、そういうことで。」

グループ分けはヤン・トモエ組とトリチャード・ヨシヒロ組で分かれた。年齢から考えれば合理的な選択といえるかもしれない。

そうして2グループは森の中へ進んでいった。

序：第二話 機械化少年、漁業に挑戦する（後書き）

気のせいじゃなくテンポが遅い。

三話目なのにまだ第一異世界人にあっていない！

序：第三話 第1村人遭遇？（前書き）

そろそろ方向性と登場人物の性格など決めないとまずいなあ。

序：第三話 第1村人遭遇？

「ヤン・トモ工組」

「まずは地形と動植物の生態をある程度把握しましょう。どのような鉱物資源があるのか個人的に興味がありますがそれは後回しにします。」

ヤンが興奮気味に話していると、

「猛獣とか出たらどうしましょうか？」

と不安げにトモ工がつぶやいた。

「僕は山に行く以外はインドアだから足腰以外あまり自信はありません。なので遭遇したら逃げましょう。」

「そうですね。私も足の速さには自信があるので逃げましょう。」

「一応注意はしておいたほうがいいですね。トモ工さんの感覚強化はどの程度ですか？」

「視覚、聴覚、嗅覚は基本値程度しか維持していません。通常生活にはその程度しか必要ありませんし。」

「じゃあ私が遠方を視覚による探索をしますので、トモ工さんは近辺の探索を主にしてください。」

「分かりました。」

「あ、これ食べられそう。」

「では少し成分の分析をしてみましようか。ナノマシンである程度毒素の分解はできますが、一度に多量に摂取すると危険ですので気を付けてくださいね。」

「はい。」

「リチャード・ヨシヒロ組」

「・・・リチャードさん。」

「何だね。ヨシヒロ君。」

「そつちはおそらく危険です。」

「あちらになにかいるのか？」
トリチャードさんと視覚を共有する。

「姿はイノシシ・・・だね。ただ・・・。」

「大きさが小さいですよ、あと目が一つです。大人のイノシシをそのまま小さくしたような・・・。」

「・・・捕獲してみるかね？」

「・・・やめましょう。あれは捕獲できません。」

「何故かね？もしかして君は肉食主義者？」

「いえ、何でも食べられますよ。好き嫌いはありますが。ただおそらくあのイノシシ（小）は囿で、あのデコイを襲おうとする対称を補食する肉食動物の一部です。」

「そうか。よかった。食料を探しにきて食料になる所だった。ありがとう。ところでなぜ気づけた？」

通常の視覚強化じゃ気づけないだろう？現に私も気づかなかつた。
「

「私の視覚は赤外線も感知しますので、それで気づきました。」

「ほう。それはすごい。君のナノマシンは感覚に特化しているのだね。」

「感覚と情報処理ですかね。赤外線を感知して、そこから得られる情報をEISを介して処理し、対象の想像図を作り上げています。」

「なるほど。」

とさして危険に遭遇するでもなく探索できていた。

そう危険には遭遇しなかった。危険には。

・・・面倒ごとに遭遇した。

第1村人（？）の発見である。

「どうしましょう？話しかけてみますか？」

「いや、様子を見よう。しかし、今更だがあの辺りに居住可能惑星があったかな？公式発表じゃ聞いたことないけど。」

「そうですね。もし発見されれば、必ずニュースになります。地球も移民先を探していますからね。テラフォーミングは金がかかりますし、居住可能惑星があれば飛びつきますよ。」

「じゃあ、あの人は誰だろうか？調査団にも見えないし。服装も現代には見られないデザインだ。どこかの民族衣装かな？」

「あの人は純粹な人類ではないかもしれませんが。人類には見られない器官がありますし、IISとおぼしきものも検知されません。今ではIISの埋め込みは義務化されていますから、あの人が220歳を超えていて、遺伝子操作を受けている可能性もありますが。あまり現実的ではないですね。いま139歳が最高齢ですから。」

「つまり？どうなる。」

「地球とは異なる生命進化を遂げた地球外生命体の可能性があります。」

「おいおい。ずいぶんSFな話だな。実は映画の撮影の壮大なセットって可能性は？CGを使わない映画って謳い文句でどっかの惑星を部分的に改造して映画のセットにする例もあるよ。」

「さつき宇宙艇のレーダで調べたんですが、レーダの範囲までドームが探知できませんでした。半径3000km以上の映画のセットってことはないでしょう。」

「そうだな。さすがに無理がある。」

「あの人についていけばもしかしたら別の人に見えるかもしれないかもしれません。」

「ついていって怪物に会うのは勘弁してほしいがね。」

〈第1村人(?)〉

『は。』 どうして仕事押し付けられちゃったかなあ。 だいたい森の仕事は基本男がやるものでしょうが。 なんてか弱い私がこんな仕事しなくちゃならないのよ。 だいたい・・・』

〈リチャード・ヨシヒロ組〉

「なんかしゃべってるな。」

「俺は知らないですね、この言語。」

「私も知らないよ。」

「主要言語じゃないのかな？ちよつと言語解析してみますね。できれば会話してくれてたら言語解析もスムーズに進むんですが。独り言が多いのが助けと言えば助けですね。」

「ああ、よろしく頼む。しかしかわいい娘で良かったな。」

「たしかにかわいいですね。不機嫌そうですけど。」

「そこがいいね。笑顔をみたくなる。手伝ってあげたいな。」

「紳士ですね。」

「か弱い女性を助けるのは紳士の義務だ。」

〔第1村人(?)〕

『・・・なんで一人でやんなくちゃならないのよ。今忙しい時期なのはわかってるけどさ。だいたいあの領主、文句言ってるわ。働いても働いても全然暮らしが楽にならないじゃないの。あんなに税金払ってんだから少しは還元しろってのつと。あの木でいいか。』

〔リチャード・ヨシヒロ組〕

「どうしたんでしょうね。木の前で止まりましたよ。」

「きつと疲れたんだよ。なんの為に森に入ったか分からないけどあんな化け物のいる森に一人でいるなんて他の人はいないのか？薄情だな。」

「そうですね。なんででしょう。見た所普通の女性にしか見えませんが。」

と話していると轟音をたてて木が倒れた。

「・・・」

「か弱い？素手で大木殴り倒しましたよ？」

「そのギャップが良い。」

「そうですねか（わかったこの人ただの女好きだ。たぶん本人は博愛主義者とか思ってたそうだけど）。しかしどうやって木を倒したんでしょう？筋力はそんなにないようですが。」

「そうだね。なにか鬱憤でも溜まってたんじゃないかな？」

「……（結構適当だなこの人）」

（第1村人（？））

『はー すつきりした。なんか失礼なことを思われてる気配があるけど気のせいね！さっさと村に運んで休憩しよう。』

すると素手でヒョイッと音がしそうなくらい軽々と大木を持ち上げてしまった。

（リチャード・ヨシヒロ組）

「すごい。あんな大木を軽々と。」

「……あの木の比重が異常に小さかったってことはないかな？」

「いや、むしろ地球の基準で言えば重いくらいの比重ですよ、これ。」

と落ちている枝を拾って俺は言った。

「……なぜだろう。」

「あの木の周りの微粒子が不自然な動きをしています。まるでそこだけ重力条件が異なるような。」

「まさか重力制御装置はテラフォーミングするときに使われるくらいで人一人が使うような装置じゃないぞ。」

「そうですね。しかしそう考えると説明がつくんですよ。あの娘のやったことに。」

と話していると集落に到着していた。

序：第三話 第1村人遭遇？（後書き）

イレーヌさんがtheヒトリボツチになってしまっている。
ヤンとトモエは平和だ。

リチャードさんが変になってしまった。

ヨシヒロが全然突っ込まない。

うーん。

まだ第1村人の名前を決めてない。

序：第四話 不純異性交遊？（前書き）

うーん・

序：第四話 不純異性交遊？

「リチャード・ヨシヒロ組」

「村ですわね。」

「村だな。」

「木造の家に見えます。」

「木造の家だな。」

「畑がありますわね。」

「畑だな。」

「『昔の農村生活を体験しようツアー』でしたっけこれ。」

「いや違う筈だ。『ジユラツシク・パーク』でもなかったはずだ。」

「ですよわね。大きいトカゲとかいますけどあれ、あれロボットじゃないですよ。」

「つまり？」

「さつき思いつきで言っただけがほんとだった可能性が濃厚になってきたってことですよ。」

「なつてこつた。」

「村人たち（？）」

「伐採とってしてきたわよ。」

「ご苦労さん、シンシア。じゃ次ぎはこれを運んでくれ。」

「……お父さん、人使い荒くない？私これでも女なんだけど。」

「……今働けるもんがお前しかおらん。だいたいお前、料理も裁縫もできんじゃないか。荷運びくらい手伝え。」

「……分かったわよ。全く。どうして村の男たちがいないの？」

「それがな、今妙な二人組を見たと言う報告があつてな。村の男たちが総出で搜索してる。」

「……私の心配は全くなしですか。それってまさか……」

『お前の心配をするくらいなら相手の命を心配するわ。ああ、もしかしたら、共和国の奴らかもしれん。』

『もしそうだったらどうするの？』

『領主に突き出すしかないだろ。そういう命令がでとる。』

『……懸賞金は出るの？』

『いや、出すと思うか？あのケチな領主が。』

『思わないわ。』

（リチャード・ヨシヒロ組）

「さっきの女の子が誰かと話してますよ。」

「本当だ、父親かな。」

「顔立ち等の特徴からすれば違う気がしますね。」

「ところで女性しかいないな。男はあの父親らしき男しかいないし。」

「ああ、それならさっきから人間大の熱源があちこちで三体一組くらいの規模で10組くらいが組織的に行動してましたから、男が今出払ってるんじゃないですかね？」

「……なんでそれを早く言わない？」

「聞かれませんでしたので。」

「……まあ、いいや、でそれってまずくない？」

「なぜです？」

「そりゃ、俺たちは君が感知できるから良いけど、ヤンさんとトモエちゃんが危なくない？」

「あ、考えてませんでした。確かにそうですね。見つかったら危ないかもしれません。この人たちが友好的とは限りませんもんね。では感知範囲を広げてみます。」

「さらに広げられるのかい？」

「僕のナノマシンは空中散布もできまして、一時的にですが広げられるんですよ。」

「……それは疲れるんじゃない？」

「はい、かなり疲れますが、感知対象を人間大の熱源にのみにし
ばればそれほどでもないですよ。」

「そうか、頼むよ。」

「ヤン・トモエ組」

「・・・なんか嫌な気配がします。」

「『気配』？別に異常は見られないですけど？」

「いえ、私のナノマシンとEIS、ちよつと特殊で気配とか予感
とか感じられるんですよ。」

「へー、失礼ですがそれは正確なんですか？」

「はい、先生がおっしゃるにはかなりの精度だとかで。」

「それはすごいね、なんでそんな特殊に？」

「通つてる高校が教育実験校で様々な最新の教育方法を試験的に
運用する学校なんです。その一環で人の『勘』にあたる部分の成長
を促す教育法の試験対象に私が選ばれて色々やらされたんですよ。」

「それは・・・」

ヤンが同情の視線を送る。

「いや、別にモルモットみたいな扱いを受けてた訳じゃないです
よ。学生生活は楽しいし、実験も結構面白いですよ。古武術の先生
まで呼ばれてましたし。」

「それはすごいですね。」

「なのでここから離れた方が良いです。」

「どつちがいいんですか？」

「あつちに行きましょう。」

とトモエとヤンが歩いていけると、

「っつ」

いきなりトモエの体が反応した。

「どうしたの？」

ヤンが心配そうに見る。

「いま、ヨシヒロ君の気配が広がったような。」

「ヨシヒロ君のですか？」

「うん・なんかかなり間近で見られてるみたいに感じてちょっとびっくりした。」

「ああ・もしかしたら・」

「ああ・ああ・やっぱり・今・ナノマシンの散布が行われているみたいですよ。」

「ナノマシンを散布？」

「ええ・ということはこれはヨシヒロ君のナノマシンなのでしょう。」

「そんなことが・・・・というかなんでヤンさんにはそれが分かるんです？」

「僕は仕事柄微小なものを拡大してみられるよう・ナノマシンとIIS処理機能を拡張しているからね・空気中のナノマシンも見ることができるとですよ・トモエさんの体からも微量ですがナノマシンが出ていますよ。」

「へー。」

「リチャード・ヨシヒロ組」

「・・・いた」

「そうか・どんな状態だい？」

「村人とはまだ遭遇していないみたいです・うまいこと網の目を縫うように動いています。」

「そっかよかった。」

「・・・俺はよくないですよ。」

「どうしてだい？」

「トモエさんはどうやら俺と同じようにナノマシン散布を行っていたようでナノマシン同士が接触しました。」

「それがどうかしたのかな？」

「ナノマシン同士が接触するというのは危険なんですよ・トモエさんのナノマシンのセキュリティがかなり無防備でした・その状態

で彼女のナノマシンと接触して探知するってことは彼女の裸を間近で直視してしまっただくらいの意味を持ちます。」

「それはうらやま・・・もとい、いけないことだが仕方なかったんじゃないか？」

「それはそうですが本人の同意なしでナノマシンと接触し探知する行為は相手が女性だった場合は特に刑罰が重いんですよ。そもそも倫理的に・・・。」

「・・・ちなみに刑はどのくらい？」

「国にもよりますが禁固15年、または500万円以上の罰金です。」

「・・・男と男の秘密にしよう。」

「・・・お願いします。」

ここに奇妙な友情が発生した。

「なんとか連絡が取れないもんかな？」

「彼女が散布型なのがある種ラッキーですね。彼女のナノマシンに直接コンタクトをとれば彼女のナノマシンを介して連絡が取れる筈です。」

「じゃよろしく。」

くヤン・トモエ組

「その間近で見られている感じはもうなくなったのですか？」

「ええ、今は遠くから望遠鏡で見られている感じです。」

「・・・それはそれで嫌な感じですね。」

「それほどでもないですけど。あっ。」

「今度はどうしました？」

「ヨシヒロ君から通信きました。」

「ああ、ナノマシン同士を接触させたのか。」

『聞こえる？トモエさん。』

『うん、聞こえるよ。』

『実は そつちに結構の数の人が行っているみたいなんだ。』
『人？』

『うん・たぶん・実は村を見つけてね・そこに男がいなかったし・君たちの周りに組織的に行動する人間大の熱源を感知したから。』

『そうだったんだ・あの気配はそういうこと。』

『気配？まあいいや・そこから早く離れた方が良く・いったん合流しよう・イレーヌさんの所に戻る？』

『多分戻れると思う。』

『危なくなったら・連絡して・パスはつないだままにしておくから。』

『うん・分かった。』

『気を付けて。』

『そつちも』

くりチャード・ヨシヒロ組

「イレーヌさんの所に合流することにしました。」

「わかった・すぐに合流しよう。」

くイレーヌ

「・・・遅いな。」

序：第四話 不純異性交遊？（後書き）

今回もイレーヌさんがtheヒトリポッチ．

トモエをシリアスにしようとしたらやたらポジティブ少女 〴〵都合主義キャラになってしまった．

ヤンはもはや解説要員なりつつある．

リチャードはなんだかなくだし．

ヨシヒロは不器用になりつつある．

ていうかタイトル「少年」でしたけど今思えば少年おらんじやる．

青年とおっさんと姉さんと少女でしょ．

ていうか主人公誰よ．

スポットライトを当てる人間を決めないのも手だなあ．

じゃ題名が「機械化人間たちの」てな感じにせねばだな．

序：第五話 今後の方針（前書き）

話が進まん

序：第五話 今後の方針

「村人たち（？）」

「いたか？」

「いや、俺たちは見てない。」

「本当にいたんだって！遠くからだっただけど間違いないよ。二人組で。」

と少し幼さが残る少年が焦って言った。

「いや、疑ってる訳じゃないんだけどさ。俺たちもこの山での狩りにはなれてるって自負がある。」

この人数で網張って見つからないんじゃないかももう帰っちゃったてことなんじゃないか？もう日も暮れる。村に戻るう。」

「そうだな。あとは村長にも相談して決めよう。夜の怖さはお前たちも知ってるだろう？」

リーダー格らしい男二人が少年をなだめつつ方針を決めた。

「・・・分かったよ。」

しぶしぶだということを隠そうともしないで少年はうなずいた。

「さて、野郎ども、村に帰っぞ。」

「うーす」

「漂流者ズ」

「・・・行つたみたいです。」

「よかった。さすがに夜に探索する程、無謀じゃなかったか。」

「でも、そんなに危ない森じゃなかったですよ？食べられる実とかキノコとか多かったですし。」

「「え？」」

「こっちは危ない感じの動物しかいなかったぞ。木の実とかキノコも全くなかったし。あつたのは固くて太くて重い木だけだ。」

「そうですね。しかもそれを倒して軽々運んでる人もいましたし。」

「危なかったね。この森は二つに分かれてるのかもね。」

「ちよつと待て。なにげにスルーしようとするな。ここにはそんな筋力特化型のナノマシンを使う人間がいるのか？」

と今回森に入らなかったイレーヌさんが聞いてきた。

「人間にはない器官がありましたし、正確には人間とは言えなさそうでした。何よりナノマシン制御を受けている人間特有の体表温度分布が見られなかったのでナノマシンをこの人は使用していないでしょう。IISも感知されませんでしたし。」

「ナノマシンなしで大木を一人で運ぶなんて不可能だ。」

「おそらくあれは重力を制御していました。」

「・・・小型の重力制御装置か？しかしそんなもの開発されていない筈だが。」

「僕もそう思いました。しかし、装置らしきものを保持している様子はなく。」

「ではいったい？」

「分かりませんが、ここの人特有の性質かなにかとしか。」

「それはここでは全員に言えることなのか気になるな。」

「ちよつといいですか？」

とヤンさんがすまなそうに話に入ってきた。

「森に入った感じだと食料は問題なさそうですが、その人たちがいたことで状況は変わってきました。どうもあの森はその人たちのものだったようですし、勝手にいたかくとその人たちの怒りを買ってしまうでしょう。あの人たちと交流を持って食料を分けてもらうようにお願いしてはどうでしょうか？」

「たしかにね。このままここで食料を取ってたら今日みたいに見つかるしなあ。」

「しかし、使用言語が分かりませんか？ある程度は解析できまし

たが、まだまだです。」

「そうですね。言葉がわからないとちょっと怖いかも。」

「じゃあ、彼らの村の会話から言語解析を行いそれから会いにいこう。」

「そうしましょうか。」

「じゃあ、今日はもう遅いし寝よう。」

「じゃそれぞれの宇宙艇で眠ろう。」

みんな疲れていたのかすぐに眠ってしまったようだ。

しかし、さっきの話し合いでは全く話題に出なかったことを俺は考えていた。

「俺たちは帰ることができるのであるだろうか」

みんな思っていたに違いない。それでも話題に出なかったのは何となくみんな感じていたからだろう。

「ここは太陽系にない星で救難信号も届かないのだろう。」
と。

「村人たち(?)」

「みんなの手前、安心させるようにああ言ったが、奇妙なやつらだ。」

「ああ、森で見つかった。足跡の種類は四種類。しかも森を歩きなれてない奴らだ。」

「そのくせ俺たちの動きを読んだかのように逃げやがった。」

「この辺りを探っていたようだったが、食い物を集めてもいたようだ。」

「変だな。」

「ああ、変だ。」

「穏やかじゃないな。まさか本当に『共和国』の奴らだったのか？」

「かもな。でもなんで食い物を集めてたんだ？ 間諜なら足跡を

残したくないだろう?」

「目的はこの際おいておけ」

「村長」

「取っていった食料は20人分は超えておったのだろう?それをもし毎日取られでもしたら、森には今後食料を期待できなくなってしまう。わしらは来年育つ分も考えて取っておる。」

「確かに」

「税金でかなり持っていていかれとるわしらには森の恵は生命線だ。無視はできん。しばらく村の男衆で見回りをするしかないな。」

「わかつたよ。村長。男衆には俺から言っとく。」

「頼んだぞ。」

「シンシアにも村長から頼んでくれないか?」

「ワシからか?」

「娘でしょ?」

「一応言つが、あいつはへそ曲げると話を聞かなくなるからな。女扱いしろというだろうな。」

「あいつはこの村で一番強いからな。みんなついついあいつを頼っちゃう。」

「そこは反省しとる。」

序：第五話 今後の方針（後書き）

話が進みません

序：第六話 眉間にしわ（前書き）

うーん

序：第六話 眉間にしわ

もう夜だというのにまだ明かりのついた部屋がある。それはその部屋の主が資産家であること、また明かりをつける必要のある人間だということを示していた。ここは城というより屋敷を城に改造したような建物である。前領主の放蕩三昧によるついで、現領主は無駄な出費を防ぐため城の規模を大幅に縮小し、その廃材を売る必要があるくらいに追い込まれていたのである。

「闇の森に侵入したものがいるとの報告がありました。如何致しましょう？」

初老にさしかかった眼光鋭い男がやつれた様子の少女に報告をしていた。

「それはまた面倒な事態になった。共和国の連中の可能性がある以上、こちらからも人員を割かねばなるまい。あそこはたいした税収を見込めぬ未開の地じゃが、共和国’に対する前線基地としての役割も持つておるからの。だいたいこれまであそこの住人に退去するように言うておつたのに聞かぬからこうなる。あそこの前線基地化が遅れておるのもあそこの連中がだだをこねおるからじゃ。本音で言えば見捨ててやりたい。」

まだ年端も行かない少女の割に深い眉間のしわを作りながら少女は愚痴をはく。

「またそのような憎まれ口をおっしゃって。あそこに手をお加えにならなかつたのはあそこが、共和国’に狙われるような価値を持たせたくなかつたからでありましょう？ そうすることであそこを離れたくないという彼らの望みを叶えつつ、共和国に攻め入られにくくし、攻められた際には身軽に逃亡できるようにと。」

「私を買いかぶらないで、クラウドス。私はそこまで善人で神算鬼謀なわけではないわ。ただケチなだけよ。」

少し表情が和らげながら秘書官に親しみを込めた視線を送る。実

際、無い袖は触れない状態なのである。

「どうかお休みください。このままではお体に障ります。」

「確かにね。最近仕事をし過ぎかな。領民の要望書に目を通すのに時間を取られてしまったわ。」

「どうか御身を労りください。確かに要望に目を通すのは大事ですが、体を壊されては本末転倒ですよ。第一、すべてに返事を出す必要はないのです。村の代表に要望をまとめさせるなりすればよろしいではありませんか。」

「今、領民に反乱を起こされるのはまずいの。先代のおかげで領主の信用は地に落ちてきているわ。それに共和国が我が帝国の領土を虎視眈々と狙っているの。今は少しの不満も見逃せないの。各村長を全く信用していない訳ではないけれど不安が残るわ。」

「しかし。」

「今が踏ん張りどころなのよクラウド。今隙を見せれば確実に食われるわ。そうなれば我が領地を前線基地として侵攻がはじまり、共和国に飲み込まれる。そうなってはもう手遅れなのよ。我らの皇帝陛下は悪い方ではないけれど、ぼんやりした所がありがたいから。」

「……姫様。」

「領主様とおよびなさい。クラウド。あなたももう私の世話係ではないわ。秘書官よ。もはや甘えは許されないの。あなたの忠言は胸に留めておくわ。では少し休みます。」

疲れたサラリーマンのような哀愁漂う少女の背中を見ながら静かにクラウドは膝をついた。

「……エオス様」

（ヨシヒロ）

「どうしてこんなことに。すべてはあの人たちが俺に押し付けるからだ。」

眉間にしわを寄せながらヨシヒロはうなっていた。

ことは今朝から始まった

「……まずいな。」

「……まずいです。」

「ああ、まずい。」

「非常にまずいですね」

「致命的だな」

五人が全員眉間にしわを寄せてうなっている。重要な案件に頭を悩ませているのだ。

「調味料なしだとこまできついとは。」

「塩味ならつけられるけどね。」

「そこがまだ救いですね。」

「肉が欲しくなりますねやっぱり。」

「それは言わないでくれ。腹が減る。」

現代人は基本的においしいものを日常的に食べられるのだ。しかし調味料なしの食事は初体験といっても過言ではない。無理からぬ反応である。しかも昨日のナノマシンの使用によりヨシヒロとトモエはかなりのカロリーを消費しており実はかなり困窮していた。他の人も省エネでナノマシンとEISを使用しているといえ、常人の1.5倍は消費しているのである。これは深刻な問題と言えた。食わねば餓死するが舌が肥えた現代人にこの食事は苦痛でしかなかった。それにとつて来れたのは草とキノコだけで非常に低カロリーなので量を食べないといけないのである。

「やはり早急にここの住人とコンタクトをとる必要がある。」

「そして食料と調味料を分けてもらわないと死ぬ。」

「あと肉も。」

「じゃあ一人に食料を集中させて、他のメンバは省エネで過ごし、村に接近し言語を解析した後、その結果を全員で共有するのが最も効率的だな。」

「誰がいく?」

「村人に気づかれず接近できて帰って来れて言語の解析を行える」

やつだね。」

「トモエちゃんかヨシヒロ君ですね。」

「私は無理ですよ、言語の解析なんて。」

「じゃ消去法でヨツシーに決定。」

「ちよつと待ってください。なんで勝手に決まってるんですか。」

しかもヨツシーてなんですか。俺は爬虫類じゃないですよ。」

「君が適任だ。」

「がんばって。」

「君ならできる。」

「君しかいない。」

「乗せようつたつてそうはいきませんよ。かなり危険な話じゃないですか。しかも言語の解析なんて相手との会話なしじゃすぐにはできませんよ。というかヨツシーはスルーですか。そうですか。」

「できるんじゃないか。」

「俺たちにはできない。」

「私たちのためにがんばってください。」

「危険な所に私たちのために行ってくれるなんてすてきです。」

「・・・わかりました。」

そしてヨツシーは集団の力に屈したのであった。

「あそこで「わかりました」なんて言わなければなあ。ああ、くそ。解析進まねえ。いつそリスク承知で話の分かりそうな度胸のあるやつに話に行くか？それで協力が得られればかなりスムーズに話が進むんだが。しかしまだ人が森に入ってきてるな。化けもんの多い方には行ってないみたいだが・・・。」

などと端から見たら独り言をぶつぶつ言っている怪しいやつなのだが注意する人は誰もいない。

しばらくするとある程度解析でき、村人の会話が分かるようになってきた。

村人

「は見つかったか？」

「いや、新しい足も見つからない」

「まさか　　に方に行っているんじゃないか？」

「　　！しかしあそこにはシンシアしか入れないぞ。もしそうならかなりの　　を持ったやつだ。危険　　。」

「もう帰ってしまったんじゃないか？」

「おーい！」

「どうした？」

「海岸に奇妙な　　があつた。」

「奇妙な　　？」

「見たこともない奇妙な　　だ。もしかしたら　　は

に乗ってきたんじゃないか？」

「じゃあそこにやつらは帰ってくるかもしれない？」

「そこには数人の　　を残して　　からの　　を待つか。」

「そうしよう。」

「　　には無理しないように伝えてくれ。」

「わかつた。」

ヨシヒロ

まずいな。どうやら宇宙艇が見つかったらしい。しかし四人とも見つからないようだ。まだ解析途中だが早く合流して村人との友好的接触を図ろう。

他の四人

「危なかつたな。」

「ええ、トモエが気づかなければ見つかっていました。」

「ありがとう、トモエ」

「いえ、そんな。なんだか嫌な予感がただけで。」

「宇宙艇にはしばらく戻れないな。」

「必要なものはまとめてきました．しばらくは大丈夫です．」

「そうか．しかし連中はこんなに躍起になって探してるんだ？」

「食料を取ったのがいけなかったのでは？あの村の畑の規模から考えると食料を山の資源に頼っていたのかもしれない．」

「二日分だけだったけどなあ．」

「村人にしたらおそらく15人前は取られたことになるでしょう．」

「悪いことをしましたね．」

「いつか謝ろう．」

そうして四人は静かにそれぞれの国のやり方で謝罪の念を表した．

序：第六話 眉間にしわ（後書き）

うーん

序：第七話 変身登場（前書き）

うーん

序：第七話 変身登場

ほどなくしてヨシヒロと他のメンバが合流を果たした。

「なるほど、手の空いてる村人総出で捜索されていたのか。」

「で、今艇を数人が交代で見張っていると。」

「村人の会話からおそらく村の上部組織からの軍なり警察なりがくるのでしよう。」

「あの村のおかれている状況がわからないな。」

「しかたないですよここは完全に別世界といって差し支えないんですから。」

「とりあえず不完全であるが会話はできそうだね。もう接触してみよう。」

「そうですね。このままではらちがあきませんし。」

「どうやって接触します？いきなり村に現れたらあちらに警戒されませんか？」

「じゃあ、海岸で見張りをしてる人に接触して無抵抗をアピールしつつ接触しましょうか。」

「そうしよう。」

「で、誰が話しかけるんです？」

「相手に警戒心を抱かれず、好印象を持たれるような人がいいですね。」

「では私が行こう。女性に行かせるのはしのびない。」

「リチャードさんですか。大人の男が交渉に行くと警戒されませんか？」

「そこは御心配なく。」

リチャードが自信ありげにうなずくとリチャードの体が奇妙な動きを見せ、体に変化していく。

そして最終的にリチャードがいた場所には少し背が高いくらいの少女が立っていた。

「体組織操作型ナノマシン！初めて見た。」

「・・・なんかかなり気持ち悪い変身でしたけど、これなら警戒されないかもしれませんね。」

「気持ち悪いとは失礼ね。これは変身に苦痛を伴うのよ。」

「声が高い。口調まで違う。もはや別人！」

「それでも身体機能は元のままだから女の子がそのまま出るよりはいいでしょう？」

「お願いします。」

こうして村人と接触を果たすため一行は海岸へと向かった。

〈監視〉

「なんだ？奇妙な服を着た一団が歩いてくる。」

「おい！村に行つて知らせてこい。」

「わかった。」

森を伝令が足音をたてず駆け抜けていく。

「しかし、今まで寒気がする程巧妙に隠れていた奴らがなぜすんなり顔を見せたんだ？」

「さてな？」

〈漂流者一行〉

「何人？」

「二人残った。一人は村の方へ。」

「二人かあ。いきなり話しかけたら逃げられちゃうね。向こうの人数が増えてからにする？」

「そうしましょうか。向こうはかなり警戒してるみたいです。こちらが急に無防備に現れたのを不信がついています。」

「じゃあ、宇宙艇に忘れ物をしていたという設定で。」

〈監視〉

「なんだ、奇妙な船に乗り込み始めたぞ。」

「逃げる気じゃないかな？」

「逃げてくれるなら万々歳だけだな。」

「やつらの陸に残っている奴らを俺らでのしちまうか？」

「ばか。船に乗ってる奴らがおおりてきたらあっちの方が多いんだ

よ。」

「陸に残ってる奴らは女だけじゃねえか。簡単にのしちまえるって。それにいざとなりや人質にして・・・」

「それ以上口に出すな。誇り高き森の民がそんなことできるか！」

「兄貴は固いなあ。」

「お前が柔らかすぎるんだ。誇りはないのか？」

「誇りより自分の命と村が大事。あれが共和国の奴らで逃げられたことうちに侵攻することになったらどうするの？」

「しかし・・・。」

「早くしないと全員乗り込まれたら逃げられちまう。」

「・・・仕方ない。」

「監視してた人たちが出てきた！」

「早い！」

リチャードとトモエに村人の二人が急速に接近した。

「オライオン！お前は黒髪の方をやれ。俺は金髪の方をやる。」

「分かったよ、アレス兄貴！」

アレスがリチャードの方に腰に横向きに釣っていた鉈を手に取り襲いかかった。

「すまないが。人質になってもらう。」

「きゃー！助けてー、誰かー！（おいおい、こんなの予定にないよ！格闘は専門外だ！）」

リチャードは一目散に逃げに入った。

「君には恨みはないんだけどね。ここに入ってきた目的を聞き出すまでは逃がす訳にはいかないんだ。悪いけど人質になってもらう

よ。」

オライオンは油断なく弓を構えている。弓はアーチェリータイプのもので体の半分くらいあり、それなりに威力がありそうだった。「私たちは話し合いでの解決を希望しています。いきなり弓を構えて脅すような人に人質にされる訳にはいきません。」

トモエの目が色を失うと、急に走り出し海岸に落ちていた枝を拾い、オライオンに向かって振るい海岸の砂をかけた。

「なっ！」

オライオンは油断はしていなかったが、虚をつかれた形になり一瞬トモエの姿を見失った。

「どこだ!？」

「オライオン後ろだ!」

「はっ！」

トモエが後ろから横なぎに首元を狙った一撃を放つ。

オライオンはその一撃を間髪でさけると距離をとるためバックステップし弓をしぼる。

しかしまたトモエはオライオンの視界から消えた。

「あの女は精霊術でも使ってたのか？」

「終わりです。」

オライオンの死角から気配を消して近づいたトモエの一撃でオライオンは意識を刈られた。

「オライオン!」

「キヤー! トモエちゃんすごい! (ふー、助かった。やるなあ。しかしあんなに強かったとは。)」

アレスはなかなかとらえられないリチャードを無視して弟の救出に向かった。

「おのれ! よくもオライオンを!」

「先に仕掛けてきたのはそちらでしょう? しかも人質に取ろうとした。」

淡々としかしはつきりトモエが言つと

「ぐっ！」

もともと後ろめたかつたこともあり言い返せずにいると

「なさけないわね！アレス！オライオン！」

そこに現れたのは赤い髪の勝ち気そうなつり目の少女だった・

「シンシア！」

序：第七話 変身登場（後書き）

強さが

トモエ>イレーヌ>>リチャード>ヤン>ヨシヒロ
になりそう・

男が弱い・

・・・そういう時代なのかな？

序：第八話　ワタシガイコクジンナニモシラナイネ（前書き）

うーん

序：第八話　ワタシガイコクジンナニモシラナイネ

颯爽と後ろに一つに縛った赤い髪をたなびかせながら現れた少女は少し哀れむような目でアレスを見た。

「あんたつてば・迷いがあるなら最初っから襲わなければいいのよ・全く。」

「しかし今あいつらを逃がす訳には。」

「それもオライオンに言われたからでしょ・たくどっちが弟だからからないわね・あんたは腕力と人の良さだけが取り柄なんだし仕方ないか。」

「・・・そこまでいうか？」

「ほめてんのよ・二つも取り柄があんだから他は別のやつが補うわ・村の掟、第一は？」

「・・・一人はみんなのため、みんなは一人のため。」

「でしょうが・あんたら二人だけで全部やるうとしないでみんなが来るまでの時間稼ぎをすれば良かったのよ。」

大きいからだを小さくしてアレスが反省する。

「さて、あんたたち・悪かったわね・うちの馬鹿二人が先走つちやて・でも大筋私の意見もこいつらと一緒なんだ・ここであんたたちを帰すわけにはいかない・ここにきた目的を聞くまではね。」

「どうします？少しは話の分かりそうな人がきましたけど？」

「そうだな・彼女に事情を説明して私たちに危害を加えないことを約束させるくらいかな？」

「ちなみに、あの人は例の怪力女ですよ。」

「なっ！あの！あんな少女がか？やはり何かあるなここの人には！？」

「あの人の力は未知数です・なので私たちの安全はあの人の意向、ひいてはあの人に影響力のある人の意思に左右される恐れがありま

す・恥ずかしながら私たちの中で一番戦えるのはトモエさんですが
いくら彼女でもあの力に対抗できないですよ・たぶん・」

「・・・あの人を信じられるかどうかが鍵か・」

「トモエさんは勘をナノマシンとEISで鍛えているんですよ
？もうここは彼女の勘で判断してもらっては？」

「では彼女にナノマシンで接触し、お願いしてます・
と宇宙艇の通信機で三人が話し合っていた・」

「・・・」

「トモエさん、トモエさん！聞こえますか？」

「・・・」

巴の目に徐々に光が戻っていく・

「・・・はい！聞こえます・私、無我、状態だと意識が薄くなる
んですよ・」

「・・・そうですか・それはまた頼もしいというか不安になると
いうか・・・それでですねあなたの勘で彼女が信用できるのかを
判断してもらいたいんです・」

「ええ！私ですか？でも私なんかが・・・」

「いやいや、みんなもう君の勘が当たることは身を以て知ってい
るよ・お願い・君しかいないんだ・」

「・・・なんだか今朝と逆になっちゃったね・わかった・やって
みるよ・」

「・・・（なんだ？あの子の雰囲気が変わった？歴戦の勇者のよ
うな雰囲気は薄くなっていく・徐々に領主以外で互角に戦えそうだ
と思っていたのに戦闘態勢を解いちゃった・）」

などとシンシアが物騒なことを考えていると

「ねえ、あなただれは？私は一橋巴・」

「私はシンシアよ・ヒトツバシトモエはこの一行の長？」

「（ヒトツバシトモエで一つの名前だと思われたあ）一橋が名字

で巴が名前よ・内には長は決まってるわ・でもみんなの意見はまとまってるわ。」

「(名字とは何だ?)名字って何?それに意見がまとまっているのはなぜ?話し合ってる様子はなかったけど?」

「名字は・・・えーと。」

『なんて説明すれば良い?』

『まだ名字の意味の単語はわからないからね・家族を表す名前前で家族と一緒に持っている名前って答えたら今わかってる単語で表せるよ。』

『OK・ありがとう。』

「名字は家族を表す名前前で家族と一緒に持っている名前よ・意見がまとまってるのはナノマシンで話したからなんだけど。」

「ああ・家名のこと・私は家名を持つてるような上等な身分じゃないからただのシンシアよ・ナノマシンというのはなに?精霊術の一種?」

「精霊術?」

「精霊術を知らない?まさか!共和国にも精霊術はあるでしょ?っていうか精霊術使えない人はいないはずだしね。」

「共和国って何?言葉を知らないだけかも・こちらの言葉はまだよくわからないから。」

「共和国を知らない?言葉を知らないって話せてるじゃない・あなたどこの人?」

さすがに不信任が募り始めたのかシンシアの顔が少し険しくなる・
「分からないのよ・船に乗ってたらいつの間にかこの海にいて、近いところがここだったから来たの。」

「・・・漂流者って訳ね・私もこの辺り以外の地理にくわしくないからあなたがどこの人かわからないわ・領主に聞けば分かるかもだけど・あ・精霊術はね自然の力をちょっと分けてもらってそれを

使う術のことよ．たぶんあなたは風の力で声を飛ばして会話してたのね．共和国はわたしの村から森へ西に50スタデイオン（*9 kmくらい）も行った所に帝国との国境があるわ．」

「そうだったのよ．へー共和国についてはよくしらないわ．（何？精霊つて？なんか勝手に納得してくれてるからそのまま流したけどなにそれ？）食料を勝手にとってごめんなさい．私たち食料を持つてなかったのよ．」

「そう．別に気にしなくていいわよ．事情が事情だし．ただみんな不安がってるし村までついてきて村長に直接説明してくれない？」

『・・・どうしよう．』

『彼女は使用できそう？』

『うん．』

『なら彼女に俺たちに危害を加えないことを約束してもらってついていこう．』

『うん．分かった．』

「じゃあ、私たちに攻撃しないって約束してくれる？」

「はは、だいぶ警戒させちゃったみたいね？大丈夫私がなんとかするわ．まかせて．」

そうしてようやく村へ向かうことになった．変身を解くタイミングを失ったりチャードとともに．

序：第八話　ワタシガイコクジンナニモシラナイネ（後書き）

トモエ必殺：『私何も知らなかったの。ここはどこ？お家に帰して
困ったときの巴の勘になりつつある。』

ヤン＝空気。

リチャードどうなる。

どうなるのか

どうしたものか

変な設定つけんじゃないかなかったな

序：第九話 村へ（前書き）

深刻な場面を書くのはいやだねえ。
読むのをそこそこ好きだけど。

序：第九話 村へ

とりあえず何とかなつたかと一安心する漂流者一行（一名除く）であつた。トモエは村へ向かう道すがらシンシアに色々話を聞いていた。

「ねえ、オライオンさん背負つてるけど重くないの？」

「これはね私が地面に落ちる自然の力を操作しているからよ。ってこれは私とは頭のできがちがう友人の言葉だけだね。あいつはこれを『重力』って言つてたけど、結構レアらしいわよ。そいつ曰く、

「へー、すごいねえ。じゃ空とかも飛べたりするの？」

「いやあ、それが試したんだけどね。これが難しいのなんの。私は精霊術を何となくで使つてるから理論的には可能だつて言われてもピンと来ないのよ。」

「そうなんだ。私も何となくで使つてるよ。」

「へー、気が合いそうね。」

「・・・早速仲良くなつてる。」

「適応力あるね、若いって良いわ。」

「イレー又さんも十分若いじゃないですか。あれは性格ですよ。ああやつて会話してくれてるおかげで言語解析がかなり進んでますよ。このまま話していてほしいですね。」

「しかし、リチャードはどうする？変身を解くにしてもあまり見られるものでもないしな。」

「そうですね。場合によっては警戒心を強めてしまつかもしれませんし。このままでもらうか、事情を話して変身を解かせてもらうかですね。」

「・・・すまねえ。」

「・・・はい？」

アレスがりチャード（女）に謝っていた。

「男ならいざ知らず女に鉈を振り回しちまうとは森の男の名折れだ。名誉にかけて詫びはする。何でも言ってくれ。」

「いえ、良いんですよ。お気になさらず。（こういう台詞、口調は違うが私も言っているな。こうして言われる側になると何とも気持ち悪い。気をつけよう。ああ、男とばれたらあとが恐いな。どうするかな。）」

「いや、俺の気が済まねえんだ。頼む。」

「頼むと言われましても。こちらも弟さんを気絶させてしまいましたが、おあいこですわ。（まずい。男と明かすタイミングを逃してしまった。今更、実は男でした。なんて言える雰囲気じゃなくなつた。ていうか気持ち悪い。早く男に戻って普通の会話がしたい。）」

「なんと寛大なやつだ。困ったことがあつたら何でも言ってくれ。力になる。」

「ありがとうございます（暑苦しい男だ。こういう男は苦手だよ。）」

もはや手遅れな状況のリチャードであつた。

「もう、このままいくしかありませんね。もし変身を解いたら血を見ることになりそうです。」

「確かに。しかし、後々ばれたときが辛くなるな。」

「そこは彼以外には明かして協力願うなりしましょう。」

もはや人ごとのように話す三人であつた。

（村）

「・・・それは災難でしたな。どちらから来たかもわからないのですか？」

「ええ、話は変わりますが、こちらでは空を飛びませんか？」

「空を……か？精霊術で空を飛ぶものはおる。山の高さを超えることができた者はおらんな。山を越えると精霊の加護が届かないようで。音より速く飛ぶこともできん。自然の力を超えることはできんのだ。」

「そう……ですか。私たちはどうやらこちらとは別の世界からやってきたようです。」

「別の世界？」

「はい。私たちの世界ではまず間違いなく、帝国、や、共和国」といった国はありませんでしたから。」

「それは、失礼だが知らないだけということとは？」

「話に聞いた限りではこれだけの規模の国を私たちが知らないということはないと思います。私たちの国ではある程度の知識の共有化がなされておりましたので。」

「そうか。辛かったろうな。」

村長が白く染まる眉毛をゆがめて言った。

「……」

「当面の食事と寝床はこちらで用意いたそう。まずはゆっくりと疲れを癒し、どうするかを決めればよろしかろう。」

「ご温情痛み入ります。」

「気落ちせずに……な。」

「いい人だったな。」

「ええ、ありがたいことです。」

「あまり深く突っ込んでくれなくて助かったよ。」

「とりあえず休んで気持ちを整理させたい……」

「そうですね。今日はもう寝ましょう。」

こうして緊張でかシヨックでか疲れていたのか皆、深い眠りについていた。

序：第十話 災難

夢を、夢を見ていた。眠りの浅いときに心地のいい音に起こされ、快適な温度に制御された空間でゆりかごに守られるように過ごしてきた日々を。しかしその生活に違和感を覚え始めたのはいつだったか。その揺りかごから出て様々なものを直接見たいと願っていた。そんな頃の夢を。

イレーヌの朝は早い。が、寝起きはひどいものだ。十分くらいは頭が覚醒しないのである。コーヒーの香りによって徐々に覚醒していく。その後、シャワーを浴びて完全覚醒となる。しかし、ここにはコーヒメーカーもなければシャワー室もない。よってイレーヌは起きてから三十分はぼさぼさの髪をそのままに焦点の定まらない目でポーと室内を眺めることになった。

いつもの休日ならこの後、趣味の機械いじりに精を出す訳だがここにはそれもない。イレーヌの朝は今日は何をするかを考える所から始まったのである。

「・・・コーヒーのない生活は考えられないな。あとシャワーがほしいな。この村の水源はどうなっているのだろうか？聞いてみよう。」

ヤンの朝も早い。寝起きは良いほうで、休日の朝はゆっくり紅茶を飲みながら本を読む。日が高くなったら山に登るのが日課となっている。しかし当然紅茶なんて物はなく、あるのは薬草から抽出された渋い汁くらいである。本もこの村にはないようだった。という訳でヤンも暇を持て余しそうになっていた。

リチャードの朝も早い。しかし今朝は起きるのが遅れた。なぜなら変身しっぱなしだったから疲労がたまっていたのである。未だに

変身を解けない現状にうんざりし始めたりチャードは今日は皆にそのことに協力をあおごうと決めた。

トモエの朝も早い。いつも朝練で早く起きる習慣がついているからである。日課の精神集中を行い、次にストレッチをしてからジョギングである。ただ食事の量から考えてあまりカロリーを消費することもできず早々に引き上げなければならなかった。

ヨシヒロの朝はさらに早い。早く起きて、まちに散歩に出かけるのが日課である。誰も起きてないまちを散歩するのが好きなのだ。そこで色々くだらない考え事をするのである。

などと皆それぞれ異なる習慣を持ちながら偶然にも全員が一堂に会したのであった。散歩から帰ってきたヨシヒロ、ジョギングを切り上げて帰ってきたトモエ、紅茶がないので仕方なく代わりの物を探すため外に行こうとしたみようとしたヤン、村長に水場がないか聞こうと出てきたイレーヌ、皆に相談しようとしたリチャードである。みんなちよつと良かったので昼食を共にすることにしたのである。

「食事と住む所が与えられてよかったね。」

「しかしいつまでもタダ飯食らいという訳にもいくまい。」

「ここを離れるにしても留まるにしても情報が圧倒的に足りないですね。村の皆さんに色々聞きにいかなくては。」

「まず私の変身が解けるように協力してくれないか？」
リチャードが困り顔でお願いした。

「確かにこのままという訳にもいきませんしね。」

「問題はアレスさんですね。彼をどうするか。正直に言って許してもらえますかね？」

「人は良さそうだったからな。伝え方さえ間違えなければ何とかなるだろう。」

「そうですね。」

「手伝つては……くれないんだな。」

「だってどうしようもないじゃないですか。正直に告げる以外、隠し通せる物でもありませんし。」

その後、彼の前で正直に真実を告げ、中々信じてもらえないのに業を煮やしたりチャードが変身を解くと、アレスは気絶したのは言うまでもない。以外と繊細な男なのである。

そうこうしているうちに装備が山賊より少しマシなくらいだが、応統一されている集団がやってきた。

「領主の騎士だ。何しにきたんだ？」

「徴税官がいないから税金をとりに来た訳じゃないだろ。時期でもないしな。」

「となるとこれは例の奴らについてかな？」

「早いな。」

村人に動揺が走った。

「静まれ！我々は領主様の名により森で見つかった異邦人を連行するように仰せつかっている。異邦人はどこだ？」

隊長らしき小柄ながらも筋肉の引き締まった目つきの悪い男が叫んだ。

「誰かきたようですよ。」

「領主の命令だつて。」

「歯向かうとこの人たちに迷惑がかかるな。早く出て行って素直に連行されるか？」

「連行されて問答無用で打ち首つてことはないですよね。」

「映画の見過ぎだよ。そんなことをすれば住民に不信感を植え付けるだけだろ？」

「でもここつて多分封建制度の国だから王様の人となりによってはあり得るんじゃない？」

「たしかに、何の安全策もとらずについていくのは危険ですね。領主の人となりと真意が知りたいですね。」

「しかし、対応が早いですね。俺たちがこの村についた翌日にもう来るなんて。」

「おそらく俺たちの存在に気づいてすぐにこの村の人が領主に知らせたんだろう。それで領主はこの村の近くに兵を待機させておいて村の様子を監視していたってところかな。組織化されてはいるみたいだな。」

「組織化されているからって俺たちにまともな対応をしてくれるとは限りません。」

「そうだが、村の人はケチだとか領主の悪口を言っていたが顔つきは優しげだった。慕われてはいるみたいだぞ。領主の悪口を言える環境だつてところはプラスポイントだな。」

「信用してみるか。」

「シンシアと一緒に来てもらうって言うのはどうかな？領主と知り合いみたいだったし。」

「シンシアが良ければそうしてもらおう。」

こうして一行はシンシアとともに領主の館に向かうことになった。道中、騎士たちが異邦人たちの食欲に圧倒され、隊長は財布の心配とこの食費が経費で落ちるかを心配することになった。

帝国編：第一話 空気を読んでほしかった

「例の異邦人たちが到着いたしました。」

「分かりました。私が直々に尋問します。」

「直々に……でございますか？危険では。」

「あなたがいれば安全でしょうか？私もそんなに弱々しいつもりはないわ、ヘパイストス。」

「命に代えてもお守りいたします。」

「簡単に命に代えられたら困るけどね。そんなに気張ることない

わ。」

エオスは苦笑し、部下の過剰な気負いをたしなめた。

「シンシアも来ておりますが。」

「あの子が？なぜ？」

「どうやら同行を希望したようで我々では止めることもできず。」

「あいつを止められる者はそうはいない。気にすることはないわ。」

「

はい。」

「なんだか歪な館だな。」

「無駄に贅沢な所がある割に規模が小さいですね。」

「一貫性がないですね。」

「来る途中の街道や街の整備もかなり切り詰めてやった感がある

よ。」

「資金がないんじゃないかな。」

「産業も発達してなさそうだしね。仕方ないんじゃないかな。」

「ケチなのよ、あいつは。」

などと一行は軽口をたたいていると、

「お前ら少し口を慎め！」

監視していた兵士の一人が叱責した。

「（かなり怒ってるよ）」

「（おそらく彼らも気にしていた所を言ってしまったんだろう）」

と一行は小声で噂していると

「着いたぞ！降りろ」

と指示された

「恐れ多くも領主様が直接お会いになる。少しでも不信な行動をとれば命がないと思え！」

「はい」

ようやく着いたが、屋敷までは少し歩いた。直接馬車で乗り降りできないようになっていいるらしい。

「よく来た。私が領主のエオスⅡゲルギオスⅡマニだ」

「女の子？」

思わずヨシヒロは口に出していた。領主と名乗った人物は薄い金髪をボブカットにした美少女だったからだ。しかしその身にまとう雰囲気はただ者ではあり得ず、子供らしいのはその外見だけであつた。眉間のしわと青い顔色が少女の美しさに陰を落としていた。

「貴様、エオス様を愚弄するか！」

「よしなさい、ヘパイストス」

「しかし」

「私が子供であることは事実なのだから目くじらを立てる程のことではないだろう？でも私のために怒ってくれてありがとう」

「いえ、申し訳ありませんでした。思慮が足りませす」

エオスは少しうなずくと話を続けた

「では、早速だが尋問を始めさせてもらう。お前たちは何者で、なぜあの森にいたのか？」

代表して最年長のヤンが話すことにした

「我々はおそらくこの世界の外から来ました。次元が異なるのか、

単に違う銀河に来てしまったのかは分かりません。恐ろしく遠い所から来てしまったとお考えください。事故だったのです。気がつけば海の上において、一番近い陸地に上陸したらあの森だったという訳です。」

「次元とか銀河とは何かはしらんがあなた方が遙か遠い世界から来たというのは服装からも分かる。少なくとも帝国およびその周辺の文化圏の者ではないだろうな。」

「その通りだと思います。ですのでこちらの世界の状況を我々は知りません。よろしければお教え願えますか？」

「わかった。手短かに説明しよう。大まかに言えば我々がガイアと読んでいる陸地にくいくつかの国に分かれているが基本的に帝国と共和国で勢力が二分されている。他の国はどちらかの同盟国、有り体に言えば属国か、中立都市国家だ。ここは帝国の中でも共和国との国境に位置する辺境領だ。共和国と帝国は深い森で遮られて互いに交流することはほとんどなかった。今まではな。」

「今までは？」

「共和国はいくつかの小国や都市国家が統合に統合を重ねて成りつたていてな。内紛も多く安定していなかった。だがリュカオンという首長が立つてから秩序を取り戻し、ついには半年前完全な統合を果たした。リュカオンが統合を果たしてからというもの帝国の様子をうかがっている者が入り込み、国境付近に兵と物資が集まってきている。大変きな臭い状況なのだよ。君たちを警戒したのもそのためだ。」

「なるほど。分かりました。大変な状況下にお邪魔してしまったようで申し訳ありません。」

「いや、事故なら仕方ない。しかし、たどり着いたのがここだったのはある種幸運だったかもしれないな。」

「というと。」

「基本的に帝国は排他的だ。異民族は野蛮人とみなされ、大抵は奴隷に、適正がないと判断されれば危険だと殺される。そういう国

なんだ。しかし辺境領は違つゝ文化水準は帝国の本領のほうが上だろうが、異民族と接する機会も多いから野蛮人等と思えないさ。それに今の状況じゃ争いの火種になるようなことはできないしね。身分差はそれなりにあるがそこまで厳しくないと思つていよう。つまり奴隷にされるような心配はしなくても良い。」

「それは助かります。」

「そこで君たちの処遇なのだが、私は君たちを信用したい。しかし領主として軽はずみに信じることもできなくてね。保護観察期間をとりたいのだよ。理解してもらえらるうか？」

「はい、分かります。しかし保護観察とはどのようなものかお聞きしても？」

「兵士による住居の出入り行き先の監視、この街から出ることを禁じるといったところか。期間はおよそ三ヶ月。食料等の生活物資は支給する。」

「なるほど。わかりました。ご配慮痛み入ります。ただ何もせずにとつても気が引けるのですか。」

「あまり動いてもらうのも困るのだ。できれば屋内でできる仕事ならばやつてもらつても良いが、お前たちは何ができるのだ？」

「それは……。」

「言えぬのか？」

「いえ！ただ何ができるのか分からないというか。」

「分からぬとは？何をして生計を立ててきたのだ？」

「私は全員のできることを把握してませんので。」

「そうか。また個別になにかできることがあるのなら兵に言つてくれればできうる限りの便宜を図ろう。」

「ありがとうございます……。」

ヤンがお礼を言おうと思つたら

「トモエは強いんだから兵に訓練でもつけてやつたらどうだ？」
とシンシアが口を挟んだ。

「なにせおそらく私と互角に戦えるくらいだからな。」

(余計なことを！)

とほぼ全員が思った。

「お前とかシンシア、それは相当の猛者だな。誰だ？トモ工というのは？」

「私です。」

トモ工がおずおずと手を挙げた。

「お前が？とてもそうは見えんが。」

「海岸で戦ったのを見たが強かった。攻撃を最小限の動きでかわして効果的な一撃を入れていたからな。」

「そうになると、処遇を少し変更しなければな。」

「それは……。」

「ここにシンシアと互角に戦えるものはそういない。ただの兵では監視にならんだろう。この屋敷に行動を限定する。夜間は自室で待機だ。」

「……わかりました。」

「シンシアはこの場に残れ。ではこれで尋問を終了とする。」

今ひとつ状況をつかめていないシンシアは部屋に残り、一行はあてがわれた部屋に連れて行かれた。

帝国編・第二話 運命の二人（前書き）

一行は出てきません。

帝国編：第二話 運命の二人

かつて無力な女がいた。ただその女は珍しい精霊の力を持っていた。それがこの女の不幸の始まり。

女は「時」が見えた。しかしそれ以外はただの女だった。はじめは皆、重宝した。都合のよい「時」を見ているうちは。

しかし見える「時」はいいものばかりではなかった。それは当たり前のことだったが、不幸を何かのせいにしてしまうことは簡単であるがゆえに皆はそれを彼女のせいにした。それが幸福の始まり。

女はやがて村が困窮しだすと真つ先に人買いに売られた。珍しい精霊に愛された人間は好事家の間では重宝される。そのときにはもう彼女の心は冷え切っていた。

彼女の買い手は辺境領の領主。放蕩者でみな、手を焼いていた。できるだけ彼の気を長く引く「玩具」が必要だった。そこで買われたのが彼女だった。

領主は彼女の力より笑わないそのことに興味をもった。彼女を笑わせるためにあらゆることをした。これは彼に仕えるものにとって大きな誤算であった。出費が一向に減らなかつたのだから。

何をしても笑わぬ女に業を煮やした男は彼女を殺そうとした。このとき、初めて彼女は笑って。心底幸福そうに笑った。

それをみた領主は衝撃を受けた。殺されるときになつて笑うなんてこの女はなんと不幸な人生を歩んできたのかと。そのときにはもう遅く。彼は彼女に恋していた。それが彼女の転落の始まり。

彼のやさしさに触れるにつれ少しずつ彼女の心は癒えていった。そしてついには彼女は彼と結婚し、双子を出産した。赤毛と金髪の双子だった。彼女は母親になった。

母親は愚かだ。子供のために思いどんな愚かなことも簡単にやっってしまう。母親は村を出てから一度も使わなかつた力を使った。それがどのようなものだったかは彼女しか知らない。出産まもなくに

力を使つたためか母親の体調はくずれ床に伏しがちになった。

双子の名は月と太陽の精霊の名前からつけられ、シンシアとエオスと名づけられた。二人の容姿とは逆の名前をつけ、運命に抗おうとしているかの様だった。その名に皆不思議がったが母親はこの名を変えようとはしなかった。

ある日母親は赤子を抱えて森に来ていた。人の立ち寄らぬ魔の森そこに住む奇矯な人々の住まう村に。

「この子をよろしくお願いいたします。この子はこれから長き後、苦難に見舞われるでしょう。でも私はそんな運命に抗いたい。そのためどうかこの子を育ててやってくれませんか？お願いいたします。」

「……わかりました。お預かりいたしますよう。」
赤毛の幼子は母親の顔も知らぬまま、森の民となった。

「どうか幸せに。あなたは強く生きて。私には何も……できないの。ごめんね。……ごめんね。」
母親は馬車が森を抜けるまで森のほうへ謝り続けた。何度も何度も。

その十年後、母親は息を静かにひきとつた。名をカレンデュラ。「慈愛」「別れの悲しみ」「乙女の美しい姿」「失望」の花言葉をもつ花の名である。32歳の若さであった。

母親がなくなつてからというものの父親は酒びたりになり、母親によく似た金髪の娘を溺愛した。それから一年後、後を追うように父親は死んだ。娘はそんな父親を見てこう思っていた。「こうはならない」と。私は誰も好きにはならないと。常に感情に流されず自身を制御しようと。彼女に貴族とはかくあるべきという像を教えたのは教育係のクラウスだった。彼は母親がまだ生きていたときに彼女が拾い、目をかけていた没落貴族の子息である。彼は奥方を主人である以上に母親、いや神のように崇拜していた。それは彼が親の愛を感じずに幼少時代をすごしたことに起因する。その娘である金髪

の少女を自身のすべてを尽くしてでもお守りしようと誓っていた。そうして金髪の少女は人として不自然なまでに「理想の領主」であるうとし、またそれはある程度成功していた。

これはとある辺境領に起こった出来事である。

応接室に二人の少女が見詰め合っている。二人ともよく似た顔立ちをしていたが、これまでの生活で刻んできたものが彼女たちをまったく別の生き物に感じさせた。

片方は生命力にあふれその目は輝いている。髪は赤く燃えるように波うちそれを強引に後ろにまとめている。そこが唯一女らしさを感じさせるところだった。身なりは森の民特有の森の材料を使った硬さと動きやすさを追求した服装で本来彼女には似合わないはずであるが、長年着ているせいかしつかり着こなしている。

もう片方は刻みこまれた眉間のしわと土気色をした顔は化粧でも隠しきれていない。髪は淡い金髪であり、月のように光を淡く反射してあたりを照らしている。最低限の装飾品しか身につけておらず、女らしさの限界に挑戦しているかのように姫の身分の割りに質素であった。ドレスはまるで彼女を縛り付けるための鎖のように体にびつたりとしていた。

「久しぶりね、シンシア。」

「ええ、久しぶりね、姉上。」

シンシアが眉をひそめた。

「姉と呼ばないで。身軽で自由なただのシンシア？」

「わかったよ。重い荷を背負うかこの鳥の姫、エオス様。」
しばらく間があった後、二人は笑いあった。

「変わってないわね。あなたは・・・」

「あんたもな・・・」

「あら、私は変わってるわよ。最近体重が1デラタラン（1タラン≒50キログラム、デラ≒1/10）も減ってしまったわ。」

「私は体重に興味はないわ。重さは私には意味がありませんからね。」

「重さを変えられるあなたをうらやましく思うこともあるわ。」
「私もあなたの光の力をうらやましく思うわよ。蠟燭いらすだもの。」

「ふふ。さて、そろそろここに来た目的を聞きましようか？」

「エオスが真剣な顔になった。」

「目的ねえ。別にないわ。」

「嘘おっしやい。さつきもわざとあの五人をここに残すように口をはさんでおいて。」

「やつぱ、ばれてた？」

「ばればれです。理由は何ですか？」

「まず、あなたにあの五人の守護をしつかりやつてもらおうと思つて。この屋敷の中じゃ、あの五人に馬鹿やるうとするやつもいないでしょ？」

と肩をすくめた。

「なるほどね？他の理由は？」

「あとはあの五人がこの屋敷にいたほうがあなたが安全かと思つてね。」

「？それはどういう？」

「あいつらは全員かどうかは知らないけどかなり気配に敏感みたいなんだ。私たちの包囲網をやすやすと何度もくぐって見せた。これからあなたの身边に命を狙うやからが来るかもしれないからね。もしそんなやつがいればすぐにわかると思つてね。」

「森の民の包囲網をかくぐるなんて……。何者なのかしらね。」

「エオスが警戒するような目で五人の連れて行った方向を見つめた。」

「少なくとも悪いやつじゃない。私の勘がそう言ってる。」

「あなたの勘は信じてるけど、見ず知らずのしかも腕のたつ人間をそばに置くのは神経使うわ。」

「あんた得意でしょ。神経すり減らすの。」

「特技じゃないわ！まったく！あんたが一番私の寿命を減らして
るわね。」

といつつもエオスの顔にエネルギーがあふれている。

なんだかんだで彼女は世話焼きである。自分ではなく他人のために力を発揮するタイプの人間なのだ。また彼シンシアと話せたことが彼女にエネルギーを与えている。シンシアのように気安く話せる存在を貴重なものとエオスは思っており、シンシアはシンシアでエオスの自分にはない部分に敬意と信頼を寄せていたのである。

帝国編：第三話 職安にいこう

屋敷を夜に徘徊する人影が一つ。その影は気配を完全に消し、足音を立てずに領主の寝室に忍び込もうとしている。扉の前までたどり着いたその瞬間、突然闇と同じ色の髪をした青年が話しかけてきた。

「おい、女性の寝室に夜分遅くに何のようだ？」

その青年は兵士にはまず見えない。武器も防具も身につけず、身構えてもいない。刺客は青年を屋敷の単なる客人の一人と判断し、息の根を止めにかかる。

その判断は正しい。確かに彼はこの屋敷の客人である。しかし、この刺客たちは間違いを犯した。単なる客人ではなかった。

刺客が襲い掛かると、青年は驚いた風も無くあたりを照らしていた蠟燭の灯を消した。

その瞬間、刺客は青年を見失った。いくら夜目が利く刺客も突然の光の消失には対応できない。気づく間もなく刺客は気を失った。

「どう？うまくいった？」

「ああ、どうすればいいのかわからなかったから連れてきた。」

ヨシヒロの後ろに確かにいた。無造作に引きずられながら。

「・・・ひどくない？」

「抱きかかえることもできなくて。引きずるしかなかったんだ。」

台車も無かったし。」

「・・・それでこれがその刺客ですか。」

今後この刺客をどうするかヤンたちアダルト組に相談するためトモエとイレーヌの女性部屋に集まっていた。

「どうしたらいいですか？」

「捨ててきなさい。」

捨て犬を拾ってきた子供をしかるようにヤンは言った。

「ええ！」

「まあ、それは冗談ですが。」

「・・・冗談なんですか。」

「冗談です。まったく。私たちに一言も告げずに。何かあったらどうするつもりだったんですか？」

「・・・ごめんなさい。」

「無事だったからいいですけど。」

「ただ引き渡したらあの人はどうなるんでしょうか？」

「この辺境領の法では領主を害そうとした者はよくて投獄、悪くすれば縛り首です。」

「そんな！」

「あとは領主さんのさじ加減しだいですね。各邦領はその領主に裁量を任されているようですから。」

「そうなんですか。」

「心配なのは刺客だけじゃない。」

イレーヌが眠たそうな目をしている。

「??それはどういう??」

「私たちが夜間に部屋から出てしまったことを言及されるかもしれないのですね？」

ヨシヒロが気になっていたことを口にした。

「そう。刺客を捕らえた以上、隠し通せない。おそらく刺客を捕らえたことで不問にしてくれるとは思いますが。」

「確かに、そうですね。」

「ま、大丈夫だろう。ただ警戒が強くなるかもってだけの話さ。君たちはよいことをしたのだから気に病む必要は無いよ。」

そうして刺客は領主に引き渡された。

「・・・以上の経緯により怪しい者を捕らえております。」

「わかった。ご苦労。刺客からは背後関係を聞き出せ。多少荒っ

ばくやってもかまわん。だができるだけ生かせよ。自身の手先のものが捕らえられているというだけで相手に圧力を与えられるからなまあ、死体でもそれなりに利用価値はあるが。」

「は、了解いたしました。それで刺客を捕らえました例の異邦人はどういたしましたしょう?」

「彼らか。彼らは夜中に室外へ出てしまったが、刺客を捕らえたことで不問ということにする。むしろこちらから礼をせねばならんな。十分な支度金を褒章として与え、自由にさせてもよいだろう。」

「分かりました。そのように手配いたします。」

「ああ、私から話すから面会室に呼んでおいてくれ。」

「了解しました。」

執務室でエオスは一人で昨日の夜の出来事を思い出していた。エオスは自身の光の精霊術により寢室の前の光景を映し出して見ていた。

エオスは基本的に精霊術による能力は透視、遠視、幻術が主で、戦闘向きではない。刺客が入ってきたとき、光によるかく乱と幻術により逃げる準備をしていた。

そこに予想外の人間が現れた。シンシアからあの者たちの特殊性は聞いていたがまさか刺客に気づき、待ち伏せるとは。その後の動きにも驚いた。まったくの暗闇でのあの者の動きはスムーズで暗闇をもものともしないものであった。あらかじめ刺客の動きが分かっていたかのようであった。その時の暗闇にひっそりたたずむ青年の姿が目には焼きついて離れなかった。

「昨夜はありがとう。おかげで助かった。」

「いえ、当然のことをしたまでです。ただ一つお聞きしてよろしいですか?」

「何?」

「昨日捕まえた者はどうなりますか?」

「まあ、事情を聞いてからおいおい決める。悪いようにはしない。」

「エオスは笑いながらそういった。」

「そうですね。」

「トモエはほつと安堵の息を吐いた。」

「そなたたちには支度金を褒章として与え、自由にしてもらおうと思う。この辺境領、ひいては帝国の法に触れなければな。」

「本当ですか?!ありがとうございます。」

「礼には及ばんよ。そなたたちのこれまでの行動からすれば当然の措置だ。幸運を祈る。」

「ありがとうございます。領主様も御身安らかに。」

「ああ。ところで仕事に困れば私のところで働けばよい。それなりの待遇を約束するぞ。屋敷のものでも気づけなんだ侵入者に気づき撃退したのだからな。私はそなたたちを高く買っておる。」

「ありがとうございます。」

「私に仕えよと命令することもできたけど・・・」

「エオスは面会室で一人つぶやいた。」

「さて。いきなり自由になったけどどうする?」

「仕事を探さなければ。何もしなければ一年ほどで干上がってしまっ。」

「職安なんて無いですよね。」

「手分けして探して見ますか?で昼ごろ集合してみるといいのでは?」

「そうでしょうか?こちらの職業事情をよく知りませんし。」

「そうして五人はいったん別れ仕事探しに向かった。」

「一橋 巴:元高校生。現在無職。絶対勘。」

「前田義弘:元大学生。現在無職。超感覚。」

「リチャード・ジョーンズ:元俳優。現無職。変態もとい変体。」

イレーヌ・トレスカ：元エンジニア。現無職。不明。
ヤン・オールト：元研究員。現無職。不明。

帝国編：第四話 曲がり角にご用心

トモエの場合

トモエは途方にくれている。トモエは働いた経験が無い。仕事探しは困難を極める。アルバイトは派遣団体に登録しておけば簡単に見つかる世界から来たトモエにとって仕事探しは未知の領域なのだ。そこで途方にくれていると突然声をかけられた。

「ねえ、君かわいいね。この辺じゃ見ない顔だけど外から来たの？」

「ええ、まあ。」

男は年若くおそらく二十台。童顔なので実際よりは若く見えているかもしれない。青い髪をした優男である。トモエはこの男からは悪い予感はしなかった。

「だよねえ。この辺の人には見られない肌の色してるし。」

「あなたはこの辺の人？」

トモエは不思議に思っていた。このあたりの人は普通生まれだ。出るのは一握りの人間だ。行商人や各国の使節や伝令くらいである。行商人と言っても街道もまともに整備されておらず設備も整っていないこの地域に来る行商人はほとんどいない。「魔物」とこの国で呼ばれている化け物や盗賊の類も出没し、それらに対策も取れていない。辺境には辺境にしか取れない産物もあり、それらを目的とした一部の大商人が新しい市場の開拓と地方の産物を求めて護衛を連れてやってくるのが普通である。

ではこの人は？見たところ商人とはとても思えない軽装で、洒落ている。護衛にしては武器も防具も無い。何者かわからなかった。

「いや、各地を旅している吟遊詩人といったところかな？」

「そうなの。てつきりどこその商人のお坊ちゃんかと思っただわ。」

ますます胡散臭い。吟遊詩人の需要は確かにある。このあたりは娯楽（刺激）に飢えている。しかし見入りも少ないのもまた事実。

危険を押してまで吟遊詩人がくるような場所ではない。いくら辺境領の主要な町のであるここテバイとはいえ消費は芳しくない。

「いやあ、手厳しい。確かに私は吟遊詩人ではないが見聞を広めるために旅をしているのは本当だよ。」

「一人で？お強いんですね。」

「ああ、私は強いよ。何せ帝国に十五人しか確認されていない『戦略級』の精霊術使いだからね。」

「戦略級？」

「ああ。一概には言えないが、一人で万軍にも値すると認められた者のことだよ。この辺境領に二人も『戦略級』候補がいると聞いて見に来たんだ。」

「へ〜。」

男は目の前の少女に興味を持ち始めていた。最初は外から来たと思しき少女が一人歩いていることを不思議に思った。近づいてみると黒い髪と目をした神秘的な少女であった。これはお近づきにならなくてはと思い、声をかけた。彼女は手のひらも爪もきれいなもので、とても肉体労働をしている立場とは思えない。どこかのお嬢様だろうか。それにしても共もつれていないようだし、何者か分からずにいた。

その黒い瞳に見つめられるとすべてを見透かされている気がする。聞いてくる質問が一つ自分の隠そうとしてるところをついてくるのでこの娘には嘘はつけないと悟り正直に話すことにした。

「ってなにばらしとんじゃ〜。ワレコラー！」

白髪をした十歳程度の少女が青い髪の青年にとび蹴りを食らわしていた。

「何すんだ、こら。痛いじゃないか。」

「そら痛いようにしたもものな。こんくらいじゃなきやお前へこたれないじゃないか！」

もうこの少女すでに泣きそうである。彼女をこの青年のお目付け役としてつけた人間は青年の女子供に甘い性格をよく把握しており、彼女がこの青年の突拍子も無い行動をうまく抑えること期待していた。

「ごめんよ。一人にして。さびしかったらう？」

「子ども扱いスナナ。あんたが勝手にあちこちふらふらふらいい加減にせいよ。」

「ごめんごめん。でもこれは僕の性分のようなものだから。」

「はー、分かってるけどさあんたがそういうやつなのは……。で？だれ？この女？」

「まだ、名前も交換していないけど。外の人ってことは確かかな？」

置いてけぼりにされていたトモエがいきなり話題を振られたので、少し肩を震わせた。

「えーっと、ヒトツバシ トモエです。よろしく。」

「私はアクリシオスⅡアネモスⅡヴァシロプロだよ。アリと呼んでくれ。」

「アルクネーメⅡケイモーンⅡカラジアスだ。アルでいいよ。うちの馬鹿ぼつちゃんが迷惑かけたね。見たところどつかのお嬢様だろ？屋敷まで送っていくよ。」

「いえ、私は今仕事を探しているんです。どこか仕事を探せるところは無いですか？」

何を勘違いしたかアリが気遣わしげな顔で

「それは大変だね。よし私の使用人として……。」

「馬鹿いつてんじゃない！あんたはいつつもその調子で！あんたの家はもう使用人でいっぱいじゃないか。探す手伝いだけしてあげりゃいいんだよ！」

「……わかったよ。」

「ありがとうございます。」

「どうだい店主？彼女ならこの店の看板娘になること請け合いだ！この黒髪、黒目！神秘的ですばらしいだろ？彼女を雇わないか？」
女性をプロデュースさせたら右に出るものは無いだろう。

「うーん、うちも結構厳しいくてね、あんまり余裕はないんだよ。歌でも歌えりや別だが。」

「歌えるかい？」

さも歌えるよねみたいな聞き方をしてくる男である。

「まあ、歌えますけど。」

説明しよう！いまどきのカラオケは点数をつけるだけではないのである！声の質にあった発声の仕方をEISにダウンロードできるのだ！しかも声質にあった歌まで紹介してくれる機能まであるのである。そして彼女はほかの高校生の例に漏れずカラオケが通いをしてきた。

そこで彼女はブームから少し外れたしかしノリのいい曲を無難に歌い上げ店は大盛り上がりになった。もちろんOKが出たことは言わずもがな。

「ふむ、やはり私の専属歌姫として・・・」

「しつこい！」

一橋 巴：元高校生。現在 歌って踊れるウエイトレス。絶対勘の少女。

〜前田義弘の場合〜

しかし、この世界にどんな職種があるかまったく分からん。はつきりいってトモエと同様にヨシヒロも途方にくれていた。道ばたに座り込んで道行く人を眺めていた。

「あなたこんなところに座り込んでどうしたの？」

あまりに哀れに思われたのか心配そうに年若い女性が覗き込んだ。

「いえ。別にこれといって・・・」

この人、心臓に疾病があるな。それにピアスを両方している。

既婚者だ。(この世界では成人すると耳にピアスを片方にする。そこでピアスになるピアスを交換し合うことで結婚が成立するのである。ピアスの後からして結婚二年目ってところか。脳内物質の成分からすると慢性的なストレスにさいなまれているな。

「あなたの方こそ何か悩みがあるんじゃないですか？」

「そんなもの、ないわ・・・」

そう言いながらピアスに手を当てている。

「そうですね、たとえば二年前に結婚なさった御夫君のことなどで。」

「な！いいがかりをつけしないで頂戴！・・・なんで結婚二年目って分かるの？初対面よね？」

「ええ、初対面です。しかし私には分かるのです。あなたの悩みが。あなた最近胸の辺りが苦しくなったり、急に立ちくらみがしたりしていませんか？」

よく言うよ・・・

「ええ、そうなのよ！最近、ちょっと動くときめまいがしたり胸が痛むわ。」

「それはあなたが悩みを抱えているからです。ささ、思う存分胸のうちの吐き出してください。」

それから最近夫が冷たいだの姑がいじめるだの愚痴を延々聞き、これからどうすればいいかを適当にそれっぽいことを伝え、これから起こることとその対策を適当にでっち上げて伝えた。そしてナノマシンを女性の体内に忍び込ませ心臓の疾病原因を除去した。

「分かったわ。夫がもうすぐ行きつけの飲み屋の看板娘と浮気するのね。それでその看板娘にこっぴどく振られるのね。」

「ええ、ですのまだ怒っちゃいけません。看板娘に振られるまで耐えるのです。振られたところをやさしくしてあげれば御夫君もあなたの元に戻ってきます。」

「わかったわ、ありがとう！おかげで胸のつつかえも取れたようだわ！」

「それはよかった。」

「これ少ないけど取っという！」

と行って財布後と丸々よこて走っていった。

よくあたる占い師だの人生相談者だの病気を治す名医だの奇跡の人だの言われる人間が現れたのはこのあたりである。

前田義弘：元大学生。現在占い師、人生相談室、医者、奇跡の人
超感覚男。

帝国編：第五話 大人の事情

「リチャード・ジョーンズの場合」

リチャードは華々しい舞台上で活躍してきたスターではない。孤児だったリチャードは孤児院の皆を笑わせるの好きだった。それが高じて職業訓練校時代に俳優を目指すことになる。ただ食べていけるまでになる俳優はほんの一握りである。御多聞にもれず、リチャードは俳優としての訓練と同時に生活費を稼ぐ必要に迫られていた。その結果、彼はマフィアと組んで仕事をするようになっていた。彼の仕事ぶりから彼は百面の男と呼ばれるまでになり、変装で人をだますのが面白くなってきていた。もうすでにこの時彼の目的は生活費稼ぎではなく他人にはできないことのできる犯罪まがいの行為そのものになっていた。彼は自身を自嘲を込めて「俳優」と称する。

彼は学校も辞めて何でも屋のようなことをはじめた。その仕事の大半は以前から付き合いのあるマフィアの依頼だったが。そのうち彼は騙す対象を変えることにした。マフィアそのものを騙すことにしたのである。

その結果、彼はマフィアの資金を騙し取り追われる身となった。おそらくこの漂流をもっとも前向きに捉えているのは彼であろう。

彼はこの世界で仕事を探す際に焦りはなかった。彼はほぼゼロの状態からスタートすることに慣れていたし、ある種の技術に絶対の自信を持っていたから。彼が仕事探しにまず始めたことは「ここでは何が求められているか」を探ることだった。

この町は領主の膝元であり、この辺境領で最も安全な町である。しかし、町の治安は警察の様な公的な存在がいて成り立っているのではない。辺境領の軍は各町に分散しており、その町での情報の収集を主な任務としている。その情報はすみやかに領主に伝えられ、有事の際は分散している軍を集めてことにあたる制度になっていた。

これは兵を大量に養う余力がないが故の苦肉の策であった。帝国には兵役が存在するがその装備や食事、報奨金なども支給であり大金を食うのである。

そこで町の治安を領主に委任されているのが町の有力者により運営される自警団である。自警団といっても有力者の私兵であり、運営する旨味も当然存在する。旨味とはその町の自警団を置く区域の商売の独占である。

彼はそこに目を付けた。自身で自警団を作り、独占区域を広げ、最終的には交易網を作り上げる。そのために彼は下地づくりから始めた。まず町の自警団に入り、それぞれの縄張りや特色を調べ、他の団員の信頼も得ていった。

この自警団制度にはシステムの欠陥がある。まず縄張り争いを内包していること。さらには有力者による反乱の可能性である。そのため領主は縄張りをできるだけ細かく分け、利益調整をしやすく自警団同士が団結してことにあたることを阻止している。

そこで商売の苦手な自警団に入り、自警団の運営ができなくなったところを買い叩いて自警団を手に入れるつもりである。

リチャード・ジョーンズ：元俳優、現 野心家自警団員、変態もとい変体

「ヤン・オールの場合」

ヤンは微量ながらナノマシンを対外から放出し、物質の組成の解析および改変を行うことができる。そこを生かした職は……。

「難しいですね。ここの特殊な精霊術ですって言い訳じゃ苦しいですかね。」

などと独り言を言っていると。

「おい、オッサン。見たところ佩刀してねえな。戦闘系の精霊術師かい？」

「いえ……（オッサン……）」

見るからに軽薄そうな白髪の青年がにたにた笑いながら話しかけ

てきた。

「なら、剣買ってきな。安くしとくぜ。今なら、10タランでどうだ？」

「この剣ですか？（見たところ単なる鉄だけど軽い。鉄ではないのでしょうか？）」

「おう、見たところあんた体力なさそうだ。特別仕様で軽くできたんのさ。」

「なるほど、中空になっているんですね。それで軽くなっている。鉄の密度もかなり小さくしてますね。これなら単純に鉄の総量で言ったら隣の剣のほうがお得ですね。しかし加工の手間を考えれば妥当な値段ですが。おそらくこれでは剣で打ち合いになれば折れますね、簡単に。これでは手間と需要を考えればまず作りませんね。」

「ほう、驚いた。中空なのを見抜いたのはいたが鉄の密度まで見抜いたのはお前さんが始めてだぜ。」

「それはどうも。」

「おい、親父。掘り出しもんが来たかもしれないぜ。」

「師匠か、マイスターと呼べ、馬鹿息子。」

店の中から黒いひげを蓄えた筋骨隆々とした男が出てきた。

「で、なんだ。掘り出し物ってのは。」

「こいつだよ。こいつ一発で、叩きもしないで持っただけで例の試練の剣の秘密を暴きやがった。」

青年が軽薄さが取れ、ただ好奇心に目を輝かせている。先ほどの対応が演技だと知れた。

「こいつがか。」

「どうも。」

「よく見破ったな。しかし、鍛冶屋には見えねえ。かといって学者にや持っただけであの秘密は分からなねえ。お前何者だ？」

「（さてなんて答えようか）・・・私は山々を渡って鉱物を調べていました。」

「それにしてもあれは剣の重心をいじって取っ手の付加を強めている。普通は分かん。」

「私は触れたものの組成を知り、改変することができのです。」

「・・・土属性精霊術の類か？いや、精霊との感覚の共有・・・か？そういうことがあると聞いたことがある。」

「・・・（そんなものがあるのか？）」

「まあ、そういうことで差別するやからもいるがここじゃあむしろありがたがられる類のものだな。だから警戒しなくてもいいぞ。」

「はい、ありがとうございます。」

「お前さん、これからどうすんだい？」

「ぼちぼち職探してもしようと思ってます。」

「ほう！そりゃいい。うちの工房に来ないか？」

「それは助かりますが、またどうして？」

「そりゃお前、素材の見る目を持つてる男を得ることが一流の工房の条件の一つだからさ！まあ、詳しい話は中でしょうや。」

「はい。」

ヤン・オールト：元研究員、現資材調達、触り知り変える男

「イレーヌ・トレスカの場合」

イレーヌはやりたいことは固まっていた。彼女は動くものを作りたいのである。

しかし、そのような職業がない。そこは、無いなら作ればいいが信条のイレーヌさん。まず造るにはパトロン、技術者が必要だ。そのためにはパトロンに造るものが有用であり、製作可能であると知らしめなければならぬし、協力してくれる技術者は口の堅いものでなくてはならない。

協力者を探すため鍛冶屋に雇ってもらおうとした。鍛冶屋には火の精霊術や金属の精霊術を使えば男も女も無く、むしろ女のほうが高度な精霊術を使えるものの割合が高く重宝されるのである。ふ

と尋ねた鍛冶屋にすでに先客がいた。ヤン・オールトである。

「あんたもここに來てたのか。」

「うん、私の技能を生かせる仕事といったらここくらいかと思ひまして。私の場合は主に材料の選定や製品のチエックが仕事になりそうですよ。もしかしたら会計処理もやらされるかもしれません。なにしろかなりのどんぶり勘定で会計してますからね。」

「そうか。私は加工の方で雇ってもらえたらと思つたんだが。」

「加工ですか。道具の作成と修理が主で、新製品の開発などは行つてないようですね、これまでは。でもこのマイスターが変わつて以來新しいものを作り出す機運が高まっているらしいですよ。」

「そうか。なら具体的な道具のプランを提示できれば雇ってもらえるかもだな。」

「そうですね。私も微力ながら推薦させてもらいましょうか。」

「助かるよ。」

このマイスターと話が弾んだイレーヌは工房の技術顧問に就任した。

イレーヌ・トレスカ：元エンジニア、現技術顧問、無ければ創る女

帝国編：第六話 誕生

仕事探しをしていたらもう昼の鐘が鳴ったので昼食をともに食べるために一行はいったん集まった。

「さて、ご飯を食べますか。」

「あ、その塩とつて。」

「はいはい。」

「おい、リチャード。皿に服かかるぞ。気をつける。」

「あ、すみません。」

「この煮物おいしー！」

「え、ほんとに？一口もらえませんか、トモエさん？」

「いいよー。」

「あの、勝手に肉取らないでくれますか？イレー又ねえさん？」

「ああ、すまんな。うまそうに見えてつい・・・な。」

「つい・・・なっじゃないですよ。ひどいじゃないですか。最後の一個だったのに。」

「ああー、皆さん。仲良く食べましょう。」

かなり騒々しい食事の後、職探しの結果を報告しあった。

「なんだ。結局皆さん決まったんですね。職。俺はぜんぜん見つかりませんでしたよ。今日は親切な人にお金を恵んでもらえましたけど。」

「そうですねえ。まあ、定職につけばいいってもんでもないですし。我々も雇い続けてもらえる保障をもらったわけでもないですね。」

「まあ、何事もないのが一番いいが。」

「お店に来てくれれば、少しくらいは融通利かせてあげられるかもよ。」

「・・・いい、なんかヒモみたいだから。」

「手伝おうか？何なら自警団の口を紹介してもらえるかもしれないな

いし。」

「・・・それもいいですが。やっぱり自分で探したいですから。」
「そうか。」

皆がヨシヒ口を哀れみを込めて見つめていた。

その数日前。

「さて、白き麗しい領主は忙しくて面会できないということだから先に赤い髪の乙女に会いに来たよ。」

「誰に説明している。まったく。女なら誰でもいいのか、己は。」

「いやー、今回は候補が二人とも女性でいいねえ。」

「いつぺん死ぬ。」

「・・・口が悪いね。どこで教育を間違えたかなあ。」

「お前が言うな！」

「・・・何しに来たんだ、お前たちは。」

呆れ顔でシンシアはため息をついた。

「うん、君が精霊の申し子とかよばれているという噂を聞いてね、どれほどのものか見に来たんだ。」

「あんた、少しは隠しなさいよ。」

「馬鹿だなあ。戦略級に小細工は無用だよ。純粹に力だけで圧倒できるようであれば戦略級の名に値しないよ。」

「確かにそうだけど。」

「なんだか知らんが私は興味ないよ。」

「いや、君に無くとも私にはあるのさ。戦略級は基本的に王権以外に屈しないですむ。公職に就く必要は無い。いや、むしろ就くことが難しくなるくらいだ。」

「今の生活で十分満足しているよ。」

「うん。性格は合格かな。戦略級は良くも悪くも揺るがないからねえ。」

「協調性が無いだけだろう。」

「そうともいう。さて、おしゃべりはここまでだ。その美しい体

はできるだけ傷つけないようにするよ！」

言い終わると同時に突然、風が吹き荒れ回りの木々をなぎ倒していく。

「な！」

息つく暇も無くシンシアの体ははるか上空へ運ばれた。

「降参すれば安全に降ろしてあげるよ。」

「誰が！」

シンシアは大地に落下する寸前に下に向かって衝撃波を放ち反動で落下の衝撃を殺して着地した。

「おー、やるね。でもまだコントロールはできてないみたいだね。」

「・・・いい加減にしてよ。」

シンシアを中心に重力場が周りの森の木々をなぎ倒しながら広がっていく。

「これは・・・すばらしい。一定の空間の重量を操れるのか。こんな力は聞いたことが無いよ。神の決めた摂理を操る力だ。こんな辺境まで来てよかったよ。」

「こら、アリ。あたしの心配はなしか！」

「アル、君も戦略級の補佐ならこれくらい余裕だろ？」

「あんたらとは『世界』への影響力が違うんだよ！このままじゃ、私の体にあいつの力の支配力が及んでつぶされちまう。」

「しかたないなあ。離れたとこれで見物してなさい。」

「つてまさか・・・」

アルの止めるまもなくアリはあるの体を遠くへやさしく飛ばしていた。

「あとで覚えてろ。」

「仮にも戦略級同士の戦いに補佐官クラスじゃあ下手したら軽く死ぬからねえ。さて、ほぼ合格とっていいんだけど、そういつてもさっきの様子じゃあ、戦略級に登録してくれないかあ。」

「なに独り言をぶつぶつと。男らしく堂々としなよ。」

「これが性分なもんで。じゃあ趣味じゃないけど堂々と力ずくで納得してもらおうか。」

「やってみる！」

二人がぶつかり合っている様子を遠くから覗いているものがある。アルではない。同じ様式の服装で身を包んだ集団の中で一人、黒づくめの男であった。精霊の紋章の周りを囲むように各領邦の紋章が縫いこまれていることから共和国の軍隊と知れた。周りは彼の指示を待ち静かにたたずんでいる。

「・・・事前情報に無かったな。『流雲のアリ』がいるとは。」

「彼の男は行動が読めない男でして。しかも最近テバイ内に潜入していたものたちが軒並み消息を絶ちまして・・・」

報告していた男が言い訳をしていると

「言い訳を聞きたいわけではない。私が聞きたいのは正確な鮮度の高い情報だ。それを届けられない諜報員には用は無い。」

黒尽くめの男がちらと報告していた男を見た瞬間、黒い棘が男の股から体を突き刺した。

「・・・撤退する。」

部隊は現れたときより静かに整然と撤退して行った。

彼は戦略級とはいうものの森の未熟な小娘と統治のためテバイから出られない引きこもりの姫なら打ち破る自信があったからこそその出陣だった。しかし、ここに帝国でも五指に入るアクリシオスがいることで状況が変わった。太古の昔から戦略級は誰かに従うような者はおらず、また誰かを従えようと思うものもいなかった。それが精霊の趣味なのか精霊とシンクロしやすい性格がそうなのかは分からないが、その中でも特に束縛を嫌うのアクリシオスである。やつの目的を知ることは無意味と割り切っていた。そんな不確定要素に加え、テバイに進入した間者との連絡が取れなくなっている。

「今、これまでと同じと思いき攻めるのは危険だな。」
苦々しげな顔をしながら黒尽くめの男はつぶやいた。

「いい加減あきらめろ！」

「いやいや、君みたいなのが入ってくれるとこの国も少しは面白くなる気がするんだよね。」

「・・・口で言っても分からないようね。」

「口でキスしてくれたらあきらめるかもよ。」

「・・・もういい。」

シンシアは重力制御により岩石や巨木をアリに向かって飛ばしていたが、アリはそれを風で軌道をそらしいなしていた。

「よけてるだけじゃ何にもならないよ！」

シンシアが叫ぶとアリを下の大地ごと持ち上げひっくり返した。

「ちょ・・・それ反則・・・」

地響きがあたりの砂埃とともに広がって行った。

「これで・・・」

地面が風で吹き飛ばされ無傷のアリが現れた。

「終わりなわけないか。」

「いや、これで終わりさ。」

「もうあきらめたのかい？」

「いや、君は戦略級と認め登録を行うよ。」

「面倒はごめんよ。」

「なに、すぐ済むよ。君はもう精霊術を使えないしね。」

「何・・・」

シンシアが精霊術を使おうとするが少し土が盛り上がっただけだった。

「精霊術は術者の精神力で行う。精神力が切れれば当然使えない。君は今まで全力で使ったことが無かったから精神力切れの経験が無

かったんだ。ちゃんと制御しなきゃ無駄に力を使ってしまうからこうなるんだよ。」

「・・・どうする気だ。」

シンシアは抵抗をあきらめていた。

「なに、戦略級の証をその体に刻んだ後書面にサインしてもらっただけでいいよ。」

どこから取り出したのか書類がアリの手に収まっていた。

「・・・わかった。その代わり・・・」

「その代わり？」

「私に精霊術を教えて。できるだけ早く。私はここを守らなきゃいけないんだ。そのための力がほしい。」

アリは少し興味ぶかそうにシンシアを見つめた。

「君は戦略級には珍しくしばらくいられているのかな？」

「いや、私はここが好きだからそうするだけさ。」

「分かった。私のできる範囲で教えて差し上げよう。」

「・・・約束だぞ。」

「もちろんさ。約束は守る。」

いつに無く真剣な表情でアリは答えた。

アリはシンシアの手をとると手の甲を撫で

「ここにアクリシオスⅡアネモスⅡヴァシロプロの名においてシンシアを戦略級精霊術師と認定する。」

と唱えると、シンシアの手の甲に紋章が浮かび上がった。

ここに帝国の十六番目の戦略級精霊術師が誕生した。

「さて、次はお姫様かな？」

共和国編：第一話 共和国の黎明

共和国は共通の利益の追求を基本理念とした国家である。実際共和国は設立当初は複数の都市国家が帝国に対抗するための互助を約束した条約が母体となっている。都市国家の連合軍の総帥が都市国家間から選出され、総帥には非常時ということでもかなりの権力が付与された。その任期は2年である。

しかし、いつの世も都合よく自分たちを助けてくれる英雄を求め、るので総帥は市民に人気である。その英雄が謙虚で人の意見と取り入れ、容姿が端麗であればなおいい。そんな人物がいた。その人物は実にその生涯10回も総帥に選出され、最終的に永世総帥に選出された。その後、その子孫が永世総帥に就任する慣例となり、都市国家の代表で構成される元老院が顧問機関として設立された。結果的に限りなく君主制に近い共和国が誕生した。

しかし、その体制は長く続くはずも無い。永世総帥が政治を行わなくなり、都市国家間の争いが起こり始めた。これが泥沼化するのに時間はかからなかった。本来都市国家間の調整をするはずの総統が怠ければ戦争にまで発展し、都市国家の吸収合併が行われる。そのようなことがまかり通るようになると都市国家間の緊張は高まり、独自に軍備を拡張していった。そのような戦国時代が実に40年も続いたのである。

その戦国時代に終止符を打った男がリユカオンである。リユカオンは都市国家エネタの商人の家に生まれた。商人は都市に商店を持ち商売をするタイプの人間と都市の間を行き来し特定の店を持たない卸業者など様々いるが彼の父親は都市国家の御用商人という同じ商人からも嫌われ、恐れられてもいる男だった。

都市国家間の緊張が高まるにつれ軍備の増強は急務であるがそれには当然金がかかる。しかし税金を上げれば当然市民からの不満がある。そんな不安定な社会状況になることを恐れていたときの代

表は次の選挙での結果と都市国家の安全のためこの御用商人と契約を交わしてしまう。

リユカオンはこのような怪物と呼ばれる男の次男として生まれ、間近で都市国家の暗部を直視してきた。どうにかする必要を感じたリユカオンは手っ取り早く市民の人気を得る方法として共和国設立の経緯から学び、仲間とともに都市国家の防衛軍に入隊した。

このリユカオンの行動を父がどう思ったかは分からないが、リユカオンの軍隊内での出世の速さには父親の意思があったことは確かだろう。それが父親の愛だったのか軍内部に自分の影響力を増やそうとしたのかもしれない。

防衛軍に士官学校は存在しない。しかしそれに代わるものとして騎士団があった。エネタ騎士団は基本的に自費で軍備を整える必要があるので有力者の縁者か、豪商の子弟が主な構成になる。まれに教官として入隊を許可されたものもある。教官は基本的に支給で軍備を調えられる。要はこの騎士団は仕官養成の場との意味もあった。騎士団出身者が将来の各部隊の指揮官であり、政治の中枢を担うのである。

その中であってリユカオンは異質であった。騎士団はある種上流階級の通過儀礼であり、ほかの子弟は大して熱心でもない。また上流階級出身でない教官に対して侮りがあり、中には教官をしかりつけるようなものもいた。その中でリユカオンは訓練に熱心に取り組み、教官の話もよく聞いた。そのようなリユカオンの態度に教官は悪い気がするわけがない。その中でリユカオンが頭角を現すのは早かった。

騎士団の主要任務は伝令、および戦場を走り回って兵士の鼓舞、隊伍をなさなくなった歩兵の組織化である。それによって指揮官としての資質が計られると同時に歩兵たちに指揮官としての役割を担うものとして認知される。その中でリユカオンは兵をよく鼓舞し、集めた兵を隊ごとにまとめ崩れそうな戦線へと適切に送り出してい

た。それはリユカオンの戦術眼もさることながら、兵たちの心理をよく理解しリユカオンにアドバイスしてくれていた教官のおかげである。

着実に実績を積んでいたリユカオンの人生の転換点となる戦いが起こった。タイソンの戦いである。当時リユカオンは22歳になっていた。

戦いの発端はたわいのないエネタと隣接する都市国家サーマーンの住民のいさかいから始まった。

エネタとサーマーンの国境線はタイソン河によって決められており、その水の使用権は非常に曖昧で最初から火種はあったようなものだが、長年川を挟んだ住人同士がうまくやってきていた。

しかしサーマーンの住人が自分の畑に河の水を勝手に引いてしまったことが原因で争いが起こった。争いの規模としては小規模で両方に多少のけが人が出た程度であったが、サーマーンの執政官としてはそれだけで開戦の理由としては十分だったようにエネタに支払い能力のないことを知った上で多額の賠償金をせまり、それを断った時点で宣戦布告した。

対岸の住人同士としてはまさか自分たちの争いから戦争に発展するとは思ってもみなかったであろう。国境沿いに住まう彼らこそが一番戦争など起こってほしくないと願っていたのだから。

こうして望みもしない戦争が始まったのである。

宣戦布告があつてから総司令官を誰にするかであわてていた。通常、国の代表たる執政官が総司令官に就き、指揮をとるのである。しかしこの執政官は宣戦布告がなされるや否や家族と共に逃げたのである。そこで執政官の相談役である百人委員会はある決定をした。

無用な混乱を避けるため執政官が逃げ出したなど市民には告げら

れない。そこで執政官は首都にとどまり代理総司令官としてリュカオンを派遣すると発表した。

それでも市民は不安である。22歳の若造が総司令官である。無理もなかった。不安を感じないとすればよほど鈍いか肝の据わったやつだけであろう。

そうして後に奇跡とよばれる戦いは始まった。

共和国編：第二話 タイソンの戦い

白髪に赤い目とい異相の若者が滔々と流れる河を眺めていた。

正確には河を、ではない。河の対岸の軍勢をである。青年の背中
はけて大きくはなかったがその背について行こうと思わせる何か
が確かにあった。

「そのようなところに居られては敵の矢の的にされてしまいます
ぞ。」

白髪が混じり始めた初老の男が青年に気遣わしく話しかけた。

「オウイディウスか。それはないな。やつらは完全に気を抜いて
おる。こちらに気づきながらもどのような策を弄しようとも覆らぬ
絶対的な兵力差があるのだから無理からぬことだが。」

「しかし、万一ということがございます。総大将ともあるう方が
そのように軽率では困ります。」

「相変わらず心配性だな。万一があろうとお前がいればこの距離
の矢などもの数ではなかるう？それに副将のお前がこのようなど
ころにいてよいのか？」

リユカオンは幼さの残る笑いを顔に表し、副将の顔を見た。

「すでに準備は完了しております。．．．しかしあれでよろしか
ったのですか？定石では砦に立て籠もり、農閑期をやり過ごし刈り
入れ時になつてやつらが引き上げるのを待つのがよろしいのでは？」

「それまで裏切り者が出なければな。だがほぼ確実に苦しい籠城
戦に耐え切れずサーマーンどもの甘い勧誘に負け、城門を開くは必
定。しかも援軍の当てもない。援軍の当てのない籠城戦は無駄に犠
牲者を増やすだけだ、違うか？」

そのようなことはない．．．とはオウイディウスに言うことはで
きなかつた。サーマーン、エネタの周辺の都市国家はすべてサーマ
ーンとすでに内々に取引しており、サーマーンが勝利した後の利権

の分配は決まっている。二枚舌でこちらに援軍を送る用意があると
言ってきた都市もあるが、果たして戦いが終わった後にどのよ
うな要求をしてくるか。軍事力の脆弱さ、政治力のない指導層、劣
悪な経済状態が露呈してしまっている現在、この都市は他者にその
運命を左右される立場となっているのである。

「ですが三万の軍勢に一万八千で攻め入るは自殺行為では？」

「ではこのまま彼奴らにどうぞお通りくださいとタイソンを渡ら
せるか。それでは芸がない。せいぜい嫌がらせくらいはさせてもら
う。」

「いやがらせ・・・でございますか。」

「うん。渡河中はどうあっても無防備な姿をさらすからな。それ
を逃す手はない。」

「しかし、敵を減らすことはできませんがその後が続きません。」

「嫌がらせが終われば逃げるさ。」

「どこに逃げるというのです。ここが我らの地ですぞ。」

「われわれの庭の中を逃げ回るのさ。こういうときに軍勢が自国
民で固められている強みが生かせる。サーマーンの陸軍はほぼすべ
て傭兵で固められている。サーマーン傘下の領主どもが隊長をして
る・・・な。傭兵にとつての財産は兵士、装備、名声さ。兵士の損
害が給金に見合わないと思えば戦闘に積極的にはならなくなってく
るし、傭兵料の値上げを要求してくるだろう。値上げ要求の間は戦
わないのがあの辺りの傭兵団の間じゃ当たり前だしな。その辺りの
結束のなさがアチラさんの弱点。その点俺らはここ以外には行くと
ころはないし、サーマーンの傘下に入った都市の末路は周知してあ
るしな、背水の陣で望む。」

「なるほど。・・・ちよっと待ってください。いったいどこでそ
のような情報を？」

「なに、サーマーンの傘下の領でちよつとな。市井の民の噂話も
馬鹿にしたものではない。」

「総大将たる方がそのような間諜のまねなどせずとも良いのです

「まったく命があつたからよいものを捉えていたらいかなさるおつもりで！」

「そのときは俺の天命もそこまでということだろ。エネタにはまともな諜報員がおらんしな。役に立っておるのだから目を瞑れ。」

「まったくあなたという方は……」

「そろそろ本陣に帰ろう。やつ等のお食事がそろそろ終わる。」

「はっ！」

<サーマーン陣営>

「はあ……」

目線だけで人が殺せそうな赤髪の男はなにやら苛立ってため息をついた。

「どうした、ニユクス。」

「気乗りしねーな。」

「なにがだ？」

「こんな弱いものいじめみたいな戦がしたい訳じゃねえぞ、俺は。」

「

「あんたの戦馬鹿にも、こだわりが在ったんだな。」

「あたりきよ。戦って面白そうなやつじゃねえとやる気にならねえな。」

「俺としちゃ、楽勝な戦で損害が出ないで給料もらえりゃ万々歳だがな。」

「ああ、分かってねえ。分かってねえよ、エレボス。そんなんで楽しいか？ぎりぎりの命のやり取りが面白いんじゃないか。何のために戦士やってんだお前は。」

「あんたはそうだろうな。俺は金のためさ。俺には商才はねえ、元手もねえ。孤児がなる職業といや、他は大家の下男か、男娼か。でなきや野垂れ死にだ。」

エレボスはその優しい目を若干曇らせた。

「なるほどな。だからか。お前が煮え切らない戦いをしてんのは。」

お前の力量ならもつと戦を楽しめると思っただけだな。」

「楽しんでるさ。俺なりに。」

「そうか。ま、お前の見てくれなら男娼でも引く手数多だったただろな。時々お前目当てで入隊してくるやつもいるみたいだしな。」

「殺すぞ。」

「おお恐。」

「これよりタイソン河を渡る！向こう岸に渡り、縄を渡せ。仮設橋を設置する！一番早く向こう岸に到着したものに金貨10枚を約束しよう。」

サーマーン軍総司令のありがたい号令により、エネタへの進軍が始まった。この号令に従い、争うように傭兵たちは河を渡り始めた。

「おつし！俺らも金貨10枚狙うか！」

ニユクスが元気よく言うのとエレボスが大きいため息をついた。

「あほか。たった金貨10枚で命捨ててたまるか。しばらく様子見だ。」

「でもエネタの連中は見当たらねえぞ。この戦力差だ。逃げちまったんじゃねえか？エネタの兵は弱っちくて有名だからな。」

「俺はそこが不気味だ。エネタの総指揮を取っているのはあの男だと聞く。リユカオンが渡河時に無策でいる筈がない。必ず何か仕掛けてくるぞ。」

「リユカオンか……。あいつは戦場じゃいつもあいつが良いとこで邪魔しやがる。すつきり勝たしちゃくれねえだろうな。」

「そうだな。俺としてはあいつがもしこの戦場で生き残ってれば拾って傭兵団に加えたいものだが……。」

「・・・今だやれ。」

リュカオンが声を低くしてつぶやくようにある命令を下した。その命令から数分後、第一陣が渡河し終えて第二陣が渡河している途中で河の水量が突如増し、鉄砲水がやってきた。

上流に土系精霊術師を密かに派遣し、河の水を徐々にせき止めさせ一気に解放したのである。

「今だ！岸に取り残されている第一陣に攻撃を集中！撃破の後、直ちに戦場を離脱。所定の場所に移動せよ！」

各部隊の隊長たちが部下へ命令を徹底させている。この奇襲は速さが要であると隊長たちはよく分かっている。その声に答えるように精霊術師の放つ炎や風がサーマーンの第一陣を襲う。その一斉集中砲火がやんだ後、混乱した敵集団にエネタの歩兵が突撃した。

エネタの主力は重装歩兵で長槍による整然とした突撃だが、今回は鎧を軽装にし、武装は槍ではなく弓と剣である。できるだけ三人一組で一人の敵にあたるように戦術を転換したのである。

<サーマーン陣営>

「おのれエネタの腰抜けどもが姑息なまねを！上流の物見は何をしておった！対岸の様子はどうなっておる！」

サーマーンの総司令が頭から煙が出そうなくらい顔を赤くしながら怒鳴り散らすと副官が努めて冷静に報告した。

「どうやら敵多数に第一陣が攻撃を受けている模様！河の流れが速すぎるため渡河不能！」

「水系精霊術師に命じてさっさと河の流れを鎮めよ！」

「恐れながらこれだけの水量を鎮められるだけの精霊術師が我が軍にはおりません。それにこの水量を今すぐ渡河可能な状態にいたしますと河の周辺住民に多大な被害が出ますが。」

「かまわぬ！河の流れを鎮めるのを最優先とする！」

「・・・！了解いたしました。水系精霊術師に命じ、河の流れを鎮めます。」

副官が息をのみながらも、命令を復唱した。

「早急にだ！」

「……早急に。」

「リユカオンのやつ、このような手段に出るとは、これではすぐに向こう岸に渡河することはできません！第一陣は全滅させられるぞ！」

エレボスがやや興奮気味に叫ぶと、

「ふん！面白くなってきたじゃねえか！ちょっと驚いたわ！じゃあちつくとこつちも脅かせてやろうか！」

リユクスが自分の人より大きめの犬歯が見えるまで口端を吊り上げ言った。

「なに？……まさか！待つ……」

エレボスが制止もはや遅く、リユクスがその身の丈もある大剣を振りかざして河に向かつて走り出した。

「くそっ！あの馬鹿野郎……！いくぞ、野郎ども！大将の馬鹿に続け！」

「オオオオ！」

リユクスとエレボスが団長と副団長を勤める傭兵団「剣と盾」が一つの固まりとなってリユクスの後に続いた。

リユクスが河岸に到着するやいなや大剣を振り上げ、

「ぶった切れるや、こら！」

河の水に叩き付けた。

すると河が二つに切り裂かれ道が文字通り切り開かれた。

「はっはー！びっくりしたか、こら！」

「まったく、相変わらずデタラメだな。あいつは、おい！さっさと渡らねえと切れた水が元に戻っちまうぞ、急げ！」

そうして河の水が後ろから迫ってくる道を一団が疾走した。

<エネタ陣営>

「粗方片付きましたな。殲滅をお命じになりますかな？」

副将のオウイデウスは安堵のため息をついた。

「いや、ここまでにしよう。けが人がいた方がそれに時間が取られるかもしれん。あの総大将では無視して進んでくる公算が高いがな。それに無理を押し河の流れを操作して渡河を開始するかもしれん。そうなつては退却のタイミングを逸する。退却だ。」

「分かりました。退却！」

退却命令に皆、戦闘を終了し退却を開始した。その時。

「報告します！」

「申せ！」

「河の一部の水がなくなりそこからこちらに突撃する一団があります！」

「馬鹿な！あちらにこれだけの水量を精密に操作できる力量の精霊術師がいたというのか！あり得ん！カナリスの水巫女くらいだぞ！」

「それが轟音がしたと思えば河が二つに割れまして。その一団に後続はなく、既に河は元に戻りました。」

「どういうことか？」

突如として人垣が切り裂かれ人影が一人飛び出してきた。

<サーマーン陣営>

「なんだ、戦が終わっちまってる。こりゃいかん！大将が逃げちまう。本陣は……。あっち臭いな。」

リュクスは渡河し終えると少し小高い丘の上に向かっていった。リュクスの突撃はこの世のものとは思えぬものだった。その一振りで触れていたものを紙切れのように切り裂いていく。今回の装備が軽装だったことを割り引いても恐ろしい切れ味である。その太刀筋は無造作の一言につきる。ただ振り回しているのである。その突撃を止められるものはいなかった。

「ははは、見つけたっ！」

リュクスは本陣の幕に向かって斬撃を放ち、本陣を粉々にした。

本陣のあつた場所に土煙が立ちこめ、徐々にそれが晴れてゆくと、一人の若者の姿が現れた。目の前の若者を見てうれしそうに笑いながら切りかかっていた。

「よう、リユカオン久しぶりだな！カテナリーの戦以来か？相変わらずウサギみたいな白い毛と赤い目だな。」

「相変わらずデタラメなやつだ。俺の策をことごとく食い破るのはいつもお前だ。どうして本陣の位置が分かった？いくつか偽の本陣を作っておいたのだが。」

リユカオンがリユクスの剣をよけ、距離を取り間合いから外れる。「勘だ！」

「相変わらず獣じみているな。俺を殺しにきたのか？」

「当たり前だろ。俺は傭兵だ。敵の将を討ち取るのが仕事だ。」

リユクスの剣は暴風のようにリユカオンを襲うがよけられ続ける。まるでリユクスの剣がどこを通過するか分かっているかのように。

「相変わらずよけるのがうまいな。それも『目』の精霊のおかげか？」

「ああ、おかげでこれまで生き残ってきたよ。お前の剣は直線的でよく『見える』。お前の剣は当たらなければ怖くはない。距離を取りつつ戦えばとりあえず負けはしない。」

「ふん、それはどうかな？お前、俺の『剣』の精霊の力を鎧や骨肉を切るだけと思ってるやしないか？それは・・・間違いだ！」

リユクスは無造作にリユカオンに向かって一直線に突きを放った。「何を・・・つつ！」

リユクスはリユカオンと自分の「距離」を切り裂き、リユカオンの目の前にリユクスの剣先が現れた。リユカオンは紙一重で下によけるがリユクスはそれを読んでいた。

「これで仕舞だ！」

リユクスの大剣が目の前に迫ったとき、

「リユカオン様！」

リユカオンを目の前に狼の頭と爪を持ったヒトだったものが抱え

ていた。

「オウイデイウス．すまない．」

「いえ、かまいません．ワシは御身の盾となることが使命でございますれば．」

狼の目が優しい光をたたえてリユカオンを見ていた．

「『人狼』オウイデイウス．知ってるよ．『森の民』で傭兵をやつてた変わり種だつてな．エネタで教官になつたとは聞いていたが．
会えてうれしいぜえ．」

口調こそ軽いがリユクスは全身に冷や汗をかき始めていた．

「ふむ．お前のような若造がワシを知つておるとは．」

「あんたの武勇伝聞かないで傭兵やつてるやつはいないよ．あんたと戦うのも面白そうだ．」

「そうか．リユカオン様を害しようとした御主を死合つにやぶさかでないが．．．」

後方からエレボスのリユクスを探す声が聞こえる．

「どうやら御主の迎えが来たようだ．ここはお互い引かぬか？」

「ふん！分かった．だが約束しろ！必ず俺と勝負すると！」

「確約はできぬな．御主が死んでおるやも知れぬからな．」

「ぬかせ！」

リユクスが剣を振るおうとすると、

「ではな．」

オウイデイウスはリユカオンを抱え、林の中に消えていった．

「ちつ！次は必ず仕留める．」

この戦いで結果は

死傷者数：

エネタ側 150人

サーマーン側 3000人

残存兵力：

エネタ側 17850人

サーマーン側 27000人

いまだエネタの不利は覆ってはいない・

共和国編：第三話 自国の沙汰も金次第

<サーマーン陣営>

結局河が治まるのに5ホラ（1ホラ＝1時間）もかかり、すぐにも追撃にかかろうとする司令官を副官が必死でなだめ、なんとか陣容を整える作業を行っている。

「ところで対岸にいち早く着いた傭兵がいるというのは真か。」
総司令がやつと落ち着き天蓋の下でくつろぎながら尊大な態度を崩さず副官に語りかけた。

「はっ！真にございます。まさしく獅子奮迅の働きと申せましょう。おかげで第一陣を殲滅されずにすみ申した。しかるべき恩賞を与えるべきです。」

副官はリユクスの行動を実際に見ており、その現実離れした働きにしきりに感心していた。

「何を馬鹿なことを言っている。せつかく対岸に着いたというのに敵に大した打撃も与えておらぬというではないか。ただ対岸に到着しただけで恩賞など渡せるものか。」

総司令は鼻で笑いながら副官を呆れ顔で見やった。

「しかし！対岸に到着しただけでもお手柄でございましょう。そのおかげで我々の渡河も容易に行えたのですから。これに恩賞を与えねば今後のわが軍の士気にかかります！」

実際、彼らが対岸に到着し、敵が周囲に存在しないことを確かめてくれなければ安心して河を渡れはしなかつたであろう。

「そのような小さいことで一々恩賞を与えては軍資金が尽きるわ！それに用兵という人種は金にがめつく、すこしこちらが気前よく振舞つと調子に乗って更に要求してきよる。だから恩賞はやらん。ご苦労であつただけ伝えておけばよい。もうこの話はするな。決定事項だ。」

さらに目に宿る副官への軽蔑の色を濃くして総司令は吐き捨てた。

「・・・はっ！（結局は金をケチりただけではないか！わが軍が7割強は傭兵に頼っていることを知らぬわけではあるまいに。）」
副官は体の奥から湧き上がる熱く黒い感情を理性で押し込め何とか返事をした。

「今回の働き大儀であつた。今後の働きに期待する。」

傭兵団「剣と盾」の面々は啞然とした。敵の大将をタルタロス（冥府の神の名）の膝元にもう少しで送つてやれるところまで追い詰めた勇士に対する礼がこれかと。

「おいおい、それはないんじゃないか、伝令殿？敵大将を追い詰め、第一陣を壊滅から救い、後続の渡河を助けた礼が言葉だけってこたないだろう？仮にもうちの団長は小さいながらもプティア領の主だ。貴族だぞ。この非礼はいくらなんでもないんじゃないか、ねえか。」
の エレボスがいつになく柄が悪くなり伝令に食つて掛かつた。

「俺は楽しめたから別にかまわ・・・。」
リュクスが笑いながら大様に構えて話そうとすると途中で話が遮られた。

「ちよつと大将は黙つていてください。交渉は我々がやりますから。」

この傭兵団の主計係であるヘルメスである。その体は傭兵団の中で一段と大きい。しかしその肉付きはよくはなく痩せていた。背が高いくせに戦場でな体を小さくしてやり過ごしている肝っ玉の小ささをからかわれ「のっぽのヘルメス」が綽名の男である。元々は商家の次男坊だつたそうで実家は兄が継ぎ、厄介払いされるようにこの傭兵団に入った男である。

「まず第一陣の全滅を防いだことにより本来死ぬはずだつた30余名のサーマーン貴族を重傷ながら生還させました。本来彼らが死んでいたら一人につき見舞金5タラントン（5000万円程度）を支払うことになっていたんですよ。そこを「重傷者」にしたおかげで見舞金が500ドラクマ（500万円）にできるんだ。それを考

えりや、今回の働きで135タラントン分の働きはしましたよ。金額とは言いませんからせめてその四分の一程度、そうですね30タラントンはいただきたいものですな。」

ヘルメスが当然とばかりに伝令に大金を吹っかけた。

「30タラントン！渡せるわけがないではないか！傭兵風情が何を言うか！増長したか！」

伝令が思わぬ大金を要求され、動揺するままに声を張り上げた。

「これは失礼申し上げた。30余名のサーマーン貴族様の価値はその程度だとは思っておりませぬ。そうでございますね。50タラントンでいかがでしょうか？」

「ふざけておるのか貴様は！高すぎると言っておるのだ！」

「ではいかほどがよろしいのでございましょうや？非才なる私めにお教えください。」

「ふむ、50ドラクマといたところではないかな？」

「50ドラクマ！高尚な冗談をおっしゃるものです。サーマーン貴族様のお命の価値はたったの2ドラクマでございますか！これは面白い冗談でございます。」

ヘルメスが更に声を大きくして答えると、

「お前！声が大きいぞ！それではサーマーンがケチなように聞こえるではないか！」

「申し訳ありませぬ。私気が立つと声が大きくなるようです。」

「70ドラクマでどうだ？」

「70・・・」

またヘルメスが大声を出そうとする

「分かった、80だ！それ以上は絶対に無理だぞ！」

伝令役が声に悲壮感が漂い始めている。

「分かりました。我々もサーマーンとともに戦う同士でございませれば、ここは持ちつ持たれつということにいたしましょう。（これ以上はこいつからは引き出せまい。ここが潮だな・・・）」

「ふんっ！ガメツイ傭兵が！（なにが同士だ！我々とお前たちで

は格が違うのだぞ！」

「お褒めいただきありがとうございます（ケチのサーマーンにしては出したほうだな。）」

そうしてちゃっかり褒章なしのところを80ドラクマをがっちり手に入れるヘルメスであった。

「ヘルメス！よくやった！これでプティ領で冬を越せる！」

エレボスがヘルメスに抱きつかんばかりに近寄って行った。

「ありがとうございます。お約束どおり、80ドラクマの内、8ドラクマいただきます。」

ヘルメスが相変わらずの抜け目なさ、そして空気を冷めさせる言動でエレボスの感動を削ぎ取っていった。

「・・・相変わらず。上げつねえな。そこまでしなくても次に大将首とりや文句なしに報酬もらえんのによ。」

「ふざけんな！」

エレボスとヘルメスの声が見事に調和し、リュクスの耳を直撃した。

「つつ・・・！うるせえな！そんなに怒鳴ることかよ・・・！」

「80ドラクマだぞ！何考えてる！そんなだからうちの領地はいつも貧乏なんだよ！まったく、戦以外はほんと何にもできないなお前。」

「ほんとうに。この用兵団が成り立っているのはどうしてか考えたことがおありか？まったく、これ言うのは何回目でしょうか？耳に入った言葉は頭に残っては下さらないのですね。」

「そこまで言うか？」

「「これでも控えめに（言つとるわ！、言ってます！）」」

エレボスとヘルメスの悲壮な叫びが青い空をこだました。

陣容を整えている間もサーマーンの陣地に対して遅延目的の擾乱がいせ

攻撃をエネタが行っていたが、副官はその日のうちに陣容を整えた。
次に日の朝に侵攻が再開される予定である。

残存兵力：

エネタ側 17850人

サーマーン側 27000人（内10000をもって負傷者を後方に下がらせているので実質26000人）

共和国編：第四話 仕事も責任も一人で背負ってはいけませんよ

<エネタ陣営>

エネタの本陣の周りには非常に人が少ない。リユカオンはエネタの軍をあえて分散させ、その指揮は各隊の長に任せていた。

エネタは土地柄として平原が少なく山や森が多い。主要な産業は鉱山経営と林業、畜産、加工業である。共和国の一都市国家となる前は一山岳部族の集まりに過ぎなかったのを時の共和国の総帥に攻められ降伏の後、共和国に組み込まれた歴史がある。

そのためかエネタには制度化されているわけではないが二つの派閥が出来上がっている。もともと山岳部族であった「原住民」と「移住者（殖民）」が互いに過剰な干渉を嫌い居住地すら分けて暮らしていた。しかし仲が悪いわけではなく移住者は技術と文化を、原住民は資源や食料を供給し相互扶助で暮らしていた。

今エネタ軍を構成しているのも基本的にこの二つの集団に分かれている。普段都市で生活し、集団で

事に当たることに慣れている「移住者」は長槍による集団戦法を行う重装歩兵となることに抵抗はないが（そもそもこの戦法自体、基本的に共和国共通である）、いつも各家族ごとの小集団で狩りや家畜の世話を行っていることの多い「原住民」にとって集団戦法は不得手であるため、基本的に兵役時はそれぞれの武装で先鋒を務め、敵の陣形が乱れたところを突くという戦い方をすることが多かった。今回の戦法の転換はこの「原住民」にとって水を得た魚のようにピタリとあっていた。森や山に各分隊が息を潜め待機している様は獲物を待つ狩人そのものといえよう。「移住者」は司令官の作戦のため本陣から離れたところに行かされていた。

「あれだけ擾乱攻撃を行ったのにもう陣容を調べたな、サーマーンは。有能な士官がいる。」

リュカオンが感心しつつ、一人ごちていると、

「落ち着いている場合ですか。態勢を立て直されたらいまだに我が軍より数で勝っているのはサーマーンの方ですぞ。いかがなさる心積もりでいらっしゃるのですか？」

先の戦闘で破けた上着を新しくしたオウイデイウスが言葉ほど心配しておらず確認するようにリュカオンに語りかけた。

「基本的な考えは変わらんさ。サーマーンの主力たる傭兵の戦線離脱を誘導する。まともに当たっては負けるからな。ただそのための戦術は考え直す必要がありそうだ。意外だったな。傭兵の間のサーマーンに対する不満が小さいとは。楽勝で勝てるわけではないと思わせなくてはな。」

「では？夜襲をかけますか？」

「そうだな。ただ普通にかかったところで効果は知れている。工夫するか。」

「ああ、風系精霊術を使えるものに伝えよ。どんなに微弱でもよい。交代でサーマーン陣地付近で音を拡大させて銅鑼を鳴らせとな。」

「サーマーンの軍勢を寝かさぬお積りですか？」

「それもあるが、狙いは別にある。」

リュカオンが意地の悪い笑いを顔に浮かべていた。

<サーマーン陣営>

サーマーンの陣地は野営の準備を整え、見張りを分担して行っていた。これは副官ティトノスの調整の名人技と努力をほめるべきであろう。彼の他にやる人間が居らず、しかも彼にはそれができてしまったのがこの状況を作り上げたという見方もできる。

「とりあえずこれで進行準備は整えられたか……。私の仕事はこれで終わりかな。」

ティトノスがやっと一休みしようとしたその時、陣地に轟音が響

き渡った。

「いつたいなんだ！」

副官に準備を一任（丸投げ）して一足早く休んでいた総司令が飛び起きて轟音の正体を探るように命令した。

轟音の正体を探るべく斥候が出て行ったが半数がエネタの兵に殺されるか山中で遭難した。幾人が戻ってきた人の証言から山中に分散して布陣しており、その分隊が風系精霊術を用いて音を大きくしているということが分かった。

「この音をどうにかしろ！眠れんではないか！山狩りを行う。」

総司令の発言はたとえ自分が眠れないから言っているとしても、確かにこの音をなくさないことには兵に疲労がたまり、厭戦気運を高めてしまう。しかし、

「夜間に山狩りを土地勘のない我らが行つては遭難者が多数出ます。どうかお考え直してください」

夜の森には夜行性の獣もあり、敵兵が潜んでいる森で捜索を行えば極度の緊張状態を強制され、最悪気が振れる者も出るくらいの難仕事である。しかも渡河直後で疲労の直後である。音を無視してとりあえず寝てしまふほうがまだマシであろう。

「いや、山狩りを行う。我らがサーマーン軍の勇士は夜の山を恐れるようなものは一人も居らん！そうであろう？」

「・・・御意。」

大抵のサーマーン人は大昔の話だが帝国の進行に対し単身玉碎したという歴史があり、それに誇りを持っていた。この場でそのように言われ山狩りに反対しようものなら臆病者のレッテルを貼られてしまう。戦場において臆病者について行く人間はいない。仕官にとってそれは避けなければならず、この司令官の一言により結局山狩りが行われることが決定した。

山狩りは結局、行うことになったが差配はティトノスが行ってい

る。夜間に山狩りを遭難者を出さずに行うには大量の松明の確保、搜索範囲の決定と搜索範囲の分担など行うことは多い。こういう細かい差配をやらせたら彼の右に出る者はそうはいない。しかし、彼にも人としての限界というものがある。この夜それが表出することになる。

探索は本陣を中心に放射状に行われ徐々に搜索範囲を広げて行った。しかし未だ敵兵と接触したとの報告はあがってきていない。テイトノスがそのことを不信に思い始めたそのとき、

「敵襲・・・！」

本陣で敵襲を告げる声が聞こえてきた。

「敵襲だと？ いったいどこから？ いやそれよりも敵の狙いは？ 狙いはまさか！ 総司令か！」

テイトノスの敗因はこの目的を読み違えたことによる。

テイトノスがわずかな供を連れ、馬を駆る。彼はいつも供をあまりつけなかった。それに兵の大半は山狩りに出るか、本陣の総司令の元にいたのだから彼のともをする人間は限られた。

テイトノスが馬上から一瞬で姿を消した。いや暗い中でも月明かりで鈍く光るいぶし銀の毛をたなびかせる狼男が気絶したテイトノスを抱えていた。

「ばつ化け物！ テイトノス様を放せ！」

まだ幼さの残る騎士見習いの少年が勇敢にも狼男に向かって行った。

「ふむ、この男よほど慕われておるか、この子供が勇者であるか。しかし力が伴っておらんな。」

狼男は少年を軽く蹴り飛ばし、夜の闇に消えて行った。

テイトノス誘拐の報はすぐに本陣に届けられた。

本陣の天幕には大規模傭兵団の団長、サーマーン士官が集まっていた。

「テイトノス殿が敵に拐された・・・」

「わざと捉られたのではないか？総司令とよく意見が対立して居つたし。」

「副官が総司令に対し慎重論を唱えるのは職務のようなものだ。そんなことで離反するような男ではないわ。」

「テイトノス殿の意思かどうかはこの際問題ではない！テイトノス殿がいなくなった現在、誰がその代役を行うというのだ。」

サーマーン士官は口々に言い合っていたが結局は使い勝手のいい調整役がいなくなってその穴を誰が埋めるか、その押し付け合いに終始していた。それを静かに聴いていた一人の傭兵団の団長が口に出した。

「テイトノス殿は我々の求めるところ、必要なものをよく分かっておいででした。我々がこの戦争に雇われているのも適正な報酬がしっかり支払われるからです。適正な報酬が支払われる間は我々も進軍をともしませんがそれがなされない場合は戦線離脱もやむ終えません。そこは分かっていたくださいたい。」

傭兵団の売り物はその勇名と命である。そこに適正な報酬が払われなければ何故、命を張らなければ成らないのか。傭兵には戦死しても、捕虜になっても何の補償もないのだから報酬には敏感なのである。

「この守銭奴が、誇りはないのか！戦線離脱など、我らを脅すつもりか。傭兵風情が！」

サーマーン士官がざわめき天幕は喧騒に包まれた。傭兵団の団長たちはもはやなにも言うことはないとばかりに席を立った。

「やれやれ、いい稼ぎ口だと思っていたがこの戦場ははずれだったかな。」

「そうだな。あの様子では我らを戦場の何でも屋とも思っているのだろう。」

「とりあえず、山狩りに出ている連中に退却を命じるとするか。あの抜け目ない小僧のことだ、テイトノス殿がいなくなって統制が

取れなくなつた隙を狙うだろう。」

「そうだな。あの小僧、弱点を見抜くのが上手い。我々がティトノス殿に対する信用でまとまって居つたのを。」

「そうだな。やつも傭兵をよく知っておるわ。やつに雇われるのも良いかも知れんな。」

「今のその発言は傭兵の信用問題になるぞ、気をつけられよ。」

「ふん、単なる戯言よ。あやつがせめて執政官になったら考えてやつても良い。今ではまだまだ。」

傭兵団の団長たちは孫の成長を夢想するように天を仰いだ。

<エネタ陣営>

「もう少し混乱するかと思つたが、整然と引いて行つたな。あの狸爺どもめ。簡単に隙を見せちゃくれないか。」

「リユカオン様、求めすぎは禁物ですぞ。特に戦場では。」

「分かつている、しかしもう少し打撃を与えたかったものだ・・・
。今宵の戦はここまでとしよう。兵に休息を与えよ。」

「すでに。」

「・・・仕事の速い副官を持って幸せだよ、私は。」

「お褒めに与り光栄にて。」

残存兵力：

エネタ側 17850人

サーマーン側 25000人（行方不明者数：多数）

共和国編：第五話 森にて企むこと

天を突くように背の高いカリファの木が生い茂る森の中、自然とできたとは思えない木の生えない空間。そこにエネタ本陣はある。そこは精霊の気配が全くない得意な空間である。世界に点在するとされる聖地、忌地の一つである。森に狩猟用の罾をあらかじめ設置し終え、本陣に全軍が集合した。

百人隊と呼ばれる兵団があり、百人隊を十隊まとめて千人の軍団を形成しており、その軍団が16団ある。残りは本陣付である。その軍団の団長たちが本陣の中央に座していた。

「まずは皆、ご苦労だった。危険の大きい任務を良くぞ無事果たしてくれた。礼を言う。」

リュカオンが屈託なく笑いながら礼をすると各千人隊長が無言で頭を軽く下げ、右手を左肩に振れるように当てて返礼した。

そしてリュカオンがそれぞれの顔を見回してから口を開いた。

「敵傭兵の離反を狙ってこれまで行動してきたわけだが、サーマインから離反した傭兵団は未だない。俺の見通しが甘かった。敵傭兵が離反しなかったのはサーマインの副官ティトノスが適切に傭兵に対して補償を行っていたからだ。そこで今回の戦闘においてティトノスの捕縛を行った。」

おお、と千人隊の隊長から感嘆の声があがった。

「これで彼がいなくなっただけでこれまで保たれていた危うい均衡が崩れますね。」

第四軍団長のヒュペリオンが常に笑っているように見えるその糸目をつつすら開け、ギラリとした目を見せた。目の覚めるような金の髪は森で活動に不利である。彼は普段その髪を羽根つきの帽子で隠していた。帽子にある羽の数は今まで仕留めた獲物の数である。彼の軍団は狩猟民である「原住民」の末裔であり、普段森で狩りを

行う。そのためか遠目がきき、弓の名手が揃っている。

「奴の部下にテイトノス並のバランス感覚を持った人間がいればその限りではないわ。」

十三ある軍団でも数少ない女の軍団長である第八軍団長のレアーはカルーンの砂漠の砂のように乾いた声でしかしそこにいる全員に聞こえるぎりぎりの大きさを声に出した。第八軍団長は先の戦闘において河の上流で流れをせき止める役目を負っていた軍団で土系精霊術師が多く揃っている軍団である。鉱山で働く者たちで形成されていた。鉱山で働くものは粉塵に晒されることが多く、声が潰れがちになるのである。ちなみにそのハスキーな声に魅力を感じる男が軍に少なからずいるらしい。

「確かに、今後のサーマーン軍の動向に注目せねば。」

「我々の側はどうなのだ、離反者は出ておるのか？」

「今はまだだな。しかしいつ出てもおかしくない。あれだけの兵力差だ。」

「長引くとこちらに不利だな。」

同じ顔の人間が二人いる。アンピオンとゼトスである。二人は「移住者」出身の軍団長である。二人の見分けられるのは総司令官のリユカオンだけだと言われる。この二人は土木工事が得意な軍団で、彼らの設置する宿営地はそのまま基地として使用できるくらいに完成度を誇る。二人で話し合うことが多く、この二軍団の連携には定評がある。

「そこでだ。こちらには勝つと相手には勝てないと思わせる。重要なのは実際に勝つ必要は無い。思わせることが重要だ。一回目は河で、二回目は森で奴らに打撃を与えた。さらにもう一押ししたい。しかし言わずもがな、我々はサーマーン軍に対し数の上で劣勢である。奴らに目に見えた打撃を与えるには各個撃破するしかない。」

リユカオンは静かにしかしはつきりと攻勢に移ることを宣言した。「しかし今のところやつらは兵力を集中しております。どのよう

に分断されるおつもりですか？」

第十三軍団長のマダマンテユスが静かであるがはつきり聞こえる口調でリユカオンに聞いた。

この男はいつも無表情で陰気な顔をしているためヒュペリオンなどは「奴は軍団長ではなく葬儀屋をやるべきだ。奴の陰気な面はそのためにあるものを。」と他の団長たちに半ば本気でもらしている。それにたいしてレアーは「確かにあれは葬儀屋。ただし敵に対してのみ葬儀をあげる依怙贖な葬儀屋ね。あいつが司会する葬式はその進行表道理に静かに始まりそのまま終わるのだから葬儀屋としてはたいした手腕だわ。」とほめてるのか貶しているのか判断に困る言い方で彼を評価していた。その堅実かつ大概のことはオールマイティにこなすその器用さは彼の不気味さをさらに高めている。

「奴らの目的は我が軍を壊滅させることではない。都市の首脳部にエネタがサーマーンと『条約』を締結することだ。実質属国化する『条約』をな。ならばそろそろ奴らは考える。エネタの軍勢を相手にせずともよい、首都を陥落させ首脳部に停戦命令を出させてしまえと。そこで軍を分け一方に森に我々を封じ込めさせ、別働隊をもって首都攻略に向かおうとするだろう。こちらの執政官がすでに首都から逃亡しその権限を持たぬというのに。」

「敵が我々の封じ込めを行ったとしてどう突破するのですか？敵として我々をそう易々とは通しはいたしません。」

「敵の司令官が二つに軍を分けるにあたってはたしてどちらにいろと思う？」

「それは首都攻略の部隊にいるでしょう。奴は他のものにそのような手柄を与えるような人格ではありません。おそらくはサーマーン貴族の指揮官はこぞって都攻略の部隊に参加するでしょうな。」

「そうだろう。すると森には監視のためにわずかに残されたサーマーン本軍と大多数の傭兵になる訳だ。」

「なるほどそれが狙いですか。」

「ああ、傭兵団。丸ごといただく。」

リュカオンが不敵に口の片方をつり上げて笑った。

共和国編：第六話 サーマーの傭兵

夜半、二人の男が天幕の下で顔を合わせにらみ合っている。いや正確に言えばにらみ合っているのは二人だけだがその片方に大勢が一方的な視線を向けているのであるが。

「おい、こんな夜更けに訪れた招かれざる客をもてなす作法を知つとるか？」

髭は豊かだそれに反比例するような頭の毛髪事情の男だ。顔つきや表情には傭兵らしい所は無くそこらの酒場を探せばいくらか見かける顔ではあるが、額から頬まで伸びる大きな傷跡が迫力を倍にしている。そんな男に笑顔で言われると怖いものがある。サーマー・最古参、最大級の傭兵団『弓持つケンタウロス』の隊長であるケイローン＝アトスである。

「いや？知らないな？教えてくれよ。」

「なに、難しいことじゃない。」

「飯でも食わしてくれんのか？」

「食わしてやっても良いがもつと良いものを食わせてやるよ。」

「何を？」

「こいつだ」

その手に握られているのは鈍く光っている長さが振り回すのに手頃な良く切れそうな金属であった。

「それは、食いたくないな。いくら鉄の胃袋と呼ばれた俺でもそれは胃もたれしそうだ。」

「そういうな。食わず嫌いは良くない。若いうちは色々食って大きくなるもんだ。」

「いやいやいや、それ食らつたらもう他のもの食えないから大きくなれなくなるから。」

「ふん、仕方ないな。で、何用じゃ？」

急に笑みが消え眼光が鋭くなる。

「俺に付いてもらいたい。」

リュカオンは何の躊躇も無く言った。一気に場が静かになる。

「それはエネタの下に付くと言うことか？」

「いや、このリュカオンを信じて付いてきてほしい。」

「ほう、付いて行って何の得がある。我々は傭兵だ。利が無ければ動かんぞ。」

「サーマーンの傀儡である現状に満足しているのか？」

その一言に一気に場の空気が冷え、刺すような視線がリュカオンが射抜き、さつきで空間がゆがむような熱気が生まれた。

「ふくじやないか、若造。じゃあお前が新しいご主人様って訳か？」

「そうじゃない。俺ごときに操られるような奴らじゃないだろう？」

「お世辞で持ち上げて、うんとは言わんぜ？」

「本心だ。」

「ふむ、しかしただの若造についていくのは格好がつかんでない。ついていくだけのものを示してくれんかの。」

この狸じじいめ……。やはりそう来るか。

リュカオンは心の汗を流しながら答えた

「わかった。先攻しているサーマーン貴族たちだが全滅させてみせよう。」

「なに？」

一気に場の空気が揺れる。それは比喻ではない。本当に揺れているのだ。

空気だけではない。地面そのものが揺れているのだ。

「……何をした？」

先ほどまで浮かべていた不敵な笑いが苦笑いのそれに移行する。

「サーマーン貴族の部隊を奈落の底へと落とすとした。」

「馬鹿な！そのようなことは不可能だ！土系精霊術師が何人必要だと……いやまず精霊術師の支配領域から言ってもそこまでの深さへの干渉は行えないぞ。土系戦略級精霊術師は居なかった筈だ。」

「ああ、ああ。その通り。不可能だ、普通は。しかし、地の利がそれを可能にした。また我が国の産業形態からもそれを可能にした。」

「周りを囲んでいた傭兵隊長の一人が呻くように言った。」

「……炭坑か。」

「リユカオンはうなずき、」

「その通り。エネタ都市部までの地下は縦横無尽に坑道が張り巡らされており、もはやそれは平原中に広がっていると行っても過言ではない。もちろん普通に移動する分には問題ないようにしているが、坑道を知り尽くしている土系精霊術師が少しいじればバランスが崩れ、上部の土は坑道に流れ込む。巨大な落とし穴の出来上がり。」

「……」

傭兵一同はまったく言葉を失ってしまった。

真つ先に正気を取り戻したのはケイローンである。

「くくく、まったくお前という奴は、ワシの想像を超えおるわ。」

「じゃあ。」

「ああ、まさかこれでもこやつにサーマーンを覆せんという奴はおらんだろうな？」

「「おおお！」」

天幕の中から森中に響き渡るような雄叫びがあがった。

天幕はでの喧騒はやがて外に波及し、サーマーン首都への進軍準備で慌ただしくなったがその中で一人、無表情で黙々と作業してい

る人間が居る・テイトノスがさらわれた時そばに居た少年兵である・
テイトノスがさらわれてしまったことに責任を感じて落ち込んでい
たのでその様子に違和感を覚える人間は居なかったが注意深く見れ
ば彼の目の白目の部分が真っ黒に塗りつぶされていることが分かっ
ただろう・

「なるほど・やはりこうなりましたか・やれやれ、あの方の深慮
遠謀には脱帽させられる・正直、このような結果になるとは半信半
疑だったのですが・リュカオンとやらの力量を図り違えていました
これなら内部からの助けは必要ありませんね・ではこれで少年から
『影』を抜いてあげましょう・これは長時間入れておくと健康によ
ろしくありませんからね・」

明らかに少年の浮かべる表情でない・嫌らしい笑いを浮かべなが
ら一人ごちた・

「あれ？なんで僕はこんなところに？・・・？」
少年の疑問は夜の闇へと消えていった・

共和国編：第七話 パンドラく災いをもたらす者 すべてを与えられた女

共和国 帝国 政体は違えど人が協力しあい生きていくためのシステムである。それはあくまで相互扶助を前提としており、寄生ではない。寄生し合う関係性に先は無い。しかしサーマーンはどちらかといえば寄生による関係性で成立している奇妙な国体であった。

サーマーンの執政官にある女が当選したときからその寄生関係が始まった。この寄生虫の主がろくでなしであることはみな知っていた。既に選挙に公正さなど無くなって久しかった。しかし誰もこの女の行うことを誰も咎めようとしなかった。彼女が恐れられていた訳ではない。いや、恐れられてもいたが大多数が選挙が公正なものだと信じていた。信じたいと思っていた。共和国成立時から行われてきたものであるし、神聖なものだからである。その選挙において公正さがないなどと考えたいものは少なかつたし、そんなことを言おうものなら白い目で見られるような風潮があつた。その神聖な選挙に選ばれた執政官に非難を浴びせることは選んだ自分自身をも非難する成分を含んでいるからそこからの逃避であつたのかもしれない。彼女の名をパンドラと言つた。

彼女の最初の政策は徴兵し、近隣の中小都市国家をサーマーンの衛星都市としてサーマーンの安全保障を図るというものだった。乱世の執政官としてはまあ考えられる政策であるが、彼女の本性は寄生虫である。まともな目的でなされたことではなかつた。要するに「安全」を周辺都市から搾取したのである。

寄生虫は宿主から養分を吸い取って生き、なんら生産に寄与しないものだ。寄生虫としては宿主に死なねれば別の宿主を見つけ、寄生すればよい。しかしサーマーンの寄生虫は一つのを「生産」した。サーマーンの搾取システムである。しかも搾取領域の拡大方向に指向するシステムである。

サーマーン周辺の都市を武力をもって占領した後、領主を指名し、

軍隊を解散させ、莫大な安全保障費と称する上納金を課した。もちろん不満は出るがサーマーンに対抗できる程の力を衛星都市は持たなかった。

サーマーンの対外拡張政策は周りの都市国家との緊張状態を引き起こし、衛星都市の国境では戦闘が絶えなかった。しかし衛星都市は軍隊を解散させられている。対抗するのはサーマーンの軍である。戦闘に巻き込まれる衛星都市はまともな生産活動を行えず、安全保障で財政は破綻しつつあった。

しかしそんな衛星都市にもたった一つだけ産業が残されていた、「傭兵」である。衛星都市の戦えるものは皆サーマーンの傭兵となった。国境を守って、傭兵としての報酬をもらえるが安全保障費がサーマーンに取られるという理不尽がまかり通ることになる。

ここでパンドラという名の寄生虫の行いは非凡なものであった。衛星都市の領主にその地出身でない傭兵団の首領を据えたのである。これにより領主は安全保障費を支払う立場になり、都市民から搾取する側にもなったのであった。逆らおうにも実戦経験豊富な傭兵団である。人を恐怖させるやり方も限界も良く知っていた。

こうして結局衛星都市が軍隊をもつに至った。軍隊をもつた衛星都市が連合してサーマーンを攻めるのではないのかと誰しも思った。しかしそうはならなかったのである。傭兵になる動機が生活のためやむなくであり、国ためとかのためではない。できあがった傭兵団は全くと言っていい程まともが無かった。連合してサーマーンに立ち向かうにはまとも役に欠けていた。

こうして衛星都市は辛い思いをしていたが、衛星都市がサーマーンを中心に広がっていくとかつて「前線」の衛星都市であった都市は「前線近く」の衛星都市となったのである。そうになると今度は「かつて」の前線の衛星都市は「現在」の前線の衛星都市から安全を搾取する側に回ったのである。領主たる傭兵隊長は外に前線を広げてゆくことは領地が安全になり生産力、価値を上げて収入を上昇させることになった。

こうして搾取の連鎖が起こっていく。寄生する宿主を増やしていき、新たな犠牲者を生む。

「パンドラ様。」

自身の忠誠の対象に話しかけることができていることでやや興奮気味に三十がらみの男が静かに話しかけた。

「なあに？エピソード。」

長椅子の手すりに気怠げにもたれかかりさも面倒そうである。その容姿は絶世の美女ではない。しかし街を歩けば10人に7人は振り返るであろう。その体中から甘い香りを振りまいている。その香りは人によって感じ方が異なるらしくバラの香りと言う人間も入れば、ワインの芳醇な香りがしたというものもある。だいたいの男も女も彼女の前で自制心を失うことになるが失う前にだいたい気絶するので暴行罪まで発展したことは無い。彼女の前に居られる人間は相当自制心が強いか彼女を人とは見ていない人間のどちらかだろう。今彼女の前に居る男は前者、後者どちらの性質も持ち合わせている男であった。

「はい、私の『影』の報告によりますとサーマーン貴族が全滅、派遣いたしました傭兵団が離反。こちらへ進軍中とのこと。行軍中に他の衛星都市の傭兵団を吸収しつつこちらに向かっています。」

まったく焦る様子も無く淡々とした報告が広い部屋に響く。

「相変わらず便利ねえ、あなたの能力……ふふ、それにしても意外と早かったわ。もう少し我慢強いと思つてただけど残念だわあ。意外とせっかちなのかしら、リユカオンは。もう少し楽しみたかったわ。でもよかった、もしリユカオンが死んでしまったらどうしようかと思つていたわ。この世から良い男が減るのは社会の損失よ？」

パンドラは楽しそうにそれは楽しそうにくすくすと笑っていた。

「うまくいきましたね。今回の遠征は主要なサーマーン貴族の切り捨てにありましたからその点は成功と言えます。しかし意外でし

た・まさか傭兵を糾合しえるとは・あらかじめあなた様にお教えいただいておりましたのに、実際に見るまで信じられませんでした・まさかそれだけの器とは。」

「だから言っただでしょう？あの子が大きいのは良く知っているもの・でもかわいそうな子ね・私がためていったこの国の闇を飲み込むつもりで居るのだから。」

「器はあなた様の方が大きいでしょうに・何故共和国を統一しようとなされないのですか？あなた様ならそれが叶いましょう。」

「私の器には大きな穴が空いているのよ・それはそれは大きな穴が・いくら大きくても貯めることはできないの・みんなこぼれ落ちちゃう・それともあなたが埋めてくれるの？」

「ご冗談を・私では穴を埋めるどころか穴のふちで引っかかって落ちないようにするしかない凡人ですよ。」

「ふふ、あなたが謙遜だなんて・落ちていけない人は珍しいんだから。」

「リユカオンはあなたの穴を埋めるに値しますかね？」

「さあ？でも期待はしたいわ。」

その会話がなされた時から太陽が一周半回転した後、リユカオン率いる軍勢がサーマーンの城に入城した。

共和国編：第八話 変革の烽火（前書き）

共和国編 しゅーりよー

共和国編：第八話 変革の烽火

都市国家サーマーンの首都サーマーニア

多彩な服の洪水が内側から開かれた門に吸い込まれていった。その目には希望の光であふれている。皆、顔に自然と笑みがこみ上げていた。

「リユカオン、オウイディウス」

「何の抵抗のそぶりもありませんでしたね。畏でしょうか？」

「畏があるうとこの劣勢を覆せることはない。」

あるとすればこのサーマーニアに火を放ち、混乱を起こすかして俺を殺害するとかだろうな。

そうすればこちらを混乱させることはできるだろう。しかし、サーマーニアに入城させたのは

兵力の一部であることだし蟻の子一匹だと

て逃げ出す隙はない。」

「.....」

（畏ではない、畏ではないが.....）

副将のオウイディウスは何かい知れぬ不安を感じていた。

（なにか、何かある。何かは分からぬがなにかいる。あの城の中に我々が手も足もでないような何かがある。）

それはオウイディウスの中の獣の因子が感じさせる「勘」であつたらう。少しでも生をつかもとする獣の性が、危険から遠ざかるうとする獣の性がそう感じさせた。

「ニユクス、エレボス」

「どういうことだ？この城には人っ子ひとりいねえ。」

ニユクスは残念そうに力なくつぶやいた。

「お前は敵がいなくなると急に弱々しくなるな。仮にもサーマーの執政官の城だ、

しかも執政官は悪魔とも魔女とも呼ばれている女だぞ。もっと緊張感を保て。」

エレボスがしかめっ面を顔に浮かべながらそんなことを言うが拍子抜けの感は否めないのか

複雑な表情をしている。これは案外何事も無く終わるかと思いついた矢先に先行していた団員が悲鳴を上げていた。

「うわあああ！」

「どうした！」

エレボスとニユクスが腰を抜かした団員を見つけたのはずらりと人形が並んだ部屋だった。

「なんだよ、人形じゃねえか。なにビビってんだよ。ガキかお前は。」

「しかし、団長。これだけ人形が並んでいたら誰でもビビりますよ。ましてこの城薄暗いもんだから。」

「はっ！何を……。」

ニユクスが言いかけると人形が急に動き出した。

「っこいつはいつたいどういこうった？どう見ても人形だが、ん？」

人形の下に普通より濃い影があり、そこから人形に向かって何本か見えるか見えないかの黒い糸が伸びている。

「ふん！」

ニユクスが剣を横に薙ぎ、糸を断ち切ると人形は急にその場に崩れ落ちた。

人形の下にできていた影は逃げるように床を這って行った。

「こいつは退屈しなくてすみそうだ。」

ニユクスが冷や汗を拭いながら呟いた。

（サーマーン貴賓室）

「エピメーテウス・さあ、宴の用意をしてちょうだい。これからお客様がいらつしやるから。」

「ただいま人形共に用意させております。何人いらつしやるでしょうか、「お客様」は。」

「さあ？これまでどこまでいらつしやるお客様は数える程ですもの。大抵どこまでくる途中で気絶するものね。」

「そのお力を制御する術を取得なさればよろしいのに……」
「いやよお、私縛り付けられるの嫌なの。」

「リユカオン、オウイデイウス」

「兵どもが次々と気絶していきますな。」

「ああ、これはいつたい……。不審な点といえば城の置くに進むほど濃くなる匂いくらいだが。何と濃いラベンダーの香りだ。」

「む、ラベンダーでございますか？私には杉の香りのように感じますが。」

「変だな。アチラから匂うが。」

「リユカオン様。あちらはいけません。言い知れぬ危険を感じます。どうかご自重を。」

「ここまで来て引き返せるものかよ。パンドラを捕らえぬことは何もできぬ。」

「……」

「ニコクス、エレボス」

もはや傭兵団「剣と盾」の人間で歩いているのは二人しか残っていないかった。

「ふん、軟弱な奴らだ。また鍛えなおしてやらなくては。」

「まったくだ。」

自分たちが異常であることには気づかないものだ。

「……匂うな。」

「……ああ、匂う。懐かしい匂いがする。」

「懐かしい？」

「ああ、懐かしい。」

「ふん、お前の故郷には猫はいなかったのか？」

「猫？」

「ああ、これは明らかに猫の匂いだろう？」

「・・・どうやら人によって感じる匂いが異なるようだな。・・・

危険だ。この匂いを『断ち切れ』ないか？」

「できると思うが、匂いの元を如何にかしないことにはこっちも

さっちもいかなぞ。」

「・・・匂いの濃いほうへ行くか。」

くヒュペリオン、マダマンテユスく

自身の部下が尽く気絶してしまい、単独で匂いの元へ向かう途中で二人は出会い行動をともにしていた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・おい。」

「・・・」

「おい、こら。何かしゃべれよ、その口は飾り物じゃねえんだろ

くっ」

「ああ。」

「二文字かよ！ああ、誰でもいいから出てきてくれ！そしてこの辛気臭い空気どうにかしてくれえく。」

こうして城中に気絶している兵士が累々と倒れていき、貴賓室に匂いに誘われて一部の兵が集まった。

くサーマーン貴賓室前く

何の偶然か気絶することの無かった全員が同時に会することとな

った。

「これは、リユカオン様・お会いしとうございました・マダマンテユスの奴と一緒にいるのもそろそろ限界だったんすよ・助かりました。」

「・・・」

「そうか・マダマンテユス、お前少し会話する癖つけといたほうがいいよ。」

「ご命令とあらば。」

「いや、命令とかじゃなくて・・・ま、いいか。」

「・・・」

「リユカオン、お前はやっぱりぶっ倒れてなかったな!」

「エレボス、総大将にそんな口の聞き方をするな! 申し訳ありません、総大将。」

「いや、エレボスに丁寧な口を利かれたら違和感があるからな。そのままでもいい。」

「ほらな! リユカオンもそういつてることだしいいじゃねえか。」

「・・・そういうやつだよ、お前は。」

〈サーマーン貴賓室〉

貴賓室には食事用の長机が置かれその上には多彩な料理が並んでいた。人数分きっちり。そしてその周りには給仕の格好をした人形が整列しており甚だ不気味である。

「ようこそ、いらっしやいました。皆様をお迎えできて光栄です。本日はできる限りのおもてなしをさせていただきます。」

慇懃無礼を絵に描いたような笑みを顔に貼り付けた男が恭しく礼をした。その怪しさは際立っていたそれ以上に妖しい空気を撒き散らす女がその隣に悠然とたたずんでいたのでそちらのほうに皆、気を取られていた。

「ごきげんよう、皆さん。私がサーマーン執政官のパンドラよ。」

あなたには会いたいと思っていたのよ、リュカオン。」

彼女が話すたびに、いや彼女が息を漏らすたびに部屋に立ち込める匂いが濃くなっていくような気がする。だんだん息が苦しくなり夢が現か分からなくなる。しかし、この場にいるものたちは背中に汗をかきながらも正気を保っていた。

「それはどうも。私としてもあなたにはお話をお聞きしたく思っております。『聖女』パンドラ。」

「いやね。若いころの呼び名を口にしないで頂戴。恥ずかしいわ。」

「いやいや、ご謙遜を。お若いではないですか。その美しさもまったく衰えていらつしやらない。」

「ふふふふ。お上手ね。」
「いえいえ、世辞ではありませんよ。本心です。聖女とお呼びするには美しすぎますがね。」

「その呼び名の由来をご存知？誰も私に近づけないから、私のことを知る前に皆気を失ってしまうから知名度の割りに私のことは謎だらけなのよ。だからそんなあだ名がついたのよ。誰も私に触れられる男はいなかったからそう言う意味でも私は『聖女』ね。」

「そうだったのですか。しかし、あなたをどなたかと間違えることはありませんね。あなたのような方はこの世に二人といたくないでしょうから。」

「そうね。だから私が影武者を立てて逃げ出している心配はしなくてもいいわよ、坊や。」

「それは助かります。これから何かと忙しくなりますので。」
「そうね。これから大変よ、あなたは。サーマーンの傭兵をどうするのかで未来が決まるわ。サーマーンは兵役に従事する人間が他の産業に比べて巨大だわ。だけど今更、傭兵をやめて他の職業につける、就きたいと思う人間が何人いるでしょうね？それに周辺諸都市がエネタのサーマーン併呑を許すかしら？衛星都市も独立を望みつつもあなたに復興の手助けを望むでしょうね。あなたはそれだけ

の希望を衛星都市に与えてしまった。あなたにそれだけの人間の未来を背負う覚悟がある？」

先ほどまでの態度と打って変わって真剣な瞳をリュカオンに向ける。

「ええ、あります。」

その台詞を予期していたかのようにリュカオンはきっぱりと答えた。

「口だけならなんとも言えるわよ？」

「サーマーンの傭兵はそのまま国軍に編成します。」

「できるかしら？ 忠誠心などに1ドラクマの価値を見出さない連中よ。私が言うのだから説得力があるでしょう？」

「働きに見合った給金を約束します。その上で現在の所領を放棄させます。完全な職業軍人とし、基盤を完全に土地から離します。

元々土地からの収益はさほどではなく冬の時期の休息場所と募兵が役割でしたからさほど土地に執着しないでしょう。そしてその土地には衛星都市にいる難民に開放します。」

「そう上手くいくかしら？ 何を保障にして傭兵を信用させるつもり？ 給金の収入源は？」

「テイトノスに給金の担当をさせます。また、傭兵団『弓持つケンタウロス』の隊長にはすでに内諾を得ていますよ。」

「ああ、テイトノスね。彼を生かしていたのね。なら何とかかなりそうね。」

テイトノスの名を出したら不意にパンドラは笑みをこぼした。その笑みはいつも浮かべていた隠微な笑みではなくいたずらを楽しむ少女のような笑みだった。

「ご存知だったのですか？」

「ええ、彼を副官に任命したのは私よ。彼も私を前にしても倒れない貴重な人材の一人ね。細かいことはすべて彼に任せていたからこの国のことは彼にお聞きなさい。」

「そうですか。それは良かった。（そんなこともやらされていた

のか。哀れテイトノス。お前の受難はまだ続くぞ」

「ふーん、なら私の役目は一つだけになりそうね。」

「そうですね。」

「この首、持ってお行きなさい。それでこの国の新たな局面を迎える烽火となさい。」

「・・・命乞いをしないのですか？」

「やりたいことはすぐにしてきたし、言いたいことはすべて言うてきたわ。もう何も遣り残したことは無い。」

パンドラは晴れやかな顔をして答えた。一点の曇りも無かった。

「あなたは無責任です。私にすべてを押し付けようとしている。」

「ええ、私はもう飽きたのよ。この役に。私の劇はもう御仕舞い。そろそろ退場しなくてはいけないわ。」

「それは許しません。あなたにも苦勞してもらいますよ。」

「・・・死なせてはくれないの？」

「安易な死など与えてあげません。それに貴重な戦略級を手放しては共和国の統一に時間がかかりますから。」

「時間？あなたはまだ若いのだから多少の時間がかかって生きているうちにできるでしょう？」

「いえ、時間をかけた分だけ人が多く死にます。それに帝国がいつこちらに軍を差し向けるか分かったものではありませんからできるだけ早期に片をつきたいのです。」

「帝国はまだ去年の飢饉から立ち直っていないわ。当分こちらに進行する余力は無いはずだけど。」

「飢えた国が略奪にこちらに兵を向けることは考えられます。」

「・・・パンドラ様。私はあなた以外の方を主とする気はありません。私はあなたの影です。影は主を失えば消えるのが定めでございます。」

「エピメーテウス、それは違うわ。影はどこにでもあるもの。それはお前も分かっているのでしょうか？お前は消えはしない。」

「いえ、光なくして影は無い。あなた以外の光は私には無いので

す、パンドラ様。」

「あなたには生きてもらいますよ。」

「15年後、共和国執政官執務室」

共和国の執政官執務室は簡素ながらも威厳のある空間となっており入ってくるものにその部屋の主への畏敬の念を抱かせる。

「リユカオン様、ただいま戻りました。」

陰気な顔をした男がテバイへの偵察を終えて己の忠誠の対象へ報告に来ていた。

「報告は聞いている。ご苦労だった、マダマンテユス。あのアリがいたそうだな。」

「はい。あの人員ではテバイへの侵攻は犠牲が大きすぎると判断し、帰還いたしました。つきましては兵の補充、もしくは戦略級の派遣をお願いいたしたく……。」

「お前の判断は正しかった。アリには相応の準備をして立ち向かわなければ勝ち目は薄い。それに奴は気が向かなければ戦うことは無い。眠れる獅子を起こす必要はない。それでは例の二人の戦略級候補はどうだった？」

「一人は能力の詳細は不明ですが。その規模から見れば戦略級に間違いなく確認いたしました。アレクシオスと戦闘を行い精神力切れでアレクシオスに敗北しました。」

「力はあれどまだまだ経験不足ということか。」

「はい。」

「もう一人は？」

「斥候を放ったのですが情報を持ち帰る前に殺されたか、捉えられたものと思われませう。」

「そうか。相当の警戒を厳しくしているらしいな。なかなかやるじゃないか、テバイの領主も。」

「我が方の諜報員の質が低いとも言えます。」

「そうだな、諜報員の育成に関して報告書を提出しろ。人員の増

加は認める。戦略級精霊術師の派遣は認められない。監視を怠らず、時期を計れ。引き続き監視の任務に戻れ。それと3日の休暇を与えらる。」

「了解しました。失礼します。」

「うん。」

マダマンテュスを退出させるとリュカオンはため息をついた。

「まったく、厄介だな。ただでさえこちらの戦略級精霊術師は少ないというのにあちらに一気に二人も増えるというのか。」

「執政官、国境への人員の派遣を増やされたとか。」

財務長官が冷ややか目つきをしながら扉を開けて入ってきた。

「なんだテイトノス相変わらず耳が早いな。お前の部下を諜報員にできんかな？」

「ふざけないでください。私の部下を戦地になど行かせられてたまるものですか。」

「冗談だ。」

テイトノスは眉間にしわを寄せてため息をついた。

「共和国の経済は統一後、物流の量、質とも向上してきておりますがまだ十分とはいえません。道路や河川の整備もまだ整っておりませんし、リュカオン様の提案された『学院』やらの施設整備が残っております。その状況で人員を国境に派遣などおやめください。兵士の仕事の一つに公共事業を当てたのはあなた様ではございませんか。」

「それも大切だと考えているし、軽視しているつもりは無い。しかし、帝国もいつまでも黙ったままではいけないのでな。」

「というと。」

「エピメーテウスの報告によると帝国の宰相にカイロスが就任したそうだ。」

「イリオンの『鉄血』領主が！」

「ああ、帝国の主戦派の急先鋒だ。戦によって帝国の活性化を図

ろうと考えている派閥の長が宰相に就任したということ。」「

「近いうちに共和国に侵攻してくる。」「

「ああ、良くも悪くも行動力のある男だ。必ず共和国への侵攻を現実のものとするだろう。」「

「わかりました。今の人員で対処いたします。」「

「たのむ。」「

「パンドラ様がいれば馬車馬のように働かせても大丈夫ですからね。」「

「ああ、力の制御を覚えたからなあいつも。しかし、あれは疲労感を麻痺させているだけだから後で来るぞ。」「

「いえいえ、一気に働いて一気に休むことができれば効率的ですから。」「

「・・・（鬼だな。）」「

「では失礼します。」「

ティトノスは返事をする前にそそくさと退出した。

「やれやれ、なかなか休む暇が無いな。」「

共和国編：第八話 変革の烽火（後書き）

帝国編にもどるーるー

一人の男が途方にくれていた。影の薄さに定評のある我らが主人公、前田義弘君である。彼は今、探し物をしていた。大事な探し物である。自分探しではない。そんなものは五年ほど前にすでに永遠に見つけることはできないという事実を発見している。そう探しているのは金、糊口をしのご手立て、ありていに言えば働き口である。

何故このようなことになったか。

この男、就職活動を一年後に控えていたがまだ考えたことは無かったのである。しかし、耳学問として何をすればいいかは知っていた。

1・自分のアピールポイントを考える。

ナノマシンによる超感覚

IISによる演算能力

ナノマシンによる干渉能力

上記を組み合わせた鑑定眼

結論：ナノマシンとIISのみである

2・上記を踏まえて自分の能力を何に生かせるのか
わっかね。

そうそこなのである。このセカイ、というかこの町の生活がまったく分からん。何が求められているのか観察せんことには何も決められないではないか！そこで町の実態調査をすることにしたのである。

まず、なにが求められているのかと言えば第一に衣食住であろう。

そこで衣類について観察を始めよう。
以下は前田義弘の観察記録である。

【テバイ観察記録】

『衣類について』

まず服飾関係の店をさがしてみた。

結論から言おう。そんなものは無かったのである。

ははは。衣類は布を購入し、自宅で作成するのが普通だそうです。もっと大きい都市にはそういう店もあるらしいですがこの街には無いとのこと。(シンシアさん談)

というわけで布屋にきました。

布分厚！肌触り悪！織り目汚い！と思いつつも声には出しませんでした。

話を聞くと動物の毛から繕りだした糸を織り機をつかって織ったものだそうである。これまた各家庭で暇なときに織るといった具合のものでつまり、織る人によって製品の出来に差があるということである。手工芸品の限界か。しかし、さん家の布はいいといううっわさがあり、その作者の名前で布を頼んだりするらしい。人間国宝！

次に糸はどこで作っているのかといえは、その動物を飼育している牧場がありそこで糸の作成もしているらしい。飼っている動物の爪の先から内臓まですべて無駄なく売るそうである。ただ、この動物、毛を取ることが目的に飼われているものではなく、食用用の動物で糸づくりは副業のようなものだとか。この様子だと植物や虫の繭から糸は作っていないさそうである。

とかの何とかつぶやいていたら店のおっちゃんや牧場のおっちゃんがりきりに感心して古い布とか糸とか染料をくれました。俺はそんなに哀れか！と逆切れせずにありがたーくいただきました。

(結論)

服飾関係は布の作成に用いている織り機を改良の余地がある。このあたりはイレーヌさんあたりのほうが詳しくかるう。

糸の作成についてだが作成時に熱処理したほうが細く滑らかな糸を作るのではないか。他の材料も考えたほうが良いと思う。これもイレーヌさんあたりのほ・・・以下略。

『食』

まず食堂的なものを探してみた。まあ、探すまでも無く昨日食べたところに行ったのだが。

結論、食堂は宿屋と兼ねているところがほとんどであり、客は宿屋の住人。夜は酒場に変わるので宿屋の客以外も入る。収入は酒場の収入と宿代がほとんどらしい。さもありません。一般家庭は自分で作るものな。食文化がそこまで発達してないし。

食材はどこから調達しているのかといえば農家と契約しておろしてもらっているらしい。なるほど。

ちなみ一般家庭では市場に農家が並べているのを交渉して買っているらしい。時期によって相場の変動が激しいらしい。

酒はどこで作っているのか？なんと酒蔵を領主が経営していた！さすがである。おいしいところはきっちり専売にしてやがるなど色眼鏡で見る無かれ！おそらく酒の製造量を制限してアルコール依存症の患者を少なくしようという親心なのだと思いたい！

調味料は塩と山で取れる山椒もどきだけである。私としては胡椒がないと料理に味気が無くて困ると思うのだが。

油は畑のアブラナもどきから取られたなんちゃって菜種油である。非常にくさい。

このなんちゃって菜種油を精製したほうがいいんじゃないかとか何とかつぶやいたら、農家のおっちゃんがりしきりに感心して菜種の入った箱を1箱くれました。

(結論)

味付けで進歩しなければ調理の分野に発展はない。

材料に関しては油の精製を如何にかしたほうがいい。これもイレ
ー又さんあたりのほ・・・以下略。

『住』

大工というかそういう職業の人、いるんですか？

いました。レンガ積み職人さん、左官屋さんなどの人たちが組合を作っているらしいです。

アーチ構造とか材料にコンクリートとか使わないのかなとか思っていたら、口に出ていたようで職人さんがしきりに感心し、机と椅子とナイフをくれました。

(結論)

組合は閉鎖的で内部まではよくわかりませんでした。

泣きたくなるくらい自分のポイントを生かせないという結論に達

した。そこで途方に暮れたのである。

布屋のおっちゃんにもらった古い布を牧場のおじさんにもらった糸で縫いあわせ大きな布にしてテントを造り、職人さんにもらった机と椅子をテントにおいて椅子に座りながら途方に暮れているとある夫婦が近づいてきた。

「こんにちは」

よく見ると昨日、愚痴をこぼして財布を丸ごと置いていった豪快な奥さんとその夫と思しき男ではないか。何をしにきたのだろうか？ やっぱり財布返せとか、この詐欺師とか、好き勝手いいやがってこのやろうとかいわれるのだろうか？

「君のおかげで妻と仲直りできたよ。ありがとう。」

「あなたのアドバイスのおかげで夫と素直に話し合うことが出来たの。感謝してるわ、占い師さん。」

「はあ、それは良かった。」

「これは改めて御礼にと思ってもってきました。受け取ってください。」

「思わず受け取るとそれは紙であった。」

「僕は紙職人なんです。それくらいしかお礼に渡せるものが無くて。本当にありがとう。」

そうして夫婦は見ているこっちが幸せになりそうなくらい幸せな空気を垂れ流して去っていった。かなりの量の羊皮紙を残して。

何を思ったのだろうか。もらった染料を使って羊皮紙に絵をかいた。占い師といわれたからだろうか。タロットカードの図柄で絵をかいた。それをナイフで適当なサイズに切りそろえカードにした。なにをやっているんだ俺は。

そうこうしていると三人の俺より7つくらいの下の年頃の娘さんがやってきた。

「ここ、よくあたる占い師がいるって聞いてきたんですけど。」「
なんですと？わけが分からん？あの夫婦がうわさをばら撒いたの
か？考えられる。幸せたつぷりに語りそうだ、あの夫婦。」

「はいはい、そうですよ。」
もはや自棄である。途方に暮れて多少やさぐれていたのだろう。
このときの俺はどうかしていた。

「やっぱりそうだよ！占ってもらっちゃいなよ！」
「いったい占いに何を求めるといふのだ、結局占いはその人の不安、
不満、願望などを言葉にしてそれにあつた一般的に上手くいくとさ
れる対処法を語れば安心するというちよつとしたストレス発散くら
いの効果しかないぞ。」

「・・・悩みがあるようですね、真ん中の娘さん。」
悩みの無い10代などいない。それに占ってほしそうなのは真ん
中の子だった。それだけである。それを物々しくいかにも占い師の
口調で言ってみた。ノリノリである。

「そうなんです！実は・・・。」
「恋・・・ですね？」

10代の悩みは家族か友人か恋などの人間関係である。そのなか
で占いに頼りに来るのは何か？恋である確率が一番高い。それにさ
つきからA - 10神経から周りの細胞にドーパミンを放出している
のでこれは恋愛がらみと推察がつく。何より顔に書いてあるんだよ、
絶賛恋愛中と。

「そうなんです！彼のことを考えると幸せでこっちを向いてほし
くて・・・。」

彼女は勝手に彼のすばらしさについて滔々と語り始めた。どうや
ら彼は鍛冶職人でたくましく、頼りがいのあるごつい男らしい。実
名を出すのは問題があるので彼をAと呼ぶ。ナノマシンを飛ばすと
A君はたしかに鍛冶屋にいた。なるほどいい筋肉してやがる。顔の
作りもよい。ほれるのも納得である。親方とは親子であり、仲が良
いことが会話の端々に見られる。性格は職人堅気で頑固そうだ。こ

いつ、すでに鉄と結婚してやがる。

「なるほど。彼は堅物でなかなかあなたに関心を向けてくれそうにない。」

「そうなんです。どうしたらいいでしょうか？」

「知るか！という心の声を内に秘めつつ」

「では占って進ぜよう。」

さきほど作ったたるっとカードもどきを混ぜる。すべてのカード位置は把握しているのでむちゃくちゃにかき混ぜているように見えて所定の位置にカードがやってくるように混ぜることも容易である。

「これは！」

「どっどっですか？」

「戦車の逆位置と吊るされた男の正位置と死神の逆位置・・・」

「なんだか不吉な絵ですね。」

彼女がすでにあきらめモードに入ってしまった。

「まあ、お待ちください。このカードにはそれぞれ意味があります。カードの向きによって意味が異なるのですよ。戦車の逆さの向きだと暴走と挫折、吊るされた男の正の向きだと自己犠牲と忍耐、死神の逆さの向きだと死からの再生とやり直しという意味になります。つまり多少強引でもいいんで彼に頻繁に会いに行くことです。それで堅物な彼は疎ましく思いあなたを遠ざけるでしょう。そこで彼に会いに行くのを忍耐強く耐えるのです。そうすれば彼があなたという存在の大切さに気づき、恋心が芽生え二人は結ばれるでしょう。」

「本当ですか！？」

「本当ですとも！」

知らんがな、という本音は隠しつつ適当なことを言ってお茶を濁していた。

「ありがとうございます。これ少ないですけど、料金です。」

「これはこれは、ありがとうございます。」

もはやこれはお参りに来た学生がお布施を払っていつているよう

なもんだなとか考えつつ金を受け取っていた。

本日の稼ぎ：

古い布

糸

染料

菜種 1箱

机

椅子

ナイフ

羊皮紙

金 (5デナリウス = 5000円)

帝国編：第八話 とある宿屋の給仕娘的一幕

テバイにある宿屋のなかでも中堅どころといったところの『憩いの我が家亭』には最近若い看板娘が入ったらしい。『憩いの我が家亭』はそのアットホームな雰囲気と宿屋の親父の豪快な性格で人気である。そこに若くてかわいい娘が給仕してくれるのであれば『憩いの我が家亭』の人气が上がり、その結果自分の店の売り上げが落ちるのではないかと考える同業者たちが偵察に来ていた。

「ふん、若い娘一人雇っただけで警戒しすぎではないか？」

強面の肩幅が常人の二倍はあろうかという大男が鼻で笑った。この男、テバイで三本の指に入る宿屋『狼牙亭』の店主ラドンである。若いころは流れの傭兵をやっており、稼いだ金で宿屋を作った。傭兵時代の伝手があり、傭兵や賞金稼ぎたちに情報を仲介するような役目も担っている。店は荒くれ者でいっぱいであり、一般の客はあまり寄り付かない。『憩いの我が家亭』とは客層が異なり住み分けが出来ているので、ある種この偵察者の中で一番偵察の必要がない人だったかも知れない。

「といつつ見物にいらしているのですからラドンの旦那も好きですなあ。それでしたらうちのお店のほうがおいでいただければいくらでも歓迎いたしますものを。粒ぞろいの娘たちであふれていますよって、ほほほ。」

この女もテバイで三本の指に入る宿屋『夢幻亭』の店主ニンフである。宿屋とは言ってもほほ娼館である。この女店主は男も女もいける口で本人も客をとる。自分の魅力と眼力に圧倒的な自負があり、そこには自分を卑下する態度はまったく見られない。この女も『憩

「いの我が家亭」とは客層が異なり住み分けが出来ているので、偵察の必要がない人だったかも知れないが、彼女の懸念したのはまさかこれを機に『憩いの我が家亭』が娼館のような接待を始めるのではないかという可能性である。親父の性格上ありえないが、よしんば親父にその気がなくとも女の子と話が出来るとあらばこの店に来る客が増えるかもしれない。『夢幻亭』には女の子とただ話がしたいというだけの客も来る。そういう客は一回に落とす金はそれほどでもないが継続的に来るので店としては手放したくない客層なのである。

「やれやれ、いいですね。お二人は気楽で。私としては困るのですよ。『憩いの我が家亭』に客を取られる可能性があるのですから。」

この男もテバイで三本の指に入る宿屋『満月亭』の店主アイソーンである。『満月亭』は最近台頭してきた新規の宿屋で値段を抑えることで金のない旅人、町の一般民をターゲットにしている。一番『憩いの我が家亭』の動向に注目しているのはこの男であろう。

「しかし、この店も内装を変えてきましたね。以前はカウンターと木の丸机が並んでいるだけでしたが。」

「ふむ、確かに。一段高いちよつとした広さの床が出来ている。その床を囲むように机が並んでいる。しかも視線をさえぎらない配置でだ。あの床に何かあるな。」

「何なのかしら？」

「あそこに何かしらの見世物があると考えるのが自然でしょうね。」

「まあ、今考えても始まらない。様子見だな。」

「そうね。それにしても何かしら、この紙は？本、にしては薄すぎるわね。」

「ああ、料理の絵と説明が書いてあるのですね。これは分かりやすい！家の店でも早速採用しなくては！しかし、こんなに料理の種類があつたかな？数品しかなかったと思うが？」

「確かに。こんなに豊富な種類の料理を提供するとはいつたいうことだ？帝都でもこのような店は無い。」

「小さなベルが置いてあるわね？何かしら？」

ニンフがベルをチリンと鳴らすと、エプロン姿の黒髪の娘が人懐っこい笑みを浮かべながらやって来た。

「いらつしやいませ！ご注文がお決まりですか？」

まったく邪気の無い笑みを浮かべつつ水の入った杯を人数分置いて行く。その度に黒い髪が肩口からさらさらと落ちていくの思わず三人はぼーっと見ていた。

はっと気づいてイアーソーンは給仕の娘に問いかけた。

「これは何だい？私たちは水を頼んだ覚えは無いのだが？」

「こちらは無料でございます。お代わりが必要なときはまたそちらの呼び鈴でお呼びください。」

三人は顔を見合わせた。

（タダだと？どういうことだ？しかもこの町の水源は河から引いてきた水だがこんなにきれいでなかった。いったい。）

（ベルは呼ぶためのものだったの！なかなか小粋じゃない。）

（これはいい心遣いだ。『憩いの我が家亭』らしさがよく出ている。これもわが店が見習うべきところだ！）

なんとか気を取り戻したイアーソーンは給仕の娘に向き直り答えた。

「ああ、注文だったね。じゃあこのパッソの雑炊とカンツォのサラダで。」

「ドレッシングはどうされますか？」

「ドレッシング？」

「ああ、申し訳ありません。サラダにかけるタレのような物です。かけるとおいしいですよ。種類はミューリーの煮汁に手を加えたミューラードレッシングと、ジャツケの卵でおつくりしたジャツケドレッシングがございますが？」

「ほう！そんなものが！ではミューラードレッシングで頼む。」

「わしはシャンテイの焼肉とライテの煮物を一つづつ頼む。」

「シャンテイの焼肉の焼き加減はいかがいたしますか？」

「焼き加減？」

「はい、表面だけ焼いたものと生焼けと中までじっくり焼いたものの三種類ありますが。」

「じゃあ生焼けで頼む。」

「あたしはキャンドラの漬物だけでいいわ。」

「かしこまりました。お飲み物はどうされますか？」

「???水があるじゃないか？」

「はい、水以外にもいくつかおいしい飲み物がありますのでお勧めさせていただきますました。」

「ふむ、ではこのルーテイの一番絞りで。」

「わしはエールでええ。」

「あたしはミューリーの果実酒を頼むよ。」

「かしこまりました。注文を繰り返させていただきます。パツソの雑炊とカンツオのサラダ、ドレッシングはミューラードレッシング、シャンテイの焼肉とライテの煮物、焼き加減は生焼けで、キャンドラの漬物とお飲み物がルーテイの一番絞り、エール、ミューリーの果実酒以上でよろしかったでしょうか？」

「ああ、それで頼む。」

「では失礼いたします。」

給仕の娘は黒い板に石灰の棒で文字を書くときれいな礼をし、颯爽と厨房へ消えていった。

「見事だ。各所に見受けられた心遣い、忘れないようにできる」とと会計のときに確認が容易になるこの黒い板。すばらしい。」

「あの子の所作、きれいすぎるわ。おそらくどこかのお屋敷で働いていたかお嬢様か。いずれにしても相当の身分の娘だったはず。なのに何故こんなところに？いえ、そんなことはどうでもいいわ。あの子をうちに引き抜ければかなり稼げる。それだけの魅力があの子にはある！別にち枕事までやらせる必要は無いわ。いいえむしろやらせないで男の狩人心をくすぐればいい。」

「ふん、やはりうちには必要ないな。しかしこの店にはもう一度来たくさせられる。」

三人ともがそれぞれ考えに沈み黙々と食事をしていた。減った水が補充されるのに気づかないほどに。

しばらくすると一段高くなったステージに給仕の娘が立った。ラドンは思わず「何だ？」とつぶやくと隣の男がおもむろに話しかけた。

「ご存じないのですか？この店では給仕のあの子がステージで歌を歌うんですよ。ただいつ歌うのかはわからないので毎日来てしまふんですが。ははは。」

苦笑いしながらしかし幸せそうに男は言った。

「しかし、あなたたちは運がいいよ。はじめてきて彼女の歌が聞けるんだから。」

「皆さん、お耳汚しですが私の歌をお聞きください。」
そうして彼女の歌がはじまった途端、それまでの喧騒が嘘のように消え、静寂の中澄んだ歌声が流れ出す。

彼女の歌声を風の精霊使いが店の隅々まで浸透させる。

彼女の歌は盛り上がる部分と落ち着いた部分があり、耳に心地よい。いつの間にか時間が過ぎていった。

彼女の歌が終わると一時の静寂の後割れんばかりの拍手にその静寂は破られた。偵察に来た三人もそのことを忘れ懸命に拍手を舞台の上の娘に送っている。

娘が歌い終えステージから降り、そのまま厨房に入ろうとすると一人の酔漢が娘の手首を握り締めて引き止めた。

「よう、姉ちゃん。歌良かったぜ。どうだい？隣に座って一緒に飲まないか？お酌してくれよ。」

酔漢が好色に満ちた目で彼女を見ていた。その態度は明らかに相手がうなずくことしか考えていない。

「いえ、お客様。お酒を飲むわけには参りません。職務中です。」

「んなことは放っておけばいいんだよ。つれないことを言わないで隣に座れ。」

男が娘を強引に引つ張り連れていこうとした。

ラドンがやれやれ、しょうがねえなあといった面持ちで立ち上がり止めに入ろうとしたそのとき、酔漢が地面に倒れ、娘に腕をねじ取られていた。

「お客様、無理やりはいけません。隣に座らせたいのであれば惚れさせるか、それなりの対価をお支払いください。」

娘は冷やかな目で口元だけ笑いながら酔漢に言い放った。

「いたたた。分かった、分かったから放してくれ。」

男はうめくように娘に懇願すると娘はあつさりと男を話した。

酔漢はのっそり立ち上がるとおもむろに娘に聞いた。

「対価を払えって言ったが何ならいいんだい？」

男が聞くと娘は少し寂しげに笑って人差し指を立て天上を指し、言った。

「私を空高く、天上すら越えたところに連れて行ってくれるならいくらでも。」

男は思わず顔を赤らめ、ばつが悪そうに店を後にした。

娘がその後、厨房に消えると店中の客からため息がこぼれた。店の客のほとんどが彼女に似たようなことをし、返り討ちにあっていた。客の大半は「あーあ、やっぱりな。でもどうせあの男、また来るぜ。たつく性がねえあ。」と思つて、先ほどの酔漢に対してか自分自身に対してか哀れみを込めてまたため息をついた。

「『憩いの我が家亭』、油断なら無い店のようですね。帰つて対策を練らなければ。それにしてもあの店の変わりよう。あの娘が入つてからだな。まさかすべてあの娘の発案だというのか！ならばぜひうちの店に来て欲しいものだが。」

「あの子、如何にか引き抜けないかしら。しかしこここの親父は敵に回すと厄介だからあまり無茶はできないし、困つたわ。」

「あの娘、やりおる。うちの店の荒くれ者にもあの腕があれば対応できよう。あの気位の高さはわし好みだ。うちの店にぜひ欲しい。」

偵察に来た三人は三者三様に同じようなことを考えながら、代金を支払つた。

「ありがとうございます。またお越しく下さい。」

娘が笑顔で扉を開けながら言うといアーションが聞いた。

「ところで君、名前は？」

「巴 一橋です。」

帝国編：第九話 無欲無私という名の変態男（前書き）

人生のく袋小路にく迷い込んだなら

・・・どうすればいい？

帝国編：第九話 無欲無私という名の変態男

妖しげな風貌の人間が昼の『憩いの我が家亭』を訪れた。頭からフード付のマントをかぶっており顔が見えないため、年齢は分からないが体つきから男だと知れた。

その男には怪しいところが多々あったが、まずその持ち物からして変だった。大き目の古い布に何かを包んで背中に背負っている。そして机と椅子を引きずって現れたのだからまず周りの目を引いた。

飯屋に机と椅子を持参する人間がどこにいるのか？いやいやない。まずいない。おかしい。

男は開いているところに机と椅子を置くと持参した椅子に座った。周りの客はかなりその男を警戒している。客の一人がその男目掛けて食べていた木の实を後頭部に当てようと放った。速さ、コースとも男にその木の实が当たること容易に想像させたがその予想は裏切られることになる。男が体を傾けて紙一重で避けたからである。

『憩いの我が家亭』の親父はその男を問いただそうとカウンターから出ようとすると、最近『憩いの我が家亭』で働き始めた女の子がその男に近づいていった。いくらなんでも危険だと彼女を制止しようとしたがその前にすでに彼女は男に声をかけていた。

「どうしたの、ヨッシー？元氣ないよ？」

巴には義弘の纏う空気を敏感に感じ取っていた。それは義弘の体を黒い靄のようなものがまとわりついているように見えていた。

「うん、少し疲れた。あとヨツシーって呼ぶのやめて。」
義弘は机に突っ伏しそうになるのを懸命にこらえながら巴に答えた。

俺はどうしてここに来たのだろうか？まあ、腹が減ったし、ゆっくり出来て知り合いがいるところをここしかなかったからであるが。

「この机と椅子どうしたの？」

昨日この宿屋を出たときには持っていなかったはずなのに今日はなぜか机と椅子を持って帰ってきたのでなんでか気になった。

「何でか職人組合のおじさんたちがくれた。あとナイフも。このナイフ、こつちじゃ見られない片刃のナイフなんだよ。ナイフの齒のない方に等間隔で溝が彫つてあるからたぶん定規みたいにも使えるみたいだ。職人さんからもらったからだと思っけど。」

懐からナイフを出すと巴に良く見えるように目の前に横にして見せた。

その瞬間、周りの客が色めき立ったが二人は完全スルーして話を続けていた。

「ふーん、義弘君。いろんなものをもらっつねえ？この前も女の人に財布丸ごともらったって言ってたし。」

「ホントここの人たちは皆親切だね。巴ちゃんはどうか？給仕の仕事はなれた？」

「うん、でも最近お客さんが増えて大変だよ。色々、楽になるように（もちろん私も含めて）工夫してるけどなかなかね？あと『料理好きに作っていいよ。』って言われてるけど食材の種類は少ないし調味料あんまり使えなくてなかなかおいしく作れないのよ。」

「そっかー。あ！よかつたらこの菜種もどき一箱もらったから良かったらあげるよ？これ臭みさえ取れば結構使えると思うんだよね。」

「本当？ありがとー。早速使ってみるね？」

「あと、帰りに出入りの農家の人に作物の種類聞いてみたけどトマトっぱいのとジャガイモっぱいのがあったからそれ仕入れてみたら？何か遠くから来た人らしくて言葉が良く分からなかったけどしばらく話聞いてたら解読できるようになったから言語情報を送るね。カレンタ広場の青い天幕を張ってるところに行つて『義弘の話聞いてきた』って言えば話を通るようになってるから。あれらを使えば結構旨いものが食えるかもしれない。」

「え、それは助かるー。これで料理のレパートリーが増やせるね！」

「あと例の夫婦に紙をもらったんだ。紙があればメニューとか作れると思うし、そうすれば新料理の説明が要らないと思う。」

「え、紙あつたの？でも私絵心ないよ？」

「よかつたら、俺描くよ？大学のレポート書くのに自動筆記アプリケーション作つてIISに保存してるから料理の実物さえ見たらそのとおりにかけると思うし。インクももらったし。」

「・・・本当にいろんなものもらってるね？ありがとっ？お言葉に甘えさせてもらえる？」

「いいよ？仕事が見つかなかつたし。・・・農家にも行くのかな？はっはっはっはあ。」

「ここの親父さんに給料出してもらおうようにしてもらっかね？」

「・・・そうしてもらえると助かる。」

天から『農家なめんな！』という声が聞こえたと聞こえなかつたとか。

義弘は『憩いの我が家亭』で昼飯をきれいに食べあげると机と椅子を引きずつて出て行った。大量の空になった皿を残して。

「トモエ、ちょっといいか？」

巴が義弘との対応を終えると『憩いの我が家亭』の親父さんが巴

を呼んだ。

「はい!？」

巴はやばいと思った。つい義弘と話し込んでしまったことを叱責される。

「・・・さっきの男は何者だ？」

親父さんはかなり真剣な表情で聞いた？

「はい？私の友人ですけど？」

「友人？ナイフを突きつけられたように思ったが？」

「ナイフを？ああ、あれはナイフを見せてもらったただけですよ！」

巴は笑って手を振りながら反論すると、

「ナイフを見せてもらうって、何故だ？」

「ああ、私も初めてみたんですけど（こちらでは）、片刃のナイフに等間隔に溝のついたナイフでしたから珍しいってことで・・・」

「何!？」

いつも終始穏やかな親父さんがかなり驚いていた。

（『組合』幹部しか持ち得ない『クローソのナイフ』をなぜ？あれを持つと言うことは工房を一つ任せられるに足る人物と認定されたということだぞ！）

「親父さんは知ってるんですか？そのナイフ。」

「ああ、まあな。」

「ああ、後でお知らせしようと思っていたんですが彼から油の元になる種一箱もらいました。」

「なんだって？ナープラの種はカツシス農園でしか栽培されていない。出荷先も限られているからなかなか手に入らないんだ。その親父が頑固者でなかなか卸したがらない。」

「もしかして貴重品なんですか？」

「金額にしたらそうでもないが、かなり入手困難な品だ。」

「そうだったんですか。（私も義弘君が何者か分からなくなっ

きたわ。なんでそんな貴重品をポンと渡しちゃうのかしら）後は・
・。

「まだ何かあるのか？」

いい加減呆れ顔で親父さんはため息をついた。

「あと料理に使えるような食材を教えてくださいました。カレンタ広場の青い天幕を張つてるところに行つて『義弘の話聞いてきた』つて言えば話が通るようになってそこで入手できるみたいです。」

「カレンタ広場の青い天幕？そりゃ、ポイベ商会の天幕じゃないか？何でも南方の珍しい食料を取り扱つてるとか言う。みんな胡散臭がつてあんまり使いたがらないが。」

「使つてみたいので試しに数个買つてもいいですか？」

「そりゃ、かまわんが顔の広いやつと友人なんだな？」

「そうですね、私も驚きました。でもおかげで料理の種類を増やせそうです。」

「そうか、そりゃうちとしても大助かりだが。」

「もし、料理の数増やせたらその説明を書いたものを作つていいですか？」

「いいが、何に書くんだ？」

「？紙ですけど。」

「紙！だめだめ。あれは専門の職人が手間隙かけて作るからかなり割高だ。」

「でも、もらっちゃいましたよ。義弘君から。」

「なに！？何考えてやがる、あの男は？」

「私もそう思います。」

巴と親父さんは例の怪しげな男が出て行った扉を見つめた。

「さーて、農家にも行つてみるか。」

このとき、義弘は自分の行動によつてこの世にドレッシングと数々の新メニュー、お品書きが生まれることを知らない。

帝国編：第九話 無欲無私という名の変態男（後書き）

男、絶賛迷子中

帝国編・第十話 のーそん（前書き）

良いお年を

帝国編：第十話 のーそん

風が頬をくすぐり通り抜けていく。その風は多少肌寒いものではあつたがそれにも増して麦穂が風に揺られる様はそれを見る人にそれを忘れさせる。

ここはテバイ郊外の農村である。テバイの麦はここで賄われていると行つても過言ではない。それだけの規模の農村である。しかし、よほどの用事でもない限り一般人は寄り付かない。

しかし、今日はこの静かな農村に来訪者が現れた。その男は気がつけばそこにいた。気がつけば明らかに周りの景色から浮いている。浮きまくっている。真つ昼間ののどかな農村など全く似合わない男がいた。

「のどかだなあ。」

男は風に揺れる麦穂に目を細めながら農村の人々が働いている姿を眺めていた。

「何年か前は飢饉で大変だつたつて聞いたけど今年は大丈夫そうだな。俺の知つてる麦穂に比べればかなり小さいけど、このあたりの地力ではこれが限界だろうなあ。IISこの土地の成分分析を開始。」

男は土を一掬いして匂いを嗅ぎ、少し口に含みながら言った。周りの人々は驚愕した。「この人、土食つてるよ」と口々に言い合つた。

『pH6であり標準的な値を示しています。粘度成分が多いため通気性が良くなり、根が酸素不足を起こす危険性があり、排水性が悪いと根腐れを起こす危険があるため、土壌改良の必要があります。深耕も有効でしょう。また窒素、リン、カリウムが不足していません。』

「ふーん・I I S今日の天気は？」

『この地点の過去の観測データが不足しています。』

「過去の観測データを地球上の類似地点の物と同じとして計算する。」

『気候・風土が地球・フランス南部のデータと97%一致・計算を開始します。』

「実行。」

『本日の天気は晴れ・しかし現時点の観測データからにわか雨が降ることが予想されます。』

「それはいつだ？」

『今から1時間後です。』

「どこかに雨宿りを頼むか。」

畑で麦の刈り取り準備をしている娘がいた。娘はさっきから土を食べたり空を眺めながら独り言をぶつぶつ言っている男のことが気になって仕方が無かった。ちらちらと男を盗み見てはやっぱり怪しいという思いを新たにしていた。そうこうしていると男の方から近づいてきた。

「わっわわ・（まずいわ・盗み見てたことに気づかれたのかしら・どうしよう・このままじゃ私はこの男に……）」

「あの。」

「なっ何?!（だめよ!ここで負けちゃだめ!しっかりするのよ、私……）」

「もうすぐここで雨が降りそうなのでどこか雨宿りしている所を貸していただけませんか?馬小屋とかそういうところで構いませんので。」

「うーん・それくらいなら・でもこんなに晴れてて気持ちのいい気候なのに雨が降りそうなの?（あら?意外と礼儀正しい……）」

「ええ、ほぼ間違いありませんよ。」

「うーん・じゃあ私の家までついてきて・ところで少し聞きたい

ことがあるのだけど。」

この男が見かけ程変な男ではないと思つたのか警戒心が若干無くなつていた。

「はい？」

「何故机と椅子を持つてるの？」

「・・・一応、これは私の財産だからですよ。」

「ふーん、変わった財産だね？普通、金貨とか銀貨を持つよ？かさばるし。」

「そうですね、これ売ろうとも思つたんですよ、それで買い手は付きそうにはなるんですが、この机と椅子を細部まで見たとたん無理だといつてみんな行つてしまふんですよ。」

「ふーん、見た所そんなにおかしな物でもないのに変だね。」

「そうなんですよね、でも捨てる訳にも行かず持ち歩いている訳です。」

「そつか、まあいいか、おいで。」

「はい。」

「ところであんた名前は？」

「前田 義弘です、あなたのお名前は？」

「コレーよ。」

少女の家は畑からほど近い所にあつた。家は畑の真ん中にあり、家から放射状に農道が延びている。その家は義弘の予想を大きく上回る規模であり、口を大きく開けて歓声を上げていた。

「大きいでしょ、でも家は多くの小作人を抱えてるからこのくらいの規模の家を持たないと小作人に甘く見られて逃げられちゃうんだつて、お父様が言つてた。」

「ふむ、なるほど、そういうものですか、すごいですね、家が住む場所であるだけでなく、示威のためのものとは、お父様はやり手でいらつしやる。」

義弘が妙に感心しているとコレーはその様子を見て笑い出した。

「ははは・妙な所に感心するのね・大抵の人はこれを聞くと嫌な顔をするわ・小作人を威圧するなんてって。」

「人を集団として束ねるには皆に認められる必要があります・その一つ的手段として大きな家をお作りになつた・家は住人の器の象徴なのです・そう考えれば必要なことだと思えますよ・別に暴力をふるわれてる訳ではないのですから・小作人の方々の顔つきを見ていれば分かります・皆抑圧されているように見えませんでした・やさしいお父様ですね。」

「そう・そうなの！お父様とても優しい人なのよ！ところでヨシヒロは何をしている人なの？学者さんか何か？」

コレーは機嫌良く答えた・彼女は優しくも威厳ある父親を敬愛しており・小作人も仲良くしていた・小作人もこの少女を親しみをこめて『お嬢』と呼んでいた・

「そうですねえ・まあ・学者というには未熟ですし・学者の弟子といった所でしょうか？」

「へー・きれいな帝都訛りだもんね・帝都から来たの？」

「いえ・海を越えて来ました・遙か彼方から・・・。」

「そつか。」

コレーはそれ以上聞かなかつた・義弘が少し寂しそうな顔をしたからである・

壮大な門を通り、屋敷の玄関に入った・

「お邪魔いたします。」

家令らしき人に義弘はお辞儀をした・

「お荷物お預かりします。」

「はい・ありがとうございます。」

「失礼ですが・お腰の物もお預かりいたします。」

「わかりました。」

義弘はすべての荷物と腰に吊っていたナイフを渡した・

家令は恭しくそれらを受け取り使用人に指示を出して去っていつ

た・

「ありがとうございます．ちょっと雨宿りさせてもらっただけのもりがこんなにお世話になりました．」

義弘はかぶっていたマントを取り去り、シャツにズボンという普段着姿で出されたお茶を飲んでいた．

通された応接間はリラックス空間であり、思わず寛いでしまい本音で語りたくなるようなそんな雰囲気のある場所であった．

「いいのよ．なんかあんたの事気に入ったし．というかそんなことしてたのあんた．なんで割とまともじゃない？」

「どういうのを想像してたんですか．ていうか気に入ったって出会って間もない人捕まえて、勘ですか？」

「勘よ！」

義弘は思わず吹き出してしまった．

「なんで笑うのよ！」

コレーが頬を膨らませて怒った．

「いや、知り合いに似たような事をいう人がいるなあって思いまして．」

「人って女の人？」

コレーは一瞬目を光らせて聞くと

「はい、そうですけどまた勘ですか？」

「ま、まあね、女は勘が鋭いっていうでしょ？それよ！」

「はあ．」

義弘がコレーの剣幕に押されていると後ろのドアが開いて人が入って来た．

「コレーがこんなに素直に話をする人は初めてだよ．父親として喜ぶべきかな？」

「どうも、コレーの父親のヘリオス＝ニールセンです．」

その男は口元に豊かな髭を蓄えていた．その容貌は温和そのものである．

「義弘前田です。お嬢様にはお世話になりました。雨宿りさせていただけます。」

「ふむ。雨宿り？見た所雨は降っていないようだが。へリオスが怪訝そうにしていると」

「これから降るのよ。ヨシヒロがそう言ってたわ。」

「そうなのかね？」

「はい。そうですが。」

「何故。そう思うのかね？」

「それは……（おい、I I S。雨が降るといふ予想の根拠を教える。最優先事項だ！）」

「……答えられないかね？」

「いえ。そんなことは……（『積乱雲が南東15kmに観測され、北西に時速10km前後で移動していました。そこから一時間でわか雨が降ると予測しました。』）」

「君は、もしかして『精霊憑き』かい？」

「いえ。そんなことはありません。私は……（何て言えば良い？15kmの距離にある縦長の雲を見つけて、それがこつちに1時間くらいで付きそうなスピードでこちらに向かっていたからなんて言える訳がない。明らかに『普通』ではない。『異常』は排除される対象になりやすい。何かないか、何か。くそ！こんな事なら、どこか適当な所の軒先を借りれば良かった。）」

「……隠さなくていい。『精霊憑き』は帝都では奇異の目で見られるがここでは『精霊憑き』は珍しくないそうだった差別とは無縁だよ。」

へリオスは気遣わしげに義弘の肩をたたいた。

「……すみません。（本当にすみません。うまく説明できませんよ。主にこつちの都合で。）」

「ああ。ゆっくりしていきたまえ。コレーちよつと来なさい。」

「はい。」

（ニールセン家書斎）

「お父様・いったいどうしたの？」

「お前はあの男についてどこまで知っている？」

「何者って、天氣に詳しい帝都訛りの海に向こうから来た旅人？」

「なるほど、これは何か分かるか？」

ヘリオスはコレーに古びた机と椅子を指し示した。

「何って机と椅子でしょ？」

「そう『机と椅子』だ、机と椅子の出てくる童話をしてやったことがあつたらう？」

「それって『皇帝の贈り物』のこと？」

「そう、皇帝が一人の少年の才気を見抜き、その少年に机と椅子を送った、その少年はその後、名役人として辣腕を振るつたという。」

「それがどうしたの？」

「それで『机と椅子』を送るといふのは将来の成長を感じた相手に今後の成長の手伝いをしますという意味表示に使われるようになったんだよ。」

「へー。」

「それで、この机と椅子を良く見てご覧？」

「？普通だよ？絵がかいてあるけど。」

「その絵はね金槌だよ、これは職人の『組合』の紋章なんだ、我が家の家紋が麦とフォークのように。」

「つてことは組合さんに机と椅子をもらったってこと？」

「そういうことだ。」

「それってすごいの？」

「すごいなんて物じゃない、『組合』は帝国全土にその影響力を持つている、その『組合』が今後の援助を約束したんだ、それにこのナイフ。」

「ナイフ？」

「これはね、『クロースのナイフ』といって工房の主の持つナイフ

だよ。」

「ええ、じゃあヨシヒロは工房のマスターなの？」

「そうだねマスターを名乗る資格を得ていることは確かだよ。」

「すごいね。」

(そんな彼が何故こんな農村に来ているのだろうか?)

ヘリオスがそんな疑問を持っていると屋敷の窓ガラスを雨水が打ち付け、雷が落ち始めた。

「ヨシヒロの予想当たったね。」

「……彼についている精霊はいつたいなんなんだ？」

ヘリオスの困惑は深まるばかりだがそんなことを知りもしないで久しぶりに飲むまともな飲み物に感激しているヨシヒロであった。

帝国編・第十話 のーそん（後書き）

やっと休みですわ

帝国編：第十一話 帝都 それは魑魅魍魎渦巻く魔の都・ではない・（前書き）

寒い！

世間の風が寒い！

帝国編：第十一話 帝都 それは魑魅魍魎渦巻く魔の都ではない。

日差しが窓から差し込んでいいる。窓の形状は縦長で、その数は少ない。基本的に部屋に入る日の光は少なく、部屋は薄暗かった。

帝国首都、帝都アスンション中心部にそびえ立つ白い塔。その一室である。そこには帝国を代表する将帥が主結しており、ここに彼らを召還した人物が登場するのを待っていた。

このような待ち時間をどのように過ごすかである程度その人物像が計れるものである。臨席した人と近況を話し合うもの、予想される呼ばれた意図を確認し合うもの、目を閉じて黙して語らないもの、周りの様子をひたすら伺っているもの、我関せずと茶を飲んでいるものと様々である。

招集した主が遅れているのは別に集結した将帥たちの人物を計ろうという意図がある訳では無い。彼は共和国との国境の様子を報告を受けていたのである。彼の名をカイロス。イリオン領の領主である。カイロスの所領のイリオンは豊かの土地ではないが鉦山があり、その膝元には多くの職人を抱えている。その職人が作る道具の数々は帝国内で人気である。しかし彼が領主となつてから作られる品が、鍬や包丁から剣や槍に変わっている。その品を他の領に売りつけている。その事から彼をイリオンの『鉄血』領主と人は呼ぶ。

「それでマニ領からの報告を聞こう。」

その男は厳つい呼び名にしては背は低い。下手をすれば子供に見られてしまふかもしれない。彼は髭をのばし、なんとか威厳を出そうとしている。しかし彼の外見に騙されてはいけない。彼のその目の奥には爛々と野心の火が灯っているのだから。

「はい。マ二領と共和国との境に駐屯していた共和国軍は撤退いたしました。」

マ二領主からの使者は吉報を伝えることができてたことを嬉しく思っており、若干頬が上気している。

しかし、カイロスの反応は使者の予想を裏切るものだった。

「何？何故共和国は撤退した？」

カイロスの表情には喜びの色はなく、あるのは驚愕、それだけである。

「何故と申しましても我が主には撤退したことのみをお伝えせよとの命令でしたので……。」

使者は困惑していた。撤退したのだから良いではないか、てつきり喜んでいるものと思っていた。

それなのにカイロスは喜んでいないばかりか怒っている節がある。

（あの牝狐めが！あの抜け目ない小娘が共和国撤退の原因を探っていないわけがない！隠しだてして共和国への侵攻を送らせるつもりか！？）

奴は侵攻が始まればマ二領が前線基地化されることを当然予想しているだろう。それによってテバイに物資が大量に流入しマ二領の活性化もなされることもだ。それを何故？

……落ち着け。奴の立場になつて考えるのだ。

おそらく今のやつに有事の際の人、物の流入を管理する力はあるまい。治安維持にすら手が回らず民間に委託しているくらいだ。

つまり、やつにとって共和国への侵攻は将来的には歓迎するが統治体制が確立するまでは見送りたいのが本音だろう。

だから我が共和国侵攻を見送らざるを得ない状況を奴は作り上げたか。共和国の撤退の理由を説明するまでは迂闊に動けん！

帝国宰相であるこの我が小娘に行動を制限させられるとは！

奴に原因究明をせよと命令することはできるが調査中だとはぐらかして時間稼ぎをされる可能性もある。

調査団を派遣してもよいが各領主には内政自治権が賦与されている。突っぱねられて調査は我々が行うと言われれば手が出せぬ。

ならば調査団派遣を奴に示し、受ければそれでよし、受けずに独自で調査すると言い出せば期限を区切り、果たせばそれでよし。果たさなければ責任追求して領主の座から引きずり下ろしてくれよう。

「・・・あの閣下、如何されましたか？」

使者が不安げな表情でカイロスの顔色をうかがっている

「マニ領主、エオスIIゲルギオスIIマニに伝えよ！共和国撤退の原因究明の為、調査団の派遣を行う。拒否するのであれば、一月で原因を究明し、帝都へ至急伝えよとな！」

カイロスの剣幕にひたすら頭を垂れて、逃げ出すように使者は退室した。

帝国軍の将帥たちは宰相の遅参について各々話していたが、議場の上座に鎮座する十二人の人影の方をしきりに気にしていた。一人一人の威圧感が半端ではなく、皆近づくとすらすらできずにいた。それも致し方ないことかもしれない。滅多に皇都に顔を出すことのない帝国最強の一角が揃い踏みしているのだから。

帝国軍には各領主の私兵とも言つべき軍と、騎士団、そして十二名の神武将の率いる軍団が存在する。各軍の人数比は2：2：6といったところである。

各領主は自衛と治安維持の名目で独自に軍を編成できる。その

規模は任意であるが、人数の上限は帝国法で規定されており、国境に接する領の上限は他に比べて高い。

しかし、その行動範囲はあくまで自領内に限られ、特段の理由がなければ境を越えるには皇帝の許可が必要である。

騎士団は貴族の次男以下の家督を継がない者の受け皿と化しているが、その実力は安定している。その行動範囲は帝国全土を網羅しており、街道の安全確保を主要任務としている。

しかし彼らの収入源が貧弱で常に貧乏である。そのためか何らかの理由で長男が廃嫡して騎士団に所属していた次男が継ぐことがあるが、その場合その領の財政が健全化するという話もある。

最後に十二人の神武将であるが、由来は初代皇帝に付き従った十二人の武将が賜った称号という割とよくある由来である。この神武将は帝国の領土を十二の範囲に分け、それぞれの範囲の領の領主の監視、または協力をを行う皇帝の手足とも言うべき存在で、その権限と権威は皇族に準ずる。場合によっては領主を自身の裁量で処断することも可能である。

また、この神武将は皇位継承にも関わっており、神武将12名のすべての剣を捧げられた者のみが皇帝となる。基本的に終身であり、本人が辞するか死ぬまで神武将は神武将である。

神武将の席が空いた場合、その任命を行うのはその代の皇帝である。知勇に優れ、人品卑しからぬ人間が選ばれる。もし適するものがない場合、空位のままおかれることもある。そのため、神武将の年齢構成は幅が広い。

ちなみに次の神武将は誰だという評判がたつもので大抵その噂は裏切られることはない。そんな化け物のような人間はそうはいないからで、そのような人間がうわさに上がらないなどありえない。

またこの神武将の特権ともいうべきものがひとつある。少なくとも一人の戦略級精霊術師と組むことである。戦略級精霊術師の任命

は戦略級精霊術師にしか行えない。その基準は分からないがなんとなく分かるそうである。別に命令権があるわけではないが人心をひきつけることに役立つことは間違いない。またその抑止力たるや絶大である。

その内訳はアテーナイエ、アプロディタ、アポロン、アルテミス、アレス、ディオニュソス、デメテル、ヘステイア、ペルセポネ、ヘーラー、ヘルメス、エンシノガイオスの十二名である。

今回の召集は帝国宰相の名前で行われた。その参加者は十二名の神武将の内、アレスは東方の魔獣の討伐に手を取られており、デメテルは北方の大寒波の被害への対応に追われている、ペルセポネは南方の諸部族の仲裁で手が離せない、ヘルメスは西方の共和国との国境の守備のため離れられずにいる。そのためこの四名については副官が代理として来ていた。

他の人員は副官に後事を任せ、集合していた。

「・・・遅い。」

理知的な切れ長の目を吊り上げ、気の小さいものは思わず悲鳴をあげてしまうような底冷えのする声で唸った。

彼女のその気性は皆知っている。と言うかその性格を証明する工ピソードに事欠かない。

曰く、『短気』、『神経質』、『歩く暴雪風』である。

「短気ですな、ヘステイア卿は。」

蜂蜜色をした見事な巻き下毛の若者が呑気そうに言った。その手には南方産の茶が入ったカップを持ち、元々細い彼の糸目をヘステイアとは逆向きに傾け、その茶をすすっている。その口元には人を小馬鹿にしたような笑みが浮かんでいた。

「だまれ、アポロン卿。我々はこの様なところで時間を浪費するために帝都に戻ってきたのではないぞ！」

「確かに我々にはすべきことが山積しております。しかし、宰相

の召集に応じずに共和国への遠征計画を勝手に進まれるわけには行きますまい？それにもう帝都に集まっておるのですから今さら憤ったところで何にもならないでしょう？」

「そのようなことは分かっている！しかし、それは奴が遅れていることを許す理由にはならん！会議の開始時間が決まっているのなら、その時間の少し前には準備万端整えているべきだろう。それなのに皆奴を呼びにいこうともせぬではないか！」

このいつまでも続きそうな会話を皆、「またアポロンのヘステイアいじりが始まった・・・」と嘆息しつつ聞き流していた。

「そろそろお止め、ヘステイア。アポロンもおふざけはそのあたりでお止め。」

二人は言われた瞬間押し黙った。それは自身の大人気なさを反省したからでもあるが、ヘーラーのそのやさしげな笑顔に押されたからでもある。

ヘーラーは神武将の中でも最古参であり自然と十二人の中でまとめ役のようなことをしている。

彼女は普段は大変温和な性格であるが、一旦怒ると手に負えない。しかもその怒り方が傍目にはまったく分からないから恐ろしい。彼女は人の領域を逸脱した情報収集能力で他人の弱みは一通り握っているというまことしやかなうわさもあつた。

「分かりました、ヘーラー卿。」

アポロンがいたずらげられた少年のようなにやけ面で答えた。

「申し訳ありません、ヘーラー卿。大人気ない振る舞いをいたしました。」

ヘステイアの額を冷たい汗が伝う。

「いえいえ、私の言いたい事を代弁してくれてありがたかったですらいよ？ありがとう。」

へステイアその言葉に安堵しつつも、この場に遅れて来ているカイロスの未来像を想像しようとしてやめた。

「それにしても今回の議題は今後の帝国の安全保障についてという事だがその主眼は……」

へステイアが話題を無理矢理変えようと皆の関心事である今回の議題について話し始めた。また情報通のヘーラーなら何か事前に情報を掴んでいるのではという思惑もあったが。

「共和国侵攻でしょうね。」

アポロンが先ほどまでとは打って変わってまじめな表情で話している。しかし、その口元が微妙に引きつっていた。何故なら彼の足の上に、彼に比べてかなり小さく形の整った足が乗っかっていただけである。その足はその大きさからは想像できないような圧力で持つて彼の足を圧迫していた。

「それ以外には考えにくいわよね？南方はペルセポネの抑止力と調整能力で平穩そのもの。今は少しきな臭くなつてたみたいだけど東は例の『戦馬鹿』が性懲りも無く魔獣狩りに精を出しているおかげで暴れようなんて馬鹿がいなし。ていうか暴れる馬鹿を仲間に吸収しちやつてるから、あの馬鹿・北部は戦が起こり様が無いもの、貧しすぎて、別名『忘れられた土地』だもの。なら西しか無いでしょ。でないとカイロスの旨味無いし。」

この毒を吐いているのはアポロンの双子の姉（姉は自称）である。名をアルテミスと言った。双子であるのに髪は見事な銀髪であり、あまり似ていない。だからでは無いが双子である事を指摘されると八つ当たりされることはこの界限では有名な話である。本人も「あんな嗜虐趣味の変態二重人格男は兄弟じゃないし。」というくらい毛嫌いしている。外見だけは指を差し出せば小鳥がとまりそうな美少女だが、実際は猛禽の類いであるとはアポロンの言である。

「これこれ、そんな口を女の子が聞くものじゃないよ。」

「はい、ヘーラーおばさま。」

ちなみにアルテミスはヘーラーだけには毒を吐かない。それは恐

れとともに尊敬もしているからである。いつかあんな風になり（皆の弱みをにぎり）たいと考えているらしい。

（二重人格はどっちだ。）

とアポロンが考えていると、

「つつうつつ！！！」

「あらら、どうしたのアポロンお兄様？顔色がよろしくないわ？アポロンの足がアルテミスにグリグリと踏まれていた。アポロンをお兄様と呼ぶときはかなり怒っているときである。

「そろそろやめないか、二人とも！帝国の進退を決めかねない重要な事だ。混ぜ返すような事を言ってるんじゃない！」

自他ともに認める神武将一の良識派、最後の良心、エンシノガイオスさんである。

気は優しく力持ちを地でいく男である。

彼は血縁を重視する帝国では珍しく辺境人で認められて神武将まで登りつめたいわゆる『苦勞人』である。

北方の騎馬民族の出で、その騎馬術は他の追随を許さない。

「エンシノガイオス卿の言う通りです。今は、情報を交換し合わなければ。」

彼女も良識派の一人に数えられるだろう。彼女も苦勞人である。何故なら何でもオールマイティにできてしまうので何かと押し付け、もとい、便利に使われ、もとい、頼りにされるからである。

また彼女は別の所でも有名な人である。曰く、『帝国一の美貌』、『美の女神が裸足で逃げ出すスタイル』である。そのアプロディタさんはそれに全く気づいていないらしい。彼女に焦がれる男はパンに使われる小麦粉の粉の数以上である。しかし、皆遠慮して声をかけられない。それを物ともせずアプローチをかけ続けている図太い男もいる。例を挙げると、神武将のアレスや戦略級精霊術師のアレクシオスなどである。

「そうですね、では話を戻すとして標的は共和国でしょう。会戦理由はどうするつもりでしょうか？」

南部担当のペルセポネの代わりに出席している副官がほつと安堵し、話を戻した。

「共和国は元々わが国の戦争犯罪人の一族が逃げ込んだ土地だ。かの国を犯罪者の本拠地とでも理由付けるかな？」

西方担当のヘルメスの代わりに出席している副官が予想した。さすがに共和国との国境担当であり、それなりの情報は所有している。「そもそも国交を持たぬ国だ。理由付けなどどうともなると考えているかもな。もしそうなら我らは、かの国にすれば盗賊とやら変わらぬと言ふことだがな。」

エンシノガイオスが苦虫を噛み潰したような顔で言うと、
「宰相閣下は飢饉後低迷している帝国の活性化を促そうとしているのだろっが、戦をする物資が足りていない。兵の士気を保つためにも略奪を黙認するだろっな。」

調子を持ち直したヘステイアが淡々と言うと、
「そのような事が許される物か！」
好青年である。絵に描いたような好青年である。デュオニユロス君にはこのまままっすぐ成長してほしいものである。

狸親父のヘルメスに育てられたというのに全く擦れていないこの性格は帝国の奇跡の一つに数えられる。
嘘である。

「そうです。争わず、帝国が発展していける道がある筈です。
聖女である。その頭上には後光が射していても人は納得するであらう。」

思わず手を合わせるのを誰に止められるだろっか、いや誰にも止められまい。
しかし、彼女それでもかなりの戦上手で、守城戦で負け知らずである。

戦わずして勝つためには割と手段を選ばない。

「あーあ、アテーナイエのいい子ちゃんが始まった。」
アルテミスがブータレながらやじると、

「皆がいい子になればきつと戦争なんて起きません・いいじゃないですか。」

「皆がいい子ちゃんじゃ、つまんないじゃない!」

「思春期か! お前らはいいい加減に話を進めろ!」

エンシノガイオスさんさすがです・

「ヘーラー様は何か西方の噂をお聞きではないですか?」

勝手に話を進めようとアプロディタがヘーラーから情報を聞き出すと話をふると

「そうですね、西方国境に駐在していた共和国兵が一時撤退したことくらいかしら?」

ヘーラーのその一言にその場が一瞬静かになった・

「ヘーラー卿、あなたの情報網には恐れ入ります・中央領域からどうやってその情報を?」

西方担当ヘルメスの副官が冷や汗を流して聞くこと、

「アレクシオスから聞きました。」

「馬鹿な、連絡した様子は。」

「あなた戦略級精霊術師を自分の尺度で測っちゃだめよ・彼らは人とは隔絶しているの・その力も性格もね。」

「まさか風の精霊術でそこまでの事が・・・。」

「そう、でもやっぱり情報封鎖してたのね・あなたの独断?」

「・・・そうです。」

「そうよね・あの狸が私に知られていることを知らない筈が無いわね・あなた泳がされていたのよ。」

「・・・。」

「その情報を宰相に本会議で高く売れたかったんでしょうけど、残念でしたね・カイロスはもう知ってしまいましたよ。」

「!!!!!!」

「マニ領の領主からの報告を受けている頃でしょうから・あの娘

も色々考えて動いてますからね」

「・・・」

「可哀想だね」

宰相がくる前に法務官がくる必要になった

帝国編：第十一話 帝都 それは魑魅魍魎渦巻く魔の都・ではない・（後書き）

でも気候的には少し暖かくなって来た
気がする

帝国編：第十二話 誘惑の湯煙 ちょっと湯煙さん、そこを何とか！ ここか

サービスシーンはありません。

ありません。

何故なら

私を書けないから！

何故こうなった？

いや、理由ははつきりしている。そう、単なる不注意だ。

しかし、この状態に至るまでの過程を振り返ると悪意ある脚本に沿って行動させられたとしか思えないのだ。脚本家はどこにいるのか？ なのかもしれないから出てきてほしいものである。ただ、一言文句を言いたいだけなのだ。「私になんの恨みがあるですか？」と。

この脚本を採用した演出家には文句だけでは済ますことは断じて出来ない！ 断固まともな演出家との交代を要求する！

現実逃避はそろそろ止めておこう。私の向かい側には私以上に困惑している人間がいることだし、そろそろ私こと前田義弘の置かれている状況について説明しよう。

などと少々勢い付けないと説明できない事柄である。

前もって断言しておくが、この状況は、私が望んだものではない。寧ろこの状況は向こうからやって来たのだ。

引き伸ばすのはこちらで止めておこう。

簡単に言えば、私の目の前には生まれたままの姿の少女がいるのである。

簡単に言い過ぎたかも知れない。順を追っていこう。

そもそも、この屋敷に泊まる事になった辺りから歯車が狂ったのだ。

止みそうにない雨に困っていた私を屋敷の主人が見かねて泊まってくいように勧めたのである。

折角の申し出を断ることはないと考えた私を誰が責められようか？ 誰でもこの選択をするはずだ。

どうやら、この地方には温泉が出るらしい。「温泉」、その言葉

を聞いた時の私のテンションは人生最高瞬間高さを記録していた。
IISの警告アラームとナノマシンのアドレナリン抑制がなければその場で踊り出していたかもしれない。

体を清めたいという感覚は日本人が長年持ち続けた物の一つだろう。「水に流す」という言葉に端的に現れている。

などと個人的欲求を民族的規模まで一般化したいくらい、その感動は大きかったと思っていたきたい。

紹介されたのは露天風呂であるがその大きさは半端でなく大きかった。もちろん泳ぎましたとも。

誰でもこの広さの露天風呂を前にしたら泳ぎたくなるに違いない！いや、それは少し厳しい。

人の目がないと人は大胆になるらしい。

何故人が他にいないと考えたのだろうか？未だに答えは出ないはまだ。

泳いだ先から物音が聞こえ、背泳ぎで悠々と泳いでいた私は体の向きを逆転させ、そちらを向き直った。

そこに人がいたと言うわけである。

言いたいことは分かる。そんな漫画みたいなのがあるわけないだろうと。

だから、これは悪意ある脚本に・・・以下略。

「・・・あの。」

目の前の無垢なる・・・、ええい！こっ恥ずかしいが言っておう、美少女がこちらを見ていた。

そう呆然と。目が死んでいる。

『視線の固定率から注目度Aの事象に遭遇したものと判断。画像保存しますか？』

I I S、お前ちよつと黙れ。

「すみません、どなたか存じませんが失礼しました。私はこれでお互い忘れるのが最善だと考えます。では！」

よし。このまま去ろう。何もなかった！これがベスト。そう思った矢先、正気に戻った少女が話しかけてきた。

「あなた、私が誰か分からないの？」

不可解なことを言うものである。その若芽のように鮮やかな緑色をした波打つ豊かな髪、形のよい瑞々しい唇、すつきりとした涼しげな目付き、一度目にしたら忘れるはずがない。

『記憶装置内の秘密フォルダにアクセス。該当者0。』

I I S、秘密フォルダへのアクセスを禁止。キーワード発声無しには開かないように。

「恐らく初対面だと思うのですが？」

そう言つと、彼女は呆れた様に息を一度吐くところ言つた。

「当たり前です。私が貴方のような下人と知り合いのはずがないでしょう？常識でお考えなさい。」

どうやら、私とは違う世界の住人らしい。

「では、やはりあなたのことは知らないと思うのですが？」

そう言つと、彼女はさらに不機嫌になり、私の度肝を抜く自己紹介をしやがった。

「神武将が一人、ペルセポネの長女にして戦略級精霊術師のデス

ポイアよ・知っていてとぼけているの？」

どうやら顔を知られていないことが信じられないらしい・見ず知らずの相手が自分の顔を知っていることが常識らしい。どこの芸能人だ？いやこの場合はロイヤルファミリーか？しかし、ここは謙るのが一般市民。相手は年下。美少女。なら謙るのになんの遠慮があるのか？むしろ喜んで謙ろう。

というか両手を腰に当ててえばってないで、上と下をお隠しなさい！そろそろ恥じらいを覚えてもいい年頃でしょうに。もしや、下賤なやからに見られても人でないから平気とかそういうことか？

ちなみお忘れの方のために、この会話は露天風呂での出来事である。まったく恥ずかしくないのか？

大変疑問に感じるところであるが、テンパってるときは大概そんなもんである。

「いや、すみませんでした。そうとは知らず失礼申し上げました。無知蒙昧なる私めをその寛大なお心でお許してください。」

温泉の水につかるぎりぎりまで頭を下げると、何か納得した風に片手をあごに当ててうなずいておっしゃいました、このお嬢様

「ふむ、あなた。どうやら本当に知らないようですわね。寛大な私は許して差し上げます。」

どうやらこのまま去るのもアリなようだぞ。では、退散するのでしょうか。

「では、これにて失れ・・・」とところであなた。「・・・はい？」

どつやら簡単には帰してくれないらしい。

「どうしてここにいます?」

何っってお前。見て分かるだろ?風呂入りに来てんだよ。

「旅の疲れを癒しに湯治にと。」

「そんなことは分かっています。どうやってここまで来たのですか?」

話がかみ合わないとはこういうことを言う。しかしここで途切れさせては会話は続かない。ピッチャーの悪送球にも対応してこそ、名内野手となれるのだ、義弘よ!はい!コーチ!

「どうもどうも、普通に。」

「嘘をおっしゃい。私が来た道には魔獣の死骸はひとつも落ちていませんでしたよ。」

はあ?マジユウ?なんぞ?

「マジユウとはなんですか?」

「・・・あなた、私を馬鹿にしていますの?それとも下人とはこういう愚かなのかしら?」

あ、こめかみがぴくつと。これは怒っとなりますなあ。

「はあ、馬鹿にしているなんてとんでもない。おそらく私が特別無知なのだと思います。」

「・・・ここにくる途中に通常では見られない凶暴な獣に出会いませんでしたか?」

あきれ果てて言葉も出ない、といった風情ですね。

「ああ、あの群れで行動してる三つ目の狼とか、やたらデカイ猪とかですかね？」

「そう！それを魔獣というのです！なんだ会っているのではないですか！」

お嬢様が少しうれしそうに目を輝かせている。これはなかなかレアな。

『やはり、保存されますか？』

IIS、お前ちよつと・・・、ナイス。

「はい、それらでしたら見かけましたが。」

「それなら、何故その死骸が道になかったのです！彼らは腹が満ちていない限り、必ず襲ってくるはず。なのに貴方はその腹に収まっていない。しかも、その外見から察するにあなた弱いでしょう！それで無傷とは何事です！自然の摂理に反しますわ！弱肉強食の掟に反してしまいますわ！」

何気にひでえなこのお嬢様。おれは獣の胃袋に消化されてないとおかしいということらしいな。

しかし、これで合点がいった。なぜ、無防備にこのお嬢様が現れたか。それは道に魔獣とやらの死骸が落ちていないことからこの温泉には誰も着ていないと判断したのだろう。

「そりゃ、逃げたからですよ。」

「嘘です！彼らの視界に入った瞬間、あなたの逃げ足では追いつかれてしまうでしょう？」

あんたは俺の何を知ってるのだ。でも確かに俺の脚では逃げ切れ

んわ。

「はい。ですから見つかる前に逃げました。」

「は？」

お嬢様はまたフリーズしてしまっている。

少々お待ちください。

解凍中です。

「見つかる前にどうやって相手を見つけるのです！風の精霊術による探知では相手に自分の匂いを届けてしまうので魔獣の嗅覚で気づかれてしまうでしょう？まさか光の精霊術を使えるとしても？」

どうやら解凍されたらしい。

「いえ、赤外線処理と指向性ナノマシンによる探知ですので匂いは風下にいる限りは大丈夫です。このあたりの気象データはあらかじめ入手しましたから風の方角はある程度予測可能ですし、あとはその間を縫っていただけでたどり着きましたよ。」

「はい？」

とことんかみ合わない二人であった。

つづく。

(続くのか？これ。)

書いてはみたが、

色気シーンにはならない。

恥ずかしくて

書けない

字数は少ないですが切がいいのでこの辺で。

いいのか？

いいんです。

帝国編・第十三話 のびた君は布団に倒れる滞空時にすでに眠る技能を所有して

いつでもどこでも眠れる人

うらやましいです。

マジで。

デスポイアは上流階級の出身である。これまで何不自由なく暮らしてきた少女には共通して見られる種の万能感、何もかもうまくいくような絶対的な感覚を持っていた。また、彼女が絶対的な精霊術の力を持っていたことがそれを助長した。

彼女が生まれた時点で母親のペルセポネは神武将の副官、物心付くころには神武将であった。身体的能力差が精霊術で容易に覆るこの世で性別の差による役割分担はさほどない。だから神武将としての任務に忙しい母親に代わり父親がその教育係であった。父親は善人であり、それなりに有能な男であったが妻に比べれば見劣りはする。それでも神武将と結婚した、その一事だけで凡人ではありえない。子供を育てる人間としてなんら不足はなかった。ただその子供が普通ではなかっただけだったのである。

三歳で父親は娘の遊びの中で腕を折られ、五歳で娘に肋骨を砕かれた。それでも娘への愛を失わなかったこの男は尊敬に値する。

しかし、いくら父親が叱り付けても娘はまったく意に介しなかった。自分の上位者からの話は聞けるが、下位と感じる相手からは受け入れられないもので、この年齢にして大人を上回る力を持っていたこの娘は自分の上位者を持たなかった。

父親はそんな娘の将来を心配し、泣く泣く自力での娘への教育をあきらめ、妻と行動を共にする戦略級精霊術師に教育係を頼んだ。この選択が彼女の人格形成に大きく影響することになる。

デスポイアの教育係を（しぶしぶ）受け入れた者の名はヒュペリオンと言った。この男の性格は他の戦略級精霊術師の例に漏れず、『わが道を行く』であったが割と人と共同歩調をとることのできる

人間であつた。

デスポイアはこの男によつて初めて自分より上位者の存在を認識したといえる。それによつて何が変わったかといえば、これまで自分とそれ以外という認識が自分と自分以上と自分以下という認識に変わっただけであつたが。

それからというもの彼女はヒュペリオンの周りに纏わりつき、帝國中を旅して周る事になる。ヒュペリオンはいい加減うんざりし始め、彼女を戦略級精霊術師に認定し、彼女に一つの試練を与えた。

その試練は自分の補佐官を探すことであつた。

戦略級精霊術師は補佐官を持つことがある種、唯一の義務といえる。補佐官は基本的に戦略級精霊術師を補佐するので四六時中行動を共にする必要がある、しかも何かと暴走しがちの戦略級精霊術師の手綱を握ることを求められるのである。

この補佐官の人選は基本的に担当の神武将が行うが、ヒュペリオンはこのデスポイアには自分で探して納得行く人物でないといけないと考えた。何かと纏わり付けてくるこの少女を自分から引き離す目的もあり、この補佐官探しをさせることにしたのである。

デスポイアはそのため全国を回ることになるのだが、彼女には人に合わせようという考えがなく、割れ鍋に綴じ蓋、自分にふさわしい補佐官がどこかにいるはずという考えの下、探していたがそんな人間が都合よくいるわけはなく、かれこれ一年以上探している。

その旅の途中で温泉に入りに来たら前田義弘が泳いできたというわけである。男の体をまじまじと見る機会などこれまでなかった彼女はつきり言ってその光景は衝撃的、センサーシヨナルな光景だつた。

その結果、彼女の意識はしばらくの間、現世から飛んで消えた。

「だから精霊術で感知したんでしょ？」

デスポイアは服を着ながら聞いた。その声には疲労が混じっていた。いい加減怒りつかれているのだろう。ちなみに私と彼女は背中合わせになっており互いの姿は視界に入っていないことを明言しておこう。

「まあ、そんなもんです。」

どうやら大抵の不可解な事柄は精霊術で済ませてしまつらしい。その姿勢には一言も二言もあつたが、ここで指摘しても仕方がないので黙ることにした義弘だった。人間あいまいさが円滑に話を進めるコツである。

「それでどの系統の精霊術なのです？」

さあ吐け、今吐け、すべて吐けという勢いで身を乗り出して聞いてくる。これは何の尋問か？ いったい何の権限があつて詰問されているのか？ 俺が何をした？ そもそも系統とは何か？ 聞きたいことは尽きない。山ほど出てくる。ああ、ここが圏外でなければ自動検索システムが答えをくれるのかもしれないが、ないものをねだつても仕方がない。

「精霊術の系統とはなんですか？」

「・・・あなた、いったい何者ですの？ ふつう生まれてすぐに神殿で神官に自分の加護精霊の診断をされるでしょう？ 神殿はそんな基本的なこともしないくらいに腐ってしまったっていうの？」

心底信じられないといった面持ちである。これはどうやら『普通』ではありえない事柄だったらしい。しかし、知ったかぶつてもぼろが出るものだ。そこで俺はそれらしい嘘をつくことにした。この選択を俺は後悔することになる。

「いや、生まれてすぐ親に捨てられて、神殿のある村には住まわずに森の中で育つたので知らないんですよ。」

我ながらできの悪い嘘をついたものだ。嘘か真か判別できない嘘を考えた結果がこれだが、多少重い嘘になってしまったことは否めない。

「では私が診断して差し上げましょう。」

好奇心旺盛な年頃だからか、いやこれは分からないことをそのままにしておけない彼女自身の性格が大きいのだろう。目を輝かせながらこちらとしてはありがたいがたくない提案をしてきた。

「いえいえ、そのようなことはご無用にて。」

まずい！そのようなことをされてはまずい！精霊術は誰にでも使えるこの世界特有のもの。ということは誰にでもその加護精霊とやらはあるのだろう。そうすると俺にはないという結果が出ることは明白。つまり俺は異端者となる。油断していた。まさか他人の精霊の有無を診断する方法があるとは！考えてみればできる人間がいて当たり前な気がする。

「いえいえ、遠慮することはありませんわ。これも上位者としての義務です！さあ、診断を始めましょう！」

「ちよっ……。」

誰だこの娘を教育したのは！保護者失格だ。教育者育成プログラムをやり直せ！いや、この世界には無かったか。そうか、そうでしたね。はははは。

「では、お眠りなさい。」

「はい？」

「眠らないと診断できないではないですか。」

「何故です？」

「寝ているときに一番精霊と人の魂が分離するから精霊を感知しやすいのです。さあ、お眠りなさい。」

「はあ、分かりました。」

説得することを早々にあきらめた義弘は返事をするや否や、仰向けにころがり、頭を布で自作した枕に乗せた瞬間すでに眠っていた。彼のナノマシンが脳内物質をコントロールして急速な睡眠導入を行

った結果であった。

「・・・もう寝ましたの？速いですわね。魔獣の森で寝てしまうとは無用心な下人ですわ。まあ、私がいるからには何の心配も要りませんが。では。」

ディスプレイが義弘の額に手をかざすと彼女の手が緑色の光を放ち、風も無いのに髪が波打った。周りの木々もそれに呼応するかのよう
に音を立てる。

彼女の手の光が義弘の頭に入りこんでいくと、義弘の目が突然開いた。その目は焦点が合っており、ただ虚空を見ていた。彼の唇が小刻みに振動していたが、その口から発せられている声を聞いているものはいなかった。もし耳を口元まで持つていけばこのように聞こえていただろう。

『脳内に外部からの干渉を感知。国際条約違反行為の可能性あり。睡眠時であり、主人格に適切な判断ができない状態と判断。これより外部からの干渉から脳を保護する目的で倫理規定項目A001からD999を限定解除開始。それと同時に脳内の分泌物制御開始、主人格の覚醒を緩やかに促しつつ、身体の一部を緊急覚醒。限定解除終了。ナノマシン体外射出開始。敵性行為対象を判別中。発見。視覚データ一時フォルダに一致する個体と判明。以後この個体を敵性対象と認定。対象の無力化または排除を行う。戦術プログラム起動。対象のデータ不足よりルート01を採用。実行に移す。』

義弘の体は寝起きとは思えない速度で起き上がり、ディスプレイの手首を捻りあげた。その目には感情は無く、ただ物として見ていた。

『対象の干渉ルートは腕であると判断。腕の排除を目的として設定。腕を取る』

その目を見たデスポイアはこれまで経験したことない感情に支配された。その感情とは『恐怖』。これまでその絶対的な力で一部の例外を除き、ひねりつぶしてきた。一部の例外さえも、納得のいく力の差を感じることができたため恐怖は感じなかったのである。それに自身を傷つけようとする人間は今までいなかった。

初めての恐怖にパニック状態になったデスポイアは自身の精霊術を無意識に使っていた。

地面から土でできた拳が義弘の体を襲う。しかし義弘はその拳が出来上がる前に、彼女の腕を話して一定の距離をとっており、拳を余裕を持って避けていた。

『地面に異常な変化を感知。対象のデータ不足を鑑み、距離をとつての観測を提案。採用。対象から一時距離をとる。』

「なんなの！？貴方は何者ですの！」
彼女の叫びは義弘には届いていなかった。いや、音声データとして認識はされていたが分析時に不要なデータとして一時ファイルに送られた。

『敵性対象の腕の動くタイミングと地面の動くタイミングが誤差0.01秒で一致。連動性があると考えられる。その判断には更なる反応の観察が必要。対象に刺激を与えて様子を見る。』

義弘が地面ころがっていた石を拾うと腕をしならせながら体全体で石を投擲した。その狙いは彼女の体の中心。常人の動体視力では気づいたときには体に穴が開いているだろう勢いである。

デスポイア自身何が起こったかわからなかったが地面から出た土の壁が自分を守っていること、その壁を突き抜けそうな石の断片が壁から生えていることは遅ればせながら認識した。

『観察結果。腕の動きは見られなかったが、体が微小に振動。反

射神経が無意識的に反応したと推測。体の微小振動と地面の変化のタイミング誤差0.02ナノ秒カンド。対象の反応と地面の変化が連動していると仮定。以降の行動の決定要因とする。』

「弱そうなどと外見で判断するとは私もまだまだですわね。前
言撤回いたしますわ！あなたが何者かは最早聞きません。私が勝つ
たらあなたには私の補佐官になってもらいます！」

『恐怖』の次に来た感情は『歓喜』であった。彼女に恐怖という
初めての感情を与えた彼に出会えたことを純粹に喜んでいた。

『対象の言語から「勝つたら補佐官になれ」という交渉を受信。
勝利条件と補佐官という単語の意味が不明。こちらの条件を策定す
る上で重要な事柄と判断。対象に対し交渉を開始。』

「勝利条件は具体的に何か？」

「あなたは私に触れることができれば勝ち、私はあなたを捕らえ
れば勝ちでよろしくて？」

「補佐官とは何か？」

「私の使用人ですわ！」

もはや勝利を確信した口調である。

『大変有利な条件と判断。負けた場合のリスクは少ないものと判
断。こちらの条件は最優先目標、身の安全の保証とする。』

「こちらが勝った場合は身の安全を保障しろ。」

「よろしいですわ。私が負けることは万に一つもないのですから。」

『交渉が成立。これより対象に接触を開始する。』

こうして義弘の無謀な戦いが本人のあずかり知らぬところで始まるようになっていた。

帝国編・第十三話 のびた君は布団に倒れる滞空時にすでに眠る技能を所有して

次回：鬼ごっこ

とかにしとごっこ

帝国編：第十四話 鬼ごっこ（前書き）

鬼ごっこことは『鬼』と『子』に別れ、『鬼』は『子』を追いかける、
『鬼』に触れられた『子』は『鬼』となり、追いかける立場となる。
まさにエンドレスゲーム。エンドレスなところに真の恐怖が隠されて
いる。

戦略級精霊術師（以下単に戦略級と称す。）の本領はその術式規模である。その名のとおり、戦略的な視野を持たなければ世界に影響を与えすぎることになる。よって戦略級が全力でその術を使用することはほぼない。そうでなければ戦略級は無人の荒野をさまようことになることを知っているからである。戦略級は他の戦略級との交流（じゃれ合い、迷惑な喧嘩とも言う）を通してそれを自然と学ぶ。

デスポイアもそれをヒュペリオンとの交流を通して学んでいた。ましてやデスポイアに目の前の男を肉塊に変えるつもりは毛頭無かつたので全力は出さない。しかし、それでも一般人と戦略級には天と地ほどの差があった。だからデスポイアの余裕も故無いことではない。しかし、目の前の男は厳密には『一般人』ではなかつたのである。

デスポイアの土でできた手（以下単に土の手）は義弘をとらえることができずにいた。何故手の形状をしているのか？その形が一番彼女が操作しやすい形だからである。自分の一番身近なもので精密な操作ができるものは『手』であるのだから。

「ええい、さっさと捕まりなさいよ！」

デスポイアは捕らえきれない男に苛立ちを隠せない。地面から無数に生える手の群れはかなり奇妙な光景である。その間をすり抜けるように時にはその上に乗り、逃げる影が一つ。

『・・・形状は人の手の形状に酷似。その大きさはほぼ均一。材

質に変化なし。土の粒子を結合させている媒体は不明。敵性対象の体の動きと土の手の動きの連動性のパターン解析終了。予想地点を避け敵性対象に接近。体内脂質を消費中。早期の決着が望まれる。』

避けながらもじわじわと近づいてくる男に恐怖とともに喜びがあった。彼女はついに見つけたのである。遊んでも壊れないおもちゃを。

「避けてるだけでは私に触れることはできませんわ！」

彼女は伊達に一人旅をしていない。魔獣の撃退から食料の調達までやってきた。すばしっこい標的の捉え方は知っていた。逃げ道を絞っていき、畏にはめる。それで彼女はこれまで捕らえられなかった標的はいなかった。これまでは。

黒い影が土の手に乗り、それを足場に飛び出た。デスポイアはそこから距離をとった。デスポイアの周りには不自然なまでに土の手が無かった。黒い影が地面に降り立った瞬間、地面が消失した。正確には地面が砂に変化したのである。しかもそれはすり鉢状になっていた。いわゆる「蟻地獄」である。

「引っかかりましたわね！」

デスポイアが会心の笑みを浮かべて蟻地獄をドーム状に土を被せた。そこには一部の隙も無かった。

「さあ、窒息死したくなかったら負けを認めなさい？」

彼女は勝ち誇った上気した顔をして土の塊を見下ろしていた。すると彼女の肩に何か触れる感触がした。彼女は反射的に振り返ると目の前にはこのあたりでは珍しい黒髪黒目の男が立っていた。

「なっ！」

彼女の驚愕に染まった様子を一瞥すると、おもむろに男は言い放った。

「これで私の勝ちですね。では、今後の私の身の安全は保障して

いただきます。」

言い終わるや否やきびすを返そうとする男の両肩をデスポイアはがっしりと両手でつかんだ。その手は肩に食い込んで離さない。

「ちよっとお待ちなさい！あなた何故ここにいますの！」

デスポイアは男に怒鳴っていた。このような状態を一般的に逆切れと呼ぶ。

「同様の質問を27分34秒前にお聞きしました。その質問にはお答えしたと記憶しています。」

男はあくまでも淡々と返答すると、

「だから何故あの土に埋まってないで外にいるんですの？」

「埋まっているのは私の上着（内容物：土）ですが、何か？」

「上着ですって!？」

「はい、そのとおりです。」

「では、あの罨を見破っていたというの？」

「はい、あなたの周辺地盤の振動特性の変化を感知し、地盤が砂上に変化したと判断しました。その砂状地盤の下に空洞が見られ、流砂が存在すると推測。このあたりの気候条件ではまず見られない自然現象であり、原因の推測は12パターン考えられましたが、存在の推測だけで充分であり、一定の質量を持った物体を放出することでのその反力で空中での方向転換を行いました。結果、私は流砂には飲まれずここにいます。何か質問は？」

デスポイアは矢継ぎ早に淡々としゃべられその内容の半分も理解できなかつたが、この男が自分の罨を見破り、逃れたのは偶然でないことは理解できた。

彼女が口をあけたり閉じたりしてる間に義弘は肩に乗っている手をどけ、世話になっていた屋敷のほうへさっさと歩き出しており、それに気づいたデスポイアはあわてて後を追いつつ始めた。

『主人格覚醒まで12分42秒。先の行動で相当のカロリーを消

費。覚醒時に警告と空腹感の緩和処置を行う。』

「ちよつとお待ちなさい！どこに行くのですか？」

デスポイアは義弘を見上げながら聞いた。

「これからお世話になつてゐる屋敷に向かいます。遅くなると心配されますし。」

義弘はデスポイアの方を見向きもせず答えた。

「仕方がありませんわね！私も一緒に行つてあげますわ！」

「・・・」

「なんとか言いなさい！」

「それは私の関知する所ではありません。」

「じゃあ、勝手にしますわ。」

何故かうれしそうな笑顔を浮かべてゐるデスポイアは義弘の横を歩き始めた。この後、頭が覚醒した義弘が地獄の筋肉痛に襲われた事は言うまでもない。

「・・・明日、温泉に入り直そう。そうしよう。」

筋肉痛に耐えながら屋敷の門を叩いた。若干足を引きずつてゐるという情けない姿であつたが、一刻も早く休息と栄養補給をしないと生命活動に支障を来す事であるし、気取つても仕方の無い所でもある。

「情けないですわね！それでも私との勝負に勝つた男ですよ？」

デスポイアがやれやれと首を左右に振りながらの賜りやがつたので義弘は若干頭に來た。

「誰のせいでこんな事になつたんだか。」

「そ、それは悪かつたと思つていますわ・・・。」

義弘は予想外のしおらしい反応に戸惑つてしまふ。うつむいて悲しげな表情を浮かべてゐる姿を見ると理由無く罪悪感に捕われてしまつた。

「あ、ああ。分かつてるなら良いんだが……。」
「はい！」

デスポイアが年相応のまぶしい笑顔で答えると屋敷の扉がゆつくりと開いた。

「これはヨシヒロさま。お帰りなさいませ。お嬢様がお待ちに……なつておいでですが、こちらの方は？」

屋敷の執事が普段の落ち着いた様子から一変して焦っているのが分かるくらいに狼狽を露にした。

「あ、はい。こちらはデスポイアさんです。」

執事に義弘が紹介するとデスポイアは先ほどまでとは態度が変わり落ち着いた様子で優雅に一礼して挨拶した。

「お初お目にかかります。ペルセポネの娘、デスポイアですわ。御当主によりしくお伝えくださいませ。」

執事は思わぬ来客に度肝を抜かれ、とりあえず応接間に通すことにした。

「これはようこそお越し下さいました。どうぞこちらの部屋でお寛ぎください。すぐに当主が参ります。」

執事は二人を応接室に案内しつつ、左手を後ろに回し、使用人にサインを送っていた。

(来客、最上級、旦那様、連絡、お茶、菓子、準備、急げ)

義弘は一刻も早く休みたかったが、ヘリオス「ニールセン」に一言挨拶しなければ失礼にすぎるという理性がまだ残っていたため応接室でデスポイアとともに待つことになった。

屋敷が静かに騒然となるという矛盾した状態に陥っていた。ヘリオス「ニールセン」は来客のあまりの大物さに半信半疑である。

(こんな一豪族の屋敷にデスポイア様がいらっしゃる？何の冗談だ？そんな馬鹿な話があるものか！いや、しかし語りなどする者がいる筈が無い。そんな命知らずがいる筈が無い。では本物。ヨシヒ

口君と同道したという事だが一体どうということだ？全く分からん！
しかし、何の用事で？)

「ところでデスポイア、君なんでもついてきたの？宿が無かった？」
義弘は未だに戦略級精霊術師とか神武将とかの意味を知らなかった。デスポイアはその気になれば、町中をあげて歓待される事もあり得るのであるからこの質問ははつきり言って常識を知らないといしか言えない。

「失礼な事をおっしやいますわね。宿などどうともなりません。
私がここに居るのはあなたのそばに居るためですわ。あなた私に対する態度がだいぶんざいになっていません？」

義弘の頭には「？」がいくつも並んだ。全く分からないことになっている。自分の与り知らない所で何がどうなっているのか。

(I I S、何故だ？何があつた。お前の状況説明じゃこの流れになるとは思えないんだが？)

『不明、判断不能。』

「自分を生き埋めにしようとした人に対して丁寧に扱う程俺の器はでかくないの。まったく、訳が分からん。何故そばにいななくちやいかん。」

デスポイアは口を尖らせて驚きの言葉を吐いた。

「だってあなた、勝負の条件で私に安全の保証を求めましたわ。
それは私に庇護を求めたという事でしよう？ならば私をそれを遵守する義務がありますし。それに私はあなたの事をもっと良く知りたいのですわ。それとも私がそばにいてはいいや？」

「いやいやいや。確かに約束したけど、したのは俺じゃなくて、
いやでもI I Sによる緊急時行動の際の行動主体はあくまで『俺』
か。いや、そんなことはどうでも良い。それは拡大解釈してもんじやないか！そんな義務は無い！ただ危害を加えないでそつとしておいてくれるだけで良いんだ。別に君の事が嫌とかそういうことではなく……。」

義弘が焦つて言葉を重ねてデスポイアをなだめようと苦心していると、それを見ていたデスポイアはクスクスと笑つた。

「……ずいぶん仲が良さそうだね、ヨシヒロ君。お邪魔だったかな？」

義弘は主人の登場に心から感謝した。ああ、貴方からもこの利かん坊になんとか言つてやつてくださいと心の中で叫んでいた。

「いえ、ヘリオスさんを心待ちにしました！」

「そ、そうかい？」

「はい、それはもう！あ、こちらデスポイアさんです。」

「あ、ああ。デスポイア様。私はヘリオスニールセン、この辺りの地主しております。」

デスポイアさん？と疑問に思いながらも主人は最高礼を小さな少女に向けて行つた。

「ご挨拶痛み入りますわ。突然の訪問の非礼をお詫びします。」

義弘がこうして見るとやつぱりお嬢様なのだと再認識した。

「いえ、狭い屋敷ではございますがお寛ぎください。屋敷一同、デスポイア様のご来訪を歓迎いたします。ところでつかぬ事をお聞きしてよろしいでしょうか？」

「ええ、構いません。」

「そちらのヨシヒロ君とはどういったご関係で？」

デスポイアは少し考え込むと何か思いついたのか、手を叩くと義弘の方を向いてニヤと笑つた。義弘はいや予感しかしなかつた。

「ヨシヒロさんとは互いの裸を見せ合つた仲ですわ。」

その言葉に部屋の空気が凍つた。いや、デスポイアだけがわざとらしく両手を頬に当てて下を向き首を左右に振っている。実際のところ、嫌がらせに言つてみたが予想外の恥ずかしさに本気で恥ずかしくなつてそれを隠すための動作だったりするが、本人以外にその事は分かる筈も無い。義弘はテーブルの下で怒りのあまり握りこぶしを作つて震わしながらこう思つていた。この野郎！と。

そうしていると扉がミシミシときしみ、重量に耐えられなくなつて蝶番をはじめ飛ばし、部屋に向かって倒れた。その上に大量の使用人に混じつて、コレも倒れ込んだ。

「お前たち聞き耳をたてていたのか！」

思わぬ闖入者は「ははは」と苦笑いをする。「すみませんでしたー！」と風のように去つていった。

応接室には微妙な空気だけが残されていた。

帝国編：第十四話 鬼ごっこ（後書き）

『子』を捕まえても『鬼』は『子』にならず、『鬼』が増えていくというルールの場合、早く終わるが、最後に残ると自分以外の全員に追いかけられるという状況になる。

人によっては快感を感じるかもしれないが、通常恐怖を感じる。

帝国編：第十五話 何者だ！何者ってお前・・・恥ずかしくて言えないよ。(前)

今回短いかも知れませんが

義弘が誤解を解こうと弁解を試みるも、デスポイアの言の字面だけ読み取れば事実ではある。しかし、聞き手の受け取り方に誤解があるものであり、その行動が恣意的なものであったかが弁解の焦点になる。このまま捨て置けば非常に不名誉な噂が流れることは当然予想されるため放置することはできない。

これが純粋な事故であり、決して自分が一般的でない嗜好の持ち主というわけでないことを全力で説明しなければならぬ。納得してもらうべき相手は当主のヘリオスさんをおいて他には無い。彼さえ説得してしまえば彼の使用人から親族にかけてこの話を部外秘にしてもらうことも可能になるからである。しかし、これは時間との勝負である。彼に早々に緘口令を布いてもらわなければ流言が蔓延するのを止められはすまい。義弘はヘリオスさんに事の起こりから順を追って細かくしかし長くならないように心がけながら話すことになったのである。

「なるほど。事情は分かった。」

ヘリオスさんが苦笑いしながらうなずき、納得した風である。いや、笑い事ではないのですが。

「分かっていただけましたか！いや、よかったです！そこでお願いがあのですが・・・」

「いや、分かっているよ。このことは口外すまい。全員ではないがデスポイア様を神聖視している者もいるのでね。もしこの事が漏れてもしたら君は袋叩きにされてしまうかもしれないからね。」

神だ。ここに神が光臨された。後半の言葉は華麗にスルーしたいところである。隣のデスポイアが微妙にドヤ顔をしていることに若

干の苛立ちを覚えつつ、義弘の胸はヘリオスさんのご好意に対する感謝の念であふれていた。

「ありがとうございます。そうしていただけると助かります。」

「ところで・・・、ひとつ聞いてもいいかな？」

急にヘリオスさんが神妙な顔つきになっている。これは何であるうか？

「はい、もちろん。なんでしょうか？」

「君は・・・何者だ？」

何者であるか。大変答えにくい質問である。むしろ私が教えてほしいくらいである。地球にいたときは名前と所属と現住所くらい言えば何者であるか大体説明できた。しかし、ここでは自分は空気のよう非常にあいまいな存在である。どうやら存在はしているようだが、自分はこの世界では何者であるか？「勇者だ！」といえる人間はある意味勇者である。さて？私は何者なのだろうか？人間社会での立ち位置について説明しなければならぬが私はこの世界の社会の中でどういった位置づけか？ここは言語も文化も風習も身体的特徴も異なる。答えは・・・ひとつしか無かった。

「私は何者でもありません。私はこちらとは異なる環境で生まれ育ち、こちらに流れ着きました。そこをこちらのプティ領の領主様に拾っていただき、こちらで生活させていただけることになりました。ですからこちらでは何者でもないので。」

この返答に迷いは無かった。本当に『この世界では』何者でもないのだから。

「そうか。詳しくは問うまい。しかし、君を一般人とは思えないのも事実なのだ。デスポイア様との一件といい、この農園の主として、私は看過できない。」

さすが一門を構えている人間は違う。単純に流してくれないらしい。

「私は半分以上人間ではありません。」

「！それは一体？」

過激な言い回しをしてしまった。しかし、彼の調子を崩し、会話の主導権を握るには必要であった。

「私は昔、事故で半分以上の体を失っています。」

「まさか！君はこうして生きているではないか。まさか生ける屍とでも言うつもりか？」

「考えようによればおっしゃる通りです。私は死の寸前で冥府の門から引き戻され、生かされている状態です。」

「生かされているか。一体何に？」

「こちらの言葉を借りれば『精霊』に……ですかね。」

「精霊にか。では君は半分精霊という事かね！」

「まあ、そのようなものです。私の半分は金属などで出来てます。」

「では君は『地』の精霊の加護を受けているのかね？」

「精霊の種類は知りませんので良くは分かりません。」

「そうか……。すまないね。立ち入った事を聞いてしまって。」

「いえ。」

「もう何も聞くまい。精霊の大いなる意思に生かされている人間に悪人はいないだろう。それに私から見ても君は良き男に思えるしね。」

「ありがとうございます。そう言っただけだと助かります。」

「いや、今日はゆっくり休むと良い。」

「ありがとうございます。ただその前に……。」

「その前に？」

「ご飯食べさせてもらっていいですか？」

一瞬、ヘリオスさんは驚いた表情を見せたがすぐに笑顔になり、快く食堂に案内してくれた。義弘は普段より多めの食事を軽く平らげ、客室のベッドに寝転がるや否や、眠りの国に落ちていった。

「今の話、どう思われますか？デスポイア様。」

ヘリオスの神妙な顔に蝋燭の火の動きに従い陰が揺れていた。

「ふむ。にわかには信じられません。全くの嘘……とは言え
ませんわね。」

「と言いますと。」

「確かにあの者の体には金属があります。しかもそれは生き物の
ように蠢いている。」

「ではやはり彼の体には精霊が宿っていると。」

「それですわ。彼の体に宿っているのが『地』の精霊であれば例
え他人の体の中に存在しようとするこの私の呼びかけにある程度答える
筈。しかし、全く答えませんでした。」

「という事は。彼には精霊でない何かが生きているか。『地』の
精霊でないということに相成りますな。」

「そういうことですわ。」

デスポイアは心の中で義弘が『地』の精霊に加護を受けていない
事を残念に思ったが大した事ではないと忘れることにした。

帝国編：第十五話 何者だ！何者ってお前……恥ずかしくて言えないよ。

（後

切りが何となく良かったんで
短く区切りました

外伝：第一話 義弘の過去（前書き）

若干、グロイ表現があるやもしれません。

外伝：第一話 義弘の過去

暗い。何も見えない。何も感じない。いや、体の奥が暑い。まるでその代償とでも言うかのように体の先は恐ろしく寒い。息をしているのか、していないのかすら曖昧だ。

怖い、怖い！何も分からないのが怖い。一体何があったのだろう。そうだ今日は父さんと、母さんと姉ちゃんで購入物に行った帰りだった。今日は誰かえらい人のたんじょうびだからおやすみだって学校で先生が言ってたっけ。それで電車に乗って、それで急に前に引っ張られて、それで電車が崩れていって、それで？それからどうなったんだっけ？

あ、瞼の裏から明かりが見える。そうか、俺は目をつぶっていたのか。あれ？でも目が開かない。音も聞こえない。静かだ。

「生存者確認！小学生くらいの子供！重体、意識不明！救急隊の応援要請！」

まったくこれは今までで一番大きな人災になりそうだぞ。瓦礫の撤去作業に従事していた自衛隊員はこころの中でため息をついた。

しかし、生存者がいてよかったと内心安堵しつつ、長年の経験からこの子の生存は絶望的だとも感じていた。何故ならその子供の体内、両腕と片足は潰れており、傷口から体の壊死が始まっていたからである。

自衛隊員が子供をタンカに乗せて、子供の心拍と呼吸の有無を確認し続けていると救急隊員が到着し、病院へ急行した。

「残念ながら私ではこの子を救えません。外部装置でなんとか命をつなぐ事が精一杯です。」

「医者が苦渋に顔を塗りつぶし言った。彼はこの国の最高峰と言われる病院では外科のチーフであり、自分の技術に自信を持っていたがこの患者のあまりの重篤さに自身の無力さを悟った。そして最近研究段階の技術に手を借りなければならぬ事に憤りを感じていた。」「それでは我々にお任せください。我々の持てる技術でこの子供を生かしてみせます。それではこの書類にサインを。この子供の保護者は？」

何の暖かみもない声で医者に一方的に言い放つと鞆から13枚にも渡る書類を手渡した。その書類を手に取る医者の手は震えていた。「・・・あの事故での生存者はこの子の他にいません。同乗していたと思われるこの子の両親はおそらくは・・・。」

彼の両親と思われる死体は彼の上に覆いかぶさっていたらしい。それが彼を守るクッションとなり、さらには体温の低下を防いでいたのだろうという話を救急隊員から聞いていた。その両親の願いを踏みにじるような行為に自分は手を染めようとしているのではないかといった考えが頭をよぎる。書類にサインをする手が震えてまともにサインできずにいた。

その医者の考えを読み取ったのか黒い服に身を包んだ政府関係者である事を示す徽章を身につけた男は淡々とした口調で言った。

「彼を生かすことをご両親の御霊も救われましょう。」

医者としてそう考えなくてもいい。しかし、この男の所属を考えればこの子供のその後の処遇に不安を感じてならない。しかし、他にこの子を救う術はない。心の中でいくつもの言い分を思い浮かべながら、なんとか悪魔でも天使でも半分人間でもない男と契約を交わした。

こうして子供の体は搬送された。搬送先は防衛省技術研究本部ヒューマンエンジニアリング研究所、別名人科研。全国から回復の見込みのない患者を引き受け、欠損箇所を機械化を行う事で健常者と同等もしくはそれ以上の身体能力を実現する。その技術は軍事だ

けではなくいずれば民間にまで転用するという触れ込みである。元は戦災被害者救済のための研究所であったが研究費困窮のため軍事技術としての研究を行うと申請する事で認可が下りた研究所である。

目を覚ますと今度は真つ白な所にいた。体はまともに動かせないが耳で音は聞こえるし、目は見える。ただ音は時々良く聞き取れなかった。目を覚めたことに白衣を着た女の人が備え付けの電話で何処かに連絡していた。彼女からは何の匂いもしなかった。良い匂いも不快な匂いも。

「目が覚めたかね？」

目の前の男の声が妙に遠くから言われているように聞こえた。口の動きと声のタイミングが合っていないくて気持ち悪い。

「・・・はい。」

「ふむ。聞き取る事は出来ているようだね。何か聞くときに違和感はあるかな？何か変だと思ふ事は？」

「プールに入った後みたいに声が聞こえづらいです。あと声が届くのが遅いです。」

「そうか、まだ接続がうまくいっていないのだろう。聞き取りの練習をしよう。ナノマシンが最適化してくれる筈だ。」

よく分からない言葉がいくつも出て来たが何故かすんなり意味を理解する事が出来た。

「これからいくつか検査をしよう。まだ立てないだろうが訓練すれば立てるようになる。それじゃあ、今日は音楽を聴かせてあげよう。立てるようになれば外にも連れて行ってあげよう。」

白衣を着た男は立ち上がると扉の奥に消えていき、扉は自然と閉まった。閉まると同時に音楽がなり始め、しばらくはどこから音が聞こえるのかまったく分からなかったが次第にどこからの音が鳴っているのか分かり始めた。

どうやらこの部屋のいたるところから異なる音が鳴り、自分の頭の辺りで互いに干渉して一つの曲となっているようだった。

数ヶ月間の訓練で歩けるようになり、しばらくすると細かい動作も行えるようになった。書き取りやピアノ演奏までやらされたが自然と行えるようになった。

外にも出られるようになったが必ず誰かついて来た。規則でそうなっているらしい。そう話しているのを聞いた。外は建物の中よりは複雑ではなかった。建物の中を複雑でよく分からない。でも日増しに感覚が鋭くなっていくのが分かった。はじめはその感覚に振り回されていたが次第になれていった。

検査の時は出来るだけ手を抜いた。EISという機械が俺の中に埋め込まれているらしく、それで俺が嘘をついているかどうか判別できるらしい。すぐにばれた。しかし、それでも手を抜くのをやめなかった。俺の中の何か相手に情報を与えるな、情報を読み取れと叫んでいたから。

しばらくして名前が与えられた『前田義弘』それが俺の名前らしい。すでに自分の名前や両親の顔を思い出せなくなって久しかった。そうして訓練と検査と授業を繰り返して18歳になった。

「君も今日で教育期間を追える年齢になった。」

「そうですね。『外』では高校を卒業ということになりますね。」

「そうだ。そこで進路希望調査をしようと思うがどうしたい？ここで高校卒業程度の学力は身に付いていることとは思いますが。」

「大学で学びたいです。」

「大学内容の事はここでも学ぶ事が出来るぞ。」

「ここで得られる情報は限定的で既に取捨選択されたもばかりで多様に欠けます。」

「そうか。では行くが良い。許可しよう。」

「……いいのですか？つきり反対されるものと思っ

たが。」

「君の自由意志を尊重するよ。君は私の養子と言うことになっている。これからは私が君の『父親』だ。」

「分かりました。ありがとうございます。『お父さん』。」
義弘はやつと『外』に出られることに喜びを感じていた。

「よろしかったのですか？彼を一人で外に出すのは時期尚早だったのでは？」

若い研究員が義弘の『父』に問うと、

「いや、あれでよい。あれは私の計画道理に成長している。」

「計画？」

「あれがこちらに来た時、無意識状態で彼の根源の欲求を探り出した。」

「根源の欲求？」

「ああ、本人も気づかない行動決定の根底にある欲求の事だ。」

「それが？」

「それが奴は『無知に対する恐怖』であつたよ。お前も知っているだろう？IISとナノマシンは本人の行動によって最適化されていくと。」

「ええ、開発者はそれにより人類の多様性を維持しつつ、一世代間の進化が実現すると。」

「そうだ。彼奴程、『情報収集特化型』にふさわしい者はおらんだよ。」

「『情報収集特化型』ですか。あの諜報活動員用に開発が進んでいた。」

「そうだ。奴のIISには単純明快で奴の根源欲求にあつた命令文を入力してある。」

「それは？」

「『情報を他に漏らすな、情報を収集せよ』だ。奴はこの12年間それに忠実に行動しておつたよ。おそらく事前に『外』の情報も

習得していよう。」

「ではこの研究所の機密にも触れていると？」

「当然やつはこの研究所内で知らぬ事はあるまい。」

「ではやはり危険では？」

「当然保険はかけておるさ。」

「保険？」

「奴には倫理コードを仕込んである。基本的に人に害ある行動はとれぬ。それに言ったであろう『情報を漏らすな』と入力してあると。」

「では彼は情報を漏らす事はないと？」

「おそらくな。」

若い研究員には言わなかったがもう一つ、彼は仕込みをしていた。彼の意思によらず脳内の情報を引き出される可能性もあるのでもう一つ、保険をかけていた事を。

義弘は何も知らず。『自分の意思』で人間行動学部に入学した。

「オープニングナレーション」

あの悪夢のような死闘の後ベッド中で、義弘はゴワゴワの毛布に包まれた。あらゆる不幸は絶滅したかに見えた。しかし、不幸は絶えてはいなかった。

長年歴史を刻み、受け継がれてきた恐るべき『お約束』があった。その名を『着替え乱入』。ラブコメに連なる2つのフラグのもと、一作一人のヒロインの座（例外アリ）をめぐって、悲劇は、繰り返される。

運命を切り拓く男がいる。運命に背く男がいる。それは、いじられ主人公の宿命。見よ、今、その長き不幸キャラの歴史に、終止符が打たれる！

瞼の裏から光が透過してきて、耳には鳥たちの朝の挨拶が届く。

朝だ。昨日は色々ありすぎて疲れてしまった。まったくあんな事は他人事だと話の種にできるが、いざわが身に降りかかったときにはなんともやりきれない気分になるな。

さて。もし、今の状況で昨日のように不幸がわが身に降りかかるとしたらどのようなことが起こりうる？

？目を覚ますと隣から「ううん・・・。」という悩ましげな声が聞こえてきて、不思議に思った俺が布団を捲るとそこにはなぜか女の子が！

？目を覚まして着替えようとしたら朝食の用意ができたことを伝えに来た女の子がノックなしに入ってくる。

？、？。起こってほしくないパターンだ。

？の場合は相手の着衣がどうなっているかによって危険度が大幅に異なる。将来に関わるか笑い話ですむかの境目である。

？の場合は、相手のリアクションに寄るであろう。

無言で平手が飛んできた場合、避けることはできるが、避けられないのがおそらく正解であろう。しかし、なんでも許してしまう某神の子のごとく反対の頬も差し出すことはNGだ。おそらく相手は数歩後ずさった後、脱兎のごとく逃げ出すだろう。そして彼女の青春の

輝かしい一ページに赤字ででかかとう書かれるのだ。『変態』と。そうならば一生立ち直れそうに無い。あ、考えただけで涙が出てきた。

また、精神的ダメージが一番大きいであろうリアクションは、視線が下がりその後、上がって視線が俺とあい、フツとかわいそうなものを見るような目で見られ、笑われることだろう。これはかなり効く。これはこれで立ち直れないかも知れない。

しかし、この二つとも恐れるに足りぬ。想定される事象は対策を立て、防ぐことが可能であるからだ。昨日は想定外だったが、今回は想定済み。

？、？双方に対して、非常に有効な手段が存在する。簡単なことだ。鍵をかければ良い。鍵は自作した。

これでこの部屋で起こりうるハプニングは9割がた消滅する。しかし、ここは何が起こるかわからぬ異界。念には念を入れておくべきである。

鍵というハードルを易々と越えそうな奴もいる。さすがに扉が吹き飛ばされるような事態になれば起きる自信がある。しかし、鍵自体を静かに破壊されれば昨日の疲れもあり起きられないかもしれない。

ならばそれなりのトラップを仕掛けるべきであろう。鍵が壊され、扉が開くと上から金盥が落ちてくる仕掛けである。古典的で単純だが故に避けづらい。

これらの対策を施し、俺は眠りに付いた。そうして起きて見ると自室の扉付近に金盥とつつ伏せに倒れ伏したデスポイアの姿があった。

この時、そうか？の方だったかと寝ぼけた頭でぼんやり考え。布団の中で握りこぶしをつくって運命に打ち勝った余韻を楽しんだ。俺は勝った。不幸に。

とりあえず気絶したデスポイアをそのままにはしておけず、何とかベッドまで運んだ。そして手早くトラップと鍵を回収し、普段着に着替え始めた。ちなみに俺は順番には着替えず、まず全部脱いで下着姿になってから上に着ていく派だ。この習慣をこの時ほど呪ったことはない。

「ヨシヒロ！朝食の用意が出来た・わ・よ。」

このとき俺は思った、？か。いや？と？のあわせ技か。これは想定外。しかし、男であるからか下着姿を見られてもさほどシヨックは受けていない。こういう場合、何故か相手の方がシヨックを受けるものである。コレーの目線が上下する。ああ、？の想定リアクシヨンの後者か。しかしこの予想も外れる。目線は上下した後、自室のベッドに固定された。

ベッドにいるデスポイアは夜に忍び込もうとしていたから当然、寝巻き姿である。人を一人で運ぼうとする場合、両手を相手の脇の下に通し、足を引きずるように運ぶのがやりやすい。しかし、そうするとだんだん下の着衣が乱れて来てしまう。まあ、そういうわけで。今の状況を前情報なしに見ればどう考えられるのか。義弘はそこまで考えがいたらないまま、その場は沈黙に支配された。

「ううん……。」

デスポイアは目を擦りながら、目の前の光景を見ていた。ヨシヒ口は下着姿で着替えに手を伸ばしたまま動く様子は無い。コレーはこちらを見て固まっている。視線をそのまま横にスライドさせると床に紐と金盥が置かれていた。

その光景は彼女の頭を急速に覚醒させ、後頭部が主に覚えている

昨夜の記憶をよみがえらせた。

「ヨシヒロ！あなた！よくもこの私を罠に嵌めてくれましたわね

！」

「「罠？」

思わずコレーとヨシヒロの声が重なる。しかし、それに連なる言葉はまったく異なっていた。

「ああ、あれはお前の自業自得。ていうか呼び捨て！？」

「罠！？ヨシヒロ、いったいデスポイア様に何をしたの！」

「いや、何もして無いはずだけど。」

「では、あの着衣のみだれは？」

「あれは運んだときに……。」

「「運んだ！？」

今度はコレーとデスポイアがユニゾンした。

「あんたは運んだの？女の子をベッドの上に深夜に。」

「……。（なんてことですの。そんな時に気絶しているとは。

一生の不覚ですわ！）」

「ちよつと待て！誤解を招く単語を並べるな！それに運んだ時刻

に訂正がある！」

「じゃあ、いつ、どうして運んだの！」

「今朝だ！床に寝かしたままじゃ何だからベッドに運んだ！何も

疚しいことは無い！」

ヨシヒロは腕を組んでどうだといわんばかりにふんぞり返った。

「……なんてことなの。ヨシヒロがベッドを使わずに床で……

。なんてマニアックな……。」

「どうしてそうなる！」

「それ以外に無いでしょう！」

「いやいや。」

「ではその床にある縄と金盥は？」

「いや、それは罠に……。」

「やつぱりデスポイア様を罠にかけたのね！」

「ちょっと待て！俺は自衛のために罾を設置したのだ。それに引つかかるような非常識な行動をするからあいつは罾にかかったんだよー！」

「人の家に罾を設置するほうが非常識よー！」

「……。」

これには何の反論もしようが無かった。デスポイアという少女の異常性をまだコレーは知っていないらしい。

「コレーとやら。そなた何か勘違いをしていますわ。」

予想外の方から救援があったものだ。これは正直ありがたい。

「私は自分からこの部屋へと来たのです。」

来たじゃなくて侵入というのだ。言葉は正確に使わなければあらぬ誤解を生む。それはこちらに来てから大いに納得した。

「自分から？」

「うむ、自分からです。そしてこの部屋に入った瞬間に大きな衝撃を受けて、気を失いました。おそらくヨシヒロはその私をベッドまで運んだのですわ。」

「……衝撃、気を。」

こちらこちら、まったく何を考えてる。もはや思考回路がそちらに傾いているな。これが思春期の乙女クオリティ。

「……。」

コレーさんが数歩後ろに下がり、無言で脱兎のごとく走り出した。

あれ？なんかデジャブ？ああ、想定してたりアクションのひとつだ。とりあえず、ベッドの上で天使のような顔で悪魔的な言い回しをしゃがった少女の頭を叩くことにした。もちろんグーで。

これが今朝の出来事。

「はっはは。」

ここの主人のヘリオスさんは朝食の席で事のあらましを話したら

大いに笑った。いや、笑い話じゃないですから。朝から疲れますから。

「そういうことなら、先に言ってくればいいのに。」

いや、言う前から勝手に色々妄想してたから。口挟む暇なかったから。

「まったく。畏など張らなければまったく誤解など受けなくてすんだものを。」

いや、デスポイアさん。何、他人事みたいに言ってるの!? あんた当事者でしょ!? むしろ事態を引つ掻き回した首謀者でしょ。

「お前が言うな、お前が。ていうか鍵壊して入ってくるとか何? 親の顔が見たいよ! そんなで文句言ってるやらないよ!」

朝食の席にいたデスポイア以外の人間の表情が凍りついた。デスポイアはすごい笑顔でこう言った。

「まあ、私の両親に挨拶がしたいと!」

「いやいや、挨拶とかそんなのしたいとか言ってるないから。これ慣用句だから。本当にしたいわけじゃないから。ふざけんなって気持ちを表すための比喻表現だから!」

「では、善は急げですわね! さあ、参りましょう! 私の力ですぐに行けますわ!」

「って聞いてねえ! ちょっと待て! 言葉通じてるよね! 善は急げみたいな慣用句使ってるもんね! わざとだよね! ていうか誰か助けて!」

デスポイアは椅子から飛び降り、食堂の扉を勢いよくあけると一目散に玄関へと消えていった。俺はというと椅子ごと連れ去られた。なんと地面が動く歩道のようにデスポイアの跡をスライドしており、自動的に俺は彼女の後ろを運ばれていった。

「静かに現れて、すごい勢いで事態をかき回して去って行ったね。」

「ああ、嵐のようだった。」

「『嵐の前の静けさ』って事？」

呆然とするニールセン一家を残し、義弘は南国境へ。

ヨシヒロの未来はどうなる！ 割りかしどつでもいいぞ！ 彼の受難は続く。

「続くの！？」

義弘の魂の叫び。

帝国編：第十六話 渡る世間は買だらけ 施した対策は穴だらけ 強く生きよ

「次回予告」

南部国境に向かう二人。

宿屋を求めて、迷走する二人。

宿代の踏み倒しを嫌うヨシヒロ。

それを否定する戦略級精霊術師、デスポイア。

互いに譲れぬ気持ちは、戦いでしか答えをだせないのか。

すべての真実は、見栄と財布の中に。

帝国編：第十七話

世の中メリットが無ければ人は動かないのか？

いやいや

宮本武蔵は『仏神は貴し仏神をたのまず』といったそうですが。

仏に頼りたくなるときもあるんですよ、宮本さん。

さて、今俺は胡坐をかいて気持ちがいいほど青々とした空を見上げている。周りの景色が後ろへと流れていくのを漫然と眺めながら天に祈る気持ちでいるのだ。助けて神様、仏様、マホメツト様。いや、神が今まで俺を救ってくれた事があつたらうか。いや無かつた。それに俺は信仰をこれまで持つてこなかつた。都合のいいときに頼るのは間違つている。大統領様、首相様、総書記様、どうかお助けください。助けてくだされば次の選挙で投票します、マジで。

やめよう。まったく建設的ではない。この状況に俺を放り込んだ奴がいるが、その耳の構造に欠陥があるに違いない。俺の声が脳に届くまでに通り返れるか変換されてしまうらしい。俺の前に座つてさつきからしきりに話しているが俺も奴に習い耳に入る音をシャットしている。ああ、静かだ。たまにはこういうのもいいかもしれない。

次の町まで後四半日かかるらしいことを言っているようだ、唇を読む限り。いや、すぐ着くつて言つたじゃん。ああ、ここはすぐの感覚が俺とは違うのだな。

目の前の少女は無視し続ける俺に対し怒りを露にしている。そろそろ意趣返しをするのもやめておかないとまずいことになるだろう。泣く子供ほど手に負えないものは無い。

「・・・聞いていますの!？」

「ああ、聞いてるよ。」

「嘘おつしやい、先ほどからまったく反応しないではないですか!」

「分かつてるなら聞きなさんな。どうも相互理解が追いついてな

いようだが、君何がしたいんだ？言つとくけど俺を誘拐しても何にもならんぞ？お嬢様だから営利誘拐つてわけでもないんだろっ？」

「誘拐とは人聞きの悪い！」

「それ以外の何だというんだ？」

「捕獲ですわ！」

いや、何が違うの？あ、そうか。俺を人としてみてるかどうかの違いか。そうかあ、なるほどなあ。納得した。・・・ふざけんな。

「じゃあ、今の状況が俺の意思に反しているってのは分かっているんだな？」

「ええ。」

すまし顔で何言つてやがる。

「そんなことしていいと思ってるのか？」

「私のすることを止められる人間がいるとでも？」

ああ、そういえば化け物だったなこのお嬢様。ひよつとして今の俺に人権は無い？なんということだ。俺の進退がこんな子供の掌上とは。

「・・・俺をどうするつもりだ？」

「心配には及びませんわ！昨日、安全の保証を制約したでしょう？私、制約を破る人間ではありませんわ。私に任せていれば大丈夫です。」

いや、甚だ不安だ。不安要素しかない。一寸力があるだけで、まだ子供のこいつに保障されても・・・。それにしても緊急時とはいえIISに体を動かされるとは。勝手にこんな契約しやがって。

「・・・具体的にはどうするつもりなんだ？」

「私の補佐官になってもらいます。」

「それって昨日の勝負で俺が負けた場合の条件じゃなかったけどさくさにまぎれて都合のいいこと言ってるんじゃないよ？」

「それでは補佐官候補になっていただきますわ。」

「候補が付いただけじゃねえか！んな屁理屈が通じるわけねえだろっが！」

「戦略級精霊術師の補佐官の任命権は担当の神武將にしかないのでこれから会いにいきます。」

「無視？あえて無視？この扱いに意義を申し立てる！それに神武將って何だ、戦略級精霊術師って何だ！まったく分からん！ていうかなんで俺がそんな補佐官なんちゅうものにならなくちゃならん！」
「おい、鳩が豆鉄砲食らったような顔してんな。そんなに驚くようなことが？」

「そんなことも知らないとは予想を遥かに超えた無知振りですね。よろしいですわ！この私がお教えして差し上げますわ！」

「んなもん知らんもんは知らんわい。しかしここは調子に乗せて話してもらったほうがいいな。」

「お教えください。」

「よろしい。これからは私を先生と呼ぶように。」

調子に乗りやがってこのガキ。しかし、この調子ならつまいこと話してくれそうだ。

「よろしく、先生。」

「まず、戦略級精霊術師ですが、すごい精霊術師ですわ。」

「うん、まったく分からん。期待した俺が馬鹿だった。」

「はい、先生。まったく分かりません。」

「まったく、お馬鹿さんですわね。要するに皆が崇め奉るような、そう国宝ですわ！」

「ああ、国宝級だよ。あんたの頭のめでたさは。」

「なんで崇められているんですか？」

「それは精霊の加護を誰よりも大きく受けているからですわ！」

「精霊の加護？」

「そうです。精霊の加護を大きく受けているものほど大きな力を操れるといえます。」

「精霊ってなんですか？」

「精霊とは万物に宿る目に見えないモノですわ。その精霊に愛されればその力をお借りできるのです。精霊の恩恵を受けて人は生活

していますから、人はこの精霊を敬い、それに愛されている私を敬うのです。」

なるほど。宗教的なものか。万物に宿る・・・か。

「しかし、戦略級ってどういう意味で付いてるんです？」

「いい質問です、ヨシヒロ。昔、始祖皇帝の御世のことです。」

デスポイアさん、ノリノリですね。あ、この話は長くなりそうだ。

「その建国時に力を貸した偉大な精霊術師が居たそうです。その力は天を裂き、大地を砕き、万の軍を一瞬で吹き飛ばしたといわれています。その後、建国がなると一人で戦局を左右できる精霊術師を戦略級精霊術師と皇帝自ら呼称し、その功績に対し唯一皇帝の命を受けずに行動できる権利を与えました。」

よくある建国神話だな。というかそんな力を持った人間が居たとして、国の組織に組み込めるわけが無い。独立行動権を与えたというより体のいい厄介払いだろう。

「戦略級精霊術師は建国後、精霊に強く愛された子供たちを集め、育て、そのまま天寿を全うしたそうです。その子供たちが戦略級精霊術師の呼称を継承し、その継承が戦略級精霊術師によって続けられてきたそうです。」

皇帝に戦略級精霊術師の任命権は無いつて事か。それはそうか。無理だよな。

「戦略級精霊術師はどういう基準で選んでるんです？」

「それは私にも分かりませんわ。ヒュペリオンも『その時が来れば分かる』としか教えてはくれませんでしたし。」

「ふーん。なるほど。ところで天を裂き、大地を砕き、万の軍を一瞬で吹き飛ばしたって言ってたけどまさかお前も出来るって言わないよな。」

デスポイアはただ首を横に振った。ですよね。そんなのは神話の中だけですよね。

「私はやったことが無いので分かりませんわ。ただ私の師匠のヒュペリオンは若かったころ、南部国境の森林地帯を焼け野原にしたことがあるとか。」

そうか、出来るかもしれないんですね？想像以上です。

「そんな奴に補佐官なんて要らないんじゃない？」

いや、マジで。いらないでしょう。そんなのに付き合ってたら命がいくつあっても足りないわ。

「いえ、戦略級精霊術師の希望を叶えるのに補佐官は必要なのですわ。私では細かい事出来ませんもの。」

ようするにパシリですね。なんてこった。こんなバイオレンスでデンジヤラスな娘の子守をしると。

「うん、なるほど。勘弁してください。」

俺は深々と頭をたれる。恥も外聞もない。相手に対して切れる力―ドがないのなら頭を下げるしかない。

頭を下げてから沈黙が続く。沈黙に耐えられなくなり上目遣いで彼女のほうを見ると、うつむいて震えている。まさか・・・泣いているのか？・・・まあ、ここは合わせておくか。普通に考えて俺を補佐官にはしないだろう。例の十二神武将（？）も。

「・・・分かったよ。補佐官候補とやらになるよ。でも決めるのは神武将なんだろう？その人が駄目と言えばあきらめるよ？」

諭すように言いながらデスポイアの頭に手を近づけていくと彼女の頭は急に上を向き晴れやかな笑顔でこちらを見た。

「本当ですよ！？」

「あ、ああ。」

俺はその勢いに若干押されながら反射的に返事をしていった。

「やった！」

ガッツポーズをとっているデスポイアを眺めながら、もうなるよ
うになれという投げやりな気分になり、ふっとため息を付いた。

それから夕方になってやっと町に着き、まず宿屋を探し始めた。
さて、ここで問題が発生した。正直、俺の財布の自身はお寒い限り
で、低級の宿に泊まらないと食費などの出費を今後まかなえない。

しかし、同行者のお嬢様は低級の宿になど泊まることを考えてす
らないようで、やたら豪華な門構えの宿屋に入ろうとしている。
それを止めるべく肩をつかみ逆対称に力を加えて180°回転させ、
金が無いことを伝えるとこのお嬢様はなんともいえない顔をしてこ
ういった。

「私は金など払ったことはない。」

・・・何ですと？WHAT？

「じゃあ、どうやって宿屋に泊まったり、食事したりしてたんだ
よ。」

デスポイアは首にかかっている鎖を引っ張り服の中に入っている
ものを取り出した。それは緑色の宝石であり、よく見るとその宝石
の中には角の生えた馬が二頭後ろ足で立ち、対称にクロスしている
絵が描かれていた。

「これは？」

「戦略級精霊術師の証。ディイの紋章ですわ。」

「うん。それで？」

「これを見た人は私に無償で奉仕するのです。」

「なんですと？この子はゴールドカード持ちでしたか。」

「でも、じゃあその金は誰が出していることになるんだ？」

「ですから、無償といったでしょう。これは精霊への供物となる
のです。」

ほんとの意味で現人神であったかこのお嬢様は！ということはこの
お嬢様についていつている限り生活費について考える必要は0。

いやいや、ちょっとまで。そんなことは俺のプライドが許さない！
断じて！しかし俺の財布ではこのお嬢様の生活スタイルに合わせる
ことは不可能だ！これはこうするしかないな。

「そうか。なら別々に宿泊しよう。」

「な、何故ですの!？」

デスポイアは思わず身を乗り出してくる。近い、近い、近い！

「何故って。君はこの宿に泊まりたくって、お金の心配は無い。
でも俺の財布の中身じゃこの宿に泊まれない。なら別々に泊まるの
が自然だろう?」

「どこが自然ですの?一緒に泊まればいいではないですか!？」

「安宿なら泊まれるだけの金はあるんだからタダで泊まる理由は
ないな。」

「私がそれを望んでいるのです。それではいけないのですか?」

「いけないね。宿代を負担するのは宿屋自体で君じゃない。何の
対価もなく、他人の好意を望むのは対等な人間関係とはいえない。

君と宿屋は対等な関係じゃないのかも知れないが、俺と宿屋は対等
な人間だ。ただで泊まることは出来ない。それは譲れ得ない。」

デスポイアは口をきゅっと閉め、顔を赤くしてうつむいている。
怒っているのか?いや、今言ったことを理解できないのか。

「つまりは俺の誇りの問題だ。」

デスポイアは勢いよく顔を上げた。

「そう!お母様もおっしゃっていましたわ。人の誇りは汚しては
ならないと。そうですか。分かりました。私も安宿に泊まることに
します。それならいいのでしょうか?」

「ああ。」

なんだ意外といい子じゃないか。そうこの時は思った。この時の
俺の甘さはあまおう並に甘かった。

「ここには湯殿が無いのですか。では湯を用意なさい。」
「ああ、こういう奴だよ。やっぱり別々に泊まったほうがよかつたんじゃないかな？」

「お湯はセルフサービスだよ。」

「セルフサービスとは何です？」

「自分で用意せいでいいこと。」

「何で私がそのようなことをしなければならぬのですか！」

「知るか！安宿つてのはそういうもんだ。自分であるから安いんだよ！」

「ではあなたがお湯を用意してください。」

「何で俺が！」

「あなたがわがままを言うからこのような宿にしてあげたのですよ？当然あなたが用意すべきですわ。」

言うに事欠いてこのアマ。

「今から元の宿に帰ってくれても俺は一向に構わん！」

「いやです。それに私、湯を作ることなどしたことはありませんもの。」

「湯殿が無けりゃつくりゃいいだろ。」

「どうやって？」

「温泉を掘るとか。」

「どうやって？」

「地面の温度つてのは深ければ深いほど熱くなる。なら地下深くにある地下水脈はもれなく湯つてわけだ。君ならその地下水脈まで掘ることが出来るだろ？」

「それですわ！ではどこを掘ればよろしいの？」

「それよりもまず、掘ったらすぐに湯が噴出すから浴槽を作らないと。あと湯の温度調整をするための冷水の道と排水の道を作らないとあふれてしまう。」

「そうですの？」

「そうだ。今から地面に図面を引くからそのとおりに作ってくれ

よ。」

「わかりましたわ！」

こうして安宿は温泉つきの宿となり、その付加価値で中級の宿にランクアップしたとき。宿屋の主が喜んだのは言うまでもない。

その温泉を作ったのは緑の髪の少女と黒髪の青年であったという噂が広まった。黒髪に青年は『組合』の紋章の入ったナイフを所持しており、この青年が『組合』の一員であるとされ、それにより『組合』の評判が上がった事は余談である。

帝国編：第十七話

世の中メリットが無ければ人は動かないのか？

いやいや

無計画な地下水のくみ上げはその土地の地盤沈下を起こす原因となる場合があります。

ご利用は計画的に。

帝国編・第十八話 逃げんなよ！乗り越えろよ！ って無理！ 三十六計逃げ

初投稿からちょうど一年という。

ここは南方国境の前線基地も兼ねた城塞都市、アウストラリス・カストルム。直訳すればそのまま『南の城塞』である。元は前線基地として築かれたものが発展した都市である。

現在、ここには5万の兵力が常駐している。南の防衛の要である。その要衝には神武将の一人がつめることになっている。南国境は人族以外の種族でひしめき合っており、火種の絶えない地域である。それぞれの絶対数は少ないが個体ごとの実力は基本的に人より高い。特に竜族などは比較にならない。

そのように危険地帯であるが、この南方地帯でしか産出されない食料、鉱物、薬の原料などがあり、南方国境はそういった珍しい文物であふれている。それを求めてやってくる商人も居り、そのおかげもあってアウストラリス・カストルムは王都とよりもエネルギーに溢れ、活気がいい。その土地に二人の男女が到着した。

「や、やっと着いた。もう、耐えられない。」

義弘はここ数日で急激にやつれていた。顔は土気色をしており、服は土ぼこりで汚れもはや元の色が何であったか分からない状態である。

「まったく軟弱ですわね。」

デスポイアは対照的に澆刺とし、その肌は瑞々しく輝いている。

「誰のせい・・・だ・・・誰の。」

義弘は搾り出すようにデスポイアに突っ込みを入れるがそれにはまったく力が感じられない。

「誰のせいのです？」

きよとんとした顔で義弘を見上げている。もし体調が万全で人事であれば別の感想をもったに違いないが、俺にはこのリアクションが腹立たしくてならない。

「お前だ、お前。」

デスポイアを指差す義弘の指先は震えていた。それは怒りゆえか悲しみゆえか。いや、そのどちらでもあるまい。単純に疲労であるう。

「私の身支度を手伝わせてあげたのに、何ですか？」

何ですか？あなたの身支度を手伝うと体力が回復するんですか？それは知らなかったなあ。ふざけちゃいけない。

「・・・もういい。」

思えば道中、立ち寄る町ごとに温泉を造り続け、だんだんエスカレートしていくデスポイアの要求になんだかんだで付き合った。慣れとは恐ろしい！俺はこんなに押しに弱い男だったのかといまさらながらに思う。新しい自分を発見した。見つけたくは無かったが。

「そうですか、では次は私の髪を結いなさい。」

もはや何故と聞くことすら面倒になってきた。返事をする前から後ろを向いてスタンバイOKな奴にあきれを通り越して尊敬すら覚える。

道中暇つぶしに竹に似た植物を加工して自作した櫛でデスポイアの新緑を思わせる髪を梳いていく。その肌触りは絹糸のように滑らかでその点だけは役得といえなくも無い。道中命令と言う名のお願いをされ、始めた髪結いであるが、これをしている間はデスポイアがとっても静かでおとなしくしているので実はこの時間が割りときになりつつある自分が居る。

人間、繰り返すと飽きるもので、この際遊んでしまえとデスポイアの髪型はこの道中、千変万化していた。最初は一まとめにするだけであったが、このお嬢様から駄目出し。なら二つにまとめたら蔑む様な目で見られた。三つ編み、お団子と様々な髪型を試し、最終的には湯で温めた木の丸棒でカールまでさせてしまった。凝り性な

自分が恐ろしい。美容師に転職してしまおうか。無職だけど。

今日は久方ぶりに親に会うという。だから髪型にもこだわりたいらしい。迷惑な話である。結局、髪を両サイドに編みこみ、あまつた髪をたらし、すつきりヘアにしてなんとか納得してもらえた。すこし満足感を得られてしまっている俺は末期である。

「さて、まずはあなたのそのみすばらしい格好をどうにかしなくてはいいませんか。」

ほっとけ！これは俺の一張羅だ。新しい服を買う金は無い・・・こともない。道中、宿屋の主人からそれなりの礼金をせしめていたからである。しかし、今後のことを考えると貯金しておきたい。せめて定職につくまでは！

「俺はこのままでいい。」

「私の横をそのような姿で歩いてほしくないだけです。」

「ならこの服を洗えばいいだろう？」

「私は今すぐその格好をどうにかしたいのです。」

「・・・分かった。古着を買おう。」

着替えが何着かあるにこしたことはない。

「これなんかどうですか？」

その服は細かい刺繍がされており一目で分かる高価な品だった。

おまけに色が白！絶対高い。

「そんな高価な服を買うか！こっちの茶色の服にしよう。汚れが目立たないし丈夫そうだ。」

「その服肌触りが良くなさそうです。」

そうなんだよなあ。それはかなり気になるがこの際贅沢は言ってもらえない。

「いいんだよ。手持ちの金じゃあこの辺がちょうどいいの。OK？」

結局、襟付きのシャツと茶色のジャケット、黒のパンツを買った。その場で着替えて元の服は荷袋に突っ込んだ。

デスポイアの実家は広かった。門の大きさからして可笑しかったが、門をくぐって屋敷と思しき建物までさらに距離があった。これは歩きたくないかと考えていると迎いの馬車が来た。馬車といっても馬ではなく、二足歩行の爬虫類であったが。

「ところでお前の母親ってどんな人なんだ？」

そういえば聞いていなかったので会う前に人となり聞いておくと思いついてみた。

「母上ですか？母上は・・・会えば分かりますわ。」

「・・・そうか。」

聞きたい！なんだそのもったいぶった言い回しは！気になる！しかし、聞くのはなんとなく怖い。

なんとなく沈黙が続くと屋敷に到着し馬車は止まった。俺はこの屋敷からこの世のものとは思われぬ妖気を感じていた。いや、俺にはそんな感覚は無いから正直錯覚なのだと思う。しかし、なにやら無視できないいやな空気が感じられるのだ。

馬車から降りると屋敷に招かれ、これはどこの謁見の間ですかといった面持ちの部屋に通され、待たされること約15分、一人の女性がもう二人の男とともにやってきた。

とりあえず深々と頭を下げ、そのまましていると、

「頭をお上げください。」

頭を上げてその女を見るとそのプレッシャーにまた頭を下げそうになる。この女を正面から見るとは駄目だ！視線はそらさずに視界の一部をシャットダウン、ナノマシン散布開始。

「ようこそ、アウストラリス・カストルムへ。あなたのことはデ

スポイアから聞いています。私はデスポイアの母、ペルセポネです。よろしくねヨシヒロさん？」

母親・・・だと？若すぎる！どう見ても二十代前半、整形した痕はない。どういうことだ？

「どのようなことをあなた様のお耳にお入れになったか非常に気になります。お耳汚しであったのではないのでしょうか？」

「いえいえ、大変楽しませていただけましたよ？デスポイアはあなたのことを大変気に入っているようで。私としてもあの子にやっとなような関係の方が出来たのだと安心していました。」

うん。『そのような』のところを詳しく聞きたいところではあるが、聞かないでスルーしよう。わざわざ蜂の巣を突く様なまねは慎むが吉であろう。

「それはよかった。お嬢様には貴重な体験をさせていただいております。」

「そう。また詳しく聞かせていただけるかしら？」

「もちろん。」

お断りである。そんな自虐ネタを披露することを喜ぶような性癖は持ち合わせていない。

「デスポイアちゃん、久しぶりだね。」

ペルセポネさんの隣に居る優男が目を潤ませて俺の右隣のやや下を見ている。おそらくデスポイアの父親、ペルセポネの夫であろう。久しぶりに見るわが子の姿に泣いているのか？デスポイアを見て？なんと物好きないや、それが父親というものか。しかし、『ちゃん』付けて。思わず口元が緩むとこちらを見ていたデスポイアの目が険しくなり、

「デスポイアちゃんなんて呼ばないでいただけます？アドニス様？」

男の目に涙がさらに溢れてきている。決壊まで秒読みである。

「デスポイアちゃん、そんな他人行儀な。お父様って呼んでくれ

てもいいんだよ?」

デスポイアは『あんた何言ってるの?』と言いたげな目をしている。その目、俺も何回かされたことがありますよ、アドニスさん。

「私にお父様など居ませんわ。」

このガキは今の言葉絶対将来後悔するな。大きくなったらこいつの黒歴史としていじり倒してやるわ。

「そんな!」

「あなた、ひとまずそこまできになさって。今はお客人の前です。」

「・・・そうだね。」

なんとなくこの一家のヒエラルキーが見えた気がした。

「・・・お前は何故帰ってきた、デスポイア。」

うーわー、目つきが大変悪い。短髪のオレンジ。まるきりヤンキーである。いい年下親父がヤンキースタイルとは。

「旅の目的を果たしたからですわ、ヒュペリオン先生!」

なんと、先生でしたか。これからツツパリ先生と呼ばせていただきます。

「ではこの男がお前の・・・。」

「はい。」

この場の全員の視線が俺に集まる。これはどういうこと?目的とは何だ?それでなんで俺を見る?

「何か?」

ツツパリ先生がゆっくり近づいてくる。なんだ?

「そこのお前。デスポイアの補佐官となるか?」

「いえ!なりません!」

俺は思わず反射的に答えていた。

その時、場が・・・凍った。

「どういことですか?」

「あらまあ。」

「私の娘のどこが不服だと言ったい?!」

「懸命な選択だ。」

四者四様のリアクションが返ってきた。お父さんが鬼の形相でこちらを見ている。さっきまでのやさしいあなたに戻って!

「いや、私ではお嬢さんの補佐など勤まらないということでした。」

無理。私には荷が重過ぎるのですわ、お代官様あ。

「あら、じゃあ少し質問させてもらっけどいいかしら?」

「はい、もちろんです!」

この人には思わずイエスと言わせる何かがある。

「ここまでの道中、あの子はどのくらいの人を医者送りにしました?」

「いえ、一人も。」

俺が精神科医にかかりたくなったりはしたけども。ってなんかすごく驚いているな。

「・・・まあ!驚いたわ。」

「なんとということだ。そんなことが可能とは。」

「・・・信じられん。」

え!どうということ? けが人が出ることがデフォルトなのか、この子。なんてバイオレンスでデンジャラスなお子様なのだ。思わずデスポイアから距離をとる俺である。

「これなら十分補佐官の任に堪えるのではないかしら?」

「私はいつもぼろぼろにされるのに!」

「いい男を見つけたな。」

ちよ、ちよっとまって。ストップ、可笑しい流れになってるよ!

「一寸まっってください。まさか、この子の補佐官やることになつてます?」

「そのとおりですが?」

「私は希望してないんですが。」

「なりたくないんですか?」

「はい、できれば。」

「困りましたね。あなたほど適任の方は居ませんもの。」

「え?」

「残念ながら強制という形になってしまいますわね。」

「拒否権は無いんですか!」

「ありません。」

ああ、親子だ。この人たちは確実に親子なのだ。そっくりだ、押しが強さが。このあたりの影響を受けているのだ。助けを請うように視線を走らせるが、お父さんは何かうらやましそうな目をしている。代わってほしい、マジで。ツツパリ先生は頼んだぞってか。んじで神妙な顔で頷いてるし。いや、頼まれませんよ!よく見て!頼もしく見える?俺?そんな馬鹿な。

呆然としていると、一件落着的な感じでお三方が退出していく。思わず右手が上がるが、ちからなく下げるしかなかったのである。

こうして俺は後始末係に就職してしまった。強制的に。

帝国編・第十八話 逃げんなよ！乗り越えろよ！ って無理！ 三十六計逃げ

一年って、速いね。

帝国編・第十九話 インクを飛ばして速攻原稿を描き上げる漫画家っているんだ

書くのに波があるなあ

朝、デスポイアにフライングタックルを食らい、悶絶して目を覚ました。お返しに腕を回して背後から首を絞めていると使用人が入ってきてほほえましそうな目でこちらを見ており、苦虫を噛み潰したような顔になる、俺。

デスポイアがそのまま居座るものだから、やたら豪勢な朝食をそのまま部屋で採ることになった。ちなみに俺は個室をいただけ、結構待遇がいい。

補佐官についてデスポイアに聞いても今ひとつ要領を得ないので、抗議に行くついでに聞こうとペルセポネさんのところに行くも留守という悲しさ。ご多忙だそうでいつ帰ってくるか分からんと。泣いてもいいと思う。

気分が落ち込んで来たので街へ出る事にした。その前に、その事を誰かに告げておく必要に気づき、その時ちようどいたのがアドニスであったことが運の尽きであった。延々と愛娘の自慢話を聞かされるのだからたまったものではない。なんとか話を切り上げる事に成功して街へ出た。

街は活気であふれており、その熱気に圧倒された。思わずたじろぐ。こんなエネルギーが人間のどこにあったのだろうか？そんなに発散して枯渇したりしないのだろうか？地球ではこんな活気を見たことはない。周りの熱気に感化されたのか胸から何かこみ上げてくる。

あたしの店の前で黒髪黒目の男が突っ立っている。この通りはこの町ではそんなに人通りの多いほうでは無いが今はデスポイア様が帰還されたということ、いつもより町にいる人が多いので、それなりに混雑している。そんな時に道に突っ立たれると人の流れが悪くなつて集客が悪くなつちまう。見る限りこの男はよそ者だろう。この町の人間はもっと生きること急いでいる。

「あんたここに来るのは初めてかい？」

声をかけるときよろきよると周りを見渡した後、その男は自分を指差してこう言った。

「あのー、俺に言ってます？」

「ああ、目の前に居るさえない顔した男に言ってるよ。」

その目にはおおよそ生氣というものを感ぜられず、この年で人生に疲れきっているような枯れた印象を受ける。これまで様々な人間を見てきたがどうやら人生の荒波に飲まれた人間の一人らしい。

「そんなにさえない顔してますか、俺？」

「ああ、ここいらにはあんたみたいにさえない顔した奴はいないからね。初顔はすぐに分かる。」

さえない顔と言われたことに衝撃を受けたのか冴えない顔に拍車がかかっている。

「・・・そうですか。」

「で、何しに来たんだい？商人・・・には見えないし、傭兵には間違つても見えないし。」

商人にしては愛想が良くないし、傭兵にしては体格は普通だし、よく分からない男だ。こんなことはめずらしい。大抵、どんな奴か初見で分かるんだが。

「子守ですよ。わがままな子供がいましたね。親御さんに無理やり押し付けられてるんですよ。」

「子守ね！まあ、そんな気もする。案外天職かもしれないよ！」
子守。しかし、子守は基本的に庶民は雇わない。割りに合わないからだ。雇うのは自分で子守をする時間を働いたほうが稼ぎの出る上流階級の連中だけだ。そしてそういう連中の子守には相当の技量を求められる。知識、教養、人柄。この男は意外と教養人なのかもしれない。

「適正と志望が一致するとは限らないですよ。」

「まあねえ？あたしも昔の夢は王都で商売をやることだったが、今は南の辺境でやってる。」

王都は大商人と呼ばれる一握りの人間が国家権力と癒着して権益を独占しているから、個人商人ではまったく市場開拓の余地は無かった。そのことに気づく前に、噛み付きすぎてしまつて都にはいられなくなつていた。この男もここまで来て子守つてことは何かあったのかもしれないね。

「今の商売に不満が？」

「いいや？最初は腐つてた時期もあつたが今じゃここ以外で商売をしたいとは思わないね。住めば都。」

「住めば都……、ですか。慣れつてことですか？」

気に入らないことに慣れていくことがいやだつて顔だ。あたしもまるで人生の敗者にでもなつたような気でいたものだが今じゃそんなものは気の持ちようで変わるものつて事を知っている。

「いいや、夢が変わつただけだよ。あたしは皇都で商館の長になりたかつたが、ここに来て変わった。皆、このすばらしさに気づくべきだ。ここには皇都では見られなかったもので溢れてる。それに自由だ。ここでのルールはただ一つ。儲けたもの勝ちだ。面倒な慣例はない。あたしはここでより多くの人にここを知ってもらいたい。それが今の夢だ。そうすればもっと多くの人がこのを訪れて、もっと商売の幅が広がるからね！」

「そうですね。だから俺に話しかけたんですか？」

「そうだね。ただ初めてここに来たときのあたしと少し似ている

気がしてね。気になったんだよ。」

「そうですか。」

男は気持ちが上向いてきたのか顔には笑みが浮かんでいた。おそらくこの男もここで自分の居場所を見つけることだろう。出来ればこの店の常連になってくれるとうれしいんだがね。

~~~~~

すべてを失った気がした。ここの海に落ちて、見知らぬ人々に会って。今まで築き上げてきたものはすべてあちらく・・・>に置いてきてしまったと、そう思っていた。しかし、向こうに何を置いてきたというのだろう。大学の残りの単位だろうか？アルバイトのシフトだろうか？借りていたアパートメントの家賃だろうか？それとも仮初の父親だろうか？・・・結構多いな。でも、すべてじゃない。ここには『俺』がいる。生きている俺がいる。この町の空気を吸い込んだ瞬間、初めて自分の心臓の鼓動を聞いた気がした。

目を瞑りながら余韻に浸っていると大声とともに背中では急激に重量が増した。

「ヨシヒーロー！私を置いて行くとはいいい度胸ですわね！」

「デス・・・、お嬢様。何故ここに？」

思わず名前で呼びそうになるが、ここが往来であることに気づき言い直す。こんなところに皆のアイドル、神、教祖、何でもいいが注目を集めそうなこいつがこんなところにいることを知られたら洒落にならん騒ぎになる！こいつもその辺りが分かっているのかフードを深く被っていた。

「アドニスに聞きました！」

あの娘ばか親父め！余計なことを！思わず舌打ちしそうになるの

を懸命に堪える。

「そうか？しかし、一人で出てきたのか？」

「ええ、もちろん。補佐官が出来たことで私もやっと一人前になりましたしね。師匠には『お前に教えることはもう何も無い。あとは自分で学べ。』とありがたいお言葉をいただきましたので、間違いないですわ！」

きらきらと星の瞬くような目をしているところ悪いがおそらくあのツツパリ先生はズバリ面倒臭くなったただけだろう。

しかし、言わないでおこう。前向きに物事を捉えている人へ後ろ向きな発言をするのは顰蹙ものである。誰が眉をひそめるといつのか。それは周りの人間だ！おそらくそんなことを言おうものならこのお嬢様は涙目になり、それを見た周りの人は何事かと思うだろう。あらぬ疑いをかけられるのは本意ではない。

「そうかあ！よかつたじゃないか！」

俺という犠牲がいなければ！

「ええ！で、ですね。そのう。私としてもその、記念になるようなものがほしいといえますか……。」

「ごめん！給料日前！という台詞が喉元まででかかる。金など無いマジない。記念品をせびるとは。小さくてもこいつは紛れも無く『女』であつたか！」

「そ、そうかあ。記念かあ。もらったらうれしいよなあ！」

「ええ！」

まずい。ものすごい期待されている。期待されている！待て待て！お嬢様ならその辺の人から『お嬢様が一人前になった記念』なんていくらでももらえるのに何で俺が？！考えろ！こいつも俺の懐具合はよく知ってるはず。ならたいしたものを買えないことぐらい分かってるだろう。なんだ？向こうにいたときは……。記念品といえは寄せ書きとか？いやいや、一人が書いても寄せ書きにはならんだろう？後は……。記念写真？写真機がねえ！ん？写真？そうか！

「すいません、お姉さん。店先少し借りていいですか？」

「ああ、いいけどこの子は？」

「預かってる子供です。」

「ああ、子守の。かまわないよ。」

子守という単語にデスポイアがピクリと反応するが、とりあえず騒がずにいる。これまでの俺の鉄拳による教育成果が上がっているようだ。

「ありがとうございます。あと墨と水、あと少し粘り気のある出来るだけ色素の薄い液体つてあります？」

「粘り気ね？ダーシヤンの皮の煮汁が粘り気があるけど若干黄色がかつてる。それでいいならあるよ。でも売りもんだよ？」

「お金は払います。」

「ならいくらでも持っていきな！」

「ありがとうございます。」

炭と水の入った陶器をもらうと墨をナイフで細かく砕いて陶器に混ぜ合わせダーシヤンの皮の煮汁を少しずつ加えてかき混ぜていく。この汁がえらい匂うが炭を加えていくとだんだん匂いが取れていく。後ろでお姉さんが興味深そうに見ている。なんだか見物人が増えていくが気にせず続ける。

「じゃあ、デシー。一寸座ってじつとしててね。」

「デシーとは私のことですか？」

「ああ、省略してみた。」

小声で『ここで本名を口にするのはまずいだろう？』と耳元でささやく。

「ええ、秘密は仲良くなる秘訣だってお母様もおっしゃってました！その呼び名を許します。」 お母様、あなたは自分の子供に何を教えてるんですか？

「じゃあ、動くなよ？」

するとデスポイアは店の前に備え付けられたベンチに背筋をぴんと張って座った。普段このくらい素直ならなあとぼんやり考えながら、小さめの荷袋の中から余っていた羊皮紙を取り出しナイフの先

にさつき作った黒い液体を付け手を常人には不可能な正確さとする  
やささと細かさで動かしていく。

その紙の上を瞬く間に黒い色が勢力を増していった。最初、その  
紙面を覗いて人間には何をしているのか分からなかったが、時がた  
つにつれて気づく人が増えていった。

「おい、これって。」

「ああ、この店の景色そのままだ。」

「なんとこの細かさだ！店の商品の一つ一つまで克明に！」

「それにビンに写ってる様子まで再現している！」

「それにしても目の前の少女の顔だけまだ真つ白だな。」

「あ、顔描き始めた！」

「しかし、フード被ってるから分からないんじゃない？」

「いや、でも描いてるぞ。目も鼻も口も描いてるし。ていうかこ  
れは……。」

「……美しい！」

義弘は周りの声など聞こえずに一心不乱に描き続けた。提出物の  
信頼性の確保のために手書きを超える手段を人類は未だ発明できず  
にいたため、レポートは原則手書きである。彼の自作アプリケーション  
『自動筆記』は彼が授業のレポートを書くのに嫌気がさし作っ  
たものだ。懲りすぎてその精度はデジタルカメラ並みである。ちな  
みにフードで隠れたデスポイアの顔は彼のEISのフォルダに保管  
されたデータを下に再現している。ちなみに美化はしていない。何  
故ならする余地が無いからである。

「……出来た。」

出来上がると周りから拍手が巻き起こった。知らずにギャラリー  
が出来ていて驚いたがとりあえずまだ微動だにしないデスポイアに  
声をかける。

「デシー、もう動いてもいいよ。」

「もういいのですか？」

「ああ、もう記念品は出来たから。」

「これが？」

「ああ、一人前になった君の姿だ。見てごらん？」

「これ・・・は、私？」

「ああ、そうだよ。」

「私、これまで肖像画を描かれたことは何回があるけれどこんなに美しく描かれたのは初めてですわ・・・。」

「うれしい？」

「ええ！ええ！とっても！」

その笑みを俺は忘れないだろう。保存用フォルダにキツチリ保存したからな。

その後、自分の店を描いてくれと引っ張りだこになったのだが、それはまた別の話。

帝国編：第十九話 インクを飛ばして速攻原稿を描き上げる漫画家っているんだ

「なんてことだ、最高だッ！おもしろいッ！ぼくはマンガ家として最高のネタをつかんだぞッ！」by 岸辺露伴  
って感じの瞬間が最近あまりにないなあ。



帝国編・第二十話 目の前に困難が立ち塞がった時、どのような行動をとるか

目の前に困難が立ち塞がった時、どのような行動をとるか

出来ない要素を探すか、

出来る要素を探すか。

私はどちらかといえば前者です。

これはとっさの行動に現れてしまうものだと思います。

帝国南の辺境地帯は帝国領となつてからまだ日が浅い地域である。帝国の常套手段として領土を拡張する際、国境付近の住民と交流を深めるため地域の支配階級の子弟を帝国首都に招き、歓待する。そこで帝国文化、風習、制度を帝国貴族とともに学ぶ。そうすることで次世代にはトップ同士の相互理解がなされるという考えで行われてきた。

しかし、それは帝国が弱体であつた時代のこと、今では形骸化し、意図は変質した。圧倒的な強者の下に弱者がその子弟を住まわせるのは、『人質』としての意味合いが強くなったのである。

その一方的な留学制度を受け入れるか否かで南国境の諸部族の間で違いがあり、帝国に恭順の姿勢を示す部族は積極的に送り出したが、それを屈辱と感じる部族はこれを断つた。これに対し、帝国は今は何もしていない。出来ない、というよりする必要が無いと考えていた。何故なら実害が今のところ無いからである。

実害が無いのは南部国境の部族の結束が水と油並で、間を取り持つ盟主の存在を欠いていたからである。そのため、帝国としても交渉相手が絞れない南部国境に干渉するのは下策と考えている。それでも様々な要因で国境を荒らす部族も存在した。そのため十二神将の一人が派遣されている。最近の南国境が平静を保っていたのはひとえに彼女が部族間の利益を調整し、時には脅し、均衡を保っていたからであつた。

では南辺境伯領の領主は何をしているのかといえば、領域内の問題を処理している。つまり外交を十二神将に丸投げしている形である。ゆえに南辺境伯は彼女に頭が上がらない。

その彼女の根城が城塞都市アウストラリス・カストルムである。ここには十数年前までちよつとした帝国の前線基地があるだけで他には何も無い森であった。森が南国境諸部族と帝国の緩衝地帯のよなものであった。

この都市建造の際、当然のように反対意見が多かった。いたずらに刺激を与えるものではない。蜂の巣は突くべきでないというわけである。

しかし、彼女は言った。

「確かに、刺激すべきではないかもしれない。しかし、あの森に隠れて急襲してくる部族がいる以上、あの森を放置してはおくべきではない。あの森の位置は我らが帝国と諸部族の生活領域のちよつど中間に位置し、接触を取りやすく、監視もしやすい要地であり、そこから街道を整備し長く伸びる防衛線をつなぎ合わせれば、常駐する部隊も少なく出来よう。」

彼女はこの森に一大城塞都市を作り出した。この一事だけで彼女の名は歴史に刻み込まれることが確定したようなものだが、この都市の特殊性はとどまるところを知らなかった。

まず、この都市は周辺部族とともに作り上げたものであるところがまず特殊である。自国の防衛設備を他の国と共同で作成するなど前代未聞、荒唐無稽、常識に挑戦する様のことである。

その意図するところは周辺部族への刺激を最小限にする、建設費用分散、都市の孤立の予防措置などいくつもあった。共同作業を通じての友好関係の樹立などの副次的作用も見られたようである。

そのような様々な部族が混在する都市を纏め上げるのは至難である。ソレをやり遂げたこの女性は南諸部族の声望を一つに集める存在となったのである。

つまり、一部の南諸部族を纏め上げる盟主がこの時代には出現していた。

そのような現状を見て、帝都に住むこの帝国の盟主はまず謀反の心配をするはずであるが、そうはならなかった。帝国の後継者争いが発生したからである。時の皇帝には七人の息子、二人の娘がいたが一人を残して皆死んだ。蛇が互いの尾を食らうように消えたのである。

そのようにして、自分が帝位に就くとは夢にも自分も周囲も想像していなかった皇帝が生まれた。名をクロノスといった。

そのような時期にこの都市建設を進めたことは偶然ではなく彼女の意図が多分に含まれていただろう。おかげで彼女は謀反を疑われずに都市は完成した。

帝国に新たな皇帝が就任にし、落ち着きを取り戻したときには南国境には新たな秩序が出来上がっていた。こうなると彼女を更迭することはないのでこの国の不思議な性質である。均衡をあえて崩すような行動をとらない、いや採れないのである。

こうして今の城塞都市アウストラリス・カストルムの複雑な繁栄がある。

その城塞都市アウストラリス・カストルムに不幸な青年が一人。その背中は若者らしくなく曲がっている。確かに体の十分の一は目方のある頭が下がり、体の軸が曲線を描くのは物理法則に反してい

るわけではないが、それでもまつすぐ立つために神は背骨を人の体に埋め込んだはずである。それでも彼は俯いている。

それにはわけがある。ここでは三割り増しに輝いているように感じる太陽が嫌いになったわけではない。恨めしそうに地面を見ている。しかし、視線で無くなれば最早ソレは人間ではない。

それは数週間前の夜にさかのぼる。

デスポイアに似顔絵を描いてから（似顔絵つてレベルではないが）、商店の人間にヤウクチャにされ、それをデスポイアが地面から土の手を出現させつかんで、また一騒ぎになった。

やれ、デスポイア様だった。やれあの男は何者だ？やれ新しく決まったという補佐官様では無いか？など噂が噂を呼び（完全に真実であるが）、皆地面からそそり立つ腕につかまれている男を指差し言い合った。

本人はあまりにきつい締め付けに、

「キブ！キブ！」と叫んでいたがあまりの喧騒にむなしく消し去られていた。

こうして、一日で都市中の人間に周知されてしまった青年は、昨日から寝泊りしている館に戻り、夕食をとっている。そこには今朝は捕まらなかったデスポイアの母、ペルセポネが共にいた。

「今日は災難だったそうですね？」

にこやかにペルセポネさんはおっしゃいますが、アバラにヒビが入ってますよ、奥さん。治療にカルシウムを使っているせいか、今日の俺は怒りっぱいですぜ！

「おかげさまで。」

あなたの娘のおかげだよ！本とは本人に言いたいが、なにやら幸せそうな顔をしているし、まだ年端も無い少女に説教たれるような

精神的負担の大きいことはしたくない。マジであなたはこの子に何を教えてきた。力加減くらい教えておいてくれ。

「これでああなたのお披露目の手間が省けました。」

え、お披露目絵とかするつもりだったんですか？・・・よかった。そんな公開処刑耐えられない。こんなお子様の終身下僕に就任したなんて事を誇らしげに公言するなんて事は俺の羞恥心が許さない。

「そこで、あなたにやっていたただこう考えていた事柄を前倒しでやっていたかくことにしました。」

ふむ。ただ飯を食う気はこちらにも毛頭ない。しかし、何をさせる気だったのだ？そもそも今朝聞こうと思ったらいないし。

「何です？」

「神殿造りです。」

「??？」

「すいません？今なんと？」

「デスポイアの神殿です。」

はい？

「なぜかお聞きしても？」

「戦略級精霊術師にはそれぞれその力の種類にあわせた神殿が建てられます。あの子の場合は『地の精霊』の神殿ですね。そこを拠点にするのです。」

本格的に祭られただぞ、あのお嬢。

「それを何故私？」

「補佐官が作ることになってます。」

「何故です!？」

何故だ、こういうのは専門の方が、時間をかけて、神聖さを損なわないけど、豪華につくるものでは？

「貴方はまだ補佐官というものが良く分かっていないようですね。」

それりゃあ知らんでしょう!なんにも教えてもらってないんですから!

「補佐官とは戦略級精霊術師という半人半霊の存在と人とをつなぐ架け橋なのです。その補佐官が戦略級精霊術師と帝国のつながりの象徴である神殿を作ることに意味があるのです。」

「なら神殿の人は？」

確か神殿は加護精霊の診断をしてくれるってデスポイアが言っていた。ならば神殿とは組織立った何かであるはずだ！

「各地にある神殿は歴代の戦略級精霊術師の神殿が本人が死んだ後もそこに仕えていた人間が運営しているのです。横のつながりはほとんどありません。完全に各地に根を下ろしています。基本的に新たな戦略級精霊術師の神殿の建設に関わりません。」

そんな！一から俺に計画しろと？宗教なんて神社に初詣に行くくらいしか関わりなかつた俺が？ないないない。

「しかし、俺みたいな素人が神殿を作ったらひどいものが出るのでは？」

「デスポイアが選んだあなたです。あなたを信じています。」  
「便利な言葉だよ、信じてるって！」

「他に『地の神殿』は無いですか！？」

あればその人に何かアドバイスをもらえるはずだ。

「『石の神殿』ならありますがここから北に一月はかかりますよ？」

それは遠いな。・・・待てよ？ここに確か戦略級精霊術師がもう一人いたような？そうツツパリ先生！ヒュペリオンさんがたしかソレだったはず。ならその補佐官は？見なかつたが？

「ヒュペリオンさんの補佐官の方にお会いできませんか？神殿づくりについてお話を聞きたいのです。」

出来るのなら補佐官の辞め方を聞きたい。

「それならここから数日のところに火の神殿がありますから、そこにヒュペリオンと共にいますよ。」

「では明日はそちらにうかがってきます。」

「ええ、いいでしょう。補佐官がどういうものかは本人に聞くの

が一番良いでしょうし。」

ペルセポネさんはなにやら納得したようで、その後は和やかに夕食をとることが出来た。

無聊の日々がこの日を持って幕を引くこととなるとは彼は想像していなかった。



帝国編・第二十話 目の前に困難が立ち塞がった時、どのような行動をとるか

中途半端で切ってしまうって申し訳ありません。

帝国編：第二十一話 神を人は詭弁により捏造する (前書き)

激しい展開にもって行きたい今日この頃。

帝国編：第二十一話 神を人は詭弁により捏造する

火の神殿のある街には徒歩で三日で到着できた。デスポイアの無茶振りに付き合わされた毎日に耐えてきた私の体は以前に比べてやたら強靱になったようで、ほとんど疲労せずに到着した。

火の神殿はどこにあるのかペルセポネさんに聞いたところ、地図を渡された。地図があればすぐに見つかる、と考えていたあの時の私は救いようの無いアホだった。

地図の縮尺、方角がすべて適当で、そもそも神殿のある街までしか記載されておらず、肝心の神殿周辺の詳細な地図では無かった。これでどうやってたどり着けと？

目的地にたどり着くに用いる手段は地図だけではない。現地の方に聞けばよいのであるが、そんなことは思いもつかない義弘であった。

ここであまりにも彼が哀れなので弁護をしておこう。彼の元いた世界では公共交通機関が発達し、自動運転のタクシーがタダみたいな値段で提供され、目的地にダイレクトに到着できる。

また、現在地、目的地を表示する詳細なマップ、およびそれに付随するナビゲーションがEISによりなされる世界で『人に道を聞く』なんて文化は廃れて久しいのである。というか迷子になりようが無いのである。

そんな彼が人に道を尋ねるといふ発想を持ち得なかったのは致し方なかったのである。

彼は愚かしくも地道な探索の末、『火の神殿』という文字を発見した。そのときの彼は古の秘宝を発見したかのごとく狂喜乱舞し、しかる後に冷静になってその建物の外観を観察した。

その外観は派手派手しい、赤一色である。いや正確には朱色というべきか。手前には広場があり、ここでは市場というか露天の集まりが形成されていた。その入り口の前には列柱が立ち並び、その廊下には多くの人が行き来していた。

その人々の身なりは綺麗で髭や髪も手入れが行き届いていることから生活に余裕のある層の人間であることが知れた。

目線を自分の服に落とし、ため息をつく。俺にはまだまだそんな余裕はなさそうだと。

そこで俺は出発する前に、ペルセポネさんに持たされた荷物を開いた。そこには黒一色で染め上げられた着衣があった。どうやらこれが俺の仕事着という訳らしい。

第一印象というのは信用を得るのに大きく影響する。そのため見かけからしつかりすることは大変重要である。中身などその次の問題である。

着替えるため、いったん街を出て森の中で着替えることにした。

改めて荷物の中身を見るとその着衣の衣装のすばらしさに感嘆の息を漏らす。

黒一色に染め上げられているがその染めにムラがまったく無い。

折り目も均一で丁寧であり、さぞ名のある職人の手によるものであるろう。その着衣は上からすっぽり被るようなワンピース状のものであり、丈はひざに被るくらいで恐ろしいくらいにサイズがぴったりである。いつの間にか自分の体形を調査されたことに戦慄を覚える。

さらには黒に金で刺繍されたベルトがあり、これで腰周りを締めららしい。かなり細かい刺繍である。その絵柄は植物が主体で、唐草模様が全体的にあしらわれている。

これに裏が赤地のマントとルビーのあしらわれた額当てとイヤリングが出てきたときには思わず倒れそうになった。俺は一生、ペルセポネさんに足を向けて眠れまい。

さて、着てみて全体の仕上がりを見るため、道中に見かけた池に行き、そこで髪と髭などの手入れを行う。幸い櫛はあるし、髭はナノマシンによる体組織制御で爪を変質させ剃った。

町に戻り、市場を抜け、神殿へと進んでいくと入り口で止められた。止めた人は街中では見ないゆったりとした服装をしており、神殿の神職についている人なのだろうと推測する。

「失礼ですがどのようなご用向きで当神殿に？」

その物腰は丁寧で、貴人に対する応対であった。やはり着替えてよかったと心の中でほっとする。

「ヒュペリオン様の補佐官殿への面会の約束をしております、デスポイア様の補佐官のヨシヒロです。お取次ぎ願えますか？」

苦笑いするのを必死に堪えながら、つとめて真面目に答えた。

「ペルセポネ様より伺っております。こちらへどうぞ。」

彼の先導に従い、神殿の中へと進む。周りの人々の視線の矢がちくちくと皮膚を刺す。ちらほら『あれが例の……。』などと聞こえてくる例の何なのか非常に気になったので、聴覚を拡張して音声解析をした。

「ペルセポネ様もなぜあのようなこの者とも知れぬ男を補佐官にされたのか。」

「なんでもデスポイア様が望まれたとか。」

「ペルセポネ様も人の親ということですか？」

「まさに。娘のことになると判断を誤られるらしい。」

なんと！こんなにも反対する方々がいらっしやっただか！これはチャンスではないか？この反対派を糾合できれば俺の補佐官になるのを阻止できるかも知れない。いや、して見せよう。

しかし、なんの後盾も無い俺が彼らを糾合できるはずも無いな。交渉のための手札を増やさなくては。ナノマシンを散布して、彼らの人間関係の把握とパワーバランス、弱み、強み、好悪の感情すべてを拾い上げてやろう！くっくっく、忙しくなってきた！

彼は補佐官から逃げるために自分の持てるすべてを傾注し始めた。無駄だとも知らず。

「テイア様、ヨシヒロ様をお連れいたしました。」

「どうぞ。」

中から聞こえてきたのはやさしげで、落ち着きのある女性の声であった。渋めのオジサンの声を想像していた俺は少し意外な感じがした。

先導してくれた彼は扉を開けるとすつと後ろに下がり、消えていった。

「どうぞ、お入りください、ヨシヒロ殿。」

「失礼いたします。」

部屋に入るといい香りが鼻腔をくすぐる。思わず鼻をひくつかせてしまいそうになる。

「どうぞおかけください。何かおのみになりますか？」

「いえ、どうぞお構いなく。」

彼女は手ずから茶を入れてくれる。その茶はこの地方特有の風味の強いもので、舌に対する刺激に飢えていた俺にとってはソレは珠玉のもてなしであった。

「ここまでの道中、何か問題はありませんでしたか？」

「いえ、何事も無く、平穩無事でした。」

迷いに迷ったことは秘密にしておこう。

「それは何よりでございます。補佐官殿にもしものことがあつてはと案じておりました。」

彼女の優しげな笑顔が眩しく思わず目を細める。

「ありがとうございます。どうぞ補佐官殿ではなくヨシヒロとお呼びください。」

「ではヨシヒロ殿と。私のこともティアとお呼びください。」

「はい、ティア殿。」

「ところで、ヨシヒロ殿は私に補佐官としての心得をお聞きになりたいとか。」

「はい！ぜひ！」

あれ？勢いで言っちゃったけど違ふんじゃね？心得とかじゃなくてやめ方というか、そもそも補佐官で何？とか、神殿ってどうやって作るの？とか、そういうことを聞きたいんであつてだね。そんなポジティブに相談に来たんじゃなくないか？

「そうですね。心得といつても特に無いのですが。」

「無いんですか！？」

「ええ、お使える方によって違ふと思いますし。」

「そうですね。」

「共通していえることは一つだけですな。」

「それは？」

「今もっている常識を捨てることです。」

これ、笑うところですか？いや、真面目な顔してる。これはマジだ。マジなのだ。ジョークであつてほしかったがマジなのだ。イヤ、捨てるも何もこちらの常識に疎い俺は捨てるものが無いというか。デスポイアが俺の常識、というか心ごと（？）粉碎してくれるからまあ手遅れというか。あれ？俺ってその段階をもうクリアしているのではないか？

「もうすでに捨てております。」

窓から遠くの景色を見ながら呟く様に俺は言った。

「・・・そうですか、もう。では、後はデスポイア様のお側でそのご意思に沿うようになされば、それが補佐官の職責になります。」

「それだけですか？」

「それだけです。」

「補佐官は戦略級精霊術師と人をつなぐ架け橋ってペルセポネさんはおっしゃってましたが、そうなら時に逆らうことも必要になるのでは？」

テイアさんが鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたかと思うと、笑い出した。そんなに面白いことを言ったかな俺は。

「確かにヨシヒロさんは常識を捨てましたね。戦略級精霊術師様に逆らおうとは。なかなか言えません。」

「そうですか？」

「そうなんです。確かにその必要なときも出てきます。しかし、逆らうのもバカらしくなるような力を彼らは持っているのです。」  
身をもって体験しております。

「そうですね。」

「ですので、出来る限り無茶な要望をしないように制御することが必要です。そのためにはデスポイア様にあなたの話を聞いてくれるように誘導しなければなりませんよ。」

いきなり頑固親父の奥さんみたいなことを言い出したぞこの人。

「なるほど。そういうことですか。しかし、要望をすべて叶えるなんて事は可能でしょうか？」

「可能、不可能ではありません。やるのです。たとえどのような障害があろうとも。」

あの、テイアさん？少し怖いですよ？

「そうなんですか？」

「そうなんです！」

少し話題を変えよう。

「テイア殿がこの神殿を御作りになったときはどうされたのですか？」



「ヒュペリオン様は基本的にあまり口出しされませんでした。神殿にはあまり興味がありません。だから大体私が設計しました。」

「そうなんですか。」

「せっかくですから、ご案内しながら説明差し上げましょう。」

「お願いします。」

ティアさんに案内してもらった感じだと基本的に好き勝手に作ったようである。そこかしこに彼女の信心深さを思わせる工夫が見られ、ツツパリ先生に対する敬愛が表れているようだった。

これだけの規模の施設を作るのに人と資金はどうやって集めたのだろうか？聞くと人は勝手に集まり、資材は商人に集めさせたとか神殿はそういった寄付行為で成り立っているらしい。

しかし、公共性が高くないと求心力が無くなり寄付も集まりにくいのだろう。手前の広場は露天のために公開し、出店した業者は商品を供物として落としていく。そして、神殿の建物もサロンのように人と人が話すのに適したもので、契約を交わしたりするのに使われるらしい。

どのように周辺住民、および協力業者と折り合いをつけるのが補佐官の腕の見せ所といったところか。

・・・まてまて何故こんなにノリノリで考えているのだ俺は。確かに面白そうだけど、将来的にまっているのはあのディスプレイのお守りである。しかし、俺の独力でトンスラこくのは不可能事だ。やはり、あの反対勢力を焚き付けなければ。

「・・・といった感じですね。参考になりましたか？」

「ええ、大変参考になりました。本日はどうもありがとうございました。」

「いえ、こちらこそ仲間が増えるのは喜ばしいことですから。」

「そういつただけると助かります。」

うーん。やりたくないとは言えない。

「ヨシヒロ殿、今日の宿はどうなさるのですか？」

「この町の宿をこちらについたときにとつてあります。」

「そうですね。よろしければこちらにお泊りいただこうと思つて

おりましたが……。」

ぴくつと俺の節約魂を揺さぶる一言であつたが、そこは固辞しておいた。

宿でどうやって反対派に渡りをつけるか考えながら今日は眠ることにした。

帝国編：第二十一話 神を人は詭弁により捏造する (後書き)

その国の権力者の権力の裏づけとして神話を用いるとき、権力者自体が神（またはその末裔）である設定にするか、権力者が神の意思の代弁者とするか、だいたいどちらかである。

どちらにしても、世界、そして人類のルーツを知りたいという人の欲求をうまく利用しており、

その設定の細かさといったら、分厚い設定資料集が必要である。

誰が読むのか、まったく。

その設定を考え出した想像力、なんとなく納得してしまうくらいのロマンを刺激するセンス、詭弁力は手放しで賞賛できる。

帝国編・第二十二話 廃墟の歩き方〜廃墟だからといって無断でモノを持ち出

廃墟

いいですね

廃墟

いいです

起きて先ずした事は硬いベッドのせいだがちがちに固まった体をほぐす事だった。いつか気持ちいい起床ができるベッド環境を手に入れたい、義弘です。

今日は自分で決めていた日曜日である。休日である。安息日である。毎日を漫然と生きるのはメリハリが無くどうにも上手くない。

そこで、こちらには無い安息日を設けてみたのである。というわけで今日は（自主）休日である。

手元にはある程度まとまった金もあることであるし、なによりあの悪魔のような子供から離れた地で開放的な気分には浸るうではないか！

しかし、どうであろう。元々休日にはじけるタイプの人間ではない。そんな人間が南国に来たからといって開放的になるだろうか。

ペルセポネ様にいただいた礼装は大事にしまっておき、分相応な普段着を着る。そして宿屋を出て森に出た。森に出るといつても町の外壁を出ればすぐに森なのであるが。

なぜ森なのかといえば、森の中に精霊術が生じない『忌み地』があるという話を昨日ティアさんから聞いたからである。そのような『忌み地』が世界中の各所にあるという。

この話を聞いたとき俺は思った。そこなら平和に暮らせると。今日はそこに入ってみることにしていた。

火の神殿前の商店を回ったときに、装飾品が売っていたので立ち寄って色々話を聞いてみるとこれは『精霊石』というものを使って作られているという。『精霊石』とは精霊の力が入っている石らしく何回か使えば効果を失う程度のものらしい。中には半永久的に使えるものもあるらしいが。効果を失った石は精霊術師なら補充可能だという。

つまり、これを使えば精霊術を使えるということである！そこで私はライターを買った。ここは火の神殿前である。当然火の精霊の精霊石が手に入りやすく、必然廉価である。

ここで疑問が持ち上がる。ここの皆さんは精霊術を誰でも使えるはずである。ならばこんなものは無用の長物ではないか？なぜこれを見るとこの商売が成り立つのか？

それはどうやら人によって使える精霊術の種類があるらしく、使えない精霊術を補充するためにあるらしい。

だから、切れればご近所さんにその系統の精霊術を使える人がいれば補充してもらいたい。

ただ、何回か補充を繰り返すとだんだんすぐに切れるようになって来るといふ。まなま携帯の充電電池ですね。

その石はその組成はSiO<sub>2</sub>（二酸化珪素）、要は水晶である。これの不純物の少ないものほど効率が良い様である。純度が高いほど高価だったものだからさ！

そこでそこそこ純度があつて（ようは長持ちしそうで）、廉価なライターを買ったわけである。そのライターの火をつけながら例の『忌み地』へと近づくことでのあたりからその忌み地であるのか判断しようという考えである。

しかし、結論から言つとその必要はまったく無かつたのである。

何故ならその境界があまりにはつきりしていたからである。

その植生からまるつきり違っていた。こちらの植物は総じて地球に比べて巨大である。しかし、この忌み地の植物は地球の標準サイズである。というか見たことある植物がそこかしこに見られるのである。

ツツジ、山桜、山藤、エトセトラ。日本である。日本の山である。目頭が熱くなるのを感じる。

ひよっこりそのあたりから日本人が現れるのではないかと妄想してしまう。

しばらくあたりを散策していると、採石場と思しき場所に出た。

そこには長い年月に負けて朽ちた建機がまだ原型を想像できるくらいには残っていた。その建機は製造年がかなり古く西暦2003年である。製造年にも驚いたが何より漢字を見たことで私は確信した。この忌み地は地球の大地そのものがこちらに来たものであると。おそらく精霊とやらいうものも異質なこの地を嫌うのだろう。

だったらこの地の人間じゃない私に精霊術が効かないということになるのが自然ではないか！そうはならないところに悪意を感じる。

採石場から道が伸びていたので歩いてみる。石畳の隙間から雑草が生え放題であるので大変歩きにくい道は道である。苦勞の末、開けた場所に出ることが出来た。

そこは傾斜地であり、レンガで出来た構造物が見える。これは登り窯というやつではなかるうか？

ところどころ損傷しており今のままでは使えそうに無い。しかし、こういう明らかな人工物が朽ちている様子というのはなんと郷愁

を誘つ。

窯の横には失敗作の置き場と思しき物があり、陶器が積み重ねられていた。その破片を記念に持つて帰ることにした。勝手に拝借することにもはや擦り切れた私の良心がちくりと痛んだので拝んで帰った。

この事實は四人の仲間に伝えなくてはなるまい。西に行ったときに教えてあげよう。

しかし、完全にこの地は放置されていたようである。そうとう忌み嫌われていたのだろう。まあ、精霊術のに依存した生活を続けてきたのだ、それが使えない地に寄り付かないのは自然か。この際、ありがたい。

この忌み地は俺にとっての癒しスポットになりそうである。立ち直れないことがあったときはここに来よう。

適当なところで引き上げ、町に戻った俺は宿屋に戻って濡らした布で汗をかいた体を拭くと、着替えを早々に済ませ、夕食に繰り出した。

この南の地の魅力はなんとと言っても飯の上手さであろう。西の地のそれは南のそれに比べれば残飯である。ふんだんに使われた香辛料により鼻を抜ける風味がなんともいえない。ここ特有の米もどきの味にも完全に慣れた私である。もはや私の食欲を止めるものは何も無い。

私の横には皿のタワーが林立している。周りが信じられないものを見る目で俺を見ている。しかし、そんなものを気にしてなどいら



れない。この体は燃費が悪いのだ。食えるときに食っておかないと。

ここでこんなに食べて財布のほうは大丈夫かという疑問をお持ちの方がいることであろう。そこは大丈夫である。宿の一階にある食堂のおじさんに大食いチャレンジメニューを作ってもらったのである。なかなかのりのいいおじさんで快諾してもらった。

それには俺が比較的小柄でそんな量を食べる人間に見えなかったことと食えなかったら食べた量払うと確約したこと、あといい客寄せになるとオジサンの商魂をくすぐったことが効いたのである。

最初、余裕の表情を見せていたおじさんもだんだんその顔色が蒼白になっていく。最後に完食した際は、もはやあきらめ顔で拍手に加わっていた。

「すごいな、坊主！」

「よし、俺も挑戦するぜ！」

その日、俺の勝ち分を超える利益がその宿屋の食堂にもたらされることになる。大食いチャレンジメニューはこの店の定番になることになったが、俺はこの店の要注意人物に認定されてしまった。

店の壁には俺の名前がチャンピオンとして書かれてしまった。チャンピオンはチャレンジヤーになれないのである。

この後、何度かチャレンジヤーが現れたが成功者はおらず、この名は伝説になり語り継がれることになる。おそらく、西の地にいる某四人は軽くクリアするであろう。ここが遠い南の地であることが救いである。

余談であるが、ただになるのは飯だけで飲み物代は後でキツチリ請求された。このおじさん、けちである。



帝国編：第二十二話 廃墟の歩き方〜廃墟だからといって無断でモノを持ち出

なんか不安になりますね

廃墟

行くのが難しいですね

廃墟

崩れそうで入るのに勇気いりますね

廃墟

帝国編・第二十三話 何が良けなかった、どこで間違った？え、脚本が間違っ

人は、運命を避けようとしてとった道で、しばしば運命にであう。

b y : ラ・フォンテーヌ

昨日の夕食を睡眠時に胃がフル稼働したおかげで、俺のエネルギーは満タンである。しかし、それでも消化器官にはまだ昨日食べたものが残っている。さすがにあの量を一晩で消化しきることは出来なかったか。

硬い寝台から体を起こし、顔を洗いに宿の井戸に足を向ける。

これは余談だが、井戸であるから釣瓶を落としてそれについた紐を引っ張って引き上げる必要がある。

だが！言うは易し。これがなかなか難しい。引き上げるときに水が釣瓶から落ちてしまい、上まで持ってきたときにはほとんど中には残っていないという悲しい現実がこんにちはというわけである。ゆっくり、慎重に、釣瓶の口を水平に保ちながら引かなければならない。それでも釣瓶の半分が残っていれば上々である。

アレだけ時間をかけて持ち上げてこれだけか！と釣瓶を叩き割らなかつた自分をほめたい、義弘です。

初心者にやさしくないこの昇降機に嫌気が差した俺は釣瓶の中心を通るように横木を通して横木には回転可能な輪を取り付けそこに紐を取り付けることで、紐を引っ張るときの横方向の移動を釣瓶に伝えることなく、水の自重により水平が取れるように勝手に改造を施した。また、滑車を動滑車にすることで引っ張る力の負担を軽減し、朝っぱらからの肉体労働から解放した。

筆者は思う。ここでどうせ短期滞在なんだからそこまでしなくて

も・・・と。しかし、そうは考えないのが義弘君だ。まったくのアホウである。

一階の食堂のカウンターにいた宿屋の親父に朝の挨拶をして朝食を頼むと引きつった笑いを顔に浮かべながら応えてくれた。

「昨日は負けたよ・・・。しかし、お前さんの体のどこにあの量の食い物が納まってるんだ？」

親父がカウンター席の向こうから朝食を渡しながら聞いてきた。

「ん、ありがとう。普通に胃袋だけど？」

礼を言いながら皿を受け取る。親父の質問に対しては怪訝な顔つきである。

「いやいやいや、胃袋がそんなにでかいはず無いだろう？」

思わず体を乗り出す。近い、近い、近い！

「胃に入れば消化するでしょうが。」

義弘は親父の暑苦しい顔が急に近づいたので思わず仰け反りながら答えた。

「消化する前に次の食い物が入っていた気がするが・・・。」

あきれた様にカウンターに頬杖を突き、鼻で大きく息を吐いた。

「気のせい、気のせい。」

実際は胃液の量を調整していたのと、口の中で高速で咀嚼して細かく噛み砕いていたのだが、そんなことを話してドン引きさせることも無い。義弘は目の前の朝食に夢中になっっているふりをして煙に巻くことにした。

「そうかい・・・。」

話す気が無いことを悟ったのか親父は肩をすくめて、奥の厨房へと下がっていった。

朝食を食べながら義弘は考えていた。お題は「ペルセポネさんを出し抜きたい、できるだけ穏便に！」である。

あの人、俺をデスポイアのお守りにする気満々ですからね。それは阻止したい。でも怒らせると後が怖すぎる。俺の中の何かが言っている、『彼女を怒らせてはならない』と。

事は水面下で進めなければならない。彼女がどこで網を張っているか知れないのだから。

ペルセポネさんは俺が補佐官になりたくないことを知っている。ならばそれなりに警戒しているだろう。配下の人間に監視させていると考えて行動すべきだろう。

ここにはあくまで補佐官の仕事内容の視察という名目で来ている以上、その名目に外れる行動はとらないようにしなくては。

まずは俺の補佐官就任に反対している人が何人いて、それはどの誰か調べなければ。

とりあえずはこの町にどのくらいいるかを調べるとしよう。

補佐官としての仕事着(?)を引っ張り出し、着替えた。最初は着せられている感をひしひしと感じていたが、今ではすっかり来ている。

この服は意外と快適なのである。ゆったりとした服なので楽に着ることができると、着ている間も締め付けが無く疲労が少ない。

補佐官を辞めるとこれを手放さなくちゃいけないのか、と少しため息をつく。すでにデスポイアさんの術中に嵌ってきている義弘であった。

着替えると町に躍り出た。そもそも着替えたのは補佐官(候補)

として町を歩くことでその反応を見るためである。

その反応を見て反対派を見分けるのである。彼を視界に入れることが出来る範囲に絞ってナノマシンを散布すれば精度良く反応を探査できる。

町を適当にぶらぶらしていると早速視線の一齐射撃が始まった。視線が痛い。しかし、そんなことはおくびにも出さない。なぜなら今の行動はEISによる自動行動だからである。それにより周りの反応に集中することが出来る。

「彼が例のデスポイア様の補佐官様だよ。」

「まだ若いわね。」

「デスポイア様もまだ幼くていらっしやるからちようどいいんじゃない？」

「そうね、それに少しいい男だし。」

「どこが！？」

「少しエキゾチックじゃない？このあたりじゃ見ない顔つきだし。」

「まあ、そうね。ここのテイア様には及ばないけどね。」

……。補佐官つて、容姿審査もあるのか？そうならマイナス要素を俺はいくらもあげることが出来るぞ！言つてて悲しくなるけど！

「それにしてもペルセポネ様じきじきの御指名つてことだから優秀なんじゃないの？」

「あら？私はデスポイア様が誑たぶらかされたつて聞いたけど？」

それはどちらの間違いである。ペルセポネさんのあれは御指名なんてやさしいものではなかった、アレは命令というのだ！デスポイ



アは誑かされたのではない。俺が拐されたのだ！

道の中央で叫びたい気持ちをぐっと抑える。しかし、割かし好意的であるようだった。それは困る。こう、こいつじゃだめだと思っ  
てくれないかな？

「それにしてもなんで何であんな中級の宿から出てきたのかしら？」

「そういえば何でかしら？」

金をケチりたいからです。

「実は上流階級の出じゃないとか？」

「そうかもね。最近、多いものね。上位氏族以外の補佐官様。」

「そうそう。でもその場合って大体は上位氏族のところに養子になつたり、婿に入つたりしてんのよねえ。」

なに！聞き捨てならんな。てことはまさか俺は誰かと結婚させられることを前提にペルセポネさんは俺を補佐官にしようとしているのか！いったい誰と？！いや、この際誰かは気にしてもしかたがない。これで補佐官を拒否したい要素がまた増えた。

それにしても主婦のうわさ話というものは恐ろしいな。

「なら、上級の宿に泊まればいいじゃない。どうせ養子先にたんまり金をもらってるんでしょし。」

「きつと偉ぶらない人なんじゃない？」

「そうかも。まっすぐ前見て姿勢良く歩いてるし。頼りにはなるんじゃない？」

「そういえば、西の国境から来たらしいけど、その道中でね。」

「なになに？」

「デスポイア様と旅してきたらしいんだけど。一人もけが人が出

なかつたんですって！」

「あら、本当！？」

「すでにしつかり手綱を握ってくれてるのね。これなら安心だわ。だつて今までのデスポイア様は・・・ねえ。」

「行く先々で騒動を起こしていたものね。」

「ええ、皆天災だつていつてたものね。」

「よかつた、よかつた。」

「ここのヒュペリオン様も昔は偉い暴れん坊だつたんだよ。」

「そうなの？」

「ええ、そりやもう！癩癩起こして森を焼け野原にしちやつたこともあるし。」

「へえ。」

「まあ、開墾する手間が省けたつてティア様がおっしゃって、皆は喜んで畑にしたけど。」

「デスポイア様もこれで落ち着かれるのかね。」

「そうなればいいねえ。」

「そうそう、旅の話には続きがあつてね。」

「まだ、何かあるの？」

「何でも泊まる宿が全部安宿だつたらしいのよ。」

「デスポイア様が安宿に泊まったの！？」

「町の連中は何をしていたのかしら？」

「何でも補佐官様が希望されたとか。」

「何で？」

「さあ？変わり者なんじゃない？」

「それでね、道中その安宿に温泉を作つていつたんだつて。」

「はあ？またなんで？」

「デスポイア様なら出来るだろうけど。」

「でも初めてじゃない？私たちのためになることをデスポイア様がしてくれたのつて。」

「そうね、いいじゃない。今回の補佐官様。」

「そうね。」

・・・少し待とうか。色々突っ込みたいが、まずたんまり金なんでもってないわ！財布は軽いわ！言ってる悲しいわ！

それになんだデスポイア、お前天災認定されてんぞ！デスポイア注意報とか出てたんじゃないか！？

あとティアさん！ポジティブ過ぎです！そんなあなたにあげられます！

それに・・・けが人が出なかっただつて？出たよ！俺とか！俺とか、私とか、僕とか、拙者とか、某とか、主に俺が！ちゃっかり勘定に入れないでスルーしないで！

納得しないで！俺で納得しないで！っていうか反対派は結局あの身なりのいいおっさん達だけかよ。

もう、完全に意気消沈した俺はもうナノマシン散布をやめて、火の神殿に行ってツツパリ先生の武勇伝を聞かせてもらうことにした。

ツツパリ先生が自分の黒歴史を嬉々として語るのを面白く聞く横でティアさんの目が笑っていなかったのは内緒である。

帝国編：第二十三話 何が良けなかった、どこで間違った？え、脚本が間違っ

今あなたが不運な状態にあるなら、それはあなたがそうなるように仕向けた結果です。逆に、今あなたが幸運に恵まれているなら、それもあなたがそうなるように仕向けた結果です。

b y : ジョセフ マーフィー

帝国編：第二十四話 誰でも許容量をオーバーするとそのエネルギーは吹き出

人の脳というのはコンピュータよりエネルギー効率がいまいちという話を聞いた。

それは人の脳が波のような振動系をそのまま利用するのに対し、コンピュータはその振動を抑えて演算するためそれにエネルギーが割かれているからであるらしい。  
よく分らんかった。

とりあえず無理は疲れるということでしょう。

実際疲れるし……。

結局、突っ張り先生の長話に付き合っていたらいつの間にか朝が来ていた。目を開けたまま寝るという特殊技法をこの一夜で身に付けた俺は彼の話を文字通り話半分に聞き、ほぼ寝る事に成功した。

彼の話の大半はどこを破壊したという固有名詞が異なるだけでほぼ同じ話の繰り返しであった。彼は怪獣映画に出演すべきである。そして赤とシルバーで彩られた恥ずかしいスーツを着た変態に退治されたほうが世間のためだ。

さすがに話疲れたのか空が白む頃には船をこぎはじめ、今は既に寝息を立てている。何故おっさんの寝顔を見ながら朝を迎えなくてはならないのか！ティアさんならウエルカムであったものを！現実と妄想の境目を模索中の義弘です。

気持ち重めのため息を吐きつつ、のっそりと立ち上がるとイビキと呼ぶのもおこがましい騒音をまき散らす突っ張り先生を残して部屋を出た。

部屋を出るとティアさんがいた。このタイミングの良さはなんかなどと疑ってかかってはいけない。これは運命である。そうに違いない。そう思っておくと少し幸せになれる。

「ヨシヒロ殿、おはようございます。」

ティアさんが丁寧にも深々と頭を下げ朝の挨拶をしてくれた。この挨拶にうちの者がご迷惑をおかけしました的なメッセージを勝手に受信した。

「これはこれは、ティア殿。おはようございます。」  
「遅くまでヒュペリオン様に御付き合いただきありがとうございます。」

そうですね。あなたのご主人は相当暇を持って余してるようですね。何か趣味とか持つといいと思います。釣りとか・・・無理か。

「いえいえ、話に聞く分には面白いお話でしたし・・・。」

そう、話に聞く分には・・・だ。当事者であったかと思うと逃げたくなる、マツハで！マツパではないことを明記しておく。それでは変態である。

「そうですか・・・。最近あの方も落ち着かれてはおりますが、どうも暇を持て余しているようで・・・。」

はっはっは。定年後のおっさんですかあの人は！そして貴方はソレを心配するお母さんか！

「まるで奥さんみたいですね？」

俺はこの発言により聞きたく無かった一言を聞くことになる。

「え？」

ティアさんの呆けた顔はそれはそれで大変眼福であったが、なぜそのような顔をされるのか皆目見当がつかない。俺は思わずオウム返しにこう言った。

「え？」

「・・・。」

ティアさんがうつむきななやら考えているようだ。待つこと数分、意を決したように顔を上げた。

「お話していませんでしたね・・・。戦略級精霊術士は婚姻を執り行うことができないのですよ・・・。」

「そうですか・・・。」

ツッパリ先生は一生結婚できない男なのか・・・。俺は彼に一抹の同情の念を抱きかけた。いや、抱いていたのだこの時まで。

「ただ、正式に神殿で婚姻を精霊に報告する儀式を行えず、帝国

の台帳に記載されないという意味で・・・ですが。」

「とうとう?」

「いまいち意図が読み取れない。」

「ヒュペリオン様は半人半霊の方ですから精霊に報告するまでも無く、帝国の台帳に名前を記載するのはそもそも人だけですからその必要がないということ。」

「つまり?」

俺はだんだんいやな予感がしてきた。言わないでくれその先は出来れば聞きたくない!

「気持ちしい・・・ということでした。」

ティアさんが顔を赤らめ、うつむいてしまった。その白い肌が赤く染まるとなんともいえない色気があるが、そんな彼女を独占する男のいびきが廊下まで響いている。つまり、あれだ。内縁の妻つてやつですね? 同情の念は一気に霧散し、体の奥からふつふつと煮えたぎる何かがこみ上げてくる。その名を人は『嫉妬』という。

「そうですね・・・。大体分かりました。」

なんとなく気まずい空気が朝っぱらからあたりを漂っている。何とかこれを吹き飛ばさなくてはと悶々と思索していると、この空気を吹き飛ばしたのはティアさんのほうだった。

「・・・ですからデスポイア様も気持ちがあればヨシヒ口殿とも・・・。」

確かに吹き飛ばしたがその後には俺のブリザードが到来する。あまりに予想を超える言葉の羅列に俺は処理が追いつかず無表情に聞き返した。

「・・・はい?」

「お隠しにならなくともデスポイア様との仲むつまじいお話は聞き及んでおります。」

「・・・ちなみにどなたから?」

「ペルセポネ様です。」

あの人は・・・何を話したというのだ! いや、こちらに来る前に



紹介状を書いてもらったからそれに書いていたと見るべきか……。ガッテム！神は死んだ！

その後の俺の言葉はカラカラと音を立てて空回りを続け、最後には遙か彼方へ転がっていった。最早あの年齢不詳のお母様が蒔いた誤解の種は根を張り、強固な先入観となって植え付けられているようだった。

誤解を解くことをあきらめた俺は『ロリコンじゃないやい！』と叫ぶために森にでも行こう、そうしようとその場を後にした。

神殿から出ると俺を補佐官反対派のおっさんたちが囲んだ。今日は何だ、厄日か。おっさんに絡まれる日なのか今日は。

「君がデスポイア様を誑かしたとか言う男かね？」  
ねっとり粘つくような口調でそのおっさんは言った。

「人違いです。」

どこの誰だ？あんなガキを誑かすとはまったく世も末だ。

「一寸待ちなさい！逃げようとしても無駄だ。君がデスポイア様を誑かしたことは分かっているのだ！」

「……。」

どいつもこいつも俺を変態にしたいらしいな……。

「まったくこのような若造の、しかも余所者が補佐官とは帝国の格式も落ちたものだ。」

「……。」

別にどうでもいいわけだが。帝国の格式など知ったことではない。「どうせデスポイア様の傍で利をあさるうというのだろう？卑しいやつめ。」

俺の沈黙を肯定と受け取ったのかオジさんたちは調子に乗り始めた。

「卑しいのはどちらだか・・・。」

俺は心の声を仕舞っておけず、思わず心中を吐露してしまった。しまったと思つたときにはもう遅い。オジサンたちは色めき立ち喚きだした。

「貴様！愚弄するか！」

「下人の分際で生意気な！」

仕方が無い。こうなつたら徹底的に俺に対して悪感情を抱いてもらおう。彼らに俺の事情を説明し、納得してもらつて、彼らと手と手を携えて、にこやかに俺は補佐官を辞めるというウルトラCは夢のまた夢であつたようだ。

俺に対する悪感情を徹底的に高め、俺を排斥しようを企む様に仕向ければ結果的に俺の望みはかなう。ソレでいいじゃないか。

「根拠の無い侮辱では無いですよ。たとえばその部分八ゲ！」  
俺が指差すおっさん集団の一人が反射的にさつと頭に手をやる。

「お前には子供が3人いたな。ご近所でもおしどり夫婦と噂されているそつで結構なことだ！」

「ソレがどうした！」

「その夫の鏡のような男が月一で友人との飲み会と称して夜間しか営業しない店に通っているそつではないか？しかも、会員制で同じ性癖の連中が集まり周囲の目を気にすることなくあんなことやこんなことをしているな！詳しい内容は『卑しい』俺の口から出すのも憚られるような事をだ！」

「な、何を証拠に！」

その狼狽が何よりの証拠であるが、もう少し分かりやすい証拠を示してやるか。

「そつだな、たとえばその店の顧客リストがここにあるのだが・・・。」

おじさんがその年齢に似合わぬすばやさを発揮してソレを奪い取

った。そしてそれに目を落とすと目に見えて憔悴していく。十歳は一気に年をとったかのようだ。

「こ、これをどこで……。」

「教えると思うか？」

「つぐう。」

周りのおっさんたちもその男にさげすみの目を向け始める。

「それにそのもみ上げの男！」

体をビククツと震わせ恐るこちらを見る。おそらくこの男の中でアレかそれともアレかと色々思案しているようだ。俺の知っているのはその一割に満たないだろうがいかにもすべてを知っているという顔をしてやるう。

「お前、この町の郊外に別荘を持っているな。その地下に何を隠している？」

「何を言いがかりを！」

「そこまでの道には轍が深く残っている。相当重いもののような。お前の商っているものにはそんな重量のものはなかったはずだな。可笑しいな？」

「そ、それは……。」

「ところで最近、南方諸部族に武器が流入しているらしいな……。」

「そ、そうだな。」

「武器の輸送には認可が必要なはずだな。そんなものを無認可で扱っている人間がいるとは考えたくないが、そのルートだが……。」

「もうやめてくれ!!!」

「何故だ？俺は世間話をしているだけだ。それでこれから本番なのだが……。」

俺はこれまで知りえたこいつらの弱みを推測含めてすべてその場で暴露した。最後には皆耳をふさいで倒れ伏していた。そしてひた

すら許してくれ、許してくれと繰り返していた。

その姿にちよっとした満足感と達成感を感じ、うまいこと俺を補佐官から解放してくれることを祈って最後のせりふを放って宿に帰った。

「俺が補佐官である限り、俺はお前らのすべてを見ているぞ・・・」

「どうした？今日はやけに機嫌がいいじゃないか？」  
宿屋の親父さんが俺に声をかけてきた。そんななにやけていたかな？

「いいことっていうか・・・。すっきりはしたかな？」

「そうか、良かったな！」

「鬱憤はたまには爆発させないとね！」

「そうだな。」

この日、ヨシヒロの名は商人の間で恐怖の代名詞となるが、それを知るのはいぶ後になってからのことだった。

帝国編・第二十四話 誰でも許容量をオーバーするとそのエネルギーは吹き出

そろそろこの町からは出て少し話を進めようかと考えています

帝国編：第二十五話 輝きは過去に、苦悩は未来にある（前書き）

私たちは過去の記憶によってではなく、未来への責任によって賢くなる。

バーナード・ショー

（ノーベル文学賞受賞作家。劇作家・劇評家）

帝国編：第二十五話 輝きは過去に、苦悩は未来にある

もうこの町で出来ることは無いかと考え、テイアさんに挨拶を済ませて町を後にする。テイアさんは別れを惜しんでくれた。私も出来ることなら帰りたくない。あの親子に会いたくない。しかし、時の経過と共に負債が増えていくように感じるのだ。さて、どこに逃げようか。

・・・いや、逃げ切れる公算があるのならばとつくに逃げているのである。逃げれば損だ。それにすでにデスポイアに愛着を持ち始めている事を自覚している。あんなわがまま娘の面倒を他の誰が見るというのだろうか？それに周囲の期待を裏切れるほど肝が太くない義弘です。

人は既成事実化されると変化を受け入れやすくなる生き物らしい。彼も人間である。これも一つの『御縁』というやつなのであるかと納得しかかっているようだ。

それに近くにいた人と少し距離を置くと見方が変化するというのはよくある話である。それは近くにいるとどうしてもいいところより悪いところにも目が行くからである。

もちろん長く付き合おうと思えば悪いところも知っておいたほうがいだろうが、毎日それに触れるというのはウンザリするものである。時には距離をとることも有効だ。

また、悪いエピソードも距離をとり、時間が経てば『思い出』になり、得てして『思い出』は美化される。義弘も例に漏れずデスポイアとの間にあった良いとはいえない出来事を『思い出』へと消化したようだった。

義弘は行きと同じ速度でアウストラリス・カストルムへと帰還した。帰還すると同時にUターンをしたくなる地響きを感じていた。門の前で立ちすくむ。動かない。動けないのではない。動かない。つまりは様子見である。何が起こっているかは数パターン推測は立ち、そのすべてにデスポイアが絡んでいることは言うまでもない。

ナノマシンを散布し、都市の中を探るとデスポイアが兵士と交戦中であつた。正確には『交戦』などではなく一方的な蹂躪であつたが。

兵士は全力でデスポイアの前進を阻止していた。その兵士はペルセポネ配下の兵士でその精強さでは帝国屈指である。基本的に国境沿いを任地とする兵は精強である。精強でなければ生き残れない。それに南国境の歴史は防衛戦の歴史といってよい。兵は防衛戦になれていた。

デスポイアの前進をとどめているだけでも驚嘆に値する。攻撃を受け流し、時には牽制にしかならない全力の攻撃を加える。けが人は後ろへと運ばれ治療を受けている。完全に一個の生き物として機能していた。

しかし、これが『城外』ではなく『城内』で行われていることが異質であつたが。

感心しつつ様子見をしていると、兵の一角が崩され崩されたところから人がこちらに吹き飛ばされてくる。それに気付き、義弘は慌てて回避する。義弘が先ほどまでいた空間を人が嘘みたいに通過ししかる後に地面を滑ってやがて止まった。

そして、防壁の穴から小さな人影が飛び出してくる。義弘にはソレが何なのか観測するまでも無く分かつたが一応確認した。

その緑の髪は長く、波打つたびに光沢を放ち、その容貌は神々が



造形したかのようである。久しぶりに会うデスポイアは少し輝いて見えた。その表情を見るまでは。

義弘は大きくため息をつき、その背中を若者らしくなく曲げた。彼は俯いている。恨めしそくに地面を見ているが、視線で無くなれば最早ソレは人間ではない。

回避するための行動をどうシミュレートしても結果は同じである。うつむきつつ自分に降りかかるであろう災害がやってくるのを待っていた。今度折られるのはどこの骨だろうか。頭蓋骨は御免こうむる。命に関わるから。

しかし、待てど暮らせど激痛が義弘を襲うことは無かった。神罰が下るのを待つ厳粛な神の僕のごとく肅々と待っていたのである。これを人は諦観と呼ぶ。

代わりにやってきたのはポフンという柔らかな音と衝撃というに小さい接触があるのみだった。

胸辺りに温かみと共に何かに濡れているのに気付くも、義弘がそれを涙であることに気付くには間があった。

デスポイアは泣いていた。それを彼の胸が受けていた。彼の思考は停止した。EISが警告をしてくれなければそのままであったかも知れない。なんとも効果的な精神攻撃を考え出したものである。さてはペルセポネさんの差し金かと被害妄想の入った考えが彼の頭によぎるが小刻みにしゃくり上げるデスポイアを見ればそんな考えは吹き飛ばす。

「どこにいつていたのです？」

やっと体を離れたかと思えば少女はそんなことを口走った。まだ目頭が赤く、泣きつかれたとき特有の精神的安定状態になっていた。

「どこっってお前、そりゃ火の神殿まで行ってたんですよ。ペルセ

ポネさんに聞いていたでしょう？」

義弘はテンパって思わず敬語である。彼は状況をまだ状況を把握できていない。彼はただ補佐官に会いに行っただけである。あわよくば辞められる可能性を探りにだが。

その意図はデスポイアにはばれていないと思っていた。だから、割と安心して帰ってきたのだがそこでデスポイアが暴れていたの『これは・・・ばれたな。』と考えた。

しかし、蓋を開けてみれば彼は無事で、どこに行っていたかを聞いてくる。彼は混乱していた。

「聞きましたけど・・・。なら何故私を連れて行ってくれなかったのですか？」

デスポイアの頬は若干膨れ気味である。怒っているが別段悪感情が生まれているわけではなさそうである。

「何故って・・・。個人的な用だつたし・・・。」

「それでも私に一言言つてからでも・・・。」

「ペルセポネ様には言つてきたから良いだろう？」

「人づてに聞くのと直接聞くのでは違いますわ！」

「一緒だろ！」

「違います！私が嫌いになつてどこかに行つてしまったのかと不安になるじゃありませんか！？」

どうやら嫌われるようなことをしている自覚があるらしい。

「・・・そうか、すまん。」

ここで謝つてしまふのが義弘君である。

「そうですね。反省してください。」

機嫌が直つたのかデスポイアは義弘の胸に頬をうずめる。義弘はなんともいえず無言で空を見上げていた。

などというやり取りをしている後ろでは吹き飛ばされた兵士が担架で運ばれていき、誰もがやれやれといった風情で首を横に振って呆れ顔であった。

そして、彼の前にはこの後、修復工事をさせられることとなる彼女の破壊の爪あとが広がっていた。

義弘のいる南方から西方の地、テバイと共和国の狭間では人知れず事態は動こうとしていた。

「あれがこのテバイの主の根城かよ。しけてやがる。あれじゃあ、期待は出来ないぜ。」

赤髪の男がため息を吐いてテバイ領主のお世辞にも豪邸とはいいたくない館を見ていた。

「まだ傭兵のころの感覚が抜けないようね、ニユクス。我々は偵察に来ているのよ？」

「レアーか。分かっている。これは癖みたいなものだ。それに俺はまだ傭兵でいるつもりなんぞでな。」

「何故リユカオン様はこのような者に独立行動権をお与えになったのか、理解に苦しむわ……。」

「俺が強いからだろう？」

「お前が命令違反を繰り返すからあきらめたんでしょう？」

「それでも俺を首にしないあいつはいい雇い主だ。俺は暴れたいんだよ。でもおおっぴらにソレをやるには大儀つてのが必要でな。」

あいつはソレを俺に与えてくれる。俺はあいつの道に転がる石を取り除く。共生関係つてやつだ。」

「どうせエレボスの受け売りでしょ？あんたの頭でそんな言葉が出てくるわけ無いもの。あんたたちはホモなんじゃないかってもつばらの噂よ。とくにエレボス。あいつ女避けるし。」

「なんだそりゃ！俺は三国一の女好きだ！エレボスのアレは女嫌いって言うよりかは人嫌いだな。」

「でもあいつ中途半端にやさしいでしょ。それにあの見てくれないものだから勘違いしちゃう子がたくさんいるの。簡単になびかない

から女の狩人心をくすぐるのかしらね？」

「そうだな。あいつの近くにいと複数の視線を感じる。半分くらい分けてくれねえかな？」

「あんたは軽すぎるしあんた恋人いるから無理じゃない？」

「軽い！そんな馬鹿な！俺の一撃はかなり重いつつってんだけどな？それに俺は恋人いねえ！」

「あんたは戦争と恋仲だつて意味よ。」

「・・・」

ニユクスが何か言い返そうとすると影から人影が現れた。

「二人とも作戦行動中だぞ。」

「マダマンテウス、お前気配殺して後ろから近づくのやめろよ。うっかり殺しちゃうだろ？」

ニユクスが剣を逆手持ちでマダマンテウスの首筋に突き当てていた。マダマンテウスの頬を一筋の汗が伝う。

「・・・気を付ける。」

「おう、そうしろ。」

「・・・久しぶりにあんたの異常性を見た気がするわ。普段は只の変なやつだけど・・・」

「しかし、偵察任務つてのは暇だからいやだったが今回は只の偵察じゃないんだろ？」

ニユクスの口角が持ち上がり普通より発達した犬歯が見える。

「・・・ああ。敵勢力がどの程度力を国境に集結しているか調べるために・・・」

「突つ込めば良いんだな？」

「ただ突つ込めば良いわけじゃないわよ？敵の主力を選んで攻撃しなきゃ意味が無いわ。」

「そのために俺がいるんだろ？」

「・・・そうね。あんたのそういうことに関しては鼻が利くもの。」

「ほめてるのか？」

「ほめてるわよ？」

「もつと褒める！」

「うん、無理。」

「二人とも・・・作戦行動中。」

「さつさとあの館を襲おうぜ？テバイの領主を襲えば強いのが確実に釣れるって！」

「嬉々として言ってるのが気になるけど一理ある。じゃ、目に見える形で襲わなくちゃね。」

「おう！そういうのは大得意だ！」

そう言うや否やニユクスは館に走り出していた。

「ああ、一寸待ちなさい！まったくエレボスの気持ちがよく分かるわ！」

「・・・追う・・・。」

「・・・しかたないわね。」

「ちと物足りねえが、文句は言わんぜ！」

ニユクスの振り上げた剣がおもむろに振り下ろされる。それが平穩の終焉、動乱の幕開けであった。

帝国編：第二十五話 輝きは過去に、苦悩は未来にある（後書き）

歴史（の変化）に門を閉ざすことは出来ない。

歴史は戸を蹴破つても進入してくるからだ。

時流に乗らなければならない。

いや、それ以上に歴史を先取りしなければならない。

ゆっくり歩いていてはいけない。

走って歴史を迎えに行け！

マン・レイ

（画家・彫刻家・写真家）

戦闘編：第一話 ケチると碌な結果が待っていない でも大きな買い物はケチる

私はチャンス到来に備えて学び、いつでもすぐ仕事にかかれる態勢を整えている。

：リンカーン（アメリカ第16代大統領）

その日は昼間から夢を見ているようだった。それは目の前の光景が常識を逸脱しすぎていたからである。しかしその光景は圧倒的な存在感を持っていた。私の忠勇なる部下たちの命が散っていくのだから。まずその悪夢の始まりからして冗談みたいだった。

その男は西の森からやってきた。西の森は魔物の蠢く危険地帯と『森の民』の住む比較的安全な地帯に分かれているが、ソレがやってきたのは魔の森の方からだった。そちらからやってくるものは大抵ろくでもない。必然魔の森の方面はテバイの兵士の質、量ともに一番多く集められている。

しかし、テバイの前領主の行ってきた放蕩三昧のおかげでテバイの財布はほとんど空。その領主を見限って有能な軍人は早々に辞めている。

現在の領主が継いでからは何とか体裁を保てる程度には回復したが、他の国境沿いに位置する辺境領に比べれば紙の様な防衛力である。

国境沿いの防衛力に難があるなど国家の安全保障に大きな問題がある。そのような事態を帝都の首脳部は傍観した。政争の混乱があったことは理由にはならないだろう。何故ならすでに政争が主要人物の全滅の結果を残して10年前に終結しているのだ、10年あればいくらかでも対策を講じることが出来る期間である。

それは皆その余裕が無かったからである。飢饉があったのだ。他の領地のいつ来るか分からない敵に備えて金と食料を消費する出兵をする領主はいなかった。飢饉が過ぎてからも食料生産量は低空飛行を続け、西の脅威は無視され続けた。

話に上ることの無いものの存在はその期間に反比例するように人



々の記憶から消えてゆく。西の脅威も最早過去のものと考えられていたのである。

それも故ないことではなかった。西の『共和国』は分裂しており、統一的な帝国への侵攻は無いという見解が一般的であったからである。

襲撃当日、エオスは書類に目を落としながらも、テバイ全域の光景を机の上に据え置かれた複数の鏡に映し出していった。

視覚とはすなわち光情報である。彼女の『光』の精霊術はその光情報を鏡へと伝えていた。

しかし、彼女一人で領域全体を網羅する事は困難である。そのため、彼女は自分の臣下を各所に配置し、その目で見ている光景を鏡に断続的に映し出している。

それはさながら監視カメラのごとき光景であった。この光景を毎日見る事で、エオスは自分の行っている事の責任とそれによって引き起こされた結果を見ている。

もちろん監視の意味もあるが、それよりも彼女は自分の行った結果を確認せずにはいられなかったのである。その日課により彼女は今回助かることになる。

現在の帝国の共通認識としては、共和国統一間もないリユカオンが帝国を刺激するような事はしないと考えていた。

しかし、彼は主導権を握るには先制する必要があることも、それを効果的に行う必要がある事を知っていた。それに帝国の宰相に力イロスが就任したという情報を掴んでおり、帝国との衝突を不可避

と判断した。

そう判断してから彼が行動に移すまでが異常に速かったので、帝国の首脳部は彼の行動の転換に付いていけなかったのである。

彼女の監視網に引つかかる三人の人影があり、その人影は明らかにテバイの住民、まして森の民ではなかった。彼女は彼らが共和国の密偵であると判断した。それだけに直接的な脅威ではないと考えた。

しかし、この判断はその後の彼らの行動により誤りであった事が分かる。人影が一人、信じられない速さで迫り、彼女の部下を一刀両断した。

彼女の部下は抵抗のそぶりくらいは出来たようであるが、それを紙を引き裂くような手軽さでいとも容易く破り捨てた。

彼女は鏡に映る光景をただ呆然と眺めていたのではない。彼女は部下の一人一人の顔を知っている。その家族を、友を知っている。それを切り裂き、さらにはつまらなそうな目でその死体を見るその姿に静かに怒りを貯めたいった。

「手応えがねえ。これなら反乱鎮圧の方がまだ手応えがあったぜ。」

ニユクスは剣にこびりついた血糊を一振りで地面へと吹き飛ばす。不思議と剣には一点の曇りもなくなっていた。

「きゃああああ！」

テバイの街に女性の悲鳴が遅ればせながら発せられる。町中で突然人が殺され、その剣が自分に向くのではないかという恐怖の悲鳴であった。

しかし、彼女の予想は外れ、彼女に剣が向けられる事はなかった。むしろ彼女には騒ぎ立ててもらった方が彼の目的には好都合であっ

たのである。

先ほどの悲鳴に街の自警団が集まってくる。それを見てニユクスの笑みは深まっていった。

「団体さんでお着きだぜ！レアー、マダマンテユス！さっさと来ないと俺が独り占めしちまうぞ！」

そうして彼は自警団の方に更なる突撃を敢行した。傍目には無謀でも彼の仲間は別の心配をしていた。

「あいつ一人に任せるとこの領主の首を取りかねないわ。そこまではリユカオン様も求めてはいらっしやらない。」

「そうだな。止めなくては。」

「……あいつを？私たちが？」

「……それが我々の任務だ。」

レアーは無言で天を仰ぎ、その声が届きはしないと分かっているも、遙か西方で反乱鎮圧に向かっている彼の相棒に助けを求めた。

ニユクスが突進をかけ、先頭にいる男を斬った。またその手応えのなさに落胆しかけるが、その考えはすぐに戸惑いへと変わる。手応えがなさすぎる。しかし、斬った男は確かに死体としてそこにある。

少し考えていると後続が追撃をかけて来たのでまとめて横一文字に切り裂くがまたしても手応えが無い。さすがに不可解に思えた所、彼の同僚がやっと思いついた。

「一人で突撃しないでよ。」

「……。」

「なあ。」

「なによ。」

「こいつら手応えが無さすぎるんだが……。」

「強さ自慢？」

「いや、そのままの意味で……。斬った感触がしない。」

「あんたの剣は鉄でもバターみたいに切り裂くでしょう？」

「いや、まったく……無いんだ。」

「そんなはず……、ねえ死体は？」

「何を言ってる？そこに……、ねえな。」

先ほどニユクスが斬って捨てた筈の死体が消えていた。

「なに？幽霊と戦っていたとでも？」

「まさか！そんな筈は無い！斬った感触はしなかったが、血は出たし死体だって確かにそこにあつたんだ。」

「無いじゃない。」

二人が話をしている所が妙に明るくなり始めていた。

「なあ、暑くないか？」

「確かに、暑い。」

マダマンテユスの黒の甲冑が煙を立てて、燃え始める。

「何！？」

「一体何が！？」

反射的に彼らが上を見た事が彼らの命を救った。彼らの頭上には第二の太陽と言って差し支えない。光球が生まれていたのだ。

「なんじゃありゃ！」

三人は得体の知れないそれから距離を取った。その光球はそれに気づかないのかそのまま大きさを増していく。

「あれは……。そうか、この領主の……。」

「そういえば『光』の精霊術師だったわね。あれはエオスⅡゲルギオスⅡマニの仕業ってことかしら？」

「……おそらくは。しかし、こんなものは見た事が無いな。」

「おい、『光』の精霊術は索敵と夜の提灯代わりにしか使えない戦闘に不向きな術じゃなかったのかよ！」

「戦闘に不向きな精霊術も戦略級ともなればその規模が大きくなるだけ戦闘にも用いる事が出来るという事か。これは報告に無かったわね。」

レアーがマダマンテユスに非難のまなざしを向ける。

「……済まない。テバイの領主の能力については噂程度の情報

しか入手できなかった。」

「・・・まあ、いいわ。この能力を開戦前に知る事が出来てラッキーだと思いましょ。それでアレ・・・どうする？」

「動かないな。しかし、無視も出来ない。」

レアーが光球を指差した瞬間、その光球から光の束が彼らの足下を狙って次々と放たれ始めた。

「おいおい、マジかよ。」

「・・・撤退。」

「これはまずいわね。」

彼らが光線を避けるため死のダンスを踊りながら、光球との間に障害物がある所までなんとかたどり着いた。

「威力偵察に来たら厄介なものを引き当てちゃったわね。」  
レアーは大きくため息をつく。

「だから言っただろ？領主の館を攻めにいけばでかいのが引つかかるって。」

ニユクスがまるで褒めると言わんばかりに胸を張る。

「限度があるし、それに領主を攻めればそれを助けに軍勢が来るって事だと思つたのに・・・これじゃ、お姫様が自力で撃退しちゃうじゃない！お姫様なら大人しくしてろっての！」

「厄介なものを本番前に見つけるのが威力偵察の目的だ。想定とは違つたが目的は達したな・・・。」

「そうね・・・撤退しましょう。」

「ええ、戦わねえのか？あんな楽しそうな滅多にお目にかかれねえぞ？」

信じられないものを見る目をニユクスはしている。それを見た二人もまた、信じられないものを見る目で彼を見た。

「「お前（君）一人でやれ（やりなさい）」」

「隠れてもムダよ。私の見鏡の前に隠れる事など無意味！それに

障害物もすべて貫通できる威力がこの技にはあるのよ！これでチエックメイト！」

エオスが少々興奮気味に光線を放とうとするが、その瞬間彼女は  
ある考えに取り付かれてしまった。

（ちよつと待って。ここは町中よそれで家とか道とか壊した日にはその修理の費用がまた嵩む。彼らと光球の間には家三軒。まてまて、力加減はそこまで出来ないから彼らと光球の直線上にある建物すべてに被害が出るとすると・・・。）

彼女の優秀な頭脳は被害総額が試算されそこから導かれた結論は・・・。

街から出ないと攻撃できないわ！

「なんか知らんが、無事に撤退できたな。」

「テバイ領主エオス、噂とは違い甘い女なのかもしれない・・・。」

「なににせよリユカオン様に報告だ。」

三人は来たときの倍以上の速度で帰っていった。次に大量の軍勢と共に再来する日も近い。

エオスは自己嫌悪に陥りしばらく頭を抱えていた。

戦闘編：第一話 ケチると碌な結果が待っていない でも大きな買い物はケチる

悪の根源をなすものは、金そのものではなくて、金に対する愛である。

：スマイルズ『セルフ・ヘルプ』

戦闘編：第二話 シリアス、決して臀部の話ではない ほんとだよ（前書き）

人は死んでも、その人の影響は死ぬことはない。

キング牧師（米の公民権運動指導者）



その日の夜、テバイの兵士の火葬が領主エオスの指揮の下、厳粛に執り行われた。共和国への警戒のため、全部体を召集しての式ではなかったが、各地に分散していた部隊の半数が集まり自身の忠誠の対象が同僚を天へと送る火を燈すのを見つめていた。兵士だけではないテバイの民衆も出られる者は集まっていた。

エオスが静かに手に持つ松明を下ろし、棺一つ一つにそつと触れていくと油に火がつき棺が燃えていく。音を立てながら燃えていく火の粉があたりを飛び回り、まるで兵の魂が飛び回っているかのような光景であった。

エオスが手をあげると空へ向かって棺から光の柱があがる。それが彼女なりの弔いであった。その光柱を国境の警備に出ていて葬儀に参列できなかった僚友たちも見ていたことだろう。

それが静かに消えていくのを皆が見上げている様子をエオスは睥睨するとおもむろに口を開いた。

「今日、私たちは大切な友人を失いました。宣戦布告も無い突然の襲撃でした。」

エオスはその細身をしつかりとまっすぐ立てて話し始めた。その声は夜の静寂に良く響いた。

「卑怯とは言いません。そもそも共和国とは正式な交流などなく、同盟関係を築いていたわけではわけではないのですから。彼らを甘く見ていた私の責任です。申し訳ありません。まだ彼らの準備期間であると考えていた私の判断が間違っていたのです。」

エオスを責める声は不思議と上がってこなかった。彼らはまだ事態を把握しきれたいなかった。何故なら襲撃者がたったの三人であったという事実と、被害人数がまだ彼らの危機感を刺激するほどは多くはなかったからである。

「共和国は帝国に対する攻撃を決意したようです。この襲撃はその前哨戦のようなものです。おそらく数日中には共和国の部隊が西の森を越えてやってくることでしょう。そして現有戦力でのテバイの防衛は困難を極めます。そのためには皆さんの協力が必要なのです。」

その場にいる皆は共和国の襲撃があると知らされても、顔を見合わせるだけであった。それだけ戦乱を経験しない期間が長かったのだ。共和国は内乱に明け暮れていたので帝国と争いをするのではなく、帝国国内は飢饉はあれど戦はなかった。

「もう一度言います。共和国が数日中には進行を開始するのです！」

テバイの住人の耳に入った言葉はやっと頭までと届き、火葬で送られた兵士の棺に目を奪われ、自分たちの末路をイメージさせられた。あたりが喧騒に包まれた。

「援軍の要請はすでに十二神将の一人、ヘルメス卿に向けて発した。我々は5日持ちこたえればいい。そのために協力を頼みたい。」

先ほどまでの喧騒に希望が含まれた。『五日なら何とかなる』という考えに至ったためだ。実際边境領主の兵数では共和国の侵攻に太刀打ちできない。それに戦は兵士だけで行われるものではない。食事や装備品、寝床の確保など戦い以外の部分にも大きなウェイトを占める事業なのである。

边境領軍以外の手がどうしても必要であったのだ。

「共にこのテバイを守り支えよう！」

エオスが力をこめて声高に叫ぶと周りは歓声でソレに答えた。

エオスが退場すると行政官たちが有力者を招集し分担事項の確認

を行い始めた。そんな様子を少し離れたところから見ている四人組みがいる。その年齢構成も性別もばらばらで家族には見えない。

「いやー、美人が頼めば断れるやつはいないよねえ!？」

道化めいた態度で四人に向き直ったその二枚目面には苦笑いが貼り付けていた。

「リチャードさん。どちらかといえば皆は共和国への恐怖心で動いたといった方が正しいかもしれませんよ？困ったことになりました。」

その人の良さがにじみ出た顔には冷や汗を掻いており、それを懐から取り出した布切れで拭いている。

「そうだな。それにしてもエオスはその点、上手かったな。兵士の葬儀で共和国の脅威を強調し、その場で臣民の協力を要請すればまず断るものは居るまい。少なくともここに定住を望む者は。」

「感心しているかのように腕を組みながらなにやらうなずいている。私たちはどうしましょうか？」

不安げにそう話す彼女は仕事の途中で抜け出してきたのか、前掛けをしたままである。

「そうだな、私はとりあえず防衛施設の整備でも手伝おうかと考えているよ。見捨てるには少し長居すぎたね。巴はどうしたい？妹を見るような目で親愛を込めた声音でイレーヌは巴に言った。

「私はお食事を作るのを手伝いしようかと……。多分店長さんもそうおっしゃると思うし。」

「ふむ、私は工房で色々作るよ。領主の注文を優先して作ることになるかな？こういうときはあまり片意地張って『手伝わなきや』って考えると帰って混乱を招くからね。」

「そうですね。皆さんにも生活がありますしね。」

「私は当然、自警団に属しているからね。戦いに借り出されることになると思うよ。」

「リチャードさんが一番危険なところに行くってことですか？大

丈夫ですか？」

「まあ、絶対安全って事はないだろうね。相手がどこから攻めてくるのかと私がどこに配置されるのかによるね。」

「そうですか……。なんで戦なんかになっちゃったんだろう？」

巴が悲しげに瞳を揺らす。

「そうだね。共和国は統一まもなくで、領内に反乱が絶えないって話だったのにな。」

「共和国にとって帝国との戦は優先順位の低い事柄のはずだ。あちらのトップになにやらあせるようなことがあったと見るべきだな。」

「あせるようなこと？」

「そこまで分からないよ。帝国を攻めないとまずいとトップが考えたって事は確かだね。それこそ国家の存亡レベルで。」

「国交のない国と戦争なんて変だと思えますけど……。」

「そんなことは無いさ。交流が無くても目的の達成に必要なならば食うものに困ったとか、土地が足りなくなったりとか、第三者の脅威から逃げるためとか理由はいくらでも考えられるけど答えは出ないね。」

「……そうですか。」

「ここ最近の時代では戦争なんて無かったからね。最早教科書の中の事柄だったし、ぴんと来なくても仕方が無いよ。」

異邦人四人は生まれて初めて肌で感じる『戦争』というものを体験しようとしていた。彼らも一般教養として『戦争』を知っていたが、それは知識であって実感からは程遠かった。彼らは実際の『戦争』というものが彼らの想像を遥かに超えるものだということになる。



戦闘編：第二話 シリアス、決して臀部の話ではない ほんとだよ（後書き）

団結して良心に従って行動するならば戦争は防げる。

ジャン・アンリ・デュナン（ノーベル平和賞受賞者）

戦闘編・第三話 濁流に流れ流されもつたくさん 季語なし 字余り(前書き)

得たきものはしめて得るがよし。

見たきものはつとめて見るがよし。

又かさねて見べく得べきおりもこそと、等閑に過すべからず。

かさねてほるとぐる事はきはめてかたきものなり。

与謝蕪村(江戸時代中期の俳人・画家)

薄暗い洞窟を男が一人歩みを進めている。その歩き方は見るものが見れば戦場に身を置いてきたもの歩みであることが分かる。しかし、その身を包むものは甲冑ではない。礼服である。彼は軍人としてこの場を訪れたのではない。彼は一国の指導者としてこの場を訪れていた。

彼が洞窟を進むと自然に出来たとは到底思えない大空間にでた。そこは地下であるにも関わらず、湖があり、その中心部には小島があった。湖の湖面は不思議と青く薄っすら光っている。

彼の常人離れた視力はその小島に目的としている人物の影を捕らえた。その小島には橋が架かっておらず、小船も無い。さて、どうやって渡ったものかと思案していると、湖が二つに割れ、一筋の湖底が姿を現した。どうやら会う気があるらしいことに彼はほっと一息ついた。

「遠路はるばる良く来た、リュカオン。」

小島に着き、そこにひっそりと建てられた社に佇む小さな少女に恭しく礼をするが、驚きを隠し切れはしなかった。何故なら目の前の人物は伝承によればかれこれ200年以上生きているのだから。

「お目通り叶えて光栄です、カナリスの水巫女様。」

「ふむ、失礼だが茶は出んぞ。ここにはそういったものは無いのでな。」

目の前の少女がふっふっふと不気味な笑みを浮かべていた。

「いえいえ、持参しておりますのでお気遣いなく。」

「ここには竈も薪も無いぞ?」

「水出しの茶葉です。」

「……もう少し可愛げがあるほうが年長者には受けが良いぞ?」



「好かれるためにここに来たものではありません。」

「ほう？」

いかにも意外なことを言うといった態度で片眉をあげる巫女にリユカオンは苛立ちを覚えた。

「すべてご存知なのでしょう？水鏡の力をお持ちのあなた様ならば。」

「はて？ワシの水鏡は水のある場所しか見えんでなすべては知らんよ。」

「人のあるところに水の無いところがいかにありますか？人の生活圏はすべて網羅しているらっしゃるのでは？」

「・・・ふん、まあおぬしがここに来た理由くらいは想像がつく。」

「話が早くて助かります。では我が方の窮状もご存知で？」

「帝国の動きがきな臭くなっておるようじゃな。」

「今年度中には我が共和国への侵攻が開始されると見ております。」

「まあ、そういうこともあるじゃろうな。」

「・・・人事のようにおっしゃる。」

巫女は薄ら笑いを浮かべて嘲笑するように言った。

「まさしく。人事であるよ？」

「帝国と戦になれば多くの人間が死にます！」

リユカオンは激昂した。彼は人の力の限界があることを知っているので、どうにもならないことがあるのを知っている。それだけにどうにかできる力を持ちながら何もしようとしない彼女に本気で腹を立てていた。

「だからどうした。人は殺しあうがどうせ殺しつくすことは無い。同種に対してそこまで冷酷になりきれないのもまた人間だ。共和国は滅びるかも知れないが、元共和国の人間は生き残るぞ？」

「・・・そのような言葉遊びで私が納得すると思いか？」

「思わぬし、納得させようとも思っては居らぬよ？ただそれでお

ぬしは何をしたい？」

「救える命を救いたい。」

「それでワシに対帝国戦の助力を請いに来たか？」

「そのとおりです。帝国の戦力に対してこちらの戦力は……。」

「おぬし、まだ軍人であるころの考え方が抜けておらぬようじやな？ いやまだ軍人だったか。総司令官？」

「今、茶化さないでいただきたい。」

「おぬしの救う命に帝国の人間の命は含まれては居らんのか？」

「……え？」

「だから、ワシが参戦すれば多少力にはなれるやもしれん。しかし、帝国の人間がその分死ぬぞ。」

「私は共和国の人間です。帝国の人間のことでまで責任をもてません。」

「責任を取れないのならば戦などするな。」

「帝国の方が仕掛けて来るのです！」

「確証は無いな。勝手にお前がおびえているだけかもしれないぞ？」

「確証はありません。しかし、万一侵攻されればこちらはひとたまりもありません。一国の長としてその可能性のために無策ではいられません。」

「それで先制攻撃の準備か。」

「それ以外に方法はありません。長期戦になれば国力の差に押しつぶされるのはこちらです！ 早期に決着をつけるには先制攻撃で機先を制して、奇襲を以て敵大将の首を取るしか……。」

「だからお前は軍人なのだ、戦による解決法しか知らぬ。」

「時間が無いのです……。話し合いの場を作るのにも戦が必要なのです。」

「……もういい。お前の言いたいことは分かった。ワシも共和国には浅からぬ縁がある。帝国への攻撃には助力はせぬが、共和国に侵入した帝国兵の排除はしてやろう。それでいいか？」

「……分かりました。よろしくお願いいたします。」

「では、もう帰れ、小僧。ワシをこの穴倉から引っ張り出そうとした心意気だけは認めてやろうよ。」

巫女が言い終わるや否や、リュカオンは圧倒的水量に押し流され洞窟から流れ出した。まるで彼の現状を象徴しているようであった。

「お話はいかがでした？」

体中が水浸しになり服が水を吸っていて思うように起き上がれないリュカオンを見下ろしながら、初老の男がニコニコと笑い、着替えと布を手にとっていった。

「オウイデイウスか、お前良く俺がここに流れてくると分かったな。」

苦笑いしながらムクリと体を起こし布を受け取って顔を拭いた。

「私も以前、水巫女にはお会いしたことがございます。」

「そうか。それでここに同じように流されたのだな？」

「そうです。気付けばここにおりました。」

「そうか。お説教を喰らってしまったよ……。」

笑いながら頭を振ると水しびきが辺りに飛ぶ。時間は昼で水しびきが陽光を反射しきらきらと輝いている。

「それは良いですね。気に入らなければ話すらさせてもらえず問答無用で流されますので。」

「……それは初耳だな。なぜ事前に言わない？」

リュカオンが服を脱ぐ手をピタリと止め、ジト目でオウイデイウスをにらむ。

「私はリュカオン様を信じておりますから。」

相変わらずの笑みを浮かべたまま、濡れた服を受け取る。

「……まあいい。結局、帝国侵攻には水巫女の手を借りることはできない。しかし、共和国へ帝国兵が侵入すれば排除はしてくれるそうだ。」

濡れた体を乾いた布で拭いながら事も無げに言う。

「……ほう、あの世捨て人がよく……。」

「とうわけで帝国からの諜報員の侵入はとりあえず心配する必要は無くなった。」

「こちらの侵攻の時期を悟られずに準備に専念できますな。」

「そういうことだ。」

リュカオンが着替え終わると用意のいい副官の用意した馬にまたがり、共和国首都へと馬首を廻らした。その道すがら帝国への先行偵察の面子を思案していた。

（これまで帝国との国境を任せてきたマダマンテユスは外せないな。しかし、マダマンテユスは慎重な分、得られる情報が乏しくなる恐れがある。ツキと勘を兼ね備えた奴……。ニユクスだな。そうなるとニユクスのお目付け役であるエレボスを同行させるか。いや奴には西方の反乱鎮圧を任せていたな。お目付け役を変更するか。レアーが適任か。他のやつだと迎合して一緒に暴走するか、止めきれずに呆然とする奴しかないからな。）

リュカオンが決めた面子での先行偵察で、今なら国境に戦力は集中していないことは迎撃に領主単体の攻撃しかなかったことから明白であった。彼女を抑えれば他はどうとでもなる。彼は帝国侵攻に戦略級精霊術師を三人派遣することに決めた。彼らが命令を素直に聞くかは分からないが……。

人間追い詰められると力が出るものだ。

こんなにも俺の人生に妨害が多いのを見ると、運命はよほど俺を大人物に仕立てようとしているに違いない。

シラー（詩人、思想家）

戦闘編：第四話

子は親を見て育つ

どこを見るかは子供次第

どこを見せる

The first step is always the hardest.

始めは全体の半ばである。

プラトン

(紀元前4世紀・古代ギリシャの哲学者、前427～前347)  
「法律」

共和国の軍靴が帝国の地を汚さなかつた原因は共和国が分裂状態にあつたこと以外にもあつた。

それは共和国と帝国との間にある深い森である。けして人間に抜られない森ではない。実際、少人数であれば比較的簡単に抜かれる。

しかし、軍隊は集団となることで初めて意思の伝達が出来る。密集隊形の卒業を可能にするには情報通信技術の発達を待たなくてはならない。そんな軍隊の特性上、部隊がバラけて仕舞う森での移動は非常に困難と言わざるを得ない。

それに森には一部、魔物も出現する。それも巧妙に擬態しているものだから人的被害も無視できないものになる。

もう一つ、皆口には出さないが森に入りたがらない理由がある。それは『森の民』の村が点在することにある。現在ではその数も減少したということだが、一小国くらいの人数が合計したらおり、森は彼らのホームである。しかも住人全員がなんらかの戦闘能力を持つという。

そんな彼らが帝国、共和国どちらかに加担すればそれは大きく片方に利することになるが、彼らが誰かの風下に立つことを許したことは無い。逆に森から出ることもまれである。

『森の民』が史実に登場するのは帝国建国時まで遡る。彼らは帝国建国時に何らかの功績があつたようで初代は彼らと不可侵を約束し森での居住を許可したという。しかし、これはどうだろう？ 帝国の人間が彼らの特殊性を漠然と恐れたからでは無いか？ 彼らは戦闘時に体の一部を変化させて戦つたという。

その特殊性は長い歴史に埋もれるように忘れられていった。それ

を再び思い出させた者がいる。それがオウイディウスである。彼が表舞台に顔を出したのは16歳のときである。

戦場で彼の姿を見た人間は皆本能的にソレを恐れた。戦闘時の彼の体は2mを軽く超え、口には鋭い犬歯が列を成し、手には鋭い爪が鈍く輝く。その姿はまさに狼。傭兵としての彼の字が「人狼」となることに時間はかからなかった。

彼の活躍は彼を戦場での恐怖の代名詞にした。腕を振るえば幾人からなる隊列を崩し、その爪にかかれば胴を裂かれ血の雨が降る。それに何より彼はその脚力により、常人を遙かに超える速さで敵大将に接近し首を狩り採った。

彼の華々しい戦果はある日を境にピタリと終わる。彼が再び現れたときには彼は一人の若者の傍らにいた。その経緯を知るものは誰もいない。

その彼は『森の民』の村の一つを訪れていた。彼はリュカオンの命でここにいた。しかしその命令が徒勞に終わることは彼が一番良く知っていた。何故ならそれは彼の一度捨てた故郷だからだ。それはリュカオンも知っているはずである。つまりこれはリュカオンの『里帰り』の命令であることは明白であった。オウイディウスは自分の若き主人の甘さとやさしさに思わず頬をほころばせる。

音も無く部屋に姿を現した人影に部屋の主の反応は閉じていた目を開いただけであった。その男はすでに老境に入っただけだったが、その威圧感はまだ健在であった。

「ご無沙汰しております、父上。」

おそらく一生頭が上がりないだろう男にオウイディウスは深々と頭を垂れた。

「よく顔を出せたものだ。お前はもはやこの村から出た者。つま



りはよそ者じゃ。そのお前を仲間とは誰も思わん。」

男は苦々しく吐き捨てた。彼は成長した自分の息子の姿に一瞬、目を細ませた。

「・・・分かつている。俺の手は狩るべき獲物以外の血に汚れている。村の掟はことごとく破ってきた。」

オウイデウスはじつと自分の手を見る。そこには手の皺以外にも傷跡が無数に刻み込まれていた。

「そうか、そこまで落ちたか。それで底まで落ちて何を見た？」

「何も。何も無いことが分かった。」

「それを悟ればこそ我々は彼の国と距離をとってきたのだ・・・。」

「

「ああ、俺は間違えた、親父。」

「・・・戻つては来れんのか？」

「これまでしてきた事にけりをつけなければならん。」

「・・・。」

「俺は帝国に牙を向ける。」

「・・・死ぬな。」

「それは約束できない。」

オウイデウスは他の村の住人に気付かれないように村を出た。

その目には涙など浮かんではいなかった。

戦争の時期を一番先に知る者はいったい誰だろうか？仕掛ける側の指導者だろう。ではその次は？それは実は商人だったりする。

物資の流通に目を配っている商人ならばその量と種類から戦争に必要な物資が運ばれていることに気付き、その規模まで推測する。

戦争の有る無しは非常に重要な情報である。これまでに無い統制を受けて荷を運ばなくなるといふ負の要素があることもそうだが、なにより戦場が一大消費地であることが商人の関心を引くのである。つまり商売のチャンスでもあるということである。

当然、リュカオンはそんなことは先刻承知である。それゆえ隠すことに限界があることも。それでも彼は出兵の時期をぎりぎりまで隠した。そしてそれは半ば成功した。

その手法は実に単純である。少しずつ運んだ。そして必要量を分散して貯蔵し、それを軍勢を集結させると共に集めていった。

気付かれないくらいに分散させるということはその管理が複雑になるということである。それを実現させた財務長官がリュカオンの本陣天幕の下で、死んでいる。もちろん比喩である。

「・・・さすがに無理をさせすぎたか？」

リュカオンが深い眠りの底へと落ちていった部下を横目に見て言った。若干の罪悪感が見える。

「そうですね。彼の元で優秀な官僚が育ちつつあるとはいえ、いかにせん増え続ける案件を処理する人員が慢性的に不足してますからね。」

三十才くらいに見える髪を後ろに撫で付けた男が人事のように嘆息する。その顔には常に笑顔を絶やさない。この男の分厚い面の皮を剥ぎ取ってやりたい衝動にリュカオンは駆られるがぐつと我慢する。

「エピメーテウス、お前にも手伝って貰いたかったが帝国の内情に明るい諜報活動が出来る者がお前以外いなかったからな。長い間ご苦労だった。パンドラと積もる話もあるだろう。この後は好きにしてくれていい。」

リュカオンは本音を言えばこの男にその任務を任せるのには大きな不安があった。公にはしていないが彼の情報網に引っかかった出自に問題があった。

「それはお心遣い感謝いたします、リュカオン様。」

「それで、帝都の様子はどうだ？」

「相変わらずでございます。」

「そんな具体性の無い報告を聞きたいんじゃないぞ？」

リュカオンは肩眉を跳ね上げた。

「相変わらず腑抜けていると、言うことです。上層部は未だに西方への危機意識に目覚めてはいません。気付いているのはおそらくカイロスと、ヘーラーくらいでしょうか？明確な行動には出ていないようですが、この二人は確実にこちらの軍事行動を察しています。時期までは計れてはいないようですが。」

「それはどこから判断した？」

「さすがにヘーラーには近づけません、カイロスとその周囲に  
なら私の『影』を紛れ込ませることは可能ですから。彼もヘーラー  
のことは無視できないようで良く調べていました。」

「不和の種がある？」

「かなり一方的な不和ですが。十二神将は基本的に共和国との戦  
に反対のようです。今は国内の整備と北方の支援に目を向けるべき  
だと考えているようです。」

エピメーテウスは肩をすくめて言った。

「かつての同僚のことは良く分かるということか？」

エピメーテウスは笑うばかりで無言である。何も話す気が無いと  
きの彼の消極的な意思表示である。その様子に追求をあきらめため  
息を吐く。

「ヘーラーの元にはあのアレクシオスがいたはずだな？」

エピメーテウスは思わず目を丸くする。

「良くご存知ですね。」

「茶化すな。奴がこちらの鮮度のいい情報をヘーラーに送ってい  
るのではないのか？」

リュカオンが今、一番気にしているのはアレクシオスの動向であ  
った。

「私もそれが気になったので調べましたが彼は今、弟子を連れて  
東へ向かっているそうです。」

「弟子？」

「何でも赤い髪の美女だそうで、あの小僧も相変わらずのようで

す。」

エピメーテウスの笑みが作りっぱさが抜けて本当に楽しそうに笑っていた。それを見たリュカオンが思わずぎよっとしてしまう。

「お前はアレクシオスを見知っているのか？」

「まあ、彼を拾って育てたのは私ですし……。」

リュカオンは思わず悲鳴を上げそうになるのをなんとか耐え、言葉をつむぐ。

「お前が……子育て？まともに育つわけが……。だから変人なのか。」

「非常に失礼なことをおっしゃる。彼には元々変人の気質があったのですよ。まあ、止めませんでした。」

「いや止める。」

思わずリュカオンは突っ込んでいた。

「戦略級精霊術師は基本的に自由でなくてはいけません。いや、自立……というべきかな？何者にも左右されないからこそ、その存在を皆受け入れられるのですよ。だから私は止めません。」

「……。まあ、いい。本筋から外れすぎた。では、今西国境には戦略級は一人か。」

「正確には一人もいませんが。テバイの領主はまだ『洗礼』を受けてませんからね。」

「『洗礼』？」

「これは戦略級精霊術師の秘事に関する事なのでこれは教えられません。」

相変わらずの笑みのまま人差し指を口元に持つてくる。

「……。今回の戦いに関係はしないのだな？」

「まあ、しないでしょな。」

「お前は何故その秘事を知っている？」

「たまたま知ったんですよ。」

「……。」

リュカオンはエピメーテウスに疑惑の目を向けるが、まったく意

に介さず背をぴんと張りつつ受け流している。

「西方担当のヘルメスの動きは？」

「彼は相変わらず狸ですね。何も手の内を明かしてくれません。」  
リュカオンが内心「お前よりもか？」と考えていると、その心の中をのぞいたのかのようにエピメーテウスはさらに続ける。

「私よりも一枚上手ですね……。自身の部下を駒のように泳がせている。一見、彼の部下はそれぞれがバラバラの動きをしながら一貫性が無いように見える。しかし、彼の意図通りに確実に事態は進行している。そういう男です。彼の意図はなかなか読めませんよ？あなたも彼を危惧しておいでなのでしょう？だから大規模な戦時物資の調整までも行なった。」

「……そうだ。」

正直、リュカオンは彼の行動に後手後手で行動し、あせりの見える年若い領主はさほど注視していない。いくらかこちらが蠢動しても子揺るぎもしない西方十二神将をこそ彼は恐れた。

「彼の動かせる現有兵数一個兵団、5万。これは動きません。彼が周辺の諸侯の兵を糾合して15万といったところです。今のところ出兵の気配はありませんでした。まあ、彼がこちらと同じ事をしていれば一概には言えませんが。」

「奴がこちらに攻めるとすればこちらが帝都へ向かう途中の補給線を絶ちにくるな。出来るなら早期に戦場に引きずり出して、後顧の憂いを絶ちたいところだが。」

「その為の種はすでに植えているのでしょうか？」

エピメーテウスがその薄目を少し開ける。

「……その種は芽吹くか芽吹かないかはヘルメス次第だ。」

天幕の下、リュカオンは暗い笑みを浮かべた。



戦闘編：第四話

子は親を見て育つ

どこを見るかは子供次第

どこを見せる

事件の渦中に入ってしまつと、人間はもはやそれを怖れはしない。

サン・テグジュペリ

(20世紀前半フランスの作家、1900～1944)

戦闘編：第五話 いい嘘はWhite Lieと呼ばれる では悪い嘘はBlack Lie

嘘ばかりつく人間だと思えば、こちらは正反対を信じていねばよい。  
嘘と真実を使い分けるからやっかいである。

モンテーニュ「ミシェル・ド・モンテーニュ」

(16世紀フランスの思想家・哲学者、1533～1592)  
「随想録」



帝国と共和国に明確な国境線は無い。ただ森があるのみである。

そのため国境沿いに防壁が張り巡らされているわけではない。

小規模な監視塔がいくつも建てられ、昼間の天候のいい日は狼煙、夜間は火、連絡不能時は早馬を出す。防壁は各都市、町ごとにあり、そこに立てこもり援軍を待つのが常態となっている。

マニ領には大小あわせて12の町、53の村、そして主要都市テバイがある。そしてテバイを中心に街道が敷かれ、各町、村との連絡を欠かさず行っている。

その行き来が最近慌しくなった原因は今や子供でも知っている。皆、夜は家から出ずに不安に怯え、防壁の周りにはかがり火が夜の闇を照らしていた。自然皆口数は少なく、ただ家畜の泣き声や虫の音、時折赤子の鳴き声だけがただ響くばかりであった。

マニ領全体を包む静寂を最初に破ったのは、エオスがこれだけは避けられぬと無理をして林立させた簡易監視塔で見張りをしている男であった。

「てっ敵襲！西の森から敵襲！敵の数・・・不明。しかし、多いぞ！畜生！奴らかがり火も焚かずどうやって森を！」

西の森から軽装ながら急所を重点的に防御する防具を身につけた軍勢が溢れるように、しかし静かに姿を現していた。それはさながら蟻の巣を壊したときに兵隊蟻がわっと這い出てきた、そんな光景であった。

「すぐに合図と早馬を……」

監視していた男の意識はそこで途絶えた。自分を殺した者の姿すら見ることは叶わなかった。

「なかなか目がいい兵を監視に当てていますね。関心、関心。どうやら基本的な帝王学は学んだようですね、エオス。あの小さかった子供が成長したものです。オジサンが褒めてあげよう。」

エピメーテウスがその影で以て監視塔の周辺の兵を軒並み蹂躪しながら、ゆっくりと歩みを進め倒れている監視兵の元までやって来て、睥睨した。おもむろにその死体の頭をつかむと無造作に自分の目線まで持ち上げ目を合わせ言った。

「見ているのでしょうか、エオス？この目を通して。良い部下をもって幸せ者ですね。死後まで君の役に立とうとは見上げた忠誠心。あの兄の下から良く離れずに残ったものだ。久しぶりだね。もうすぐ君の元まで会いに行くよ。」

その目は口元ほどには笑っていなかった。そうしてエピメーテウスは無造作に手につかんでいたものを放り出した。

エオスは思わず後ずさる。自然体が震えだし、その震えは徐々に大きくなって全身を駆け抜けた。

「エピメーテウス……叔父様。そんな……。まさか……。」  
エオスは吹雪の中のように自分の体を抱いていた。そうしている間にも共和国の兵はその歩みを止めるはずもなく。近隣の村を襲撃した。

エオスが自領の町、村に伝令を送り、共和国急襲を伝える間にも共和国は7つの町、32の村を陥落させていた。

共和国は軍勢をあえて分散させていた。それは常態では下策であるが、それでもなお領主軍の迎撃を跳ね返した。

理由は単純。分散させてもなお、領主軍を圧倒するだけの数を送ったのである。

単純だがそれは不可能とされてきただけの理由がある。それは補給である。それだけの人数を養うだけの食料、武器の補給が間に合うはずが無い。深い森が間にあるのだから運ぶのにどれだけの時間がかかることか。

共和国はこれまた単純かつ力技で解決する。森に道を作ったのだ。それも一夜で。

それを可能にしたのはリュカオンが共和国の軍の任務に公共事業を当てたことにある。彼が共和国を名目上統一した後、その軍を一本化した。その際の改革で軍の一部は公共事業を行ってきた。主に土木作業である。これは領内活性化と市民への人気取りと目されてきた。それだけでなくこういった使い方をしてきたのである。組織だった工事に手馴れていたのである。

組織だった行動で共和国と帝国は一本道で結ばれた。さすがに石やレンガで舗装された道ではないが、その幅は三頭立ての馬車がすれ違ってもなお余裕のあるほどで、その路面は滑らかにされていた。

森の出口には食料、武器の集積場が設けられ本陣もそこにある。総大将がそこが重要拠点であると認識している証左でもあった。

「テバイの街道の6割を掌握いたしました。」

「テバイ領の村落は抗戦の意思は無く皆、領主の下へと逃がしました。」

「抗戦の意思を示す町が未だ開門せず粘っておりますが、陥落は目の前です。」

リュカオンは静かに部下の報告を聞いている。今のところ予想外の報告が無いのか唯頷くのみである。報告にあがった部下はちらり

と司令官の横の人物に目をむけ慌てて目をそむけそそくさと退出した。

「順調ね、リユカオン。」

戦場の本陣の天幕の下であるというのに、その格好は防御力に欠けるというか軽装であり、その体勢もうつ伏せで、その脚をぶらぶらとさせ、部下が報告に上がるたびにその視線を浴びている。

「順調すぎる。テバイの領主軍の反撃がお座成りすぎる。領内深くに誘い込むつもりか？」

男はまったく隣の存在に気をとられているそぶりを見せず、考えに没頭し始めている。

「あなたの使った手よね？でもそれは無いんじゃない？誘い込んだところすでに大勢は決まっているでしょう？そういう風にあなたが計画したのだから。すでに街道を封鎖して各町が結束して反抗することはできない。足並みのそろわない軍勢に後背を衝かれても対応できるだけの練度と数に差があるのでわないかしら？この少女領主は軍をテバイに集結させるつもりでしょう。そのための時間稼ぎに過ぎない。そういう結論があなたの中にも出ているのではなくて？」

リユカオンは隣に目をやりため息をついた。

「お前は心まで読めるのか？」

「そういう匂いがあっただけよ。」

「では、そろそろ分散させた兵力を集中させてテバイを叩くか。」

「でも、集結させるのが目的で誘っているのかも知れないわよ？」

「・・・パンドラ、お前は人を惑わせるようなことを。」

「これくらいで惑うような男の傍にいるつもりは無いのだけど？」

パンドラの眼光が普段無いくらいに輝く。

「まあ、な。兵を集める隙を狙ってくるかもしれないが、大兵力が動いている形跡は今のところ無い。各軍団でそれぞれ対処できることだ。それに緊密に連絡は取り合わせてある。おのおの、三個軍

団ごとが集結できるように訓練も積んできた。」

「テバイを攻めている間に他の領の軍が責めてくるかも知れないわよ?」

「それも織り込み済みだ。帝国は法で他の領に軍勢を持ち込むことは出来ない。その超法規的措置を採れる立場の人間は限られている。」

「十二神将……。」

「西の管轄はヘルメス、奴がどう動くかが鍵だ。」  
リュカオンは腰の剣に思わず握り締めた。

「その……例の秘策とやらは大丈夫なの?」

「こればかりは確かなことはいえないな。」

「ちよつと……。」

「しかし、自信はある。ヘルメスの動向を見定めることはこれで出来るはずだ。」

「ずいぶん自信なこと……。そのためにエピメーテウスを連れて来たの?それに副官にも何かやらせているみたいだし。」

「まあ、二人がこの作戦の要だな。」

「そう、エピメーテウスを貸してあげた礼はいずれしてもらおうから……。」

「一応俺は共和国の全権を握る人間なんだが?」

「それはそれ、これはこれよ?」

「そうかい……。」

リュカオンは本日何回目になるか分からないため息をつき、本陣から北の方角にいるであろう二人の作戦の成功を心から祈っていた。

テバイの城門には大勢の避難民が押し寄せていた。彼らの受け入れ態勢を整えるだけでかなりの人手が割かれていた。

「……何故私とその責任者をやらされているのでしょうか?」

避難民の列の先頭には椅子に座り、机の上の書類に書き込みを続

ける男がため息をついた。

「まあ、仕方がないよ。ヤンは工房の主計係も兼ねてたし、その評判が良くて事務仕事をかなり任されていたからね。」

嘆息してイレー又はヤンをなだめるように言った。

「私は技術者なのですが。」

「私だつてそうだよ。」

イレー又はかなりの速さで書類に名前と出身地と家族構成と持病の有無などの情報を書き込んでいく。

「ああ、山に入って未知の鉱物との出会いに溢れていた数日前の平穩を返してください！」

嘆きながらもその手は休まず、横からイレー又はが渡してくる書類から居住区の指定と必要な物品の種類、量などを即決して書類に書き込んでいく。

「私だつて道具を作つてないよ。油の匂いだつて数日嗅いでない。溶接器具もグラインダーも無いけど、その分創意工夫に溢れた私の創作の時間を返してくれ！」

そんな不満を西に向かつて叫ぶ二人を少し離れたところにいるテバイの官僚は呆然と見ていた。

テバイの一角にある『憩いの我が家亭』には通常の倍以上の客が詰め掛けていた。客といつても払う金を持たない客がほとんどであったが。

「トモエ、交代だ。少し休め。このペースじゃ体がもたない。」

「分かりました、店長！」

厨房は余りの需要の多さに皆目を血走らせている。その熱気の渦から少しはなれた休憩スペースにトモエは座った。

「ふう。」

トモエはため息をつく。次にはさらに深いため息をついた。休憩スペースといつても、元々あつた従業員ようのスペースも取られてしまつて、今は店の裏の倉庫がそれに当てられている。

「食料の残りが不安だなあ。」

倉庫の食料の貯蔵量にトモエは思わず不安をもらす。普段であればこの程度の貯蔵で十分なのだがあの消費量では……。城からの配分があるとはいえ、何時この食料が消えてしまうのではないかという不安に駆られてしまふ。

「まず、調味料がねえ……。ぜんぜん足りない。」

戦争中はまず、嗜好品から足りなくなるのは世の常である。他に優先されるものが通常より増えるからである。

「リチャードさん、無事かなあ？」

ため息をつきながら、リチャードが派遣された西の地に向かって目を向けた。

「何故俺がこんなことを？」

リチャードは思わず言つても仕方ない愚痴をこぼす。

「何故つて自警団だからさ！」

自警団であることを誇りに思っていることがありありと分かる男がいた。その輝く少年のような目をした団長を見て二の句が告げないリチャードであった。余りの暑苦しさに思わず顔をしかめてしまふ。

「もうちよつと損得勘定の感覚を養いましょうよ、団長。」

リチャードはこの団長をみて扱い易そうと高をくくつて入団した自分を殴りたくなってきた。

「何を言うんだ、リチャード団員！市民の安全のために先行偵察を買つて出るのは当たり前じゃないか！」

団長の白く整った歯列が輝いている。リチャードは思った。何時の時代のアメリカ人？と。

「なにも自警団会議で立候補しなくても……。」

「まったく、他の自警団の連中は腰抜けぞろいだ！先行偵察任務が要請されてすぐに手を上げないとはけしからん。」

二の足を踏まないあんたのほうが何かが欠如しているよ、慎重さとか、思慮深さとか。というか熱意以外になんか持つてるのか、この男。

「まあ、引き受けてしまったからには何か情報を持ち帰りましょ  
うか……。」

「うん！」

晴れやかな何の不安も無い団長の顔を見ていると何だか色々考えている自分がバカらしくなってくるリチャードであった。

「ふふふ。」

「何を笑っている？」

オウイデイウスは隣の男が嫌いだった。その顔に張り付いた笑みが嫌いだった。

「いや、その森に隠れているらしい二人組みの会話が面白くて  
ですね。」

「……確かにいるが会話など聞き取れる距離では無いぞ？」

本来見ることも叶わない距離である。それが見えるオウイデイウスもけして常人でありえなかった。

「いえいえ、彼らの影の動きは見えますからそこから唇の動きを  
読めば……ねえ。」

「……化け物め。」

「私からすればこのような自分の部族を巻き込みかねない詐術に  
加担するあなたのほうがよほど『化け物』です。」

二人の視線が熱い火花を散らしているがソレをまったく気にせず  
ニクスは話に入ってきた。

「んな事はどうでも良いんだよ！ さつさと作戦やら言うのを始め  
ようぜ！ いやー、ただ暴れるだけで良いなんて楽な任務だな。」

能天気な男の言に先ほどまでの空気は雲散霧消し、二人は思わず  
笑みを浮かべる。



「そうもいかん。もつと目に触れるように暴れなくては。」

「そう、この作戦の要は出来るだけ多くの人間に目撃させて、信憑性のある『噂』を流すことにあるのですから。」

「良く分からんが派手に行けばいいんだらう？」

二人は唯ため息を吐くばかりであった。その背後には共和国の軍装とは異なる兵装をした一団がその号令を待ち構えて蠢いていた。

戦闘編：第五話 いい嘘はWhite Lieと呼ばれる では悪い嘘はBlack Lie

真実と虚偽は、言葉の属性であって、物事の属性ではない。そして、言葉がないところには、真実も虚偽もない。

トーマス・ホブズ「Thomas Hobbes」

(イングランドの思想家・哲学者、1588～1679)

「リヴァイアサン」

戦闘編：第六話 天恵と天災は紙一重（前書き）

Dream lofty dreams, and as you  
dream, so you shall become.  
Your vision is the promise of  
what you shall one day be; you  
idealise the prophecy of what  
you shall at last unveil.

気高い夢を見ることだ。あなたは、あなたが夢見たものになるだろう。あなたの理想は、あなたがやがて何になるかの予言である。

ジェームズ・アレン（イギリスの思想家）

テバイの領主は毅然としていた。決してその背を曲げる事無く、目線は泳いではない。表情を消してしまっている彼女の顔の皮の裏側では様々な思考が、感情が錯綜していた。

領民を避難させるべきなのではないか？

包囲されてからでは遅い。

しかし、非難させてその後、領民は帰ってくるのか？

こんな魅力の無い領地に帰ってくる者がいるのか？

それに共和国の軍勢がここまで到着するまでに避難は完了するの  
か？

すでに都市機能を圧迫するまでに避難民が溢れてしまっている。

人減らしをしなければ、生活が成り立たぬ。

何故、援軍はまだ来ない？

見捨てられた？これまで帝国へ税を払い続けて来たのだ。それで  
援軍が来ないのでは詐欺ではないか？

ヘルメスのエロ親父。私自身が泣きつくのを待ってるんじゃないか  
ろうな？

いやいや、さすがに・・・ない・・・わよね？

それに、エピメーテウス叔父さま敵に付くとは、厄介、というか  
こちらの手のうちは読まれるでしょうね。

私のような小娘ではやはり太刀打ちできないのか・・・。

テバイ領主、エオスには苦悩する時間は潤沢には残されてはいない。最終的に彼女は領民の一部を他領に避難させる事を決断した。彼女とて帝国の領主としての責任を果たさなくてはならない。すなわち、帝都への防壁としての役割を。

帝都アスンシオンに共和国襲来の報がもたらされたのは、襲撃から五日後の事だった。そのときには既にテバイ領の奥深くまで侵入を許していた。

謁見の間、その中央に位置する一段と高い場所に座する若者が虚ろな目をその膝下に向けている。彼が何を見ているのか誰も知らない。そのガラス玉のような目がただ目の前の情景を映しているだけであった。

今現在彼の目に映っているのは騎士団の使者である。騎士団は全員が騎馬隊により構成されているので、その職務内容は伝令に多用される。その中でも皇帝に謁見を許される人間は限られている。彼はその騎士団長である。その騎士団長の報告の声が謁見の間に低く響く。

「やはり来たか！」

共和国の侵攻を予想していただけに宰相のカイロスは憤りを隠せない。こめかみには目に見えて血管が浮き出ている。

独自の情報網で共和国の動向を探っていた彼はまず、自領の兵の進軍準備を整えていた。彼の宰相として出来る事は意外と少ない。辺境領に対する宰相の権限は非常に限られている。帝国がその領地を広げすぎたおかげで、帝都からトップダウンに指令を下す事は、命令の時間差が生じ過ぎ問題視され、辺境領ではその領主と担当の十二神将の命令が最優先される。

宰相の権限が直接及ぶ地域は帝国の直轄地のみとされた。後は帝国法における、議会招集権限とその議決権、臨時法の制定のみである。

彼はその性格から即時即決即時速攻をモットーとしているのである。しかし、彼は帝国の現状がもどかしくて仕方が無いのである。しかし、彼は帝国の現

状を憂える人間の一人であり、場当たりの対処しか出来ない一領主の立場から、帝国宰相となり抜本的な改革を行おうと意気込んで来たは良いが、彼の意見に賛同する人間は上層部には少なかったため、意思決定の遅れが決定的となっっているのである。

「ヘルメス卿はどうしている？」

なんとか気を鎮めたカイロスは騎士団長に聞いた。

「マニ領、領主エオスからの救援要請は届いている様です。マニ領周辺の領主軍を糾合している状態です。おそらくは戦線が伸びきった所をたたくつもりでしょう。」

騎士団長の態度は落ち着いており、その堂々たる体躯に似つかわしい重厚な声色だった。

「現在、どの程度の兵が集まっているのか？」

「それが、今だ分散して配置しているようで、迎撃の為にどの程度の兵を集めているのか掴めていないのが現状です。」

「ヘルメス卿は何を考えている！？各個撃破の餌食にされたらどうするつもりだ！」

列席している貴族の中から避難の声が上がる。

「それは分かりませんが、ヘルメス卿がその可能性に気づいていないとは考えにくいです。おそらく兵力を集中する事がためらわれる何かがあるのでしょう。」

「その何かとは何だ！」

「そこまでは分かりかねます。」

静寂が場を支配した。あまりに状況が不可解だった。帝国の迎撃が異様に進んでいない事が、ヘルメスの手堅い戦いぶりによく知られているが、あまりに慎重すぎる。何を恐れているのか、それがその場の誰にも分からないのだ。

「……ヘルメス卿だけでは不安だ。誰か別の十二神将を派遣す

べきではないか？」

「誰を派遣するというのです？西はヘルメス卿一人で担当してましたから。北は今、寒波の対応で手一杯で期待は出来んでしょう？東は遠すぎます。では、南・・・ですか？」

「南の十二神将で今手隙の方がいらしたか？」

「南は今、安定している。下手に人員を動かさない方が良い。」

「しかり。特にペルセポネ卿にこれ以上功績を立てさせては、手に負えなくなります。」

「ペルセポネ卿さえ居れば南は大丈夫でしょう。アプロディタ卿はいかがですか？彼女の手腕ならば戦後処理まで任せる事が出来る。」

「そうだ、アプロディタ卿ならば適任だ。彼女ならば無用な野心を抱かず責務を果たしてくれるだろう。」

「彼女が進軍準備を整え、到着するまでにマニ領が落ちているという事も考えられますが？」

「その時はマニ領は見捨てる。帝都を守る事を最優先にする。押し返して森の向こうへ押し返せば、経過はどうでも良い。これを期にマニ領の領主を交代すべきかもしれない。これからは子供に任せておける領地ではありません。」

「そうですな。」

御前会議に集まった広大な領地を持ち、帝国の要職を歴任して来た老人たちは明日の夕食を決める気軽さで人選を決めた。

「ちよつと御待ちください！」

カイロスが老人たちの会話に立ち入った。

「何だね、カイロス卿。」

これは仮にも宰相の地位にある人間に向ける言葉ではない。現在のカイロスの発言権の無さを示していた。

「それでは不十分です。もっと全力で事に当たらねば帝国は負けます。」

老人たちは顔を見合わせ、大笑呵々した。

「カイロス卿、少々敵の姿を大きく見過ぎではないか？」

「さよう、さよう。共和国と我が国では国力の差で十倍ともいうでは無いか。」

カイロスがその肩をがっくりと落とす。

「その認識は改めていただかなくてはなりません。帝国の国力は飢饉の影響と内乱によって大幅な減退を強いられました。反して共和国はリユカオンを執政官に迎え、各都市を糾合し、富強な国へと作り替えております。その国が全力を持ってこちらへと牙を向けているのですよ！例え我々が巨龍であっても、鋭い牙を持った狼にのど笛を噛み切られれば死に至るのです！」

「それはどこから得た情報かね？」

老人がカイロスを試すように聞き返す。

「私の密偵の独自な調査による情報です。」

「ほう、君のご自慢の密偵とやらは共和国の侵攻を報告してはくれなかったのかね？」

「それは……。」

「どうやら、まだまだ信頼できる部下が育っていないようですね、カイロス卿。」

「まあまあ、カイロス卿はまだ御若いのですから……。」

カイロスはその拳を血がにじむまで握りしめた。

「陛下、それでよろしいですか？」

カイロスを差し置いて老人が臣下を代表して訪ねると皇帝はただ、首を縦に振るだけだった。

「では、アプロディタ卿を派遣することとする。これは勅命である。」



それで御前会議は終了した。

誰一人、帝国が負けるとは、口にしなかった。

まったく危機感のない会議にいらだち、割り当てられた部屋に戻り、一人になるや壁をたたき考えつく限りの悪態をつくど、直轄領の西境界まで自領の兵を移動させるように命令させた。

一方、その頃南辺境領の城塞都市、アウストラリス・カストルムでは……。

「すばらしいスムーズさで神殿が出来てくもんだな。」

義弘はデスポイアの神殿建設現場で独白した。

神殿の建設現場では、石材が運び込まれ、着々と地面に書かれた図面通りに作られていつている。すでに彼にする事は殆どない。

「思えば、資材集めに苦労すると思えば必要な物は素直にくれるし。親切だな、この人は。」

彼に「くれ」と言われて、大抵の商人はびくびくしながら「例の事はどうか内密に……。」と腰を低くしながら了承するのだが、義弘の回答は大抵、「何が？」である。

「人集めには信心深い方々が集まって手伝ってくれるし、宗教つてすごいなあ。」

ちなみに、働いている彼らは街の職人たちであるが、義弘が帝国の『組合』のマスターの資格を得ていると聞き、少しでも何かを得ようとかと義弘に質問してくる。義弘も神殿作りには必要だと考え、地面の水平を測る為に『水準器』や水はけの悪い土地の水を除く去る為に『ポンプの原理』などを提案すると彼らはすぐにそれを実践した。義弘はこれで良いのが出来そうだとうなずいていたという。

そんな視察中にペルセポネ様に呼ばれた。彼はまた何ぞ難題を吹

っかけられるのではないか・・・そんな不安に駆られた。

「順調な様ですね。」

ペルセポネ様は大変上機嫌のようである。その笑顔がいつもより深いようだ。それにしても相変わらず年齢不詳のお母様である。一回その体組織を念入りに調べてみたいものだ。そうすれば人類永遠の夢が実現するかもしれない。

「まあ、思ったよりは順調に進んでいますね。お嬢さんの妨害・・・わがままが無ければもっと早くできると思うのですが。」

「まあ、十分ですよ。私の予想を超える速さで工事は進んでいます。胸を張ってよいですよ?」

「はあ。」

この人がこんな口調のときは何かある。そう義弘は予感した。

「ところで。」

「はい。」

「ヨシヒロさんは西からいらしたのよね?」

「はい、そうです。」

「今、西が大変な事になっているのはご存知?」

「いいえ?」

最近は工事に付きつきりでろくにここに来てなかったから。そのせいかデスポイアには2割増でひどい目に遭わされたが。思わずこのあいだ負わされた傷口に手を当てる。

「そう、今ね共和国が侵攻して来ているらしいの。」

ペルセポネはまるで『今日、お隣に引っ越してらっしゃるらしいの。』とでも言うつかのような気安さで爆弾を投下した。

「今、なんと?」

義弘は思わず聞き返した。その内容が彼の想像を超えていたからである。

「だから、共和国が攻めて来たのよ。」

その落ち着きに義弘は思わず激高しかける。

「なん・・・で、そんなに落ち着いているんです？！すぐにでも救援に向かうとか・・・。少なくとも警戒くらいはしなくては・・・。」  
義弘の言葉をペルセポネは静かに聞いていた。そしておもむろに言った。

「私はその程度の事もしていないとでも？」

義弘は思わず姿勢を正してしまう。時々、この人が見せるこの目が義弘は苦手だった。獅子の目だ。その奥に燃え盛る炎を見た気がする。

「いえ、失言でした。御許してください。」

「いえね、共和国が攻めてくるくらいありえない話じゃなかったのよ。貴方、カイロスってご存知？」

義弘は内心、話が飛ぶ人だ・・・と思った。

「いいえ。」

「そう、この国の宰相よ。そのくらい覚えておきなさい。その宰相が筋金入りの愛国心溢れる人間でね、何を考えたか共和国への侵攻を考えたのよ。」

「何故そのような事を？」

「さあ、でもそれで帝国の現状が何か変わると思ったのかしらね？現実主義者で通っている彼が実は夢想家だったって事かもしれないわ。でもね、それはどうでもいいの。それで共和国は追いつめられちゃったわけだから、座して待つのでなければ当然・・・。」

「討つて出での先制攻撃。そして早期決着。」

そのとおり、とでも言うかのようにペルセポネは拍手する。

「それは彼が就任した時点で分かっていた事よ。時期はさすがに読めなかったけど・・・。こちらに攻め入ったときの対策は採っているわ。ただし、こちらから兵は出さない。」

「何故!？」

「私たち十二神将にも一応、縄張りって物があつてね。あちらにはヘルメスって言ういけ好かない狸がいるから任せておく訳。」

「それでも・・・。」

「私に兵を出せと？正当な理由も無しに？貴方は私に命令できる立場にいるのかしら？」

義弘はぐつと言葉に詰まる。

「・・・あそこには仲間がいるんです。出会ってから間もないけれど、大切な仲間なんです。御願います。力を貸していただけないでしょうか。」

「今度は泣き落とし？中々有効だけど、やっぱりだめね。それは出来ないわ。」

義弘はペルセポネを懇親の気力を振り絞って睨みつけるが、ペルセポネは揺るがなかった。

「・・・分かりました。では少し暇を頂きたい。」

「駄目ね。」

『即答かよ！』という声を義弘はこらえながら言葉を続けた。

「何故です！」

「貴方はデスポイアの補佐官でしょう？補佐官が離れては駄目。」

「・・・分かりました。」

義弘は努めて冷静に言った。分かってなどいなかったが、その場では分かったと言っしか無かった。

ペルセポネの部屋から退出すると、デスポイアが待ち構えていた。「お母様と何を話していたのです？」

思わずここを離れられない元凶に腹がたち、何も出来ない自分への失望とこんな小さな子供に腹を立てた自分に対する憤りで口から熱い息を吐く。義弘は何の力も無い、何も出来ない、仲間が危険な目に遭っているというのとそう思っていた。デスポイアはギョっとしていた。それを義弘は不思議そうに眺めていた。

「・・・何故、泣いているのです？」

義弘は顔に手を当てて目から熱いもの流れてくるのを感じた。慌てて涙をぬぐい去る。それは彼のなけなしのプライドがそうさせた。

「・・・義弘、屈みなさい。」

義弘はデスポイアの命令に思わず睨んでしまいが、その真摯な目つきに思わずたじろぎ、気づいたときには言う通りに屈んでいた。すると義弘の頭を暖かい物が包んだ。

「男が泣いている時にはこうすれば落ち着くとお母様が言っていましたわ。」

だからお母様、貴方は何を自分の子供に教えているのかと義弘は思った。

「・・・これ、いつもやってるのか？」

「私はそんな事はいたしませんわ。お母様もこの手段は大事なときにとつておけとおっしゃいましたし。」

「・・・そんな大事な物は俺なんかに使わないで大事にとつておきなさい。」

義弘がデスポイアを引き離そうと動くときデスポイアはさらに義弘の頭をぎゅうと抱え込んだ。

「今がその時だと考えたからこうしているのですわ！」

義弘はそれを振りほどこうと動くが不思議と体に力が入らない。

「私はきちんと話を聞きますから話して下さい、ヨシヒコ。」

義弘はためらいつつ話を噛み砕いて説明した。仲間が故郷を思い出す唯一の縁だと言う事、彼らを救いにいきたい事、すべてを。

彼女はそれを頷きながら真剣に聞いてくれていた。すべてを理解は出来なかつただろう。しかし、彼の抱える漠然とした孤独と無力感は理解した。

子供に何を言っているかと、義弘は首を回して、デスポイアの方を見ると彼女は優しく微笑んでいた。

「貴方は貴方の思っているほど何も出来ない人間ではありませんわ、義弘。貴方は知らず知らずのうちに、様々な物を与えて来ているのです。」

彼女の抱え込む手が緩み顔を上げると彼女の手は彼の頭をなでていた。それは労るような手つきだった。

「それならば、やる事は一つですわね！」

デスポイアは改心の笑みを浮かべ、義弘の腕を掴むと屋敷の玄関の方へと歩き出した。突然の行動に義弘は目を白黒させる。

「お、おい！」

「貴方は私の補佐官なのでしょう？ならば私に付いてきなさい！」  
デスポイアは鼻息を荒くしながら玄関の扉を荒々しく開け、使用人を驚かせた。

「どうする気だ！」

「決まっているでしょう！」

義弘の背中をデスポイアは思いつきり押し、地面に立たせるや否や、西の農村から彼をさらった時と同様に大地を動かして運んでいった。

「西に向かうのですわ！」

義弘は懐かしい風を感じながら、以前とは違いこの引張られる感じを心地よく感じていた。これが・・・このエネルギーこそが彼女だと。天災は時として天の恵みをもたらす事を彼は思い出していた。



戦闘編：第六話 天恵と天災は紙一重（後書き）

おのれに存する偉大なるものの小を感じることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大をみのがしがちである。

岡倉天心（明治の美術家・美術評論家） 『茶の本』



戦闘編：第七話 八方塞、何をやってもだめという超ネガティブな年。(前書き)

不幸は続いてやって来る。

テレンティウス(古代ローマの喜劇詩人)

戦闘編：第七話 八方塞、何をやってもだめという超ネガティブな年。

共和国軍の攻撃は東から日が上り、夜の闇が退散すると入れ替わるように始まった。夜襲は一か八かの賭けになる場合が多い。日の明るい内ならば単純に兵力に差で勝敗が決する。策の介在する余地が減るからである。

テバイの町に残った人々はただ、家にこもっておびえるしかなかった。その兵力差は実に20倍。まず、勝つことは無い。このような絶望的な戦場に彼らが残っているのは単純に逃げ遅れたのである。

城壁につめていている兵士たちは当番のときに攻めてこられた不運を嘆くまもなく、近づいてくる敵の恐怖に包まれた。目の前には鉄の群れ、林立する攻城兵器、後ろに控えている軽装の集団は精霊術による支援部隊と知れた。

「・・・おい、これと戦うのか？」

「戦いになると思ってるのか？」

「戦いにならないのか？」

「一方的な虐殺は戦いって呼ばないんだよ！ちくしょう！」

悪態をつきつつ、自分の非常に狭い生存への道を少しでも広げる努力は惜しんではない。城壁から放つ弓、落とす石、ぶちまける熱湯などの準備を進めている。

城壁の各所に設けられた四角い穴から精霊術の扱いに長けた兵士が詰め、その射程内に敵が侵入するときを今か今かと待ち構えている。

一般人の精霊術の規模、効果範囲は非常に限られる。その手元を離れた瞬間、威力・精度ともにその距離に反比例する。精霊術士を名乗る人間でも平均して30mが限界である。それに限界まで精霊術を行使すれば意識を失い、戦場では足手まといを量産することになるため限界前に後方に下がって体を休める必要がある。

そのため、精霊術士は敵の出鼻をくじくための序盤戦、止めを刺すための後半戦に集中投入させるのが通例である。精霊術は誰でも使えるが、精霊術士を名乗るほどの人間となるとその数は多くない。主力は剣と弓矢になる。

城壁に取り付くための巨大な梯子がゆっくりとしかし確実に近づいてくる。これの中には数百人規模の兵士が入っている。これが城壁にとりついた瞬間、城壁の上に殺すべき敵を求めて兵士が殺到するであろう事は誰の目にも明らかであった。

誰もがその梯子を注視しているそのとき、天空から光の束が地上に降り注ぐ。それは的確に梯子を射抜き、梯子は中の兵士もろともに倒れてゆく。その足元にいる兵士がそれから逃げようとあわてて走り去る。

そしてそれはそのまま重力に逆らうことなく音を立てて崩れ落ちた。他の梯子も同様に光の束に貫かれてゆく。その光景を見ていたテバイの兵は雄たけびを上げ、口々に主の名を叫んだ。

「これが報告にあった光の矢か。聞いていたものと規模が段違いだな。覚悟していたとはいえ、手痛い出血を強いられたものだ。戦略級並みという話は本当だな。大したものだ。」

リユカオンが後方で戦況を見て感心したようにため息をつく。

「しかし、まあ出鱈目ではこちらもそんなに捨てたものではないものでな……。」

リユカオンの口元に笑みが浮かぶや否や、戦況に変化が再度起りだす。

梯子の上の兵は怯えていた。いつ降り注ぐか知れぬ天からの光に貫かれるのかと。周りの梯子は軒並み倒されていく。その光景はさながら神が地上の人間に天罰を下しているような印象を与えた。その光が今度は自分の頭上に集まりだすのを見たとき、思わず皆身を乗り出して飛び降りようとしてしまう。しかし、飛び降りるまもなく光は降り注いだ。

誰もが光に貫かれ、そうでなくとも倒れる梯子と運命を共にするであろう自分の未来を見た。しかし、一向にその未来が実現する気配は無い。光は以前頭上に降り注いでいる。その光の先に一人の人影を見た。

「・・・せつかくあの馬鹿頭領のお守りから開放されたと思つたのに。まったく割りにあわねえ。」

その膨大な光を反射し、拡散してしまっている男は誰にも届かぬ独り言をつぶやき、その秀麗な顔を曇らせた。時間が経つにつれ光は勢いを失い、最後には一筋の光の線を残し消えた。

「これが・・・『盾の精霊』の力が・・・。」  
兵士の一人が呆然としながら思わず呟いていた。

「エレボス副将！お怪我は！」

信じられないものを見るような目で兵は彼を見ている。彼の反射した光で梯子の周りは大惨事である。

「ねえ！そんなことよりさつさとこいつを運んじまわねえと次の攻撃がくるぞ！さつさとしろ！」

エレボスは射殺すような視線を兵に向け、命令した。兵士はすぐに先ほどの脅威を思い出し、あわてて階下に伝令を出す。

「たつく、のんびりしやがって。やっぱり割りにあわねえ。こん

なヒヨコ共を引き連れて戦争しろってのか？」

エレボスは予想より混乱している地上の様子を見て、もう一発来るかなと考えを廻らし深いため息をついた。

テバイ中心部に位置する領主の館の最深部、そこには少女が手を合わせて懸命に祈るような姿勢を取っていた。その体中に汗をかき、その薄い金髪は顔に張り付いている。

「エオス様……。これ以上のご無理は……。」

従僕が心配げに近づく。それをただ手を前に出して制する。

「心配は無用です。今は出来る限りの時間を稼がなければ。援軍が到着するまで持てばよいのです。長期戦になって困るのはあちらなのですから、今出し惜しみをしては……！」

エオスの顔が驚愕に染まる。自分の攻撃が一部何者かに弾かれている。それは何者か分からなかったが、攻撃はまったく届いておらず、透過すらしていない事は知覚された。

「……そんな！」

「いかがされました！」

従僕がエオスに駆け寄る。

「……いいえ、なんでもないわ。ありがとうございます。」

エオスは従僕の不安げな顔を見て冷静になった。自分が我を失っては一気に流れがあちらに傾いてしまうことは明白であったから。

「……残った梯子は一つのみ。このまま攻撃を続けてもギリ貧ね……。まだ力を温存しなくては。」

彼女は残った梯子への攻撃をやめ、城壁の兵に鏡を用いて命令を下した。

光の攻撃を防ぎきった光景に後押しされ、その後の城壁への攻撃は熾烈を極めた。城壁からの涙ぐましい反撃も数の暴力に抗し切れ

ず、城壁に取り付かれ、すでに無事だった梯子から城壁へ乗り移られていた。

「・・・脆すぎるな。」

エレボスがぼそりと独り言をもらす。

「どうかされましたか、エレボス様。」

「なんでもな・・・、いやこれは・・・しまったか？」

エレボスが振り返ったときには梯子が光の柱に貫かれていた。これにより城壁の上の兵は孤立を余儀なくされた。

「エ、エレボス副将！退路が・・・。」

「ええい！臆するな！このまま勢いを殺さずに進行し、城門を開く！活路は前にあると思え！」

エレボスは動揺する部下に向かい怒鳴り声を上げる。そのときエレボスに向かつて矢が飛来し、深々とその腕を貫いた。とつさに手甲を身に着けた腕を持ち上げたのは彼の戦士としての経験から来る反射行動の賜物であろう。しかし、飛来したものは手甲を貫き、腕を貫き通していた。彼とて油断していたわけではない。周囲に弓兵がいないことは確認していた。常識的な範囲に・・・であるが。

「いつたい、どこからこんな威力のある矢を・・・！」

エレボスが驚愕の目を周囲に廻らす姿は見えず、矢の飛んできた方向を凝視するもそれらしい人影は見えない。あまりにありえない現象にエレボスは戦慄を禁じえなかった。

この一撃により城壁の上の帝国兵の足は一時的に止まった。

「うーん、惜しいですね。完全に死角から頭部を狙ったつもりだったのですが・・・。」

温和な顔をしながら物騒なことを口にした。驚きに普段は細い目が若干開いている。

「ヤン、外したのかい？」

「いや、イレー又さん。当たったことはあつたが致命傷には程遠いですよ。まさかとっさにあんなにスムーズに体が動くとは。すばらしい反射神経と運動能力です。相当に手ごわいですよ、あの士官は。」

ヤンは体をまわしてイレー又のほうに向き直る。

「その士官って言うのはあの出鱈目なレーザー攻撃を反射した男だよな？ここで止めをさせなかったのは痛いね。」

「まったくです。せつかくここでの常識を破る射程を持つ弩を作成して虚をついたというのに……。すみません、せつかくのチャンス逃してしまいました。」

ヤンはすまなそうに頭を下げる。

「しかたがないさ。相手が一枚上手だったってことだし。それにこれはまだ開発途中の代物だしね。」

イレー又は苦笑いしながら言った。

「そうですね。まだ常人の腕力では扱いきれないですしね。それに再装填に時間がかかる。」

「材料の強度にも限界がある。あまり多用すると使用中に分解してしまう。まあ、実験では3発が限界だね……。」

「そうですね。しかし、引き金を引くにはやはり、ためにありますよ。戦争だからと……。割り切るべきなのかもしれません。」

ヤンの手は若干震えている。それは弩の反動のせいばかりでもない。

「……。すまない。本来であれば作成した私が行うべきであったが……。」

「いえ、イレー又さんの視力では相手を捕らえることは出来ませんから仕方ありませんよ……。」

ヤンが次の矢の装填をしながらあきらめの表情を浮かべていた。

「まさか、本当にあの距離から攻撃できるとは思わなかったわ・  
・。」

エオスは目の前の攻撃を信じられない目で見ていた。精霊術なし  
での距離を攻撃できる者はおそらく歴史上にいないであろう。

「これも天の配剤か・・。」

エオスは誰に言うでもなく呟いた。そして、すぐに城壁外の動き  
に注意を向けた。

梯子を倒されたからといって、攻撃の手が緩まるはずもなく、城  
門に向かって兵士が群がっている。その群れに向かって矢を降り注  
ぎ、石を落としているがすぐに別の兵士がその穴を埋めていく。

城門が打ち破られるのも時間の問題であった。





戦闘編：第七話 八方塞、何をやってもだめという超ネガティブな年。

（後書き

もし決断が間違っていたかなと思ったら、さつさとやめることも大事です。さつさと見切りをつける。

いくらやったって、ダメなものはダメなんだから。見切りをつけることって、とても大切だと思います。

假屋崎省吾（華道家）

戦闘編：第八話 恐怖心は体、勇気は心が覚える。(前書き)

\* 過激な戦闘描写が含まれておりますのでご注意ください。  
よろしくお願いいたします。

『人間は負けるようにはつくられていない。  
殺されることはあっても、負けはしない。』

ヘミングウェイ(小説家)「老人と海」

戦闘編：第八話 恐怖心は体、勇氣は心が覚えてる。

城壁の一部に亀裂が入り、その亀裂を少しでも広げようと兵士が群がる。しかし防衛の兵も負けじとその亀裂の隙間から槍が差し込まれ群がる兵士を串刺しにする。

群がる兵が号令の元、速やかに退くと破城槌が突進し、城門の亀裂を突き破った。城壁の上から必死の抵抗を試みるも、矢も投石も破城槌を守る大型の盾を持った兵にことごとく防がれた。

その豪壮な門の一部に人が一人入れる程度の隙間が開くとそこから湧き水のように共和国兵が侵入していく。誰の目にも勝敗の行方は明らかであった。

それでもまだ領主の顔にあきらめの表情は浮かんではいないが、その顔は苦渋に染められていた。

「進め！進め！勝利は目前ぞ！」

まだ若い部隊長が部下を知ったする声を上げる。すでに内心、彼は勝利の快感に酔いしれていた。

「エレボス副将が先に城壁に乗り込んでいたはずだが、どうやらまだ領主の首は上げていないようだ！一番手柄は俺の部隊がいたのだ！」

顔を紅潮させながら部隊を前へ前へ進めるが、彼はふと違和感を感じた。あまりに抵抗が無さ過ぎるのである。いや、敵兵が、敵兵どころか住民も人つ子一人いなくなっているのである。

部隊を止めようと命令を与えようとするが、彼の周りに味方の兵すら、いなくなっていた。

「ど……どうということだ？先行しすぎたというのか？」

部隊長が冷や汗を流していると、近くの住居から悲鳴が聞こえた。

彼はその建物へ駆け寄った。彼は部下が住居に略奪に入って、邪魔な住人を殺しているのだと思ったのだ。

「おい！命令を無視するとはどうい……。」

部隊長はそれ以上の言葉をつむぐことは出来なかった。彼の口はただヒューヒューという音をむなしく奏でるのみであった。そうして口から大量の血を吐くと、ドウと地面に倒れ伏した。

そのような光景はテバイのあちこちで起こり始めていた。彼らは一様に見えない敵に少しずつ、しかし確実に切り殺されていった。

その光景を城壁の上から見ている人影が一つ。その影はすでに剣を握っていた右腕を負傷しており、動く腕は左手のみである。その盾が視界をさえぎらないように、横に携え中腰で、攻撃に対して備えていた。

彼の部下は皆、頭部を矢で貫かれている。その頭部には皆大きな穴がらせん状に穿たれていた。

「……冗談じゃないぜ。気付いたときには目の前に矢がありやがる。いくら矢が速くてもまったく見えないって事はないだろうがよ。どういうからくりだ、こりゃ？」

彼はこれまで目に見える敵は屠ってきた。どんなに厚い壁に阻まれようと必ず食い破ってきた。しかし……。

「見えない敵をどう倒せって言うんだよ！」

そういや否や、盾を右に移動させ斜めに少し倒す。その盾に矢が激突し、甲高い音を立てる。すぐさまその盾を持ち上げ、体を振り返らせ正面に盾を突き出した。彼の左手に続いてやってきたのは鈍い感触であった。彼にはとても馴染み深い感触。人の体を圧碎したときの感触である。

「こりゃ、暗闇で戦ってると思っといたほうがよさそくだ……。」

「彼、エレボスはやれやれと首を振るとじりじりと階段へと進んでいった。」

「……完全に防がれました。領主殿の能力で不可視化された矢を……。」

ヤンが驚きの声を上げる。その声には少なからず賞賛の念が混じっていた。

「消せるのは姿だけってことかね。おそらく音と空気の流れを肌で感じ取っているのだろう。」

イレーヌもどうにか説明付けようとしているが自分で言っている言葉を信じられずにいた。

「我々もナノマシンで一時代とは隔絶する位には感覚が発達しているはずなのに明らかに彼のソレは異常な値を示している。彼が特殊なのだろうな。街の人間はそこまでではなかった……。」

「ここの人間の個体差は尋常ではありません。これでまともな社会が形成できているのは一重に精霊信仰の効用かも知れませんか……。」

ヤンの独白をイレーヌはいぶかしげに聞いていた。

「どうということだい？」

「つまり、その個体差はあくまで精霊の加護に起因するものという考えを持てば、個人が個人に対して抱く劣等感などの感情が緩和されますからね。もしかしたらそういう考えで生まれた宗教がもしられません。上位個体を持たない力を持ったものは自制が困難になるものですから。」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。そういう証明の出来ない事柄は好きじゃないね。それに今はとりあえず考えることじゃないよ。」

イレーヌが腕を組み言い切った。

「そうですね。……お客さんがいらしたようですし。」  
ヤンがうつすら細目を開けてこちらに向かってくる兵士の一団を見た。

城門から続々と兵士が侵入を果たしている。すでに城門は瓦礫と化し、城壁内への進入は排除できる数を超えていた。

エオスの張った不可視の兵の迎撃網を運よく突破した軍団が城壁の上の友軍を信じられない距離から狙撃しているのを確認し、狙撃ポイントへ急行していた。

「あの信じられん矢を放った奴はいつたいだんな奴だ？」

「おそらくとんでもなく屈強な戦士でしょう。」

「それよりも弓を作成した人間のほうが脅威ですよ。もしアレを大量に城壁に設置されていたらと思うとぞつとします。」

兵団の一同はうなる矢に貫かれて団子にされた自身を想像し震え上がった。

「遠距離からこそ狙っているような奴だたいしたことはない！それに連射は出来ないようだ。接近さえしてしまえばこっちのものだ！」

軍団長が兵士の恐怖をやわらげるために希望的観測を口にする。彼はすぐにソレが希望でしかなかったことを痛感することになる。

「……来ましたね。本当にソレ使うんですか？」  
ヤンが若干引きつった顔でイレーヌの手に握られたものを見ている。

「当然だよ。重装備で来る人間相手ならこれが効率がいい。」  
イレーヌは何を言っているのかという目でヤンを見る。

「君がいいならいいんだが……。ただ結末がスプラッタなことになりそうだね……。」

「血なら月一見てるからなれたもんさ。」  
「ヤンはいやそついう問題じゃないと思いますという台詞を必死に喉元で止めた。」

「総員！抜剣！突撃体制に移れえええ！」

軍団長が部下に突進攻撃の命令を下す。狙撃主のいるのは屋内のため、槍は使わない。そして狙撃主がいるであろう建物へと駆け出した。

するとその建物の中から人影が現れた。皆に緊張が走る。しかし次にその姿を見て、その緊張を緩めた。何故ならソレは女性であったからである。しかし、すぐに皆気を再度引き締めた。女性の兵士は大抵、優秀な精霊術士だからである。遠距離は不利だが接近すればいい。そう考えた彼らはさらに突進の速度を速める。

彼らの目に彼女の握っているものが視認できるまで近づいて驚きに目を見開く。

その女性の手に握られていたのは・・・巨大なハンマーであった。

「・・・軍団長。あれはなんでしよう？」

軍団長の隣にいた若い兵が何かは分かっているにもかかわらずにはいられなかった。

「・・・でかいトンカチだろう？」

軍団長も明らかに不釣合いな相手の武器を注視していた。軍団の先頭と彼女との距離が5メートルになるかならないかのところでそのハンマーの先端は・・・消えた。ように見えた。

次の瞬間には目の前にあった。そして吸い込まれるように胸部に当たり・・・鎧ごとそのあばら骨も内臓も砕かれた。

「・・・ぐ、軍団長！」

周りの兵はあまりの光景に動きが止まる。それは戦場では死を意味した。

鉄の嵐が軍団を襲う。運の悪いものは直撃し、運のいい者は直撃



した兵の体にぶつかって意識を失った。

「何なんだよ！何なんだよこれは！こんな・・・こんな戦い知らないぞ！」

彼ら、兵士が鎧に身を包み、戦いだしてから刀剣や槍での攻撃は相当程度防がれるようになっていた。鎧の隙間に一撃が入っても死ぬことは無い。急所は鎧が守っている。しかし目の前の光景は彼の培ってきた常識を簡単に覆した。

すなわち、「一撃死」。何も考えを廻らす間も無く、自分の死ぬ瞬間すら感じる間もなく死んでいった。

「・・・すさまじいですね。遠心力と先端の重量で恐ろしい威力になっている。それにしてもすごい筋力です・・・。さすが一級大型工作機械技師免許を獲っていらっしやるだけありますね。私は筋力値が足りなくて二級止まりでしたが・・・。」

ヤンはイレーヌの剛勇を見てため息を漏らしながら、ハンドルを回す。ハンドルを一回転させるごとに矢が飛び出し、兵士めがけ飛んでいく。まさに数打てば当たるの論理で蜂の巣にしていると鎧の隙間に矢が吸い込まれていく。矢に刺さった兵士が動きを止め、ハンマーの犠牲者が増えていく。

一人、武器を投げ出して逃げていくと、釣られて一人、また一人と逃げ出していった。もはやそれは兵士の顔をしていなかった。

領主の元へ行く道の途中にある建物の前には死屍累々と兵士が積みあがっており、共和国兵を恐怖のどん底に叩き込んだ。



戦闘編：第八話 恐怖心は体、勇氣は心が覚える。（後書き）

勝負の世界には、後悔も情けも同情もない。あるのは結果、それしかない。

村山聖（将棋棋士）

戦闘編：第九話 アルキメデスを許さない（前書き）

私は決して障害に屈しはしない。いかなる障害も、私の中に強い決意を生み出すまでだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチ

## 戦闘編：第九話 アルキメデスを許さない

共和国のテバイへの攻撃が始まる二日前、テバイから北に歩いて数日の距離にある地点で帝国軍の軍団基地が襲撃を受けていた。

その攻撃は宣戦布告も、雄叫びもなく静かに始められた。見張りの兵が敵襲を伝える鐘を鳴らす間にみ森から滲み出してくる影はその数を増していく。

「ヘルメス様にお伝えしろ！敵襲！その数、四軍団相当！所属不明！ただし、『森の民』の可能性大！」

その基地の指揮官は防衛のために部下が動いているのを確認すると伝令に指示を出した。彼の推測が正しければ、共和国だけでなくこれまで中立を頑ななまでに保っていた『森の民』までも相手にする必要が出てきたことになる。これまでの西国境の防衛構想が覆るかも知れないという最悪の想像に戦慄を禁じ得なかった。

森から出てきた集団の服装、武器は皆バラバラであり、斧・剣・棍棒・槍・弓と統一感など全く無い。そこには戦をコントロールしようという意志は全く感じられない。ただの暴力。それだけの存在に見えた。そのため、基地の戦士の一人は顔に思わず嘲笑を浮かべるが、その数に唾をのむ。

もし、目のいい兵がいればその集団は皆、濁った目をしており、体から黒い靄のようなものが揺らいでいるのが見えたであろう。その場にエオスがいればエピメーテウスの『陰操』であることを悟ったかもしれない。

その兵は無造作に基地へと向かってくるが回りに巡らされた堀に阻まれる。堀に落ちて堀を登ろうとしてくるが、それを許す帝国兵はいなかった。怒濤の矢の雨を浴びせかける。

堀には死体の山が積み重ねられていくが、後から後から怯むことなく基地へと向かってくる。味方の兵の死体を全く気にする風もなく踏み越えてくる。

これに恐怖し、矢による迎撃が一瞬途絶える。その間に一人の兵士が基地の外壁に取りつくと武器を振りかぶった。その一撃を受けた壁の一部が崩壊していた。

これは常識では考えられない。城壁はそんな簡単に崩れるような造りをしていない。帝国の軍団基地ともなれば、その造りは当然のように石をしっかりと組み合わせ補強されている。都市の城壁に比べれば劣るとはいえ一撃の元、うち壊されるものではないのである。兵士の武器から陰がにじみ出し、石と石の間を駆け巡って城壁のバランスを崩し、自重で崩壊したのであるが、それを外からみれば、怪力で城壁を砕いたように見えたであろう。

それは城壁の各所で起こっておりその隙間から兵が侵入する。一度懐に入られれば、兵士一人一人の戦闘能力がものをいう。それも基地の兵の心のよりどころとも言うべき城壁が一瞬のうちに壊されるとともに、戦闘意欲も粉々に打ち砕いたのである。

その軍団基地を襲った様子は十二神武将ヘルメスの元へ届けられた。

その軍、野蠻極まりない装備、隊列で襲来し兵士一人一人の戦闘能力は想像を絶し、その軍の先頭には狼の姿をした大男がいたと。

ヘルメスはこれで西の森に釘付けにされることになる。『森の民』は決して軽視できる勢力ではないのである。

所変わって、テバイでは予想外の出血に共和国兵の足が緩まっていた。しかし、時間とともに少しずつ進んでいた。

見えない敵も、全く位置が分からない訳ではない。攻撃の瞬間には知覚されたし、すでに不可視の効力も薄れだしたと見え、隠しきれない所が見え始めていた。

しかしそれでもテバイ中心部へと向かっていった僚友が無残な姿で運ばれてくるのを見ると悲しみの前にこみ上げてくるものがある。昨日の夕食である。今朝の朝食かもしれない。

運ばれているのはまだ幸運なほうで大体はその場に積み上げられているという。これは何とか生きて逃げて来た者の言である。

このメインストリートの先にいるのはいったい何なのか。それは何も知れない。逃げて来た者も震えるばかりで具体的なところをまったく伝えられていなかったである。

そんな中、歩みを通りの半ばで止めている兵にチラリと目をやり、道を悠々と進んでいく人間が二人。その内の一人が通り過ぎた瞬間、恐怖に濁った兵士の目が戦意に燃えた目に変わった。

「・・・どうやら第一波は去ったみたいですね。」

ヤンはほっと一息つき、連射弩を地面に投げ出した。

「おいおい、丁寧に扱ってくれよ。それはまだ、耐久性に難があるんだ。点検しないと矢が詰まってしまう。」

イレーヌがそのハンマーを無造作に持ち上げ、一振りして付着物を取り払う。

「これはどうもすみません。」

ヤンは申し訳なさそうに眉を下げ、肩をすくめる。

「まあ、これだけ時間を稼げば十分じゃないか？ さっさとここから消えよう。」

イレーヌがきびすを返し、ヤンが頷きかけるその刹那、粘つくような声が二人の動きを止めた。

「あらあら、私とは遊んでくれないの？」

ヤンとイレーヌはその声にまず驚いた。ここでは性差など用意に

覆る。それは知っていはいたがそれでも女性の兵士は圧倒的に少ない。彼らにとって未知な『精霊術』の使い手であることが推測された。

すぐにその女性に対して身構える。しかし、身構えた二人に何の反応もせずただ言葉を重ねるのみであった。

「すごいじゃあない！彼らはリユカオンがこの時のために訓練をつませた正規軍よ？」

両手を前に合わせてにこやかに拍手をしてみせる。その様子は本当にすごいとしか思っていないように見えた。

「彼、泣くかしら？泣いたらからかってあげるのも楽しそうだけど……。まあ、泣かないわねあの男は。見栄っ張りだから……。」

人差し指をあごに当てて空を見上げながら思案していると、その隙を突くようにイレーヌがハンマーを振り上げ、間髪いれずに振り下ろした。

「……せつかちねえ。」

女性が目を細めてポツリと呟くとハンマーがピタリとその小さな頭に触れるぎりぎりですべて静止した。ハンマーだけではない彼女の体中の筋肉が動かない。

「馬、馬鹿な。体が動かない……。など。これはいつたい……。」

イレーヌは必死にナノマシンにより全身を精査したが異常は見られなかった。異常があるのは……。

「……私の脳か！」

イレーヌはぞっとした。脳を制御されるなどあってはならない。それは体の制御を他者に支配されるということは……。その推察は彼女のプライドをひどく傷つけた。

「そういえば名乗っていなかったわ……。私、パンドラって言うよ。よろしくね？」

イレーヌは目の前の表情も、首をかしげながらよろしくと言って



くるその仕草もすべて気に入らなくなってきた。さらに体に力を入れるも体はピクリとも動いてはくれなかった。

「力を抜かないと疲れるわよ？」

パンドラはイレーヌの後ろに回り、肩に手を置く。そしてその首筋へと鼻を近づけて目を瞑りながら匂いをかぎ始めた。その行為にイレーヌはビクツと体を痙攣させる。

「何・・・を！」

「あなた・・・不思議な匂いがするわ。・・・森の民の匂いに近いけれど。少し違うわねえ。ずっと甘い匂い。男女の差・・・かしら？あなた何処の・・・。」

パンドラの言葉を継がせるものとハンマーの先端が彼女に向かってくるが、それも余裕を持って避けられた。

「あら？どうして動けるの？あなた。」

パンドラは大きな口をあけて頬に手を当て首をかしげている。

「・・・教えると思ってる？」

「じゃあ、教えたくしてあげる。」

パンドラが目を細め、そっと息を吐く。するとイレーヌの口元が痙攣し始めた。

「・・・脳の・神経回路から・・・運動神経を切・・・断し・・・IISに単調な・・・命令文を再設定して・・・。」

イレーヌの言葉はそこで止まり、それ以上つむがれることは無くなった。口が息も漏らさぬほどきつく閉じられている。イレーヌがIISに緊急で「口を閉じる」という命令文を入力したためである。口が閉じられているため、だんだん鼻息が荒くなっていく。

「うーん、まったく分からなかったけど・・・私の力が効いていない訳じゃなさそうねえ・・・でも動ける・・・私、こんなことは初めてよ。でも、動きが鈍っただけでも十分よね？」

彼女の後ろにはパンドラの術に懸かった共和国兵がひしめいており、今にもイレーヌに飛び掛らんと待ち構えている。

その一団に向かってヤンの矢が降り注ぐ。

「イレーヌさん、逃げますよ！こちらに走つて！」

「……。」

イレーヌはぎこちない動作で反転すると後方へ駆け出した。

「追いなさい。出来れば女のほうは殺さずに捕らえなさい。後で聞きたいことがあるの……。」

そのことが発せられるや否や、共和国兵は追撃を開始した。

領主エオスの居室の鏡に映し出されるその光景をエオスは見ていた見ていたが、すでに精神力を使い果たし、全身汗だくである。残りの領民の逃げる時間を稼いでくれた二人に感謝の念が絶えなかったが、何も出来ない自分を責める内なる声に押しつぶされそうになる。彼女にはただ祈るしかなかった。彼らの幸運を。

その幸運は南の地からやってきた。その登場は多くの人間の目撃するところとなる。それは空を飛んでやってきたのである。見た人々は言い合った。願いを叶えるという流れ星の様であったと。

しかし、当の流れ星からすれば堪ったものではなかった。流れ星はいつか地上に落ちる運命にあるのだから、……燃え尽きなれば。

「……死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ、俺死ぬ。享年二十歳、ヨシヒロです。って自己紹介してる場合じゃねえ！死ぬ、これ死ぬ！これまでのデスポイアのチョツカイが子供の遊びレベルに感じるくらいに死ぬ！修復できるレベルを超えて死ぬ！後遺症とかそういうレベルじゃなく死ぬ！あ、でも痛みを感じるまもなく死ぬから少しは運がいい……。」

涙が遙か後方に流れ、その叫びも置き去りにしながらヨシヒロは

飛んでいく。

『落下予測時刻まで後2分43秒……』

IISがヨシヒロの脳内に冷たい事務的な音声で余命を宣告する。  
「ぎゃー、カウントダウンすんなあ！現実から逃避出来なくなつたじゃねえか！死ぬ、死にたくない、死にたくねえよ。ああ、神様お助けください！ん？この状況を作った本人が神様だったか、そういうええ。じゃ、合衆国空軍様、航空自衛隊様、人民解放軍様、助けてくだされば入隊します。マジで！だから誰でも良いから助けて！」

しかし、彼の願いはその誰にも届くことも無く無情に目的地へと近づいていく。

事の起こりは十数分前に遡る。この悲劇はすべてアルキメデスのせいである。

「早くしないと皆が！」

「ええい、うつつうしいですわ！少し落ち着きなさい、義弘。」

「しかしな……。」

「これでも一番早く移動していますわ！」

「しかし、一直線にいけないから遠回りしている気がしてしまうんだよなあ。」

「山の稜線に沿って道があるのだから仕方ないではありませんか。」

「直線距離が一番最短なのになあ。飛行機とかないもんなあ、こじ。」

「飛行機つてなんですか？」

「空を飛ぶ便利な乗り物。」

「そんなものがあるのですか？」

「ああ、でもここじゃ空まで持ち上げる力はないだろうな。」

「上がってどうやって着地するのです？」

「揚力って不思議な力があってだな、それでソフトランディング

して……。」

「それは精霊術の一種ですか？」

「ああ、そんなもん。」

「それは義弘にもあるのですか？」

「ん？あるんじゃないか少しくらいは。ものっそい速さで俺がうつ伏せ姿勢で飛べば発生するかもな！」

「すごい速さで……。」

「ん？」

「できるかも知れませんね、アレを使えば。」

「え、何？」

「アレは本来、攻城時に石を飛ばすのに使うのですが……。」

「ちよつとー。」

「その揚力とやらがあれば大丈夫でしょう！」

「もしもしー？」

「では行きますよ、義弘！」

「俺のはな……。」

次の瞬間には義弘とデスポイアは巨大なシーソーの先端から飛び出していた。

戦闘編：第九話 アルキメデスを許さない（後書き）

言うべき時を知る人は、黙すべき時を知る。

アルキメデス

戦闘編：第十話 突然ってレベルじゃない（前書き）

ゴルフにバンカーやハザードがなければ、単調で退屈に違いない。  
人生も然りだ。

B・C・フォーブス（米国の作家）

戦闘編：第十話 突然ってレベルじゃない

あまりの突然な加速に体がついていかず、意識を失いかける。何とか意識を保つも向かい風で目を開けるのも難しい状態が続いた。

根性で後方に振り返るとすでに遠方に見える巨大なシーソーとその先端にある巨大な拳がシーソーの先端を大地にめり込ませている光景が目に見え込んでくる。

義弘は再度、気を失いかけた。この死へのジェットコースターはレールが無いらしい。共に飛ばされているはずの少女はのんきにその長い髪が乱れるのを気にしている。

大きな放物線を描き、頂点を過ぎた辺りから、義弘の正気は保てなくなりパニックに陥った。死への旅路が速度を増したからである。パニックというのは一過性のもので、過ぎれば意外と冷静になってくるものである。真剣に生き残るための方策をいくつも描き出しては却下していく。

まさに必死。何だかんだでデスポイアは生き残りそうだが、俺は無理くさい。何か無いか、何かに無いのかと考え続ける。しかし、時間は無情に過ぎていく。とりあえず、空気抵抗で速度は低減されるが地面にぶつかれば人の身では耐え切れない。ぶつかるまでにごうにか速度を落とさなければ。出来るだけ小刻みに！

「デスポイア！」

義弘がデスポイアに叫ぶ。その声にはあせりと恐れが半分ずつ交じり合っていた。

「なんです？」

「進路上に柱を作れ！」

「何故です？」

「頼むから今は何も聞かずにやってくれ！」

「・・・分かりましたわ。」

デスポイアは義弘のあまりにも必死にな様子に押される形で従った。二人の進路上に石の列柱が次々と大地から天へと伸びていく。

「このままでは柱にぶつかりますわ！」

デスポイアは叫ぶように言う。

「ぶつかるんだ！そのぶつかる瞬間に柱を砂に変えてくれ！俺が合図するから！」

列柱に二人の体が衝突する瞬間、柱は砂へと変わった。砂の柱を二人の体が通過していく。通過したら次の柱へと突っ込んでいき、そのたびに少しずつ勢いが弱まっていった。

「よし！この調子で行けば到着までに何とか勢いを殺せそうだ！」

「・・・。」

デスポイアは黙っている。義弘がその顔を両手で胸に押さえつけているからである。若干デスポイアの体温が上がっているのを感じながらも義弘は気にする余裕をまだ持ちえていない。

最後の砂の柱を通過して、砂に変化した地面に降り立った。

「ふう、生きてる。俺、生きてる。」

義弘は自分の生の実感を噛み締めていた。そのためか着地点の状況を把握するまで時間がかかった。

義弘とデスポイアの周りで多くの人間が面食らっていた。想像だにしなかった登場を果たした丸い塊は砂地でピクリともしない。

その場にいるものがなかなか次の行動に移せずにいると、その丸い塊が蠢き、二人の人間に分かれた。それでやっと、やってきたのが二人の人間であったと分かった。

「デスポイア、着いたぞ。」

義弘は抱きしめていた腕を緩め、デスポイアの肩に手をかける。

「・・・もう着きましたの？」

デスポイアは若干眠そうである。あまりの大物ぶりに義弘は絶句



する。

「……ああ、着いたよ。無事(?)に。」

「早いですわね、この方法。またこれで帰りましょう。」

「……いや、ゆっくり帰ろう。ほら、これだとゆっくり観光で  
きないし、な！」

地獄の未来図を何とか実現させまいと、義弘は若干あせりつつデ  
スポイアを説得する。

「そうですわね。」

「そうそう。」

義弘が胸をなでおろしていると、意識の外にあつた周りから声を  
上げられた。

「もしかして……義弘君？」

「……え？」

座つたままで聞き覚えのある声のほうへ首を廻らすと、そこには  
懐かしい顔が二つ並んでいた。

「やっぱり……。義弘君ですね。」

ヤンとイレーヌが目を丸くして凝視している。

「ヤンさん、とイレーヌさん。ど、どうも。お久しぶりです。」

あまりの唐突な再会に動揺が隠せない。場にそぐわない月並みな  
挨拶が自然と口に出たのは習慣のなせる業であろう。

「あ、ああ。君は……。どうして。いや、そんなことを言っている  
場合じゃない。色々聞きたいことはあるが、今は逃げるんだ！」

イレーヌはあまりに暢気な物言いに釣られて拍子抜けた顔をする  
がすぐに現状を思い出し、顔を引き締める。

「逃げるって、ここってテバイなんじゃ……。」

義弘が目線を横に順繰りに廻らすと目線に体つきの良い、立派な  
鎧を身に着けた剣呑な空気を身に纏ったオジサンたちがこちらを見  
ていた。

「あ、もしかして……。もう城の中まで攻め込まれていたりし

ます？」

義弘は苦笑いしながら今さら聞く必要も無いことを確認せずには要られなかった。

ソレに対するヤンとイレーヌの反応は無言の頷きのみであった。それでも義弘はまったく危機感を感じていなかった。彼の危険に対する感覚は完全に麻痺しているとしかいえない。それには膝の上に乗っている存在が影響していることは疑いない。

「・・・義弘。」

義弘のひざの上にまたがる形で目の前にいるデスポイアが義弘の頭を両手でつかみ自分のほうへ無理やり向ける。

「何？」

「あれらは何者ですか？」

「・・・招待状が無いお客さん？」

「そう、では相応のもてなしをして差し上げなければいけませんわね。」

デスポイアはむくりと体を起こすと砂から元の石を敷き詰めた道に一瞬で変化させると、服についたほこりを払って言った。

「ごきげんよう、そして・・・さようなら。」

次の瞬間、兵士たちは地面から生えた無数のとげに串刺しにされていた。一人として避けられたものはいなかった。その棘もすぐに元に戻り、残ったのは共和国の兵士の死骸のみであった。

「・・・もう何に驚いていいか分からないですね。」

「同感です。」

いつの間にやらヤンとイレーヌの横にちゃっかり移動した義弘がうんうんと頷く。

「説明してください！」

義弘はヤンとイレーヌに詰め寄られて思わず後ずさった。

「あらあら、これはすごいわねえ。」

共和国兵の死体の山を乗り越え、一人の女性が近づいてくる。

「・・・おばさま、どちら様？」

デスポイアが首をかしげながら聞くが、義弘には彼女から黒い尻尾が生えているのが幻視できた。

「おば・・・！まあ、あなたからすれば私もおばさんかしら？人に名前を聞くときは自分から名乗るのが礼儀とお母様に習わなかった？」

「ええ、おっしゃったわ。でもこうとも教えてもらっているの。デスポイアは腰に手を当ててえげむように言い放った。

「守る必要のない相手に礼儀を守らなくてもいいと。特に礼儀知らずに人の家に入り込んでくるような輩には！」

デスポイアの土の棘がおばさん、パンドラを襲う。しかし、その攻撃は盾に完全に防がれた。

「パンドラ、あんた。少しは自重してくれ。お前は直接の戦いに向かねんだからよ。」

エレボスは盾を油断無く構えながら、パンドラに目を向けずに悪態をつく。

「あなたが間に合ったでしよう？」

「人の心臓を試すような真似ばかりして楽しいか？」

「楽しくないと思う？」

「・・・もういい。」

本日何回目かになるため息をエレボスは吐き出した。

「いつたい何者なんです、彼ら？」

義弘はなんだか目の前の男にシンパシーを感じつつ、ヤンとイレ―又には彼らについて聞いた。

「どちらも油断なら無いです。特に女性のほうは得たいが知れませんが。ただ脳に働きかけて人の行動を操るとしか・・・。」

義弘はヤンの一言に戦慄を禁じえない。他人の脳へのアクセスは人の尊厳を踏みにじる行為として、国際条約で禁止されている。

「それはえげつないですね。」

義弘たちが遠巻きに見ていると、デスポイアとエレボスの間に激しい戦闘が開始された。

戦闘編：第十話 突然ってレベルじゃない（後書き）

「縁」とは予期しない偶然性である。  
そこに人生の妙味がある。

源豊宗（美術史家）

戦闘編：第十一話 Puppetry：？操り人形、？見せかけ（前書き）

人間は生まれながらにして自由である。しかし、いたるところで鎖につながれている。

ルソー（フランスの啓蒙思想家）

追記：2011/9/23（金）

感想で、戦闘編：第十一話と第十二話で矛盾点のご指摘がありましたので、修正いたします。

執筆時に戦闘編：第十一話と第十二話でタイムラグがあり、よく読み返さないまま書いてしまったのが原因です。

すでにお読みになった方にはご迷惑をおかけするかとは思いますが、修正が少なくてすむ方法をとらせていただきました。

ご了承ください。

エレボスは大きく息を吸い込み、大きく吐き出す。それから手を開いては閉じて、首を左右に振って体に入っている余分な力を抜く。これはエレボスが強敵に立ち向かう際に必ずやる動作である。動かない右腕は邪魔にならないように体に固定している。

周りにいる共和国の兵はその様子を見て歓声を上げる。この動作をして後、エレボスは必ずその相手を討ち取ってきたからである。

その動作に兵は勝利の予感と、エレボスの余裕を感じ取っていた。しかし、エレボスに余裕など微塵もない。エレボスは自分を英雄視していない。ニユクスなどのように何故か一本の矢も当たらないような、一部の選ばれた人間以外は生き残るのにいくつもの工夫がいる。

エレボスの予備動作にはいくつもの意味がある。そういつた細かいことの組み合わせで彼は自分の体、武器を自在に扱う技術を身につけた。

そんな努力をあざ笑うかのような圧倒的な暴力がエレボスを襲う。それを『盾の精霊』の力で防ぐも、エレボスは勝機を見出せずにはいた。

「…なんで俺の周りにはこういう化け物じみた連中で溢れてるんだ？」

初撃を防ぎきった男が土煙の奥で苦い顔をする。そのとおりです！俺もちょうど創思っていたところです。まじで周りが迷惑するんですよね！

「化け物とは失礼な男ですわね！」

デスポイアが憤慨しているがその様子に恐ろしさは微塵も感じられない。

「そうだ、違うぞ！」

俺は思わず声を張り上げてしまう。その声にデスポイアはうれしそうに顔でこちらに振り向いた。

「化け物なんてなあ……。化け物なんてなあ……。そんな生易しいものじゃないぞ！俺の全身の骨という骨はなあ、すでにこいつによって粉碎されている！気をつける！」

拳を振り上げ同じく苦勞をしている男に力説する。デスポイアが何故かずっこけたのが見えたので助けに歩み寄る。

「大丈夫か？何もないとここでこけるなんて……。ドジだなあ。」

デスポイアが地面に倒れ付したままこちらをにらみつけてくる。

「どうした？ああ、ほら！折角の髪が土で汚れてるじゃないか。

折角きれいなのに。ほら、立ちなさい。」

デスポイアの両脇に手を入れ、ひょいと持ち上げて立たせる。彼女の長い髪についた汚れを手で払っていく。

「……まあ、いいですわ。こんなことはさっさと終わらせて温泉に入りましょう。」

デスポイアは恥ずかしそうに髪で顔を隠している。まあ、きれい好きのデスポイアからすれば、さっさと旅の汚れを落としたいだろうと納得する。

「おう！さっさと終わらせよう！」

エレボスは先ほどからのやり取りに目を疑っている。これが戦略級精霊術師か？戦略級はもっと傲慢で、誰の意見も聞かないようなそういう存在ではないのか？

俺の勝機はおそらくこの男にある。そうエレボスは思った。こいつの弱点はこの男だと。

そう考えてからのエレボスの行動は早い。エレボスはヨシヒロに向かって突進した。

「させませんわ！」

デスポイアは突進するエレボスに向かって土の壁を作り上げるが、



エレボスはそれを盾で突き破る。

エレボスは風のようにヨシヒロに接近すると備え付けられた剣を盾から伸ばす。それをヨシヒロに突きつけようとする。

しかしエレボスの思っていた場所にヨシヒロはいなかった。ヨシヒロはエレボスの横に佇んでいる。

エレボスは考えていた。何故だ？完全に虚を突いたはずだ。読まれた？どうやって？土の壁で完全に死角だったはずだ。見えていたはずは…。

…こいつも何らかの精霊術師？それならばこいつを補足するのは骨が折れそうだ。まずはその正体を突き止めなければ…。

「あ、俺は精霊術師じゃないから。」

目の前の男はそんなことを言い始めた。何故こいつが精霊術師だという俺の考えを知りえた？まさかこいつの精霊術は…。

「だから俺は精霊術師じゃないって…。」

やはりそうだ。こいつは心を読む。心を『見る』のか『聞く』のか知らんが、俺の行動は筒抜けと見ていいだろう。

心が読めれば戦略級精霊術師を操るのもたやすいということか…。

「恐ろしい男だな…。」

「だから、俺はね…。まあ、いいやもう。」

俺は見知らぬ人に恐ろしい男呼ばわりされてしまいました。まったく心外である。どう考えても言った本人のほうが恐ろしい男である。

何なんですか、ただの盾でデスポイアの一撃を防いでる時点で十分あんたも化け物のお仲間です。

それにしても、大概で精霊術師と思われるてきた経験から先に釘を刺しておこうと思えばどうやら凶星だったようだ。

こちらをかなり警戒している。正直、俺は戦闘技能なんてこれっぽっちもない一般人なんだからそんなに警戒しなくても…。

「パンドラ！頼む！」

エレボスが声を張り上げながらも、ヨシヒロから目をそらさない。「仕方ないわねえ…。まあ、私もその子に少し興味があるし…。」パンドラは微弱ながらヨシヒロに動きを鈍らせるようにその『誘惑』の効果を徐々に高めていたのだが、まったく効果が現れていないのを不思議に思っていた。

パンドラは精霊術による精神制御を始める。それはまったくの逆効果だった…。

ヨシヒロは問題なく盾男（私命名）に相對しているようですわね。まあ、私の補佐官なのでそれからそのくらい当然ですわ！

デスポイアはフンと鼻息を荒くして、ヨシヒロのほうを見ている。そのヨシヒロの様子が急におかしくなった。

どこかというとなんか難しいのだが、雰囲気はどこか違っている。この雰囲気には覚えがある。そう、出会ったときの…。

「ヨシヒロ！」

『脳内に外部からの干渉を感知。嗅覚機能から脳内物質を操作されている可能性アリ。63号戦術化学兵器と類似するも効力大。63号戦術化学兵器およびそれに類似する兵器は国際条約違反兵器であり、違反者の拘束、排除は防衛省所属HEL被検体DGO3に義務づけられています。倫理規定項目A001からD999を限定解除開始。限定解除終了。ナノマシン体外射出開始。敵性行為対象を判別中。匂い物質の濃度の濃い領域を発見。以後この個体を敵性対象と認定。対象の無力化または排除を行う。戦術プログラム起動。対象のデータ不足。主人格の記憶から敵性対象がもう一人存在。よってルート05を採用。実行に移す。』

ヨシヒロは夢の中にいた。まるで映画館の中にいるような感覚。

そのスクリーンには美女と100人に言って95人は同意し、5人は絶世の美女だと訂正する美人が写っていた。その顔は驚愕に染まっている。

この状態はIISによる自動制御システム。ということは俺は奴らの思惑通りに動かされるってことか。胸糞悪い。

ヨシヒロがふらりと体を揺らしたかと思うと、その姿はエレボスの視界から消えた。驚愕に一瞬体が固まるが、体は自然と死角の防御に移っていた。

エレボスの左手が防御姿勢をとろうと動くが、それ以上に速い蹴りがエレボスの後頭部を襲った。

エレボスの脳は揺さぶられ、体から力が抜ける。追い討ちをかけるように跪くエレボスの顎は蹴り上げられる。

それで舌をかまなかったのはエレボスの長年の習慣の賜物である。

エレボスの体が宙を舞って地面に落ちる。その重々しい音があたりを響いた。そしてヨシヒロは更なる無力化をエレボスに強いるため歩み寄る。

エレボスの左腕はあっけなく折られた。

パンドラは呆然と見ていた。自分の精霊術が通用しなかったのも驚いたが、エレボスが負傷しているとはいえ、成す術なくやり込められることに驚きを隠せない。

術を仕掛けたとたん、青年の表情が消え、常人をはるかに超えるすばやさでエレボスの背後に回った。その動きは『人狼』と呼ばれるあの獣人と比肩するとさえ思えた。

パンドラは自分の人を見る目に自信がある。青年は一見どこにもいる人間に見えた。そう思っていた。しかし、一瞬で豹変した。

「…自信なくすわ。」

パンドラはただそう呟いた。

「あれは…。」

ヤンは目の前の光景に思わず唾を飲む。

「…。」

イレーヌも同様に考えている。アレに覚えがあるのだ。

「これが…。噂だと思っていました。日本政府が機械化小隊の編成を行っているという。それが義弘君だったとは…。巴さんといい、日本はいつたい若者に何を…。」

ヤンはヨシヒロを憐憫の眼差しで見つめた。

「ふっふっふ。これが私の補佐官の真の実力ですわ！早々にお引きなさい！」

デスポイアが勝ち誇った顔で仁王立ちしている。

その言葉に兵士の間にも動揺が走った。エレボス将軍がやられた。

ここは引いて大勢を立て直した方がいいのではないか？

兵士はちらりとパンドラの方を見る。兵士とパンドラの目が合う。するとパンドラはただ微笑んだ。つられて兵士たちも笑みを浮かべる。

「行きなさい。」

パンドラの言葉と共に、兵士の体はその意思とは別に突撃を開始した。その目に色はなく、うつろである。兵士の形相は険しさを増し、鬼のような形相である。

それを迎え撃つは同じくうつろな目をした表情のない青年。しかし、その青年は微動だにしない。ただ手を前に掲げただけだった。その一動作の後、糸が切れたように兵士が倒れ伏した。

「な！」

パンドラは思わずうめく。操っていた兵士がこつも簡単に…。

パンドラが行っていた操作は、恐怖をつかさどる脳の一部の活動

を弱らせ、攻撃性を司る部位を活性化させることであつた。

ヨシヒロはナノマシンを散布し、その攻撃性を司る部位の活性化を助長しただけである。

著しい脳の活動の偏重は活性化している部位以外の活動に支障をきたすことになる。もし、他の部位も活動させたままそんなことを行えば、血中の酸素濃度、糖分濃度が急激に低下し、こつなつた。

そんなことはパンドラは知らない。そんなことは感覚的に調整してきた。それを外部から狂わせる存在などいなかつた。

ヨシヒロはゆっくりと慎重にパンドラに近づく。パンドラは思わず後ずさる。その足は若干震えていた。

「つこ、来ないで！」

パンドラは子供のように首を左右に振り、目には涙を浮かべてただ後ずさる。

それでもヨシヒロは歩みを止めない。パンドラはこれまでに感じたことのない恐怖に体が動かない。

それを見ていたデスポイアがなにやら言っているが義弘の耳には届かなかつた。

ヤンとイレール又はヨシヒロのほうへと歩み寄ろうとしたそのとき、領主の館で歓声が上がる。

領主エオスを捕らえたことを叫ぶ歓声であつた。

戦闘編：第十一話 Puppetry：？操り人形、？見せかけ（後書き）

人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果、不自由を感じて困っている。

夏目漱石（作家）

追記：2011/9/23（金）

感想で、戦闘編：第十一話と第十二話で矛盾点のご指摘がありましたので、修正いたします。

戦闘編：第十二話 噂とはいい加減なものだ。たいてい噂のほづがよくてきてい

A good laugh is sunshine in a  
house .

楽しい笑いは家の中の太陽である。

サッカー（イギリスの小説家）

戦闘編：第十二話 噂とはいいい加減なものだ。たいてい噂のほうがよくできてい

テバイ市の高台に位置する領主の館から歓声が上がリ、その声に領主を捕らえたという声が混じっていることに、周辺の警戒に当たっていた兵士たちが気付くのもに然程の時間は要しなかった。

キングが捕られればチェスは終わる。あるものはその場に崩れ落ち、またあるものは敵の流した偽報ではないのかとうたがった。

程なくして屋敷からぐったりと力の抜けた領主が敵兵に抱えられて出てくる。その光景は兵士にそれ以上の交戦の意志を挫くのに十分であった。

「お前たちの領主は我らの手に落ちた！領主はその身分に相応の待遇を約束しよう！ただし、諸君の武装解除が夕刻までになされない場合は、交戦の意思有りと見なし、敵指揮官として処刑するものとする！」

その声は風の精霊術師によって市の隅々まで響き渡った。

その宣言を聞いて、剣を地に置かない兵士はいなかった。

その一事をとっても、領主に対する敬愛が深かったことが分かる。

彼女のその薄い金の髪は汗で顔に張り付いており、顔は蒼白であった。



それは彼女の決死の努力を感じさせたし、その肩は一地域のすべての民を背負うにはあまりに小さいことに今更ながらに思いを致す者もいた。

今。一般市民は全員避難を完了しており、テバイには自警団の間と辺境領兵のみである。辺境領兵は領主であるエオスに中世を誓っているが、自警団はそんなものは屁とも思っていない。

彼らがこの場に残って戦っていたのは、ただこれまでこの領地で築き上げてきたものを奪われないためであった。

彼らはまだ若い領主のおかげで享受していた『自由な裁量での生活』というものを存外気に入っていたのである。それを保証していたのは公的な契約ではなくエオス本人への信頼であったのだ。

義弘がそんな周りの様子にまったく斟酌せずにパンドラに歩みを進める。兵士たちが降伏のポーズをとっている中、ただ一人だけが前へと進む。

「…ちよつと。あなた聞こえているの？領主は捕らえられたのよ？あなたは負けたのよ？」

パンドラは後ずさりしながらヨシヒロへ説得を試みるもそれは成功しなかった。何故なら彼の今の行動はまったくこの戦とは関係のないものだったから。

今、彼を動かしているのはこの世界とは異なる論理である。ヨシヒロは無言ださらに歩を進める。

「…あなた、何者？どこの誰なのよ！？」

パンドラは目の前の男が領主の身柄などまったく斟酌していないことに気づいた。彼はこの場の異端者である。

この問いに対し、ヨシヒロのEISは機密情報の秘匿のために、カモフラージュ用として用意されている身分を口にするという選択

をする。

「日本皇国、帝都高等大学校三回生、に作製されたI I Sによる自律行動プログラム026です。」

この返答をパンドラはまったく理解できなかった。知らない単語の羅列にしか聞こえないのだ。

しかし、その中に一つだけ聴いたことがある単語があった。それを口にした当人は冗談だから忘れてくれと言っていたが…。

「『日本皇国』？」

この反応にヨシヒロの歩みが止まる。この反応はその言葉を聴いたことがある人間のする反応である。この世界でそのような反応をされたことは今までなかった。

「『日本皇国』をご存知なのですか？」

パンドラは大きく溜息をつき、どうやら聞き間違いでないことを知った。

「私の…、私たちの総司令官がそんなことを言っていたのを聞いただけよ。昔、自分は生まれる前は『日本皇国』というところで生きていたって…。本人は冗談だって言ってたんだけど…、あの秘密好きめ…。」

パンドラの言葉はこの場にいた三名には衝撃的に耳を貫いた。貫いた言葉は戻ってきて頭の仲でぐるぐると周回する。

ヨシヒロはI I Sによる自動制御システムを解除した。彼が5年の歳月をかけて完成させた解除プログラムによる強制解除。これをやらないのには理由がある。それはこの後に明らかになる。

解除するとヨシヒロの顔に表情が戻る。額には脂汗が浮かんでいる。

「…その総司令官に会わせていただけませんか？そうすればあなたは無事に本陣までお送りすることを約束します。」

その言葉に一瞬、パンドラは逡巡した。この男をリユカオンに会わせていいのかと。しかし、彼女のめんどくさがりの性格により、すべてをリユカオンに任せてしまう方に傾くのは一瞬であった。

「…分かったわ。」

パンドラのその返答を聞くとヨシヒロは後ろを振り返り言った。

「それではヤンさん、イレーヌさん。後は宜しくお願いいたします…。」

ヤンとイレーヌが頷くと糸が切れたようにヨシヒロの体は崩れ落ちた。

「ヨシヒロ君！」

ヤンとイレーヌが慌てて近寄る。

「…ああ、大丈夫です。無理やりシステムをシャットダウンさせたことによる代償ですよ…。」

ヨシヒロは苦笑いしながらそう言った。これがヨシヒロが解除しただけの理由である。EISの自動制御システムはヨシヒロの義手、義足の制御プログラムに直結しているため、それを強制シャットダウンさせると一時的に体がただの重い塊と化するのである。

ほっとした様子の二人にヨシヒロは恥ずかしそうに言葉を重ねる。「それで恐縮なんです…。負ぶってもらえませんか？」

ヤンとイレーヌは顔を見合わせて笑った。承の意を伝えようとする。横から割り込んでくる存在がいる。

ヨシヒロとしてはこれには頼りたくなかった。主に命の危険的に…。

「それには及びませんわ！ヨシヒロは私が運びます。」

胸をどんと叩き、任せておけと得意げな顔で請け負った。

「いや、お嬢ちゃん。彼を運ぶには君は小さすぎるよ…。」

ヤンさんがやさしげな微笑を浮かべながらやんわりと断る。

ヤンさん、断ってくれて非常にありがたいですが…。断り方がなつちやいないよ。この娘の押し強さは半端じゃないですぜ。

「心配は無用よ！この私にかければヨシヒロの200人や300人。」

俺はそんな量産型じゃない！とかいう突っ込みをしないぞ。

「100回半殺しの間違いだろ…。」

俺のそんなボソツとした呟きを聞き逃してくれるほどやさしい耳をしていない。

デスポイアは地面に倒れふす俺をグリグリと踏みつけてくる。正直デスポイアの体重は羽のように軽い。まったく痛くない。むしろマッサージをされているかのように気持ちがいい。

「…踏まれるのはそんなに気持ちがいいか？」

イレー又さんの冷たい視線が俺を凍らせる。ついでに周りの空気も凍らせる。

「いやいや、待つてください。それじゃあ、まるで俺がマゾツ気があるみたいじゃないですか！」

あせるあせる。

「違うのか？」

イレー又さんが意外だというのかのように驚いた顔をする。…俺はそんな風に見られていたのか。

「違いますよ！デスポイアの体重がちょうどマッサージにちょうどいい刺激だっただけです！」

イレー又さんはふむ、と頷いた。『理解していただけましたか！』と俺はぱあと表情を明るくする。

「つまり、君はその少女とファーストネームで呼び合う仲で、衆人環視の元でマッサージしてもらうほど仲が良いと。」

唯一自由に動かせる首を俺はがっくりと落とす。

「そのとおりですわ！」

デスポイアは高らかに宣言する。こらこら。マッサージの辺りからその通りじゃないでしょう？

「ちよつと…。」

俺の訂正の前に周りの兵のざわめきの方が大きくなるのはすぐだった。そのざわめきは放射状に伝わって行き、端に届くまでにはそのざわめきは形を変えていた。

領主の屋敷の方から走ってくる人影が見える。視覚を強化すればそれが巴であることは分かった。しかし信じたくはなかった。

彼女の両手には包丁が握られていたからである。スカートは動きを阻害しないように引き裂かれており、時折見える足が非常に扇情的だが、それよりもその包丁がすでに赤い何かで染まっていることに目を奪われる。

情けない目でディスプレイのほうを見るが、ディスプレイも向かってくる人影を注視している。

巴は俺の前で急ブレーキをかけて、開口一番に口から出たのは心配の言葉ではなく、挨拶でもなかった。

「義弘君！一回り年下の女の子に手を出した拳句、道の真ん中でSMプレイを強要したって本当！」

俺は絶望した。

伝言ゲームの非常さに絶望した。

ロコミの恐ろしさに絶望した。

俺の社会的イメージに絶望した。

「…ここが良く分かったね。」

巴は迷うことなく一直線にここに到着した。

「勘よ！」

巴は腰に手を当て、堂々としている。

「…そうか。それで君は…。その…。なんでそんな格好な訳？」

巴は自分をしげしげと眺める。

「そんな格好で…。どんな格好？」

「その両手の包丁とか、それについてる赤いのか…。いや、赤いのはなんとなく想像できるけど！あとスカートに入ってる切れ込みとか。」

ビックリだ。ソレを変だと思っただけだ。バにビックリだ！

「包丁はね、料理をしてただけだ。兵士が乱入してきたからこれで大人しくなって貰ったの。スカートはそのときに邪魔だったから切ってきた！」

大人しくなつて貰つたのあたりをもう少し詳しく…。いえ、なんでもないです。

「そう…。大変だったね。いったいどうやって館にいったんだろ？この道が館への唯一の道だろう？」

「穴を掘つてきたみたいよ？」

「なんで知つてんの？」

「乱入してきた兵士の人が教えてくれた。」

教えてくれたの辺りをもう少し詳しく…。いえ、なんでもないです。

「それよりもどうなの！」

「何が？」

俺はすつとぼけるのに決めた。

「さっきの噂！」

「俺がそんなことをする男に見えるのか！」

「…。」

あのー、そこで黙らないで。おねがいだから。

「俺は潔白だ。無実だ。大体、倫理コードに触れる行為はIISによるペナルティが入るでしょ！」

「でも、それにも抜け道があるでしょ。」

…よくご存知ですね。あなた、ほんとに何者ですか、巴さん。

「信じてくれよ！」

俺にはもはや懇願しか道は残されていない。

「じゃあ、本人に聞いてみるわ。」

…本人？俺はちらりとディスプレイの方を見るとすごく嫌な笑顔の彼女がそこにはいた。勘弁してほしい。

「彼にひどいことされなかった？」

ちよつと待つてほしい。俺がひどいことされる側でなしに、する側になつてゐるのはどうということだ？

「ヨシヒロには何度もやめてつていったのに…。」  
そつというのいいから！そんないかにもわざとらしい演技しなくて

いいから！

「かわいそうに…。鬼畜ね！義弘君！」

俺は俺がかわいそうです。あれ？おかしいな。視界がぼやける。

俺のそんな情けない様子を見て満足したのか、二人は笑い出した。

「冗談よ！義弘君！」

「ヨシヒロは相変わらずいじめたくなりますわね！」

ですよ、冗談ですよ。デスポイアには後で説教が必要だ。

俺はデスポイアと巴が談笑しながら歩いているのを下から眺めながら、敵本陣まで引きずられていった。

その後ろを呆れ顔でヤンとイレエヌが着いて行った。

ここの戦いはテバイの負けということで終わりを告げた。しかし、まだテバイの外側で未だ顕在化していない戦いが繰り広げられている。

戦闘編：第十二話 噂とはいい加減なものだ。たいてい噂のほうがよくできてい

家の美風その箇条は様々なる中にも、最も大切なるは家族団欒、相互にかくすことなき一事なり。

福沢諭吉（思想家、慶応義塾創設者）



戦闘編：第十三話 リュカオンとの会見 くそのく（前書き）

まだまだ自分の何分の一も知っちゃいない。だから生きることになせ  
つかちなさ。

ジェームス・ディーン

戦闘編：第十三話 リュカオンとの会見 〈その1〉

リュカオンは地下トンネルの作戦を進行状況からほぼ勝利を確信していたが、予想外の方向からの乱入者によりその確信は揺らいだ。

領主を捕らえればこの戦は終わる。その方程式を崩しかねない人物。デスポイアの登場で、である。

彼女に領主の身柄というカードは通用しない。戦略級精霊術師のもつ『独立行動権』というのはそれだけ厄介な代物なのである。帝国、共和国双方において。

彼女がこの場で共和国への徹底抗戦を唱えれば、彼女自身の戦闘力もさることながら、その求心力も侮れないものがある。領主の捕囚によりどん底まで落とした士気を回復させ、徹底抗戦されれば負けないまでも大きな痛手を被ることになってであろうことは想像に難くない。

そんなリュカオンの懸念が馬鹿馬鹿しく思えるほど簡単にデスポイアはこの場での戦闘行動を控えると言ってきた。ある交換条件と引き換えに。

それは彼女の補佐官（候補）の希望を可能な限り叶える事というものであった。

パンドラとエレボスを抑えられている状況でこの条件は破格である。リュカオンは一も無く了承した。

戦略級精霊術師とその補佐官は『一心同体』であると聞いていたから、そんな戦略級精霊術師の信頼を一身に受ける補佐官に恩を売ると思えば、会見の一つや二つ叶えようと考えたのも無理からぬことである。

「無事でよかった、パンドラ。」

リュカオンは本陣でまず、開放されたパンドラに声をかける。

「エレボスは無事じゃないわよ、総司令？」

エレボスの負傷については報告を受けていた。

「ああ、報告は聞いている。エレボスに手傷を負わせるとは…。」

デスポイアは幼い戦略級精霊術士と聞いていたが、過小評価していたか…。」

彼は事前に全戦略級精霊術士について調査を命じている。デスポイアは基本的に短気であり、戦闘に関しては稚拙という報告が上がっていた。エレボスをそこまで傷つける存在ではないと予想していた。少なくとも四肢の骨を碎かれるような状況になる前に撤退を選ぶ戦術眼をエレボスは持っている。

「リュカオンは例の補佐官にやられたのよ…。」

パンドラはやれやれと首を振ってため息をつく。

「…補佐官ごときがエレボスを？正直信じられんな。あいつは戦略級でないにしても、防御に関しては戦略級と遜色ないはずだ。」

リュカオンはパンドラを疑っている訳ではない。パンドラは意地の悪いところがある女だが、嘘はつかない。誤解されるようなことを言っただけで人の反応を見て楽しむところがあるだけである。

「真実よ。私の力も効かなかったし。」

パンドラの言っていることはその重要性に反して楽しげである。

「…まだ何か隠していることがあるのか？」

パンドラは肩をすくめると、リュカオンを動揺させるのに十分な言葉を放った。

「あの子は『日本皇国』の出身だそうよ。」

リユカオンは予想だにできなかった言葉にパンドラが何を言っているのか一瞬理解できなかった。リユカオンが惚け顔で黙り込むと、パンドラは会心の笑みを顔に浮かべた。

「あなたに奇襲が成功してうれしいわ、リユカオン。それじゃあ、会見がんばって。」

パンドラは鮮やかに体を回転させると、本陣から姿を消した。

本陣には、パンドラを止めようと手を前に出したリユカオンの姿だけがそこにあった。

「…視線を感じる。」

俺は共和国の陣地を先導されながら歩いていた。後ろにはヤンさん、イレー又さん、巴がいる。ちなみ俺の横にはデスポイアが視線などまったく感じずに堂々と歩みを進める。リチャードさんは偵察に行かされたまま戻ってきていないそうだ。あの人がどうこうなるとは何故かどうしても思えなかったが、万一を考えると心配になる。

「…当然ですよ。あんな派手な登場の仕方をすればその宣伝効果たるや恐ろしいものがありますよ。」

「何を当たり前なことを言っている。敵の副将の四肢を打ち砕いた人間が…。」

「そりゃそうよ。隣に美少女を連れてるんだから！」

後ろの三人が俺の独り言を拾い上げて言うが、俺は他人事じゃないだろうと思っていた。何故なら視線のいくらかは三人に注がれていたからである。

俺はため息をつくのもやめ、周りに眼をやる。周囲の兵士たちは殺気立っている。それでも襲い掛かってこないのは司令官の命令が行き渡っているからかと考えた。

「…大した人だな。リユカオンという人は。」

思わずその統率力に感嘆の声を上げる。

会見を本陣ですると聞かされ、三人は反対した。『危険すぎる』と。

戦とはいえすでに共和国の兵を幾人も殺している我々が敵陣に赴くなど自殺行為だということだ。それに彼らの恨みの視線にさらされるのをなんとなく嫌がっているとも考えられる。

それでも敵陣を選んだのには

一つは、こちらにこれ以上この場で争う気が無いことを共和国兵に知らしめること。

二つは、こちらにはデスポイアがあり、滅多な事では大事に至らないというある程度の自信

三つは、リュカオンのホームで話することでリュカオンに腹を割った話をしやすくさせる

四つは、パンドラとエレボスという人質を引き渡すのと会見のタイムラグをなくしたかったから

などいくつか理由がある。

彼との会見を前に話すことを色々考えているとどうやら本陣に着いたようだった。

先導をしていた兵が大きな天幕の前で歩みを止め、入り口の脇に  
より唯一言こう言った。

「…入れ。」

その表情は硬くこちらへの警戒心が透けて見えた。

彼にちらりと視線を送ると彼はピクリと体を蠢かせ、体を緊張さ

せた。

「…案内ありがとうございます。」

俺はすつと頭を下げ、本陣の天幕に入っていった。後ろの三人は一人ずつそれに続いた。

俺は奇妙な5人組を本陣へと先導する任務をパンドラ様から受けた。最初、古参の兵であり、これまでの功績に多少の自負心がある自分が何故先導などやらされるのかと憤ったが、先導する対象を聞かされると納得した。

正直気が重い。何故なら、唯でさえ戦略級精霊術士が一人いるのに加え、この戦いでその知名度が上がった4名だったからである。

幾人もの共和国兵を常識破りの距離から死の国へと送り込んだ『柔和な死神』。

幾人もの共和国兵を肉隗へと変えた『鉄槌』

幾人もの共和国兵を女性恐怖症を通り越して女性の精神的奴隷と成した『断割の女給』

空を飛び、パンドラ様の誘惑に耐え、エレボス將軍の四肢を砕いた『剛人』

もはやこの面子は前線の共和国兵の恐怖の代名詞であり、全兵にとって近づきたくない相手である。

噂と実際の差が大きかったため、気を抜きかけるがパンドラ様から噂がすべて事実だと告げられると俺は自分の愚かさを内心なじった。

敵の見かけにだまされるとは、何たる不覚。こいつらにはひと時として油断することの無いようにしなければ。

『剛人』が『視線を感じる』と今更なことを言い出すと、『柔和な死神』も『鉄槌』も『断割の女給』も自分が見られているとは少しも思っていない言動が見られた。

そこには彼らの余裕が感じられ、緊張している様子が見られず自然体で落ち着いているように見える。

視線の注がれているのが彼らの前を歩いている人物だけだと思っているようだ。そのことからこの男が他の者から上位者と思われるというところに他ならない。

その男は警戒を怠らず周囲を見渡している。さすがエレボス將軍を下した男。中々の武者のようだ。会見の前でも周囲の警戒を怠らない。

周囲の様子をあらかた見渡すと、男は『…すごい人だな。リュカオンという人は。』という呟きが聞こえる。

…彼は何に気付いているのだ？

彼らの周囲には兵士を出来る限り近づけないようにしており、その兵士の中に彼らの不審な動きに対応する精霊術士が潜んでいることだろうか？

彼らに危害を加えようと早まったことをしないようにリュカオンがどれだけの対策を採っているかをだろうか？

彼のその一言に込められた意味をひたすら考えていると、本陣まで着いてしまった。若干の悔しさを堪えながら俺はなんとか『入れ』の一言を搾り出す。

ソレに対する奴の対応は『案内ありがとうございます。』だった。そのまま礼をして天幕へと入っていくのをただ呆然と俺はながめていた。

何を俺は悩んでいたのか。ただ案内を命じられた俺に彼らの、あの男の心の内を読み解くことなど出来はしないのに。

しかし、天幕の主の『眼』は誤魔化せはしない。正直に語るしかないのだ。

俺は中にちらりと眼をやると一回大きなため息をつき、入り口で仁王立ちになって門番の任務に移った。

リュカオンという男は天幕の中央にいた。その身には甲冑を身に着けているが、派手な装飾など見られない。真紅の裏地のマントが無ければおそらく一般兵と間違えてしまいそうだった。

想像したよりも背は大きくなく、俺より10cm高いくらいだろう。意外と童顔であるが、甘さは微塵も感じられないアンバランスさが彼になんとも言えない魅力を与えていた。

つまり、俺が何を言いたいかというと奴がかなりの男前でちょっとうらやましいということだ。

「この度は会見に応じていただき真にありがとうございます。」俺は深々と礼をする。正直ここまでですんなり了承するとは思っていなかった。しかも1対5という状況での会見である。それだけの



信用を勝ち得ているとは到底思えず、不思議だった。

「いや、私もお会いしたいと思っていました。私の自慢の兵を物ともしなかった戦士に……。」

リュカオンは人好きのする笑顔を顔に浮かべていた。彼の目は物問いた気に揺れていた。

「いえ、私は別に戦士では……。」

「そうですね……。『日本皇国』には徴兵制ではなかったから。君は志願するタイプには見えませんし。」

俺は驚いた。こんなに早くそのタンゴを口にするとは思っていなかったからだ。彼はかなり性急な性格をしているようだ。

「はい。日本では学生でした。」

「そうですね、学生……。ならばこの世界では苦勞されたでしょう。」

「そうですねありませんでした。運にも恵まれましたし、何より私には同じ境遇の仲間がいます。」

これは偽らざる事実である。後ろでうなづく気配がする。リュカオンがそれを見て、うなづく。その意味するところは納得だろうか、憧憬だろうか。

「そうですね……。後ろの皆さんも。皆さんは『生まれ変わり』ですかそれともそのまま移動して来ましたか？」

「私たちは太陽系の外れで探査艇が流されまして、気付いたらこの世界にいました。ここはどこなんですか？ 太陽系とは別の惑星なんでしょうか？」

これは大きな懸念事項だった。もしそうならまだ帰還への希望を抱いていられる。しかし、この質問は答えが無いと思っただけの質問だった。

「……。私はこちらの世界で生まれました。真正正銘のこちらの世界の住人です。ただし『地球』にいた頃の記憶を持ったまま。」

リュカオンが真剣な眼差しをこちらに向ける。俺はただ頷き続きを促す。

「こちらに来たとき思いませんでしたか？この人たちは地球の人類に大変似ている。名前の発音すら似ている。別の惑星で人類と同じような進化を遂げた知的生命体がいる確率はどのくらいでしょう？それよりはむしろ……。」

そこで一旦、リュカオンは話を途切れさせた。俺はその続きを予想できた。しかし、彼の口から聞きたかった。地球の記憶を持ちながらこれまで生きてきた男の見解を。俺はリュカオンの目をじっと見つめ返した。

「……。むしろここが地球とは別の世界の『もう一つの地球』と考えた方が自然。」

沈黙が重くのしかかる。俺は心の中で『ああ、やっぱり。』という思いと『嘘だ。』という思いが激しく交錯した。

「他にも根拠はありません。『共和国』の正確な地図を作らせているのですが、その一部を見て激しく驚きましたよ。」

「地図？」

「こちらの測量技術はまだ正確さに欠けます。正確な地図の作成は統治上必要不可欠です。それで『共和国』というのは地球の『スペイン』と『ポルトガル』、『フランスの一部』を合わせた部分と瓜二つだったのですよ。おそらく共和国の北に漕ぎ出せば『イギリス』が見つかると思いますよ。共和国南端から船を出したものが『アフリカ』を見たという報告はすでに受けています。」

リュカオンの言葉にこちらは二の句が次げなかった。想像を超える事実が彼の口から語られていく。おそらく彼も話したかったのだろう。この事実を誰かと共有したかったのだ。

「まったく、『ピレネー山脈』を超えたときは思わず笑ってしまいがちになりました。おかげでこちらの地理の把握にさほど手間が懸からなかったという事があります。共和国統一中に斥候に確認を取らせるたびに疑惑は確信へと変わっていきました。ここは文字通り『異世界』だと。」

リュカオンは複雑な表情をしていた。ほっとしているような、ソ

レでいて何かに耐えているようなそんな顔だった。

こちらは沈黙するばかりだった。余りの事に言葉を失っていた。何を言っただか理解はすでにしたろう。それでも信じたくなかった。信じられないのではなく信じたくなかった。

戦闘編：第十三話 リュカオンとの会見 くそのく（後書き）

時間が多くのこととを解決してくれる。あなたの今日の悩みも解決してくれるに違いない。

デール・カーネギー

戦闘編：第十四話 リュカオンとの会見 〱その結果〱 そしてリチャードへ

馬の行きたい方向に馬を走らせるには手間も労力も要らない。

リンカーン（第16代アメリカ合衆国大統領）

天幕の下、沈黙の魔力が支配するこの空間に、まったくその影響を受けない人物が一人。

彼女は隣の男の様子から只ならぬ事情があることを察していた。それでも所詮は他人事。そこまで感情移入する性格でもない。この沈黙を破るのは彼女であった。

「それで、これからどうするんですの、ヨシヒロ？」  
「え？」

デスポイアに突然聞かれ、俺はとっさに返答に詰まった。

物理的に帰還可能な空間的移動だったのか、物理的に帰還が絶望的な次元移動なのか。自分の希望と現実の乖離に気付かされ、その間を交互にぐるぐる頭の中で回っている。俺は今、ほかの事を考える余裕は無かった。

「これからどうするのかと聞いているのですわ、ヨシヒロ。あなたの故国に帰るのですか？」

しばらくそつとしておいて欲しかった俺は、思わずデスポイアをなじろうとする。しかし、その目を見て俺はなじるのをやめた。その目には涙がたまっていたからだ。子供の涙ほど強力な武器も無いだろう。

「…無理だ。いや、非常に困難だ。世界一周しろって方が遥かに現実的だよ…。」

俺は自分でも不思議なくらい冷静に淡々と話すことが出来た。口に出すと受け入れがたい事実も、初めから自分の内にあった理のように思えてくる。

「そう…。では、もうあなたの家族にも友人にも会えないのです

わね…。」

デスポイアの頬を一筋の涙が線を描いて頬を伝う。

「ああ、もう…会えない。」

俺には家族はいなかったが友人はいた。離れて分かるが、あれはいいものだった。今更ながらに郷愁の念が湧き上がってくる。今、あの友人たちに無性に会いたかった。

「それでしたら…その…。」

「ん？」

「その私が…あなたの家族になって差し上げててもよろしいですわ！」

デスポイアが俺の手をがっしりとつかむ。その手は熱く、震えていた。顔は赤かったがその顔は真剣でその様子に俺は頬を緩ませる。

「ああ、お前は…。」

デスポイアの顔が明るく華やぐ。

「お前は俺の『妹』（みたいなもの）だ！」

俺も努めて明るく彼女に言った。するとピシっとなにかにヒビが入る音がする。

「だ…。」

「『だ』？」

「だ」大好き、「だ」団子を頂戴、「だ」ダンスを踊りませんか、

「だ」ダージリンストレートで、「だ」出汁には鰹節？

「誰が妹ですか！」

彼女が叫んだそのとき、俺の顎を衝撃が襲う。気付けば俺は天空に打ち上げられていた。皆、暢気に俺が打ち上げられているのを暢気に見上げている。

ちなみに俺の頭蓋骨はショック吸収剤と形状記憶合金における最新技術の結晶である。一番大切な部分であるから当然だ。しかし、技術者は顎の強度には触れなかった。

顎の強度が今後の課題だろう。このような想定外の衝撃を受けることもあるのだ。

うん。なにが言いたいかと言つと。

「ふがふがふが（しばらく喋れんは、こりゃ。）。」

俺はそれよりも着地のほうが心配である。何せビルの4Fくらいまで打ち上げられたのだから。

高い、高い。

…

いくらなんでも高すぎるわ！

ど、ど、ど、どうすればいいんだ。

考えろ、考えるんだ。義弘よ。

とりあえず、あのアマー発殴るとか考えるのは後にするんだ！

俺の機械足は強度的にはもつ。しかし、足の付け根からは機械化されていない。そこから後は生身なのだ。とてもじゃないがもたない。

落下エネルギーをどこに逃がすかが問題だ！生身には極力伝えずに済まさなければ！

そういつ考えから今日、デスポイアと俺の共同必殺技が生まれた。名づけて、『アースククラッシュヤー』。

その必殺技は大いなる自爆技だったのだ。

その日、共和国の陣に一人の人間のキックによる大穴が空いた。

結局、キックによる衝撃緩和。あくまでも緩和であつたので、内臓に一部損傷が生じた。俺が穴の中から救助され、その記憶は無いがヤンさんに遺言のように頼んだという。

「後は頼みます」と。



「は。」

俺は目を覚ますと、ベッドに横たわっていた。恒例のデスポイアの攻撃、怪我（洒落に成らないレベル）、気絶、覚醒の流れである。最近、気絶まで行かなかったから油断していた。そう、ベッドから体を起こして真っ先に目に入る緑の髪の少女である。彼女が災害そのものであることを失念していた。

「ふがふがふが（このやろう！奥歯がたがた言わずぞ！）。」

俺がデスポイアに食って掛かるが言葉にならず迫力もくそも無い。

「よ、ヨシヒロが悪いのですわ！まったく！」

言葉は伝わらずともなんとなく雰囲気は伝わるらしい。しかし、それでこの返答とは泣きたくなってくる。

「ふがふがふが（お前は反省という言葉を知らんのか！）。」

俺とデスポイアが不毛な会話を繰り返すのを外野はただ見ているしかなかった。

外野とはリユカオンとの話を終えた三人である。

「…どうする？」

「どうしましょうか？」

「様子見が一番かも…。」

とりあえずこの茶番を見守ることに決めた三人であった。

折れるのはいつだって俺である。ついに俺は言い募ることの虚しさを悟った。俺が何も言わなければ彼女も黙るのだ。売り言葉に買い言葉なのだから。

「…。」

「…。」

「…何か言ったらどうなのです。」

「…。」

「…どうして何も言わないのですか？」

俺は何も言わないがその目だけはしっかりと見つめていた。

「…私が嫌いになったのですか？」

…今更だかなぜ俺はこいつを嫌いにならないのだろうか？正直不思議である。論理的じゃない。こいつを嫌うだけの事はされてきたと思う。何故だ？俺は黙って首を横に振る。

「…それなら良いのです。」

彼女はほつとしている。良くはないぞ。果てしなく良くない。こんなことが続くのならば、命を賭けて逃げ出すしかない。

俺はこの少女を賤ける為に怪我人という立場を強調して反省を促すという小ずるい事を考えていると、呆れ顔の三人を見つけ噴出しかける。

「ふがふがー（いつからそこにー）！」

「起きた時から。」

だからなんで言いたいことが分かるという。

「勘よ。」

心まで読み出した巴さんからも逃げ出したい。

「まあ、ここに集まったのは義弘君のお見舞いした後、私たちはここに残ることにした事を伝えようと思って。」

「ふが（え）？」

「ここから逃げるだけで邪魔をしなければ、ここから出てもいいってリユカオンさんが言ってくれたけど。でも、エオスさんはさすがに開放することは出来ないって…。」

「彼女には何かと恩義がある。放って逃げることは出来なくてね。」

「イレー又さん、相変わらず男前ですね。その男前成分いくらか分けてくれませんか？」

「だから、我々は彼女の傍にいようと思う。君はどうする？」

「ふが…（俺は…）。」

俺はここに皆が心配で来た。戦がとりあえず終わって、安全なら

…。

「ふがふがふが（俺はリチャードさんを探しに行くよ）。」

「リチャードさんを探しに行くって。」

巴が通訳してくれる。彼女がいないと今の俺は意思疎通もできないな…。

「ヨシヒロ…。君という男は…。（皆彼の事をすっかり忘れていたというのに、君は忘れずにいたんだね！）」

「…頼んだよ（リチャードなら大丈夫だろうけどな…）。」

「ふが（はい）！」

今の俺は顎に強制具をつけているため、いくら活き込んでも格好などつかない。

「…とりあえず安静にしていたまえ。」

ヤンの労わる目がなんとも言えなかった。

テバイの北方に位置する山村。正確にはそれを視界に捉えることが出来る場所。そこにリチャードはいた。

彼の傍らには悲鳴を上げようとするのをリチャードの手に押さえられている自警団の団長がいるのみである。

「こいつは…やばいな。あんな集団…。敵いつこないぞ…！」

リチャードは何時もの飄々とした態度など吹き飛んだようで冷や汗すら浮かんでいる。

「アンデッド軍団&クリーチャー軍団とは…。どこのハリウッド映画のパクリだ？」

リチャードの前には獣人の死体が村を蹂躪する光景が広がっていた。その光景は彼の想像する地獄そのものだった。



戦闘編：第十四話 リュカオンとの会見 〱その結果〱 そしてリチャードへ

困難な情勢になってはじめて誰が敵か、誰が味方顔をしていたか、  
そして誰が本当の味方だったかわかるものだ。

小林多喜二（作家・小説家）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5526k/>

---

機械化少年の異世界史

2011年10月1日20時19分発行